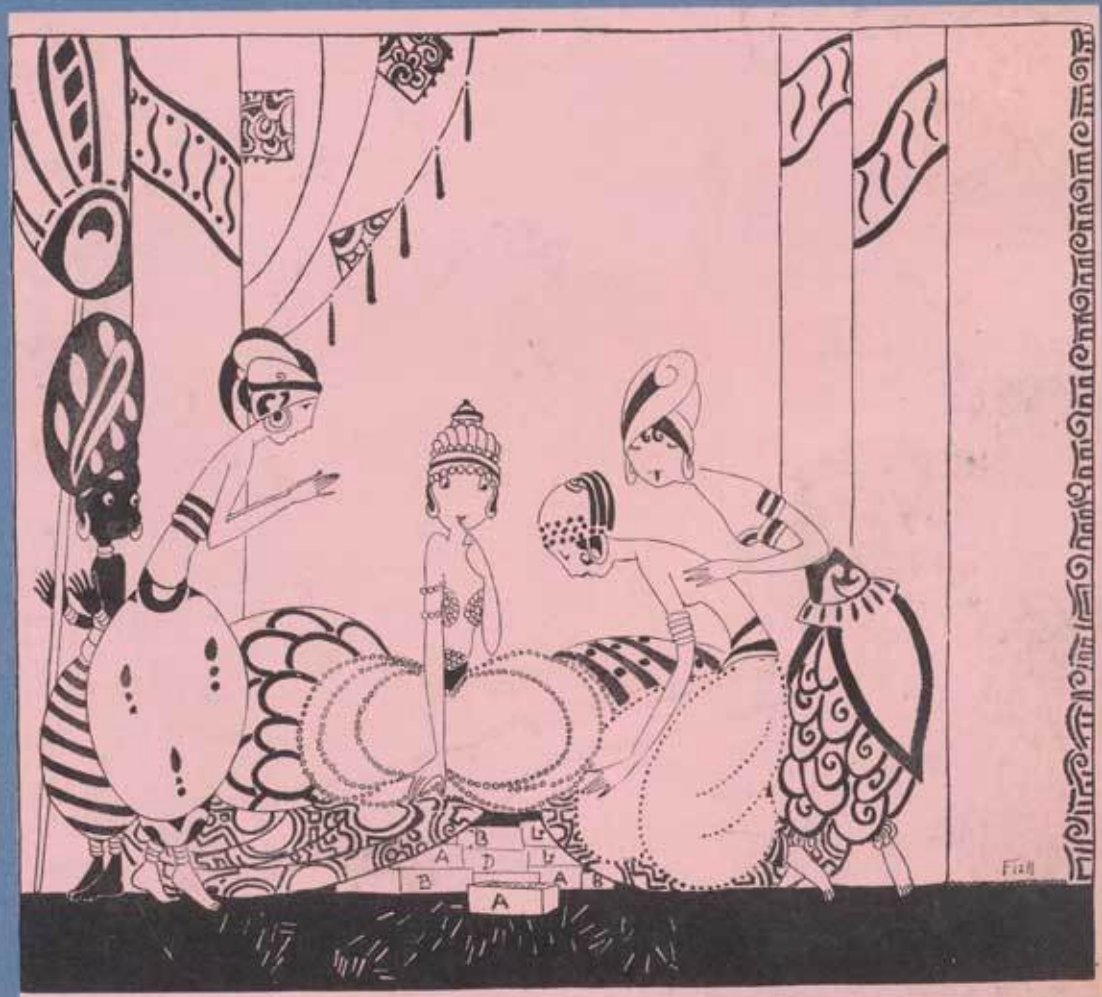


奇譚クラス

新しい風俗文獻誌

2月号



1963・2

奇譚クラス

2月号

定価二四〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



四馬孝・案並に画

日本版 サド侯爵悦虐絵巻

画の大きさ A5判

21幅×15幅(本誌の大きさ)
九枚一組五〇〇円(送共) 略号「さ9」

豊富なアイデアと適確無比の画風とを以て一世を風靡した四馬孝の制作意欲を燃えさせた四馬孝のこの約半世紀に於ける構想を練ることに提らわられたことなく、この通集を完成のみに分譲します。

この一般書店にては一切販売いたしません。是非直接お申込み下さい。内容はサド侯爵と自称する或る億万長者の青年が、美貌のうら若き女性を背景として訓練、虐待するという華麗な訓練、虐待のうら若き一りの完全絵画化であります。



「日本版サド侯爵悦虐絵巻」解説
一、日本版サド侯爵悦虐絵巻の中央に裸の美女がいて、アグラーに縛られていた。二、逆さ吊りされた美女の傍には、三、針のトイレットの植った奇妙な窓から眺めている出ぬ。四、女体燭台(厳重なアグラー縛り乳首に結んだ紐がピンと張つていて、五、拷問室のベット(お前はボクの可愛い愛玩物、衣服をすっかり剥いで、六、浴室の女神(むっちりとした肉の七、水のように清純な美女がムチうたれ、八、ボクは腹が膨らみ、九、排尿の図(さあ、鏡にうつったお前は、十、コするのだよ。さあ、オシメカバー



マゾ資料

Mフォト三十態

B7判(9×13幅)感光紙焼付
三十ポーズ(30枚)一組五〇〇円(送共)
注文略号(ま30)

若々しくハツラツとした美しい女性の豊かな尻に敷かれて、あらゆる羞しめを与えられるM男の生感を馬場の美女を主体として描いたMフォト集です。マゾモデル募集に応じて合格したこのM男は、さて、どのようにして虐められるでしょうか。全部未発表のとおきの資料を提供いたします。凄く迫力で注文殺到の(ま30)を是非どうぞ!



「Mフォト三十態」の内容

ふくよかな真白い脚で首を絞められて、息もとまるような恍惚感にむせび、白羽二重のような足の裏で絶つたりと顔を押しつけられて、絶息の瞬間の感激を味わい塩からい足の指の汗をたっふりと舐めさせて頂く倒錯感の絶妙。身も心も、骨のずいまでも屈伏させられたという被虐感を、いやという程叩き込まれるポリウムのある美女の臀部は、どっしり頭の頭に据えられて、顔がひしぎてしまうのではないかと思うほどの荒々しい馬の乗り様、背中に乗られて逆にとられ



た後手の痛さが、更に一層の屈辱感をもたせて迫って男の自尊心を踏みにじってう。顔乗り、馬乗り、尻敷き、足踏め、踏みつけ、鼻ひしやげ、首締り、胸絞め、ヘッドロックと、美女によって痛めつけられる場面が三十三態にわたって、女王様の勝手気ままなふるまいによって、次々と派手に展開されてゆきます。Mマニアの要望によって構成した第一回目のMフォト集です。ものは試し、一度ごらんになつては如何ですか。

連続吊り責フォートの決定版、未発表の秘蔵版

梨花悠紀子吊責写真特集

第一集

逆エビ吊り
略号(りつ1)

A5判 (21×15 糎) 感光紙焼付
八枚一組 五〇〇円(送共)

第二集

逆胴吊り
略号(りつ2)

A5判 (21×15 糎) 感光紙焼付
八枚一組 五〇〇円(送共)

吊責にあえぐ美人モデル梨花悠紀子嬢の裸身があますところなく、あらゆる角度から鮮鋭なるレンズによってキャッチされた、その全身の悦虐の表情を、皆さまの目のあまりに見ていただくために、A5判(21糎×15糎)の大きさに廓大いたしました。宙にういた梨花嬢の悶悦の姿態は、大きな画面と相まって刻明に手にとるように眺めることが出来る吊責フォートの圧巻であります。この全写真は、吊責愛好の梨花悠紀子ならではの到底実行できないであろうと思われる強烈なものばかりであります。



全身をぐるぐる巻きに縛られて吊り責めにされてみたいというのは、マゾヒスト梨花悠紀子嬢の第一の念願でした。彼女の願う強烈にして苛烈な本格的な吊責。彼女の思うままに、何ら手心を加えることなく、S派の第一人者辻村隆がピシピシと縛り上げて滑車により吊上げた連続場面です。

余りの強烈さと刺戟の強さに口絵としての使用を遠慮されていたものですが、ここにマニヤの強い要望により分譲品として同好家の方に限りお譲りすることにしました。梨花悠紀子嬢の均整のとれた姿態が吊責という妥協のない緊縛方法によって決定的な効果を打ち出していることを信じます。



第一集(逆エビ吊り) 八枚一組

両手首は後手に括られて、曲げた両足首と共に逆エビに緊縛された梨花嬢の肌には深々とロープが喰い込んでいます。ギリギリ、ギリギリと滑車を引き上げるとううう、と、思わず彼女の口から悲鳴が洩れ、じりじりと全身が浮き上って、苦悶の表情が彼女の顔面から、次第に足の爪先にまで伝ってゆく。高々と吊り上がった美しい逆エビの裸身――。

第二集(逆胴吊り) 八枚一組

ヒエーツという悲鳴も口にかまされた猿ぐつわによって、くぐもってしまふ。縄は徐々に滑車によって巻き上げられて頭を下にした全身は宙に浮いてきた。二の腕に、太股に、胴体にひどい程埋れてしまふ縄目。宙ぶらりんとした裸身が吊り縄を中心として、ゆるく回る。時間が経つにつれて苦痛が次第に増してくるが、彼女はまだ頑張っている。

凄絶！とっておきの未発表吊り責め写真の秘作、ここに堂々発表乞御期待

第一 グラビヤ

異臭にむせて 東浦ひかる
皮ムチの下でもだえる 関谷富佐子
逆エビに責められ 関谷富佐子
胴吊りの片足吊り 絹川文代
吊り責め準備完了 絹川文代
エビ縛りの連続写真 梨花悠紀子
ひとり寝る夜の淋しさ 浜千代子

巻頭口絵

責絵：無理強いされる食塩水 四馬孝画
新人：／＼白色奴隷見本市 クロード・コガ画
四馬孝「牢獄の花嫁」 四馬孝画
シリーズ「地底の牢獄」 四馬孝画
切腹 娘俠盗屋根上の腹切り 四馬孝画
／＼女座長真刀の舞台上切腹 滝れい子画
アイデア画 慕い寄る野犬の恐 四馬孝画

第二 グラビヤ

白肌に喰い込む麻の縄目 関谷富佐子
縄に奪われた柔肌の自由 東浦ひかる
マゾ・フォト 「踏みにじられる顔」 大塚啓子
／＼女体切腹 下腹に突き立てる短刀 東浦ひかる
擬態写真 責めに乱れた表情とポーズ 絹川文代

巻頭論稿 MSについての試論 白川由紀夫 (34)

「奇譚三十九夜」物語 (第二十二夜) 辻村 隆 (38)

「映画通信」 秦の始皇帝の 東山 太郎 (53)
若尾のハリツケ火あぶり

女相撲観戦記

誕生す『女相撲会』 岡平 吉雄 (54)

ゴムマニヤの告白 (ゴム椅子のプレイ) 津沢 秋子 (60)

偏倚雑章 臍 石 考 須藤 律夫 (62)

「体験告白手記」 窃視拾歳 永田 利夫 (66)

女体切腹の構想 芸者意気辰巳の腰巻腹切 扇 芝 (74)

長篇SM小説 宇宙のどこかで 佐治 麻造 (76)

「奴隷国探検」 サルジニア探訪記 阿留品又怒 (94)

(告白) ネルのおこしに魅せられて 越野 信敏 (102)

異譚 雪隠蠅の怪 正夢比呂目 (106)

雪俊選だより 革の拘束具についてのアイデア 雪 俊 遙 (112)

対話 妊 婦 二 題 瀬沼 四郎 (116)

「通信」 関谷夫人讃 花田 一郎 (118)

テレビに現れた緊縛場面 ああ後ろ手に縛られて 田村 清彦 (120)

創作 悪魔の唇 田沼 醜男 (122)

私の責め資料行脚 小さな窓 泉 辰之助 (132)

女体切腹秘話 腹切り地蔵縁起 石井 章造 (138)

浣腸マニヤ クリスタ・フェチシズム 夢原 弘一 (146)

小説 髪の毛の虫 忍頂寺芳子 (148)

「告白」 サジ女学生とその奴隷 鷹島みどり (156)

体験小説 男ごとく浮気ごころ 梓 加代子 (160)

緊縛フォト撮影の実際 塚本 鉄三 (166)

「関谷夫人緊縛日記」 塚本 鉄三 (166)

読者通信 (180)



画の大きさ A5判

(21 纏×15 纏) 感光紙焼付
六枚一組 五〇〇円、略号 (か6)

一、組上のいけにえ、(台上でエビのように二つ折りになされた全裸の女体に今まさに加えられようとする浣腸器の悪魔のような跳梁をじっと耐える彼女。)

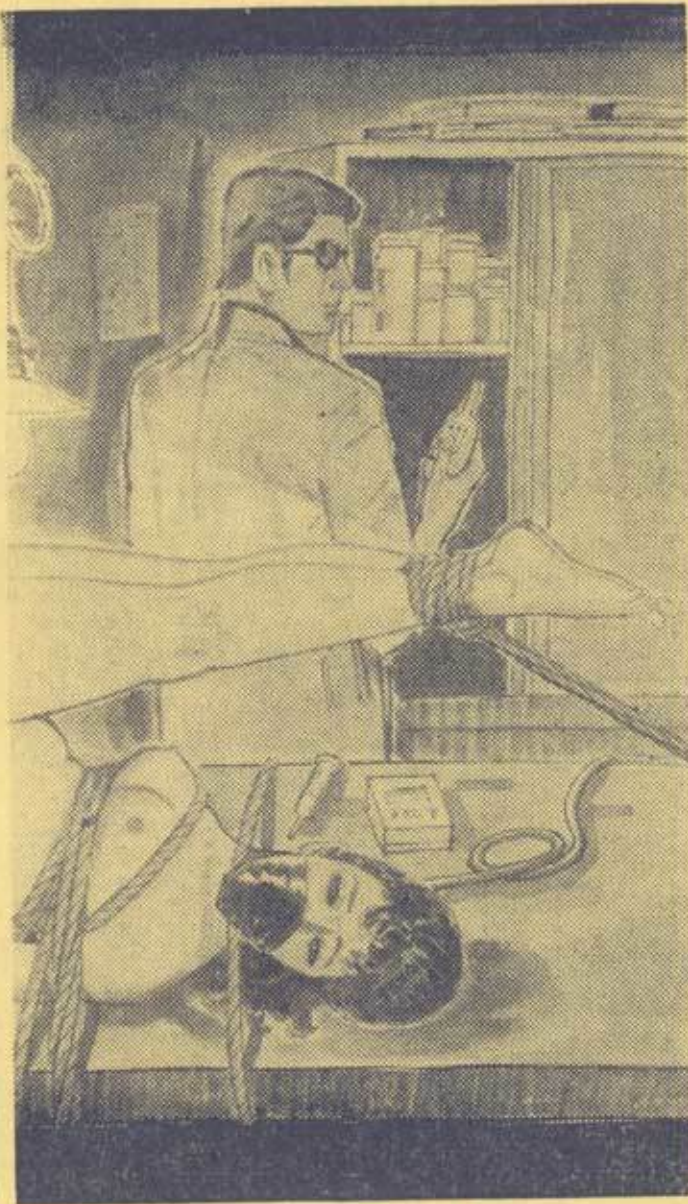
二、高圧空気浣腸、(百ワットの電光に明るく照らし出された女体に、高圧ポンプの先から、空気がドンドン送り込まれる恐怖が鮮やかに描き出される。)

三、蛙腹の注水実験、(手と足を鎖に吊られて宙に浮いた白々とした女体。その鼻孔にはイリガートルの嘴管が水をどくどくと腹の中へ注ぎ込んだ。)

四、浣腸責の最高頂、(竹の棒によって、両足を八の字に開かされたイケネエは、目の前にある恐ろしい器具に、思わず全身を硬直させてしまった。)

五、排泄に耐える、(豊満な張りきれぬばかりの女体を一本の柱に宙じばりにされて、浣腸の洗礼を受けた彼女が便器を前にして耐えに耐えぬく悲壮感。)

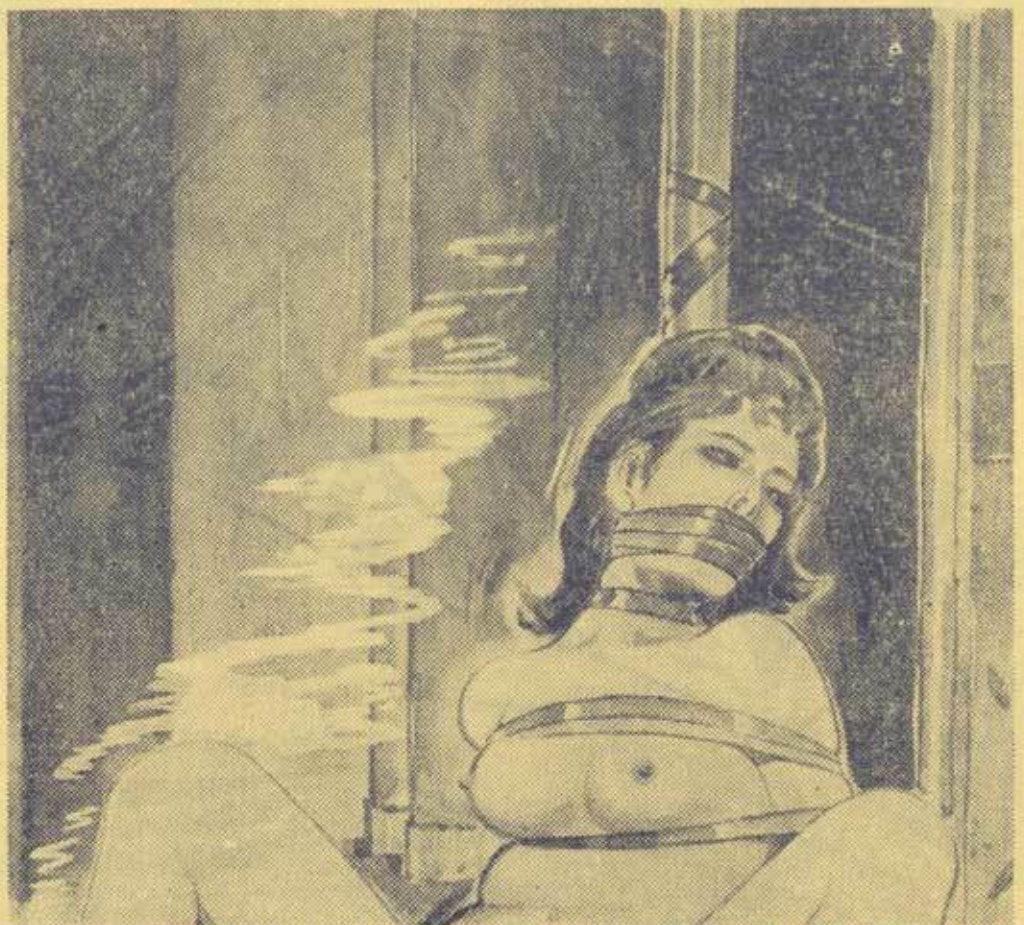
六、奇妙な便器、(彼女の体内には、五〇CCのグリセリンが注入されて荒れ狂っている。奇妙な型の便器が彼女の使用を待って、あざ笑っている。)



四馬孝・案並に画

女体浣腸嗜虐場面図

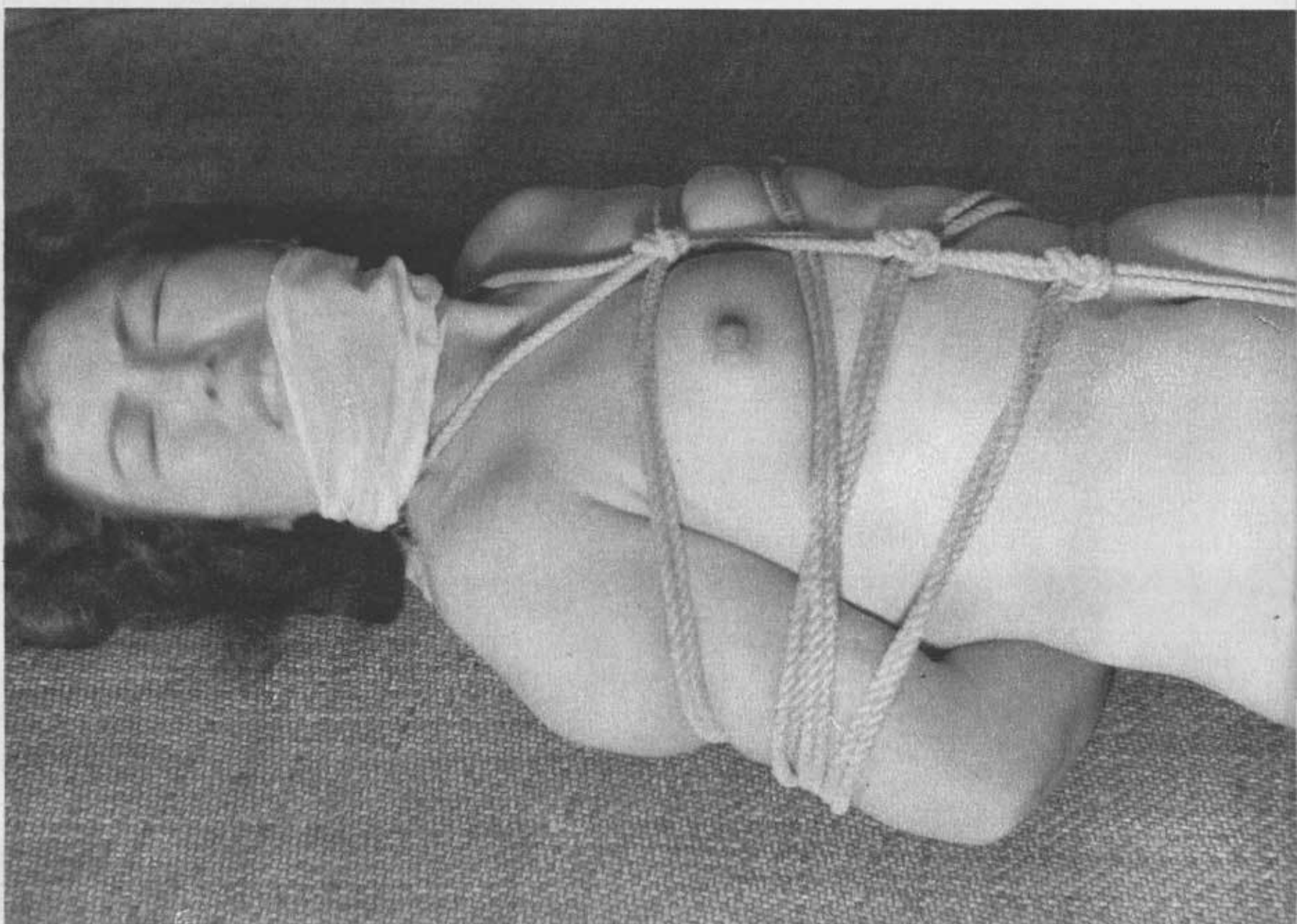
(うら若き麗人、強制的に浣腸を施される図)

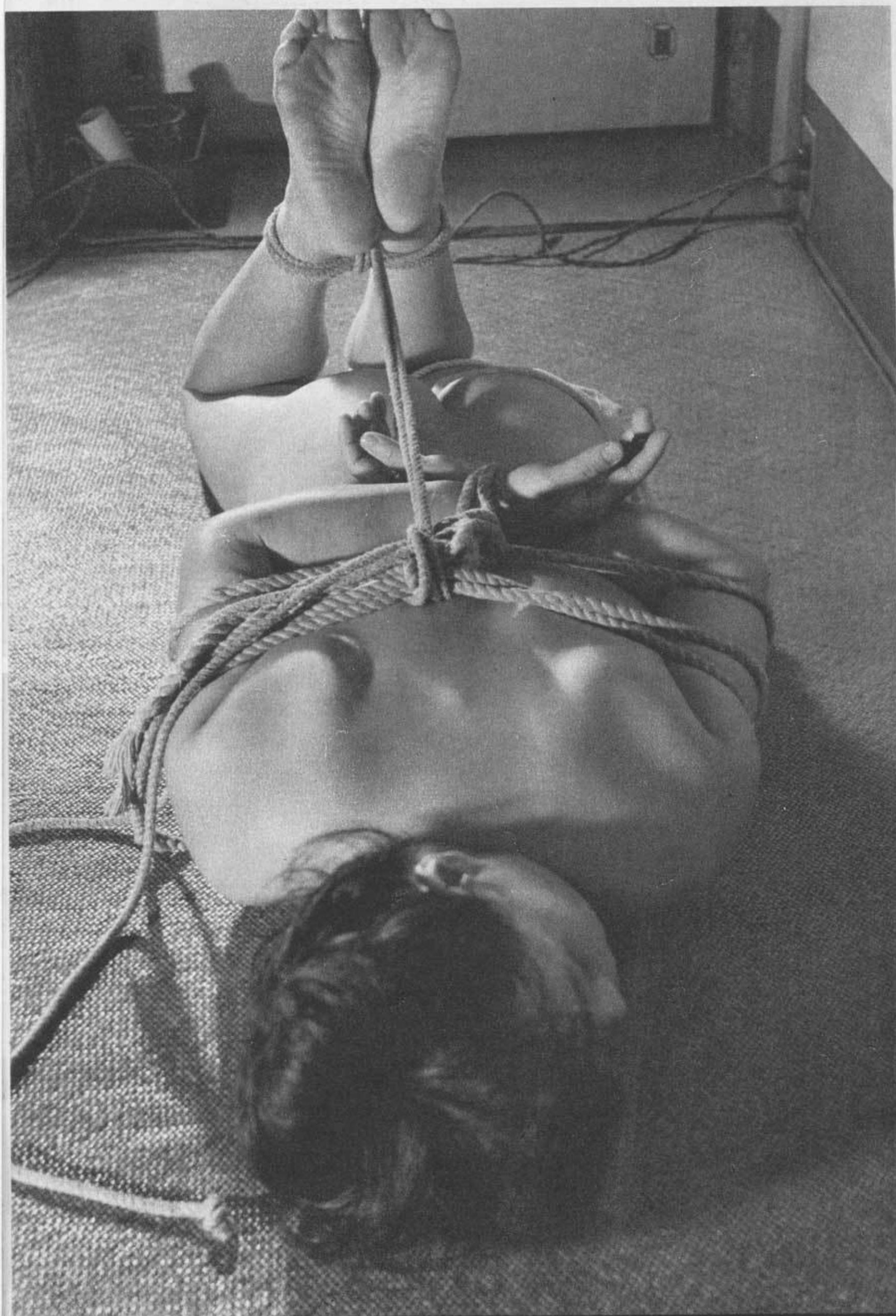


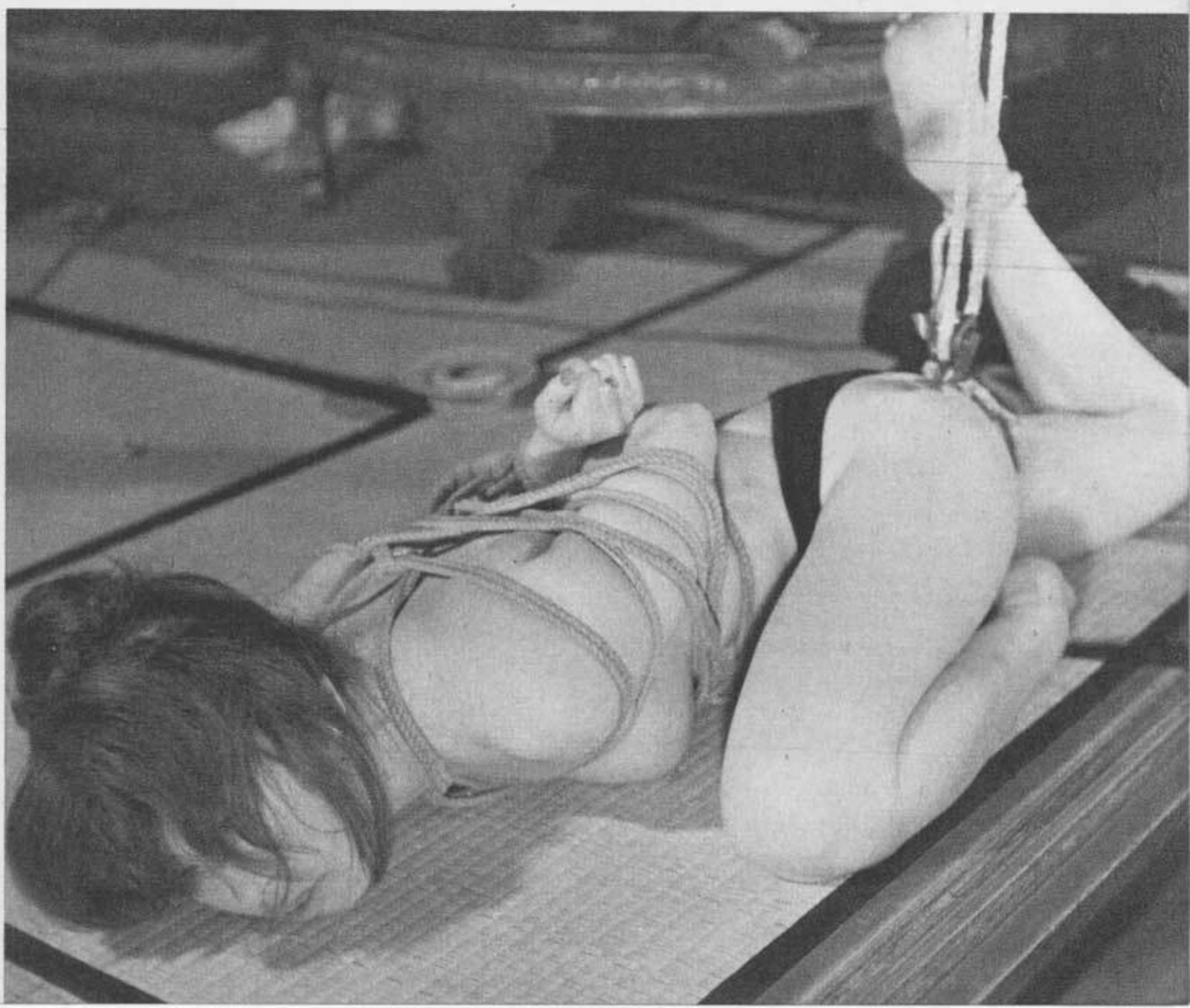
◎浣腸愛好者のために、特に浣腸を主題としたショッキングな場面ばかりを四馬孝画伯の豊富なアイデアによって描面して貰った力作揃い、従来兎角口絵から締め出され敬遠され勝ちだった浣腸のテーマを、ここに見事に完全に絵面化されました。

女性性に対する浣腸について大きな関心を抱いている方々から、の久しい間に亘っている要望も、いろいろの制約のために果し得ませんでしたが、浣腸ファンの見果てぬ夢の一端でも満足して頂こうと、ここに四馬氏を煩して、女体浣腸の興味的な場面、数々の変化ある姿態、背景、小道具等によって、美しい画集として完成して頂きました。浣腸マニアの方は勿論のこと、Sマニアの方にとっても、非常に興味がある画面の展開がたのしみです。どうか、浣腸マニアのため、特に作成したこの画集を、引続いて刊行するためにも、御支援下さるようお願いいたします。

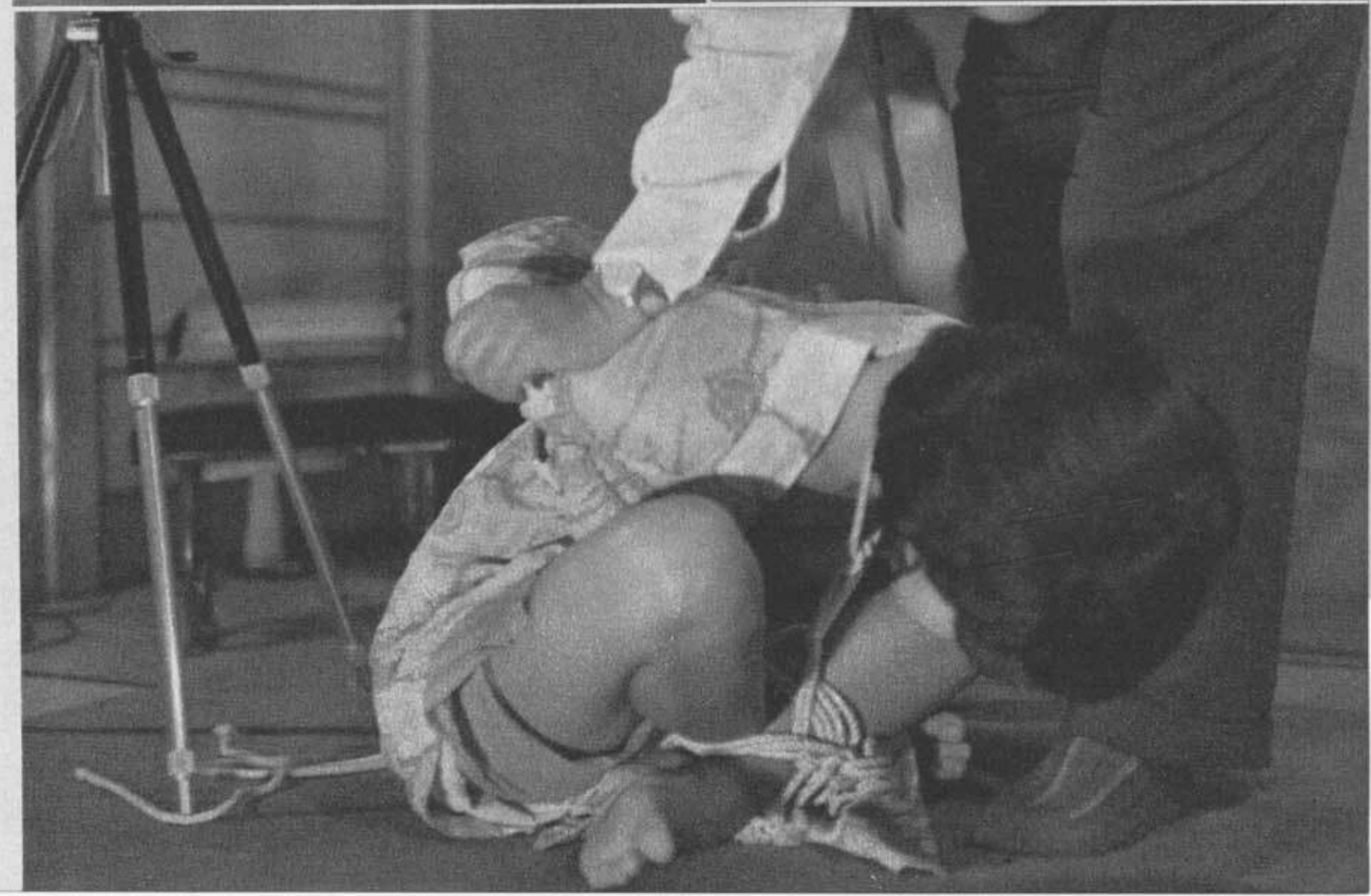
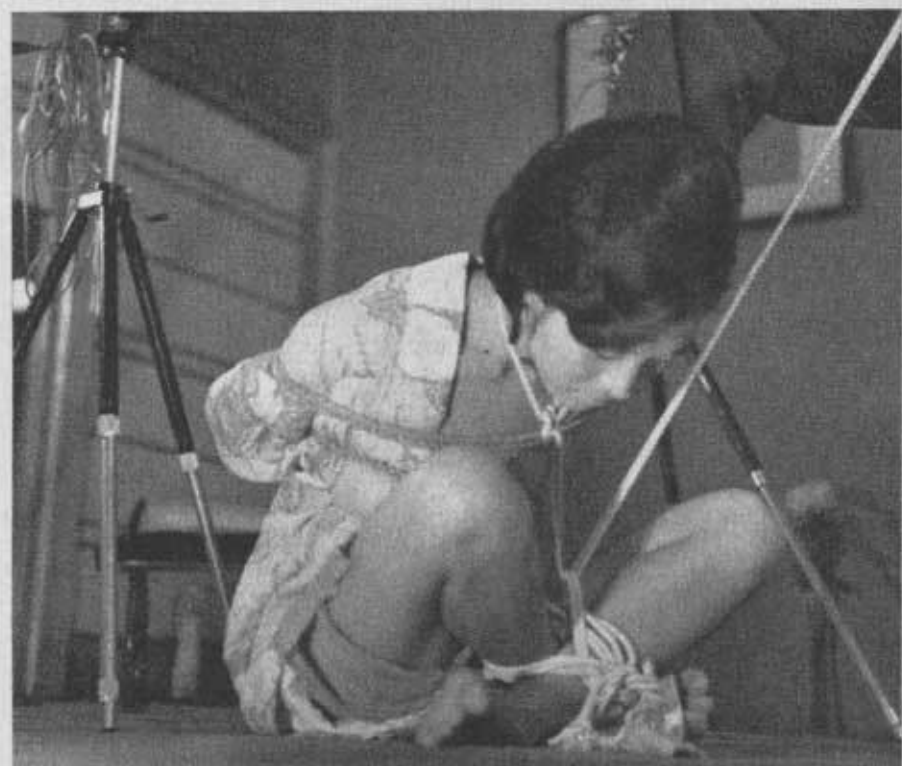






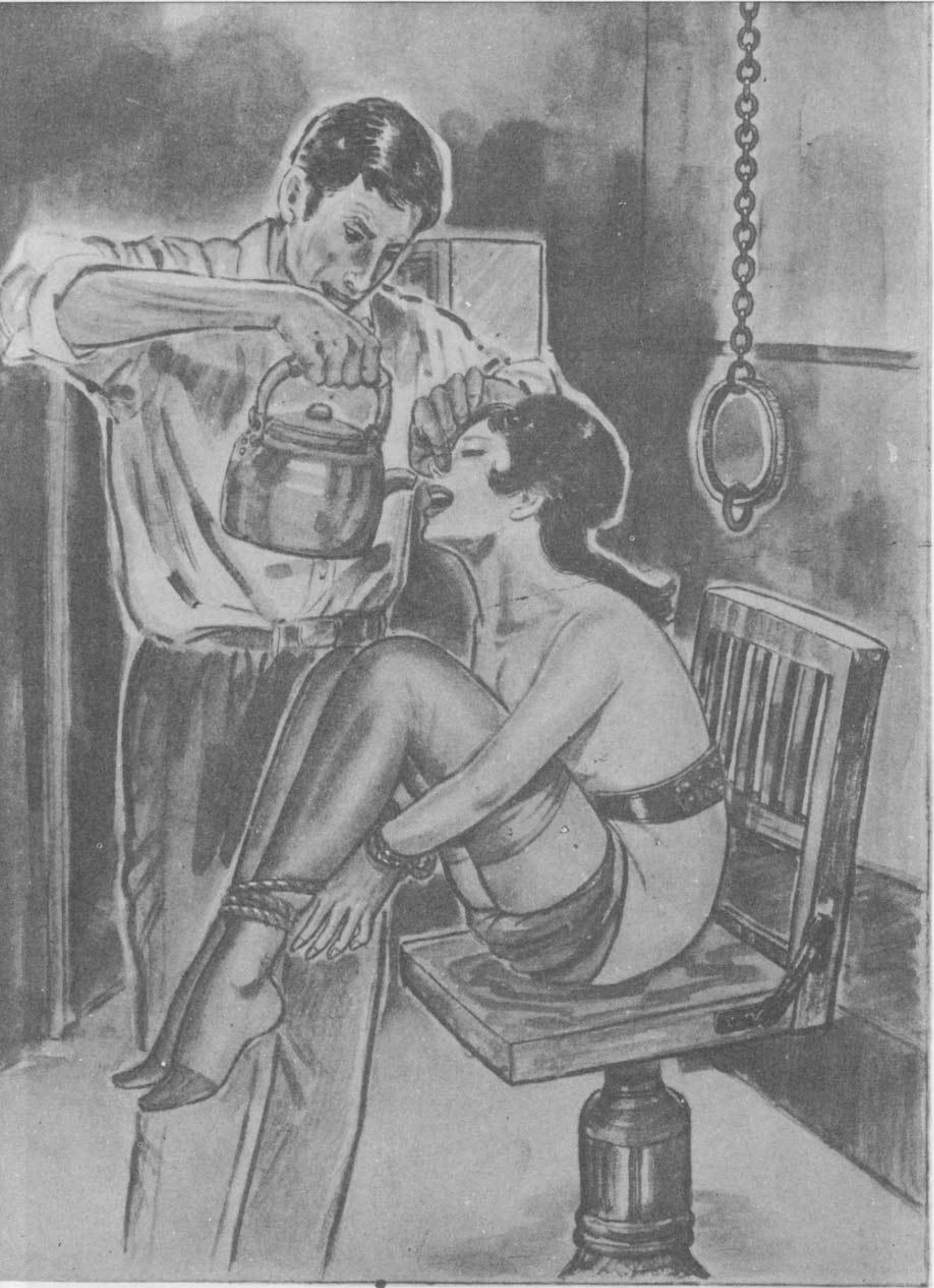






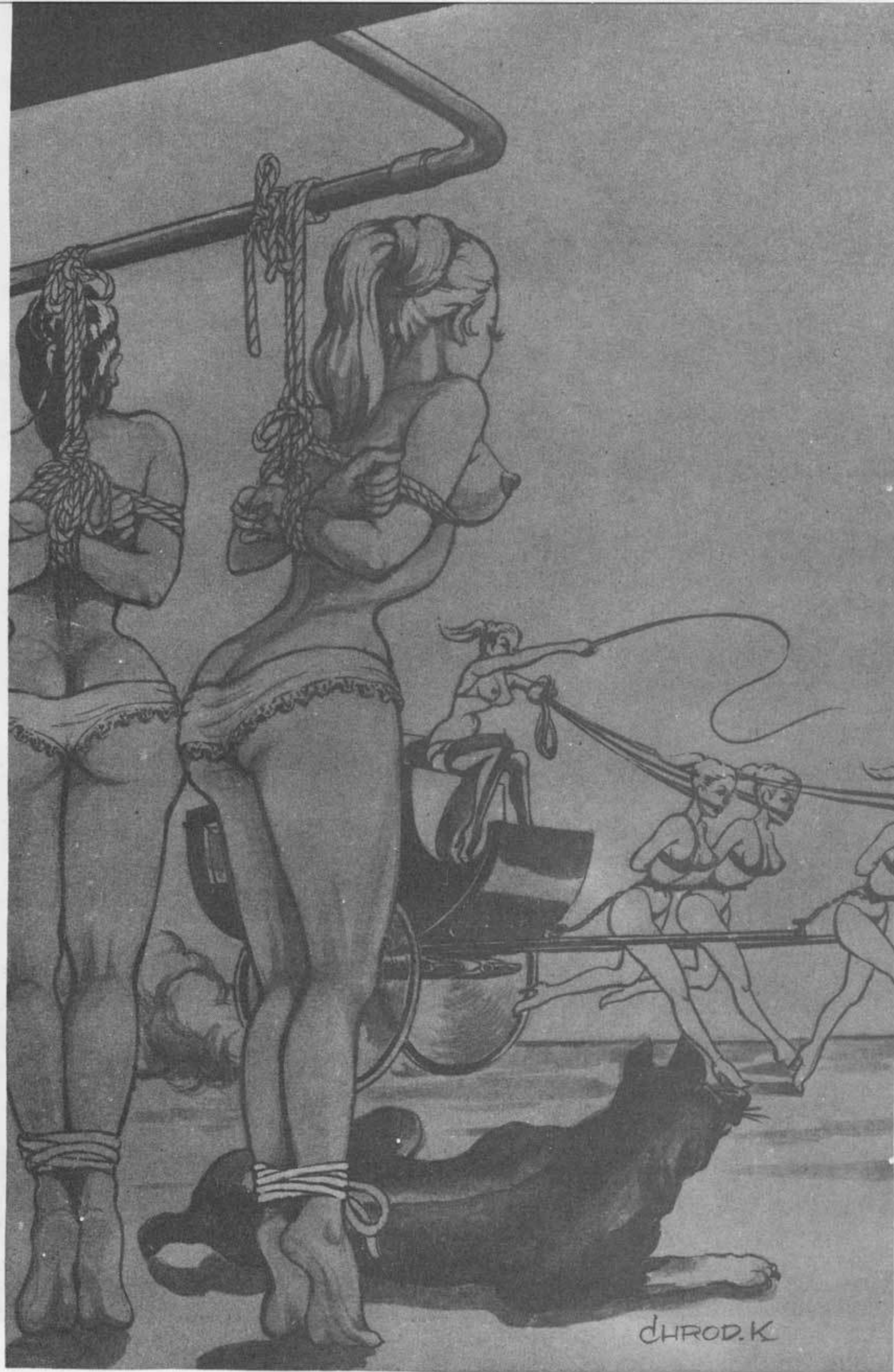






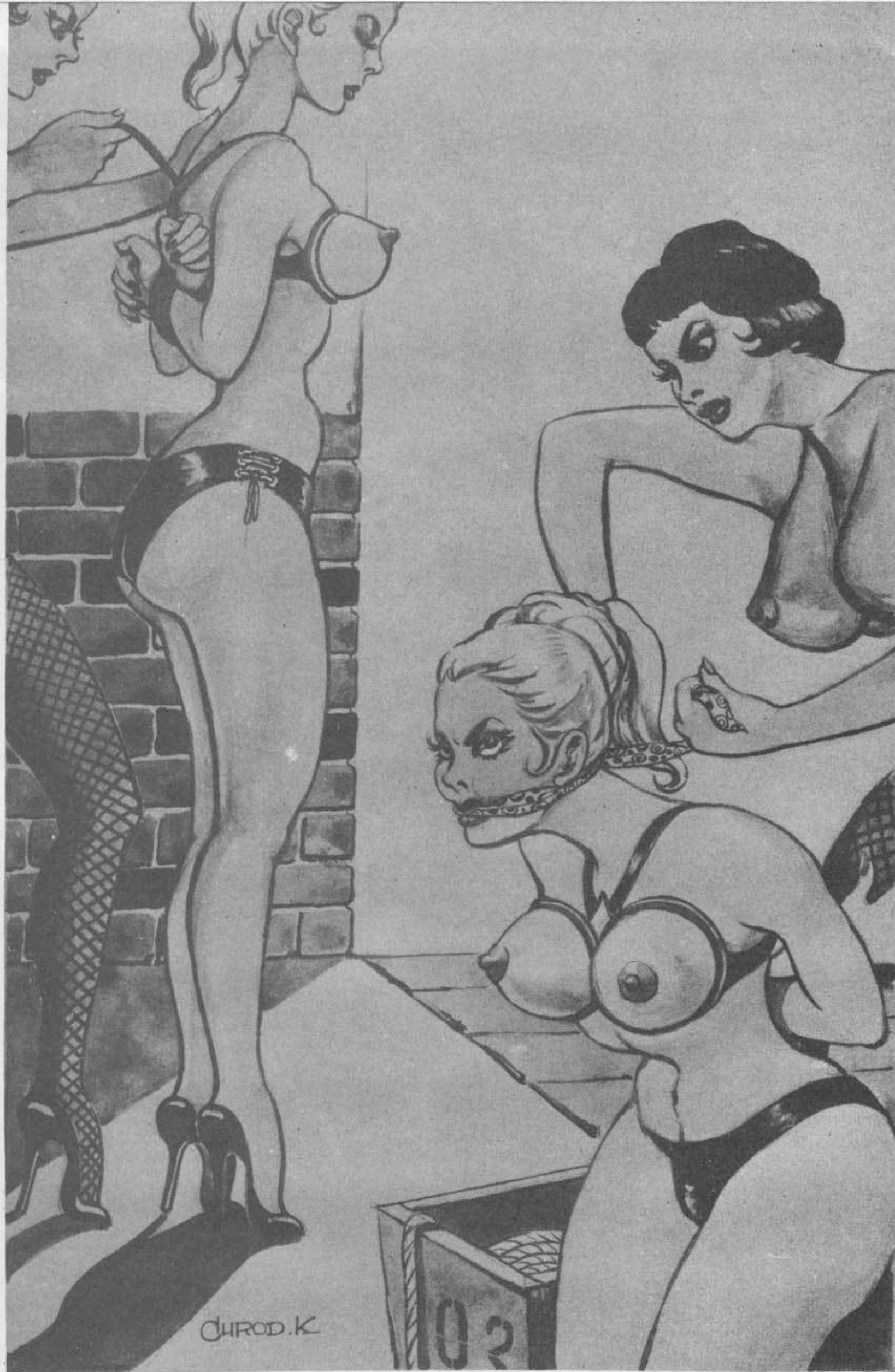
無理強いされる食塩水

四馬 孝・画



客が来たとき、商品たちは日光浴の最中だった。
猛犬がたえず商品たちを監視している。

(え・クロード・コガ)



にわかの客に商品係は大いそぎで、念入りに
商品の飾りつけを行う。

(え・クロード・コガ)



牢獄の花嫁

(四馬 孝・画)



地底の牢獄

(四馬 孝・画)



娘 俠 盜 屋 根 上 の 自 害

源 平 の 源 氏
四 馬 孝 ・ 画

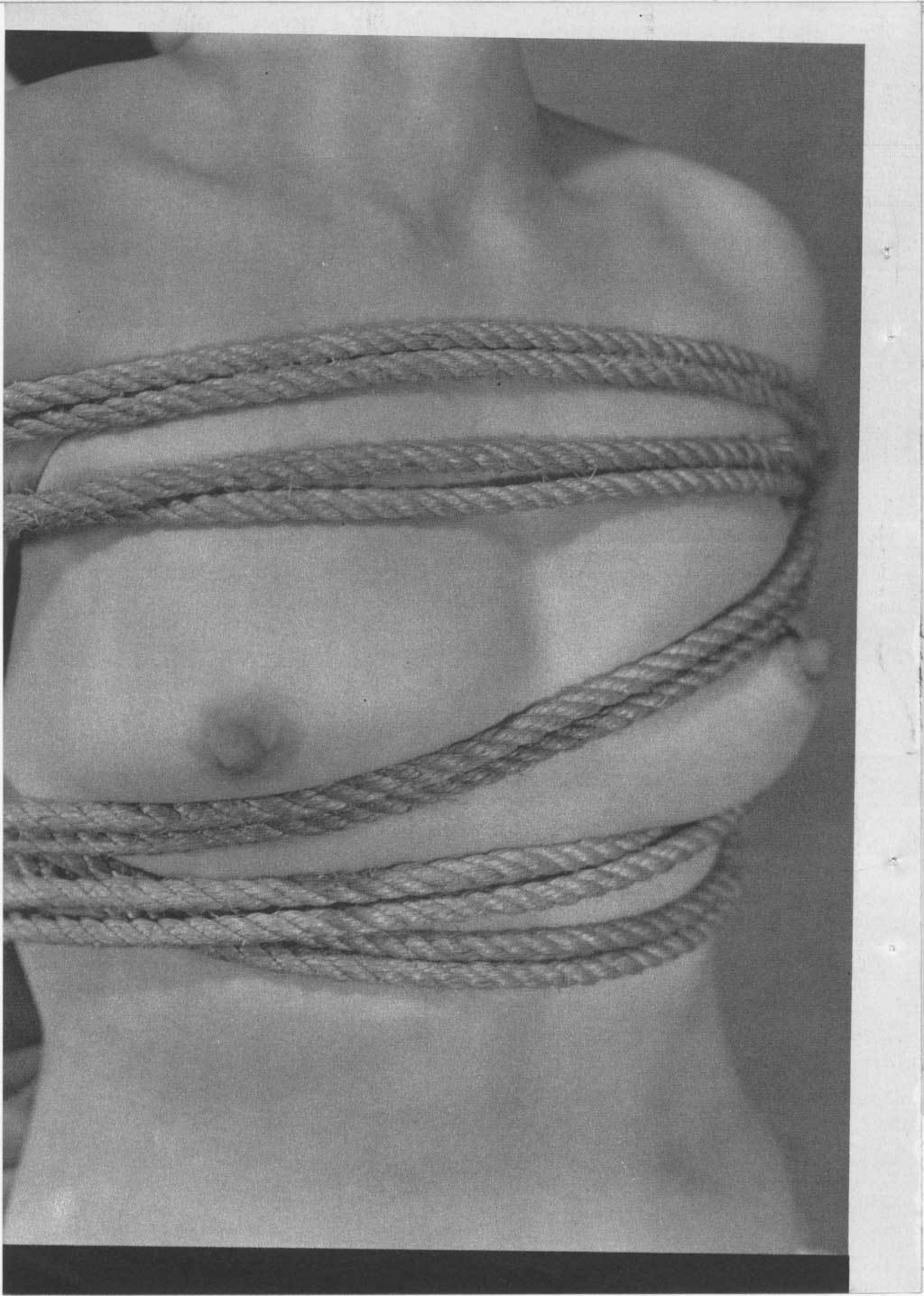


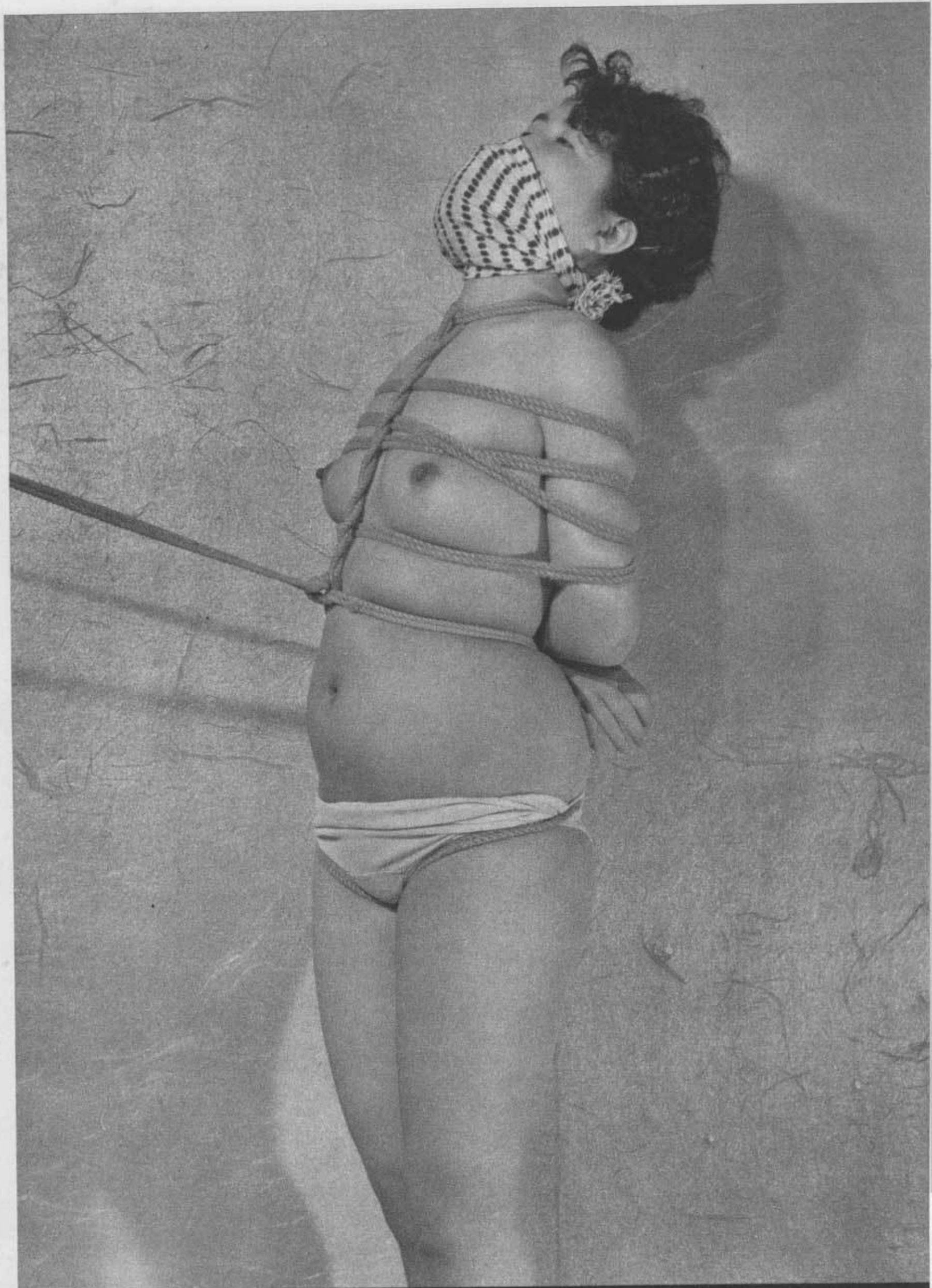
女座長真刀の舞台上切腹

瀧 れい子 画

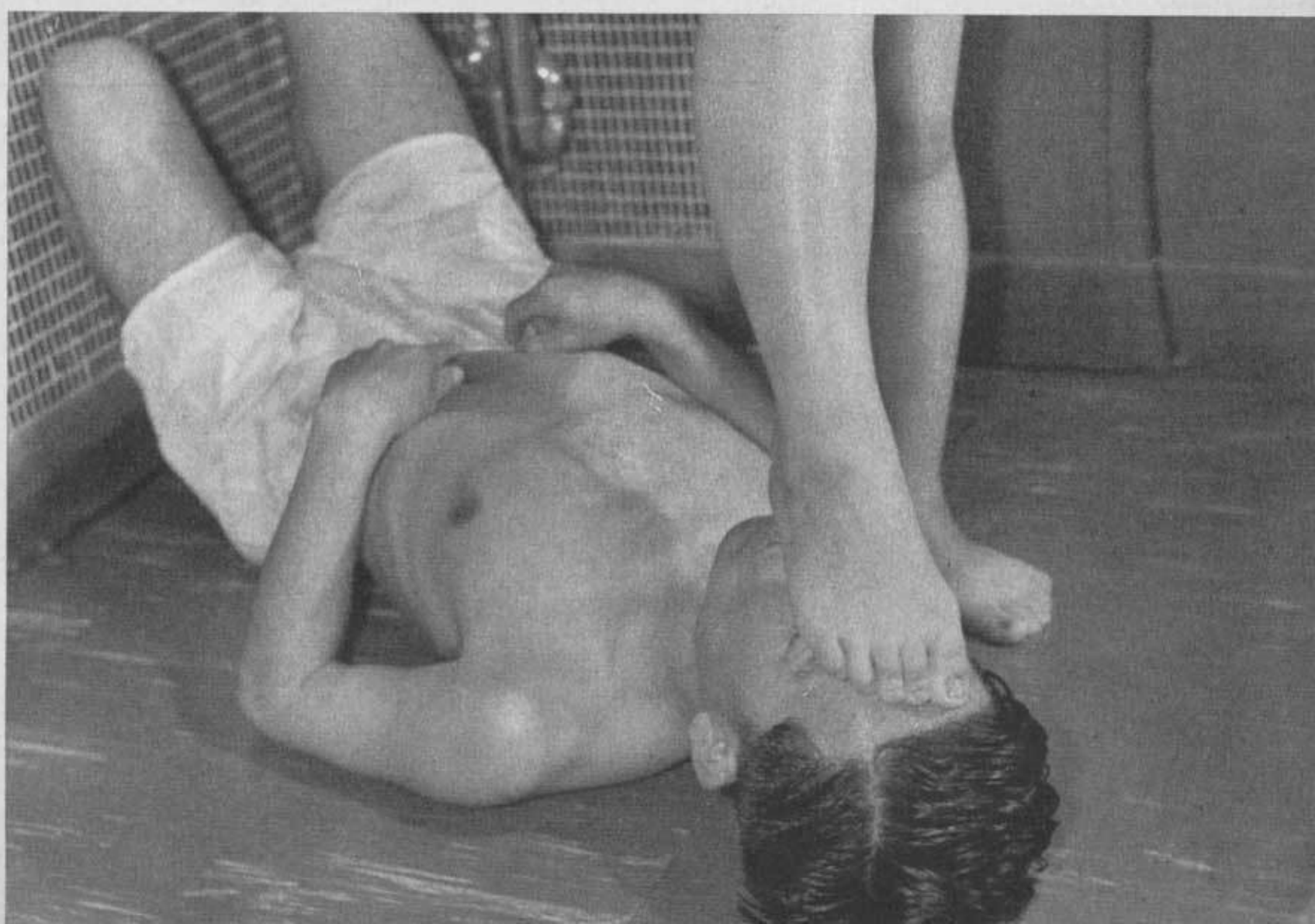


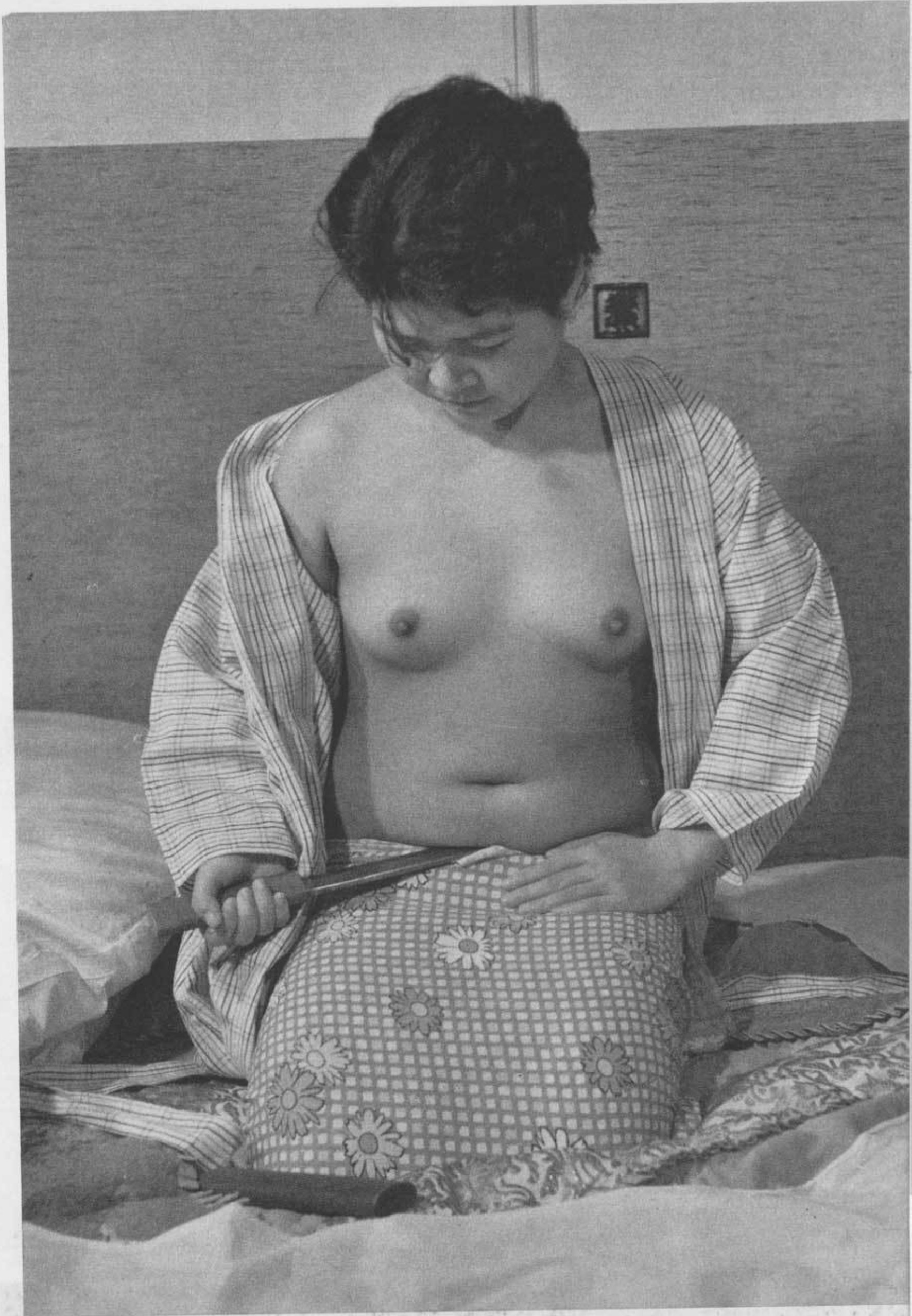
慕い寄る野犬の恐怖

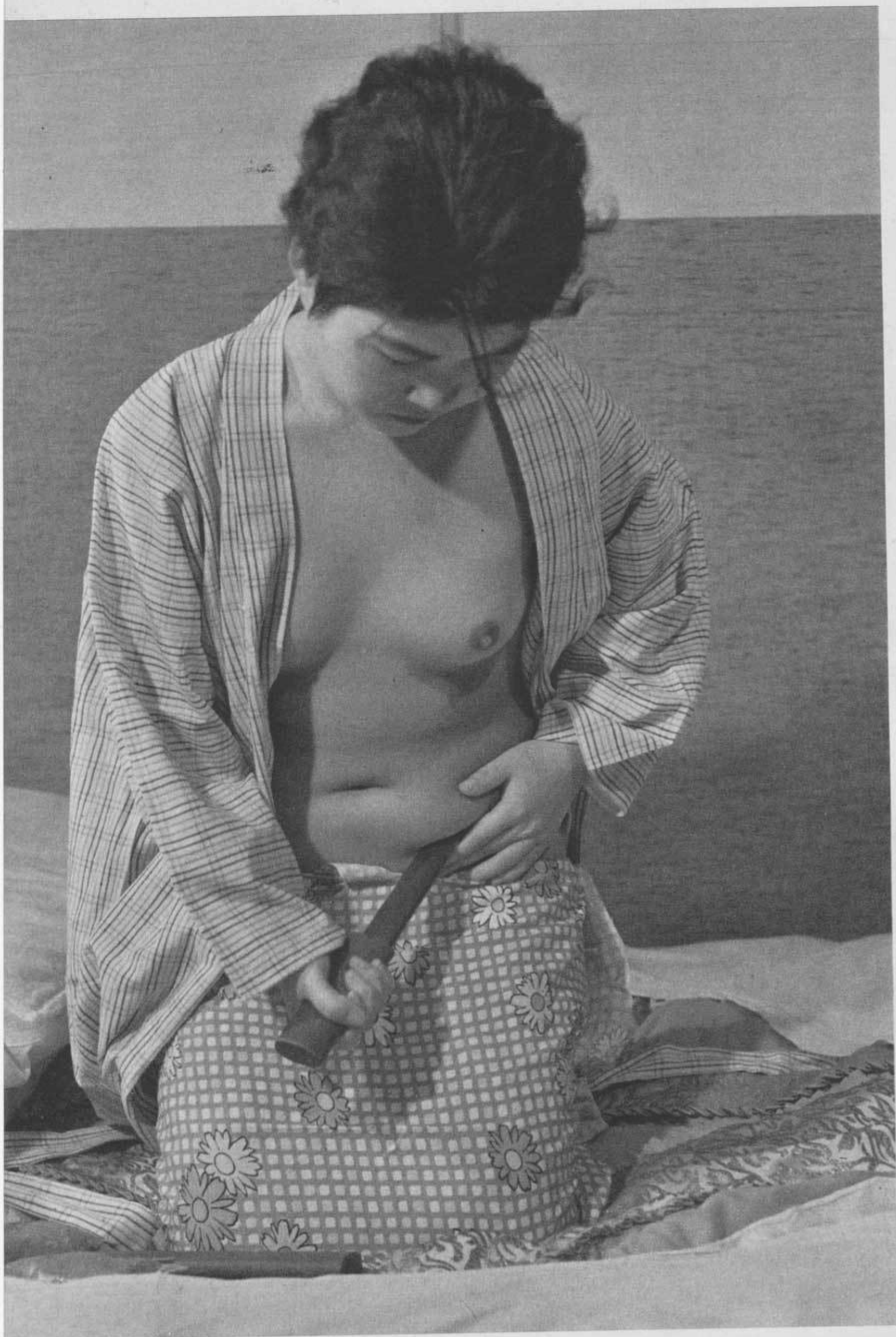














新しい風俗文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

1963年 2月号

(第17巻 第2号 通刊 第173号)

緊縛モデルの一表情

大塚 啓子





△ 卷頭論稿 △

MS についての試論

白 川 由 紀 夫

その精神的風土

生きるということが本来的に自由でなかったならば、悪への墮落も、神への祈念も成り立たないだろう。

人間の自由には奔放性と自立性の性質があり、自立性は倫理的であるが、奔放性は反倫理性を有している。人間は神的存在であり、同時に悪魔的存在である、そのことが人間の生長を保証する構造なのである。

「少女を犯すことも、赤子を虐殺することも、人間には元来許されている」と、ドストエフスキーは言った。この証言は悪魔を意識することによってではなく、神を意識することに

よってなされたのである。

人間が自由であり、悪を犯す自由をもっていることを知るとき、神への帰依がはじまる。

私は人間性とMSという変態的傾向を、このような基本的考察の上で関係づけたいと考えるものである。

人間は現象や心理の光明の面だけではなく暗黒の面を知り没入する自由と好奇心を有している。MSの迷路への放浪も決して非人間的なものではなく、あまりに幅広い人間性の一面の現れであろう。しかしながら私たちはMSが正常な感覚ではなく異常であり、それを求めることが異端の道であることを心得ていなければならぬ。悪への接近が常に神性への逆説的接近でなかったならば、それは破滅をもたらす以外



のものではあるまい。

MSは、精神の貴族的所産であることを忘れたくないと思う。古めかしい常識のもつ微温湯的な精神の弛緩から脱出する為に、MSへ志向が初められたのだ。そこにMSは高貴な異端者というエリート意識が伴うゆえんであろう。神聖への離反という心の戦きを欠いたならば、MSの底流に精神の激しい懊悩を失ったならば、唾棄すべきものになってしまうであらう。

MSの追求が、現象としての墮落は、本質的に高貴への思念であるという精神のもたえであることを銘記したい。

MSについての推定群

MSは感覚の歪曲だけではなく、論理の逆説であり、愛の理想主義である。

花の香ぐわしい匂いも持続すれば頭痛をもたらず、香が強すぎれば悪臭と変るところはない。快感の永すぎる持続は苦痛であり、限度を越えた快感も、まだ苦痛に外ならないことは、初歩の心理学が証明するところである。

快感の量的変化は、苦痛という質的变化に到るという方程式を、逆に配置したのがMSの論理にはかならない。苦痛の持続が快感であり、苦痛の増大が快感に変化とするのであるが、この論理の結論は、苦痛即愉悦ということである。

そしてこの地点に思惟がさぐりあてるものは、快楽、幸福並びに苦痛、不幸に対する懷疑と不信である。感性は懷疑

と不信とを超越することにより、新しい座標に自己を確立するほかに道はない。

仏教の修道に不浄観というのがあった。この方法を会得して観じたならば、米飯は無数の蛆となつて蠢き、美女は血膿にまみれて臓腑を露呈した死骸となつて臭気を放つという。世を無常と観て悟道に達する方便であり、この世を醜と観ることにより魂の法悦に至うるのであろう。MSの醜を美と観る倒錯した論理は、不浄観のこの逆説精神と相似するものがあるといえないだろうか。

サジストたちの心にあるのは、苦痛醜惡束縛汚辱に対する繊細で限らない恐怖と嫌悪である、その恐怖への克服という心理の自動的作用が、恐怖の実体である苦痛醜惡の愛好へ向うのである。それは傲慢で粗暴な神経ではなく、恐怖に震えているデリケートな神経である。

MSを単に歪んだ性慾の現象として、形而下的に断定することはできる、しかしその観念構造を分析するとき、普通の愛のあり方に限りない不満を抱いた愛の理念を発見する。サジストは正に茨の道を行こうとする愛の理想主義者なのである。

サジズムは、現実から分裂することなしに灼熱した愛の精神である。愛が高潮した場合プラトニック・ラブとなり、窮極には神を目指すであらう。しかしここに異端道があり、愛を止揚させ、しかも現実から遊離することを拒んだならば、どうなるであらうか。理想の愛が達成するには、現実や愛人はあまりに生々しすぎる。しかも現実を離れ、肉体をもつ愛



人から遊離することは人間としての愛の性質を喪失することになる。サジズムはそのような現実に着して炎え上った愛の灼熱した状態の、絶望的な矛盾統一の方法なのである。

サジズムは愛であり、愛他精神である。加虐者が被虐者を愛し、その間に感情交流がなかったならば、サジズムは成立しない。他人の苦痛を自己の苦痛として理解し知覚するところに成立する。野獣が人間を殺したとしても、それはサジズムとはいわれない。

また同様な意味で、強制収容所にみられた機械的大虐殺をサジズムの現われとして解釈することを欲しないものだ。

サジズムは愛の理想化のつまずきであり、愛の行為の理想化の絶望と、愛の対象への絶望にはかならない。愛はその対象と同化し一体になることを欲するのであるが、現実と自意識がそれを妨げるとき、愛は絶望し緊急手段としてのサジズムを成立させるのである。

マゾヒズムにあっては、愛の対象は既に神聖であり理想化されているのであるが、愛しようとする自己は、対象からあまりに隔っている。そのギャップを越えようとする努力は、自己を理想化するという方向に向けられず、自己を理想からへだてることによって果されようとする。すなわち努力という能動性は放棄され、すべての能力を自ら喪失させて、自己を全く受身の状態に置こうとするのである。

自己のもつ愛は完全に受動的になり与えられる愛だけに満足する。自己の低級さを意識し、意識させられることによつて、ますます愛の対象は崇高となり、その愛は充足される。

その窮極の形態は、与えられる愛の断絶することのない絶対の涸渇である。こうして自己が自立性を失い、自己の人格が無視され個体として無に帰するとき、理想の対象と一体化が具現すると思われるものである。

サジズムでは自己が絶対の権力者であり、マゾヒズムでは対象者が絶対の権力者である。権力者は支配者であり神であるが、神というにはあまりに人間臭に充ちた存在である。

○
愛の理想化における転倒の形態として更に同性愛を上げることができる。

異性に対する美学上、感覚上の嫌悪から、理想的な対象を創造しようとするとき、同性愛が発生する。それは異性的嫌悪感を有しない異性の創造なのである。異性への嫌悪の根底にあるのは自己愛であり、自己愛は自己の理想化である。

フェチシズムは愛の対象を部分的に限定することにより、純粋化し理想化しようとするものである。人間のもつ複雑な面を、愛の対象とならない夾雑物として取除いていくとき、愛の対象は限定され部分化される。やがて対象となる人間から遊離し、その附帯する所持品に焦点を結ぶのである。フェチシズムを、人間的夾雑物を否定しながら、純粋に人間的な郷愁に立脚しようとする美学ということができよう。

不健康の価値

MSの受ける倫理上の非難は、その異常、病的、不健康さ



にある。この非難は間違っていない。しかしMSのもつ倫理的価値は常識的健全さに反逆した病的性の中にのみしか見出だせないことも否めない。

複雑多岐にわたる人間の属性と、創造力の可能性の中にあつて、健康は唯一の美德ではない。健康性はたしかに人間の生活を安定させ漸進させる条件である。だが健康であることは精神的に、保守的な渋滞を感じさせはしないか。定められた時間に食慾を覚え、妻に対してのみセックスを感じ、あらゆる病的さに無感覚な人間のあり方に、創造力の狭少さを覚えるのは私だけではあるまい。

人間の偉大さは、あらゆる可能性を追求していく創造力、開拓精神の中に求められるものだ。人間の可能の追求は、健全、善意の方向だけではなく、時には病的、悪意の方向にも進められていく、それも人間の豊穡さの現れにほかならない。しかしながら探求の方向が不健康である場合、そのうちに溺没することなく、本来の健全性を忘れずに、人間性の豊さを増すことを目的としなければならないことはいうまでもない。

不健康であることの倫理的価値は、常識的健全に反抗して病的であることの、それ自身の中にある。病的であることにより、健康のなかでは得られなかったものを人間性に附加し豊富にするというところに、その倫理性を見いだすことができる。

反逆精神、異端の方位には、いっそう深い精神活動を必要とするものだ。MSの探求が現象上の方法論に終始するなら

ば、そこには機械的複雑化という自己満足しか得られないであろう。MSの探求は人間性の探求と並行して行わなければならない、いや何よりも人間性の探求であるべきものだ。かくてMSの追求に要請されることは、内省的であらねばならぬということである。

MSの現象的考察

MSの危険性は、むしろその精神と思想面における過激さにあるのだが、現実の非難は出版物などの現象面に向けられる、それはそれなりに正しい。

MSの批判は、好色、刺戟性、残虐、人間蔑視に向けられている。なかでも、刺戟的であることと人格の無視が問題となるであろうが、それはMSをあつかった作品が、機能的に複雑化することによる刺戟追求のみに終り、人間性の問題を忘却しているからである。

人間の多面的な一部分としてMSの嗜好も許るべきであるが、社会人である以上、社会の制約を守らねばならない。人間は本来的に自由であるが、その自由が自立し尊厳を保つ条件として、知性の良識的批判を欠くことはできない。MSの精神的鏤骨は個人の内面のもので位置づけられ、風俗的現象は個人の趣味の段階に止まなければならない。それらは美学や文学の芸術意識により洗練され昇華されなければならないものであり、人間論的に深化しなければならぬものである。

(おわり)



『奇譚三十九夜』物語

第二十二夜

辻 本

隆

新らしく完成した十二階建てビルの、このクラブの、豪華な安楽椅子の坐り心地は上等でもあったし、仄暗い間接照明は、いかにも晩秋の夜語りにふさわしい落付きが感じられて、猟奇を探求する紳士達にとっては、まずお誂え向きの雰囲気でした。

オールド・サントリイとレモンの香の漂よう紅茶が、ホステスによって一同に配られ終ると、ゴルフ氏は、その湯気と香りを愉しむように眼を細め、ゆっくりと音を立てて啜り、水入らずの仲間達になつたところで、さてと改まりました。

「『悪徳の栄え』が無罪になつたと云うことは、我等の愛する奇クスの存在も亦安泰なりと云うわけで、安らぎを覚えしました。昔、ドイツでの学会で云われた言葉ですが、「人間はいまでも充分にケダモ

ノでありうる」と云うのです。聖史外伝の映画「バルバ」での凄絶な拷問シーンを始め、「世界残酷物語」のように、残酷をうりものにした映画が、空前にうけている現在です。人々は残酷を秘かに求め、嗜虐に云い知れぬ興奮をかり立て、「瘋癲老人日記」の如き、足フエティシズムに徹した小説が映画化されて、成人向として、世評はそれを肯定しているのです。

だからして、私の友人のKK教授夫人、敏枝さんが、教授の永年に亘る飼育の結果、稀れに見るマゾヒストとなって、人生の黄昏近い教授に、献身的な奉仕を続けているとしても、それがアブノーマルと感じるよりも、寧ろ夫人の涙ぐましい努力に満腔の敬意を払いたいと思うのです。その夫人が日頃の単調を打破る、一寸した出来

事にはからずも遭遇したのが、このお話です。」

第五十一話 縄 目

心齋橋のK店で、教授の愛好する薫香を買求めて、敏枝夫人は一寸した買物をした後、阪急宝塚線の車中の人となった。

午後二時過ぎの車中は流石に閑散として、朝夕のラッシュが嘘のような物静けさである。庄内、豊中を過ぎた頃から車内はいよいよガラんとし、数人の乗客が手持無沙汰に、広い空席を大きく占めて、車窓からさしこむ、秋の柔かい陽ざしに甲羅を温めていた。

敏枝夫人は徒然の儘、見るともなしに、自分の前のシートに、端麗にかたちよく坐っている若奥様風の女に眼をやっていたが、急に、あれと云った顔になって、改めてまじまじと彼女の手首を凝視したのであった。

若尾文子にどこか似かよった、和服姿の彼女が、微かに吹き込む、隙間風に、フト右手をあげて耳許の髪を押えた一瞬、敏枝夫人は、そのあげた手首にまさまじと三筋の縄目がくっきりと跡を残しているのを見て、ドキリとしたからである。

△私が主人に犇々と、強く肉に喰い込む程に縛られた夜でも、一夜明ければ、うっすらと微かに縄目の跡を残しているに過ぎないのに――、あの白い手首に、薄桃色にあればどくっきりと縄跡を残しているのは、ほんの数時間前に縛られたのか、でないとしたら、私の想像も及ばぬくらい、極度の緊縛をされたに違いないんだわ――▽

敏枝夫人は、微かな睡気も吹っ飛んで、恐らくは自分と同じ被虐の立場にあるであろうこの美貌の若奥様に激しい興味をそそられた。△電車はもう池田を過ぎていく。どこで降りるのかしら？何だか正

体を見たくなくなって来たわ。私の降りる雲雀が丘なら、誠に都合いいんだけど……▽

敏枝夫人は、そろそろ雲雀が丘の駅が近づくにつれ、ソワソワし出した。ゆきずりの他人の縄目を気にして、彼女が降りる駅を降りて、跡をつけても、縄目について端的にたずねる勇氣はなかったし、それ程酔興でもなかった。

夫人はやっと諦めて、開閉扉に近づいた。その時、くだんの女もキャラのかぐわしい匂いをただよわせて、すっと立上ると夫人のうしろに、つつましくかたに立っていた。

再び敏枝夫人の心臓は、年甲斐もなく高鳴るのを覚えた。

△この人も雲雀ヶ丘の住人なんだわ……いいお友達になれるんじゃないのかしら。けれどどうして近附いたらいいのだろう。まさか、ズバリときけもしないし……▽

兎も角、夫人は駅前で、週刊誌を買って、くだんの人をやり過ぐすと、暫らく間をおいて、静かに彼女の跡をつけ出した。

住宅地の続く、田園都市の舗道を、ためらいもなくその人は歩を運んで行く。

立派な門柱の家――、そこでその人は敷石を踏んで姿を消した。標札に花鳥信とあるのを確かめて、敏枝夫人はその家から数丁許り離れた自宅に、秘密めいた興味を内臓し乍ら辿りついたのである。

× × ×

御用聞などから、かき集めた情報によると、主人の花鳥氏は北浜のU証券の総務部長であるが、最近病を得て静養中であるとの話であったが、内実は、株の暴落のショックと、可成りの思惑買の外れから、苦しい多額の負債を抱えているとの事であった。子供はなく

大きな構えに似ず、お手伝いを一人もおかず、夫婦二人っ切りの生活で、余り近所のつき合いもなく、ヒソと暮しているとの噂であった。

「それに花島さんの隣りのお手伝いの話ですが、夜中手洗いに行つての帰り、花島さんの庭の方で、押し殺した呻き声と一緒に、奇妙なもの焦げる匂いが流れて来たというんですがね——」

クリニング屋の良ちゃんは、そんなききもしないことまで、敏枝夫人に知らせてくれたあと、夫人の出した夏背広二着と舶来のスーツ三着を、大収獲と許り抱えこんでいそいそと帰っていった。

「フーン、聞けば聞く程興味深々だね。他人の秘密を覗くのはよくないが、どうやう同病相憐れむ仲間らしい。何かいい手段はないもんかね——」

数時間かかって、教授に奉仕したあと、夫人の切出した、花島氏の一件に、教授は大いに関心を示した。

「夫人は、長い緊縛の連続で、痺れた両腕をもみ乍ら、自分と同じように、犇々と緊縛され、プレイに耽溺しているであろう、あの若奥様風の人に、他人事ならぬ興味をそそられて、いろいろと自分の経験と思いあわせて、逞ましい妄想をめぐらして、神経が休まらなかった。」

放心状態の夫人の、しっとり汗ばんだ背に、突然、縄の一撃がピシリと飛んだ。

——呀ツと、夫人はのけぞった。

「敏枝——命令だ。お前は僕の奴隷として、花島の細君を誘導する義務がある。一週間内にすっかり調べ上げて、僕に報告しろ。手段は選ばぬ。すべてお前の思う通りやってよろしい。但し一週間内に

報告出来なかった時は、その罰として仕置第二十三条に科するか……いいな？」

「ハ、ハイ——」

敏枝夫人は、最初からこの事を夫に告げねばよかったと云う、淡い悔恨と、マゾ性を昂進させる便法として、夫に告げざるを得なかった心境の桎梏に、自分自身の心理の過程に、些かジレンマに陥り乍ら、一面、激しい意慾にそそられていった。

夫の定めた仕置条例のうちでも、第二十三条は、駿河責めと謂われている常人には到底耐える事の出来ない、最大の責めの一つであった。夫の仕置に耐える為、夫人は美容体操を始め、アクロバットの真似事までして、体の柔軟性をつくる様心掛けたが、背中に両手、両足を合せるのが精一杯の努力で、この背中に於て四肢を縛られて吊された時、流石の敏枝夫人も、筋肉の激痛に、絶叫して、匆々に降して貰った経験が数年前に一度あった。肉体的には脂の乗り切った三十九才の敏枝夫人ではあるが、筋肉の柔軟性に於ては、年齢的に無理があったし、しかも近頃頓に脂肪ぶとりになってきている。それだけに、きびしい、強い殴打や、鞭打ちには、可成りたえるる皮脂の厚さを増してはいたのだが——。

一匹の牝として、十分飼育された彼女は、とあれ、夫のこの命令に従順に承諾した。

花島家の秘密を探ぐる手段として、潜かに侵入する事も考えては見たが、万一発見されて竊盗と間違えられた時の事をおもんばかって、敏枝夫人のプライドが許さなかった。

色々考えた挙句、彼女は、近頃流行の新興宗教が、折伏とか云って、相当強引に病氣の家や、悩みの家を訪問するのにヒントを得

て、花島信が病氣であるとの噂を唯一の頼りに、自分がその病いを治してやろうと云うのを口実にして近附くことにした。

彼女は思い立つと早速、宗教書やら、まじないの本や、観相術の本まで買い入れて、ダイジェスト式に、大急ぎで、概略のみをほぼ会得しようとした。何とか形をつければそれでいいのであって、あとは何とかなるだろうと云う気持ちもあって、もっともらしく、花島家の門柱のベルを押したのは、その翌日の午下りの事である。

扉があくと、キャラの匂いと共に、あの人がそっと顔を覗かせた――。

フト、何処かで見たと云う、不審気な顔立ちになって、彼女は小首を傾げた儘、敏枝夫人を招じ入れた。

△ここで、いきなり度肝をぬかねばならぬ。落付いて落付いて……△
敏枝夫人は大きく深呼吸すると、おごそかな顔付になってズバリと云った。

「神のお告げがありました。貴女の御主人が死相にとり憑かれています。それを救えと――」

「えっ――主人が……」

果して花島夫人、百合子は愕然とした様に蒼腿めた。そこを更に、「そうです。神のお告げによると、御主人は株で大きな損をなさりました。重なるに胃腸の病気が重くなりつつあります。更に加えるに、貴女方は、神を冒瀆した行為に耽っておられる――」

花島夫人はしらずしらず肯定して、首を縦に振ってうなづいていった。

「私はその死相を払いに参りました。神のお告げによって、花島信氏を救ってやれとの有難い思召しからです。そうお伝え下さい」

敏枝夫人は、まるで自分に神霊でものり移ったように、澁みなく、すらすらと我乍う意外に思うくらい、おごそかな調子が口をついて出た。

――奥座敷――

敏枝夫人は花島夫妻と相対して座っていた。

無意識に百合子夫人は手首に手をやって、ひねるようにして、手首を着物の上から揉むように押えていた。チラリとべつ見した彼女の手首は、縄目が赤くただれてふくれ上っていた。

△縄目は消えるか、さもなくば、黒く痕跡をとどめるかするものなのに、あの様に縄目が赤く、みみず腫れにふくれ上ってくるなんて、この人は異常体質なのかしら？、それとも私も知らぬ、特殊な、スゴイ縛り方をされたのかしら……△

主人、花島氏に対して、クリニグ屋始め出入り商人の噂を綜合して、それを如何にも神示の様に告げると、株屋から叩き上げ、神の存在を信じぬ花島氏も、半信半疑から、徐々に、敏枝夫人の弄する言辞に傾むいて来つつあった。彼女はそこで声を強めて、
「神様にすべて、懺悔する事によって、貴方が必ず救われると、私は確信します。いいえ、治して見せると断言致します。併し私は、この懺悔の言葉を神に誓って他言致しません。人間にぎんげするのでなしに、神にぎんげしなければいけないのです。貴方は会社の金を株の思惑買に費消されたでしょう。金額を正直に申し上げなさい。」

敏枝夫人は益々自信が出来て、噂に鎌をかけた。花島氏は弱々しくうなづくと、ポツリと口を切った。

「約六百万円です――」

「よろしい。それを神にお詫びしなさい。つぎに申し上げる事に嘘を云ってはなりません。貴方は奥様を嗜虐の対象として、お縛りになつてゐるでしょう。」

ビクリと花島氏は顔を上げた。そして目を伏せると

「確かにその通りです——」

「神様はすべて見通しです。すべてを正直に申し上げなさい」

チラリと花島氏は百合子夫人に目をやると、消え入る様な低音で、半ば呟やく様に喋り出した。

「どうした事か、私達二人は子宝に恵まれませんでした。色々と化学療法を行ない、ホルモン剤を服用し、挙句には、出産された家へ家内が出掛けては、妊婦のよなを跨いで見たりして迷信と思いつつもやってみましたが駄目でした。家内は多少後屈気味でしたが、それも婦人科で矯正し、私の方も調べて頂きましたが、健全でした。そしていかに焦っても徴候は一向になかったのです。」

ある人の奨めで、灸がよく効くと聞かされ、家内はその気になりましたが、私は玉をあざむく家内の肌に、灸痕の汚点をつける事は反対だったのです。

家内は薬をも攪む気持で、灸の汚点を一つ又一つとふやして行き、美しかった肌は点々と黒く汚れて行きました。

或る灸点は患部が膿みただれ、みにくい斑痕を臀に腰に、烙印して行きました。

家内も必死でしたが、私はその汚点を夜中見出した途端、急にムラムラと胸にこみ上げるものがありました。生れる家は、態々にコントロールをしても尚且うまれ出で、婦人科は、そーはそーはで門前市をなしていると云うのに、何の因果か、欲しいと思う我々に、

神は与えてはくれないのです。世の中は全く皮肉なものです。

そんなに灸がして欲しいなら、この俺がしてやる——。私は何ものかに憑かれたように、粗々しい心になって、おどおど打震える妻に馬乗りになり、艾を糊で丸め、豊かな臀部に墨汁で大きな円周を描くと、特大の艾をのせ、馬乗りで押えつけた儘、線香の火を点じたのです。須臾にして、妻の皮肉が、じりじりと特有の臭気を発散して焦げ始めました。私の足下で、妻はその灼熱の苦痛に呻きました。その苦痛に歪んだ妻の顔に、私は激しい愉悦と快楽を覚えたのが、病みつきとなりました。子種を宿し得ぬ妻に対する復讐の様な気持も手伝って、私は妻に灸を据え続けました。妻の顔が、或る時は苦痛に引つり、或る時は、被虐の愉悦に崩れるのを観察し乍ら、いつしか私自身、灸本来の使命を忘れ、妻に灸をすえて、苦痛の快楽に呻き、のたうつ姿を眺める事に飲こびを感じる男に変貌していったのです。

燃焼する皮肉に妻がもぐのを抑制する為私は縄を用いる様になり、縄と灸は不測不離の關係につながり、纏て、打伏して灸点する妻の姿に飽き足らず、私は、縄で妻を一層苦しめ、更に灸で妻の痛楽を補ないました。

肌すさす寒い夜半、庭の四本の棒杭に妻を打伏せに縛りつけ、体中に灸をすえ、悲鳴の洩れない様に、嚴重な猿轡をかましたまま、灸の消えたあとを、ふみにじった事もあるのです。

寢室の天井の滑車——、物置きX字形の磨き丸太——、すべて何に使用するか、今更くどくど物語る必要もない、これすべて、縄と灸のアクセサリであり、不可欠の道具なのです。妻に宿った被虐の観念は、やがて私に暗示的に、種々の思いもつかぬ事を要求す



るようになりました。

うまずめの自分を許して欲しいと、妻は乳房の下から下腹にかけて、米粒程の灸点で字を書いて欲しいと嘆願しました。一生消えぬ灸の烙印の跡が胸から腹へ、花島信の妻と黒く痕跡を留めてあるのです。

私はいつか読んだ、小口末吉の妻の、あの激しいマゾヒズムに類似した妻の行為が、妻自体の健康をも損なって、小口末吉の妻のよくな哀れな末路を辿るのではないかと慄然としたこともあります。

背に更に灸字によって、どれいづまと書いたのは、いや、妻の要求によって書かされたのは半年許り前でした。今や、かつての白磁のような妻の肌は、その面影も見出せぬくらいに醜く、灸の斑痕によって、全身隈なく蔽いつくされているのです。私が御指図のように、深酒と株の暴落の余波がたたって、胃潰瘍を患いこうしてブラし、バンサインを服用する事によって、目に見えて精力は衰えを来している今、△(註)バンサインは精力を極度に抑制するのです。妻は私の嗜虐の愛情が薄れたと感違いし、夜となく昼となく、

責めて欲しい、灸を据えるよう催促してくるのです。

縄目を自分の体に残して欲しいと云う、妻の考えから、先日、妻はみづから数条の縄を私に突つけ、手袋をはめてこれで力任せに縛って欲しいと申出たのです。妻の要求する儘に、私は疲れた体に鞭打って、犇々と後手に妻を縛り上げ、云われる儘に、滑車にロープを通して、妻がいいと云う迄吊り下げてやりました。私の気力は到底、こうした激しい悦虐のプレイを希む体ではなかったのですが…。

妻は耐えに耐え、十分いや

十数分もそうして吊り下った儘、全身に滲み亘る、被虐の喜びにうっとり身をひたしていました。皮膚に赤く喰い入った縄目が全身にくっきりと、その激しさを物語るように、まざまざと残っておりました。やがて消えると思つた縄目が、やがて腫れ、かぶれ、縄目のあとが、白い皮膚から浮き上って、みみず腫れに全身を蔽った時、私はその結果に驚きました。そしてそれが妻自身、いつ迄も縄目を残しておきたいが為に、縄にたっぷりと、うるしを塗りこんで、われとわが身をかぶらせて、いつまでも、縄目のあとを楽しんでいたかった事を知つたのでした。私にかぶれさせない配慮から手袋をはめさせたのもその為です。

私の話が嘘であるかどうか、判っきりお見せしましょう。」

花島氏は言葉を切つて、百合子夫人に衣服を脱ぐ様に眼で合図した。意心伝心で、百合子は何のためらいもなく、サラサラと帯をとき、緋の長襦袢を落し、稍長身の裸体を、敏枝夫人の眼前に曝け出したのであった。

夫人は呀っと息をのんだ。

胸から腰へ——そして股縛りのあともあざやかに、真赤にただれた縄目のあとが、条々と、百合子の全身にレリーフの様に浮かび上っていた。黒い痕跡の消えた灸点のあとが、微かに、花島信の妻と読みとれ、さぞ美しかったと思われる、きめ細かな白肌が、見る影もなく、着物で蔽われる個所はすべて、灸点の名残りを留めていた。

「私が悪いのです……何もかも……」

消え入りそうな声で呟やいて、百合子夫人は頬を染めてうなだれた。

「神にぎんげしたことによって、きつと貴方達は救われます。花島さんも百合子さんも……御主人の病いは治り、きつと子宝に恵まれますよ——」

そんな様な事を夢中で云つて、花島家を辞したのを覚えているが、敏枝夫人は、悪夢のような、先刻の出来事に、夢遊病者のように歩いていた。

——その夜。教授の膝下で、敏枝夫人は喘えぎ喘えぎ、逐一を報告していた。

「僕は灸なんてやらんよ。お前をよろこばせる方法はもっともつと外にあるからな。ホレ、これをやるよ御褒美に……」

教授は口を開けて待つ、敏枝夫人の口中へ体を起すと、溜めた唾液を吐き出した。それは条を引いて敏枝夫人の口辺をぬらして、彼女の口中へ流れ込んだ。

△瘋癲老人日記にこんなシーンがあつたつけ——。あの時は、蠅子が老人に流してやるのであつたが……▽

うっとりとして敏枝夫人は、煙草の匂いのする唾液を味わっていた。

「敏枝夫人の宅へ、忘れた頃、花島百合子が訪れて来たのです。主人の病氣も快方に向い、何より幸いな事は、私に子宝が宿ったことです。昨日婦人科で判っきりと受胎したことを告げられ、貴方に対する感謝の気持で一杯です。蛇足に小声で、医者に灸の跡をきかれて恥かしかったわとつげ口をする様につけ加え、Hデパートの大きな紙包みを置いて行かれたのには、敏枝夫人もポカンとして、飽氣にとられたと云う事です、一つの事が契機となって、心境の変化

から、こうした事もある様です——。」

ゴルフ氏は語り終って、小卓の上にあったグラスをとり上げると、戦い終り、任務を果たしたと云う、稍々気どったポーズで、杯を挙げ、一気にグーイと流し込んだのでした。

「多淫、暴淫は無淫に通ず——。花鳥氏がバンサインの薬効で、精力減退を来したのが、反って幸いし、破局一步手前まで昂進した、夫婦間の危険なプレイに一応終止符を打ったのが反って、逆効果となつてよかったのでしょ——」

ドクター氏は、もっともらしく、この物語に解答を与えてくれました。

牛の胃袋のように、今の話を反芻して、ざわめきが続き、てんでにガヤガヤと批評めいた雑談が湧き起り、静まった処で、今宵の二番バッター、ワイン氏が一同を両手で制しました。

第五十二話 エッセイ

「これは、私自身の実験データと、とって頂いてもよし、恒例乍ら、私の知人の話と云うことにしておいてもいいのですが——。羽村京子さんを頂点として、同巧異曲の、洗腸、浣腸のエッセイやら、体験談が、毎号、奇クの誌上を賑わしておりますが、これは、セクスの代替物としての、も一つはアースへの憧憬を語る、ひとつの表われとも見ていいでしょう。」

投稿諸氏が等しく、イルリガートル、エネマシリンジ、注入器、イチジク浣腸等の用具の、それらから全然枠外に出ないのは、何か非常に物足りないと思います。ビニールホースを使って、水道よりの直接の導入と云ったのもありますが、これもイルリガートルを大

きくした様なものに過ぎないのです。その挙句は、羽村式の蛙腹、

——この言葉のなんと云い当てて妙なる事でしょ——、そして想像上の産物よりなる、妊婦の腹裂きや、蛙腹の内臓抽出——。所詮これは筆をもって書き得ても、実行不可能の事ではないでしょうか——。奇クが夢を売る本なら、それでいいのかも知れませんが、私としては、加虐と云い、被虐と云っても、それがプレイとしての行為であるが為には、死を伴なう、切腹や、生首シリーズと云ったものは、例えそれをフォトで見ても、所詮つくりものに過ぎないと思うのです。実際、毎号、奇クを飾っている切腹ものが、死を伴なうものである以上、何故出来もせぬ切腹などを、願望するのか、その意図が分りません。映画でも『切腹』と銘打って優秀なる映画が来ている以上、これらも残酷物語の一環をなしているとすれば、それはもう各人各様の趣味と云うしかありません。切腹を願望する人々からは不遜な奴とお叱りあるを承知で、唯、私は私なりに一寸書いて見たかったです。切腹を願望する諸氏が読者通信欄で、切腹願望者の人々と相連絡して、若し会ったとしても、二人で切腹について語り合うか、さもなくば、切腹の真似事をして喜んでいるに過ぎないと思うのです。

その点、緊縛なり、浣腸、又女斗美、諸種のフェティシズムは、同好者、相寄って実現の可能性ありと信じるのです。

初題から外れましたが、定石型の浣腸を一步出て、注入液も、石鹼、グリセリン等の、医学的見地のものではなく、浣腸自体の、あの搔痒感と、腹痛と、注入の感覚を愉しむならば、もっと体に害のないもので、幾らでも色々あると思うのです。私自身、試みたことはありませんが、最初に思うのは、最近よく売り出されている、C

製薬などの発泡錠です。よく洗腸して、あの発泡錠を相当深く挿入し、適量の温水をエネマシリンジで注入した場合、錠剤は腸内で泡沫状となり、これの排泄は、さながら泡沫式消火器のように、勢いよく、淡雪を辺り一面に撒き散らしてくれることでしょう。

次に思うのは非常によく冷やしたビールの注入です。ビールをうんと冷やすと、栓をぬいても余り泡が立たない事は既に御承知の通りです。このよく冷えたビールを静かにイルリガートルに移し、水留めを加減し乍ら、徐々に注入して行くのです。殆んど泡を立てずビールはよく洗腸された体内に移行する筈です。やがて時の経過と共に、ビールは体温によって温められ、発泡状態になります。これの放出は、発泡状態になって出てくるのです。これをジョッキに受け、体温で温められた旨酒として乾杯するのは如何なものでしょう。

サイダーでも、或いはタンサン水でもうんと冷やした場合、泡立ちには少なくなり、体温によって炭酸ガスが生じ、勢いのよい快音と共に放出すると思うのです。冬より夏の方がいいと思うのは、それによって腹部を冷やすと云うおそれが、なきにしもあらずだからです。

次に、牛乳と卵黄によってミルクケーキをつくり、すっかり洗腸された腸内にイルリガートルによって注入したあと、柔かいビニールのパイプを挿入する事によって、体温とほぼ同一温度の牛乳がパイプを通して出てくる仕掛けです。我がものと思えば、恐らく嫌悪感もそうそうないと信じます。我が手でこれをコップにうけてのむ時、味わいは又格別のものとなりましょう。

腸を切り裂いたり、切腹したりするより、これは又実益をかね

た、ソフトなタッチの喜びと云えるではありませんか。

洗腸に際しては、肛門カテーテルのあることも忘れてはなりません。スムーズにすべての腸内のものを吐出させるには、誠に便利な医家用の小道具です。

こうしたプレイとは凡そ、裏はらな至って現実的なことになりましたが、直腸によくわく蟯虫だけは、こうした為にも絶対に根絶したものです。蛔虫卵、鞭虫卵、鉤虫卵は、検便の結果によって判別し、現在、環境衛生の進んだ今、余り寄生していないと思いますが念の為、検便もして戴きたいと思います。蟯虫卵の発見は、市販の太いめのセロテープを早朝肛門によくあてがい、それを検査機関へもって行けばすぐ分るのです。

蟯虫は夜、適温と湿度がマッチしたとき、肛門に這い出し、虫卵をその周辺にうみまわすかと、自然にアースへ手をやるようになりそれがくせで、アースへの関心を高めるようになると云う、猥らな虫です。

前に述べた趣味のいろいろを試みる前に、蟯虫洗腸を、予備行動に数回続ければ、洗腸の快味と蟯虫駆除の一石二鳥です。

更に発泡錠ではありませんが、蟯虫薬の、ピペラジン製剤の錠剤を、私達成人なれば約十五錠、挿入し、注入器で水を注入した時、これの服用よりも効果あるのではないかと思うのです。充分溶解するまで我慢する必要がありますが――。

このピペラジンをシロップにし、或いは粉末のオレンジジュースにしたものを試みて見てもさまざまに、蟯虫駆除と云う名目のものといたのしめるのです。その外蟯虫用のなめらかな坐薬もあります。こうして、すっかり腸内を綺麗にしたあと、日頃私達が飲用するも

のを注入して、長いパイプで、じかに口へパイプをくわえて飲用するのにも愉快でしょう。

それでも嫌悪感を感じるなら、女子の洗滌用に使用する、カメレオンと云う俗称の粉末殺菌剤を水に溶解して洗腸すると共に、極く微量のメントを混入しても、爽やかなクールな感覚と共に、くつきりとした紫色の溶液が、ほとぼしり出る事でしょう。

グルグルなる腸内での感覚をたのしみ乍ら、汚物の交らぬ、けがれなきジュースなどをストローを通じて吸う時、又一風変わった風味を味わい得るでしょう。

赤く血の色のポートワインを注入すれば、腸内からそれは体内に吸収されて、ほのかな酔い心地と共に、眼も鮮やかな赤色の流出に、マンはフト、奇妙な錯覚をおぼえるかも知れません。

私は遺憾にも身辺雑多にて、その何れも試みたことがない事を白状しておきます。唯、かくする数々は、それらがすべて、可能性の限界を逸脱していないと考え、皆さんの御意見をきければ幸甚なのです。

念頭から、穢がれたもの、汚なき個所との観念を捨てさり、腸も我が身のうちと考え、最大限に浄化した上、これを実施されれば、それが、我が身で独りたのしむのであれば、そこからは、抹茶の薫りも、洋酒の旨みもジュースーサーにかけた、新鮮な果物の味わいも生れてくるのではないでしょうか。そんな面倒くさいことをいちいち云われれば、豈、また何をか云わんやです。マンがフラワーに試みて、愛情の発露であるとしてもよし、フラワーがマンに試みて、秋の夜長を、マンの旨酒によって、堅い愛の絆とするもよし、それは等しく、だらけ切り、疲れ果てた、夫婦の生活をエンジョイする一

つの手段ではないかと思うのです。夫婦間で、又は恋人同志で行う場合、それがはためから見て、アブノーマルな行為であっても、二人の間の愛情が、それを正当化し、ノーマルなものにまで昇華して行くことは近代感覚では誰しも認めるところです。フィクションで行くつもりが、どうもとんだエッセイの様になってしまいました——いやどうも」

ワイン氏はチラリと舌を出し、首をすくめて見せました。

「可能性はありますね。然し人間の感覚と云うものは先天的のもので、いかにアークスを浄化し、腸内何一物残さずと云えども、すっきりと割切って、ワイン氏の云う如く出来るかどうか——。所詮、人間は口から入れて、オシリから出す。マンホールは如何に溝をさえ、浄化しても所詮マンホールであるし、便所の肥壺はいかに、消毒して磨き上げても食器にはなりませんからね——。自然淘汰の逆流を遡のぼる事は、さあどうですかね——。まあ、中には知らぬが仏で、中国の美しい便器を、器と間違えて、それで飯をくっていた豪傑もいましたがねえ。まあ羽村さん辺りに意見をきいて見ましょうや」

ドクター氏は、これにも解答を与えるように、少々批判的な意見を述べました。

ワイン氏の話が短かったので、時間を気にし乍ら、最後にライカ氏が、ショート・エピソードと銘打って、グラスを置きました。

第五十三話 蛇 娘

「奈良県の奥吉野地方の、電源開発は今も活発に続けられ、やがて五新線が運行されて、脚光を浴びる日も間近ですが、これはそこに

開発事務所のある、某土建会社の、一測量技師の話です——

ほんの一足違いで、ダンプカーに便乗しそこねた、技師の島岡は暮色迫る峻しい山路を、何とか部落に一步でも近附こうと、腹をきめてゲートルの足を早めた。

彼が寄留しているH部落には三里の道程がある。どう急いでも、陽の暮れるまでには到着しそうもない。車のわだちのあとを頼りに辿ったが、九十九折りの細道で、フト彼は近道する気になり、眼前の急な灌木の茂みをかきわけて昇り出した。昇れど昇れど小道には出ず、既に暮れなずんだ視界は、数米先もさだかでなかった。島岡は、この時程、急がば廻れと云う格言を、泌々思い出したことはなかった。とっぷり暮れた山路に山犬の遠吠と、梟の無気味な啼き声が闇にこだまする。

ライターで磁石を照らし、H部落のある北西に歩いたが、道はなく、茨につまづき、枝に足をとられ、彼は困憊の極に達した。

彼は諦めて野宿する気で、ホッと空を見上げた時、高い崖の先にポツリと灯の一点を認めた。星かと思ったが、まぎれもなく、それは黒い影を夜空に落す、陋屋から洩れてくる火の光りに違いなかった。

腰のロープで、一步一步這い昇って、やっと家らしい姿が、判つきりクローズアップされた時、彼は気力もうせて、トタヘタと崖っぷちにへたり込んだ。

最後の気力をふり絞って、灯りを目指し、見当もつかず、家の戸とおぼしき辺りを叩いた時、人の気配を中に感じて、島岡は助かったと叫んだ。大台ヶ原の樹林で数日、道に迷って奇跡的に助かった

土地の幼児のニュースはきいていたが、島岡は測量技師とは云え、半歳足らずでは、夜ともなると土地カンもなかった。

立てつけの隙間だらけの戸が、ガタピンとうちらから開いて、ニユーッと顔を出したのは意外にも若い女であった。

カンテラを差し出した彼女は、そこに若い男が倒れているのを見てギョッとしたが——

「道に迷ったんけ？」

と不似合にトーンの高い声で聞いた。

「済みません。一夜だけ泊めて下さい。ボクはK土建の技師で島岡と云う者です」

いろりを囲んで女と彼は向いあった。粗末な麦飯と、山菜の汁が空腹の島岡にとっては、ビフテキにも勝る御馳走だった。

腹が出来て暖まると、島岡は始めて、娘一人の山家住いに不審を感じた。

「貴女一人？」

「母はいないんよ。父は泊りがけで山の木を切りにいってるよ」

「淋しくない？」

「なれてるからなあ」

陽焼けして色は浅黒く、衣服もモンペに着古しの色あせた上着をつけていたが、よく見ると眼鼻立ちのすっきりした、磨けばつやの出る娘であった。それに無雑作に巻いた黒髪が豊かで、解けば恐らく腰までもあるだろう。最初要心していた娘も、島岡に他意のないのが分ると大分親しく口をきき出した。

疲れがとれると、島岡は急に娘に、激しい意慾を感じたが、天真らんまんな山の娘に、しかも難渋を救われた娘に、変な気を起すほ

ど、島岡は悪くなかった。娘は美代と云った。初めて逢った二人に、やがて話題もときれ、フト白けた空気が流れた。島岡の熱っぽい視線を感じると、娘は本能的に警戒の色を示した。

「あんた、父の部屋でねなさい。布団しいた儘だから勝手に使っちゃいいよ——。わたし、今夜はこのいろいろの側でねる事にするわ」

「有難う——」

島岡は立上って、フト娘に礼をする気になり、ふところへ手を入れて、美代に近づいた途端、彼女は何を感違いしたのか、パツと飛び退ると

「ひとりと思って、ヘンなことすると山を降りられないわよ——」

ときつい眼になった。

「いや、礼をするつもりで財布を出そうとしたんだ。せめてものしるしに……」
「いらない——。人の親切を金ですますなんてきらいよ——。油断出来ないわ」



島岡は妖しい気持をはぐらかされ、腹をみすかされた様で苦笑した。

「御免御免。じゃあ、君の安心するようにボクをどうなとし給えよ」
「両手、両足を一晚中縛っておいてやるわ」
美代は真面目な顔で云った。

「それで安心するなら、ボクは喜んで縛られよう。さあ縛り給え——」

島岡は淡白な気持で、両手を差し出して、胸の前で、手を組み合せた。

美代はチョット躊躇したが意を決した様に、土間の片隅の麻縄をとり上げると、ためらい勝ちに警戒し乍ら、島岡の前に近づき、飛びかかられたら突嗟に逃げられる構えでサツと素早く、差出した彼の両手に縄を巻いた。

両手をぐるぐる巻きにした上、縦横十文字に縄をかけ、更に口で解かれぬ様、縄先を胸に廻し、腋の後で雄結びに結んだ、寝ても背に当らず、手も口も届かない個所をうま

く選んでいた。

「約束通り縛ったわ。足は勘忍したげる。さあ、床にゆきましよう」
美代は彼の腕を抱えるようにして、次の間の、粗壁づくりの、辛うじて部屋らしい体裁をととのえた、父の居間に彼を引っ曳きつけた。

島岡は素直な気持で、そっと服の儘、汚れた堅い布団の上に横たわった。

美代は、じっと彼を見下していたが、優しい微笑と共に、何と申したか、縛った手の指に、自分の指をからませ、
「じゃあ、おとなしく寝てね——」

と妖しくキラキラ光る眼眸を彼に投げかけ、小鹿のように、ヒラリと部屋を出た。

△両手を縛られると、随分眠むり難いもんだなあ、それに段々としびれて来やがる——▽

もうろうとした睡魔に襲われ乍ら、そんな事を考えるうち島岡は昏々とねむりにつき、やがて疲れたのか、大きい鼾をかき出した。そっと様子を隙間から窺っていた美代は、始めて安堵の吐息をもらしてその場を離れた。大きく胸が弾いで、頬が真赤に上気している——。

×

×

×

夜気が下腹を冷やしたのか、尿意を覚えて島岡は立上ろうとして転んだ。感覚の失せた両手が、依然として、胸の前で組み合されて縛られた儘、自由を束縛している。

△困ったなあ、これじゃ一人で小便も出来やしない。夜中だけど起すとするか▽

その気で板戸から声をかけ様として、ぐっと彼は息をつめて、声を殺した。

異様な美代の呻き声が、いろりの土間から洩れたからである。指先に懸命に力をこめて、たてつけの悪い黒づんだ板戸を少し開いて、島岡は声の彼方を見やって、愕然とし、呀っと思わず声を立てそうになった。

衣類をすっかり脱ぎ去った美代が、遅ましく張り切った全身をねじらせて、観喜の呻き声をあげているではないか、そして彼女の後に廻した両手には、太さ五糎もあるうかと思われる蛇が、くち縄の言葉その儘に、実に手際よく、しっかりと両手に巻きついて、美代の両手を蛇自身の体でぐるぐると強く巻きつけてしまっているのだった。

チロチロと吐く赤い舌が、美代の首筋をなめ、腋をなめて、鎌首はゆらゆらと、のたうち呻く美代の背で、右に左に躍動していた。更に一匹は美代の張り切った乳房から腰へ二巻き三巻き巻きついてこれも強くしめて、その頭は、かたく閉ざされた両股の辺りをうろうろと鎌首をもたげてうかがっていた。

そして首にもマフラにも似て巻きつく蛇、更に彼女の足首から太腿へかけてぐるぐると巻きついた蛇——。都合四匹の大蛇が、美代の全身を縄の様に緊めつけて、四個の鎌首から隠見する赤い舌が、胸を乳房を腹を、唇を鼻を求めてうごめき競っていたのである。

島岡の睡魔は完全に吹っとんだ。ガタガタと戦慄が五体に充満して、彼のふるえはとまらなかつた。尿意は益々激しい。

鈍いランプの光りに照らし出された、美代の官能の疼きに、のたうつ姿は、この世の人の姿とも思えなかつた。ギラギラと脂汗が、

彼女のひたいに、肩に、腰に光って見えた。

悲鳴が一きわ高くなり、美代の体はグラリと揺れて動かなくなった。吐く息のみ、激しく島岡の耳を打った。

「さあーお終いよ……解いておくれ——」

美代はけだる気に呟やくと、まるで人語を解するように、四匹の蛇は緊張をゆるめ、ぞろぞろと美代の体から離れて、いろいろのそばに黒々ととぐろを巻いて、一塊のかたまりと化した。もたげていた鎌首もやがて納さめ、蛇達は頭を互に体にさし入れ、眠りについた様に凝然と動かなくなった。のろのろと美代は立上り、ハッとした様に板戸の島岡の方をうかがい、そして、下着をつけると、古びた寝間着様のものを掛釘から外すと身につけ、細紐で腰を結んだ。

「美。美代さん——」

「あっ、何——今頃……」

「便所に行きたいんだけど……」

嗟れ声をふり絞って、やっと島岡はそれだけ云えた。

「ずっと起きてたの——」

「いや、フト今眼がさめたんだ——」

美代は板戸を開いて、疑ぐり深そうに島岡を凝視し、それからニヤリと笑って腕をとった。

「さしてあげるわ——」

「そ、そんな——」

「いいのよ……。縄をとくの面倒くさいから」

腕をとられて、ガタガタ戸外の空気の冷たさに身震いし乍ら、島岡は美代のリードで放尿した。やっと室内へ入り、いろいろの火に踊んだ時、美代が音もなく島岡の肩を抱いた。ゾクリと鳥肌立つ思い

で、島岡は唇を震わせた。

「あんた、見たでしょう？」

ぞっとする眼が、彼の顔をのぞき込んだ。

「し、しらないよ、何も……」

「嘘ッ、その眼は見たと云ってるわ」

島岡は黙った。

「見たら見たでいいのよ。父は一年のうち、十カ月以上ここをあけているわ。山中で唯一人、話相手もなく、ポツリと暮す私にとっては、蛇が唯一の友達であり、慰めになるのよ——、私はあんたの両手を縛った時、ムラムラと蛇とたわむれたくなったんよ。蛇は私の意の儘に、私を縛り、私の搔ゆいところへ手の届く様に愛撫をつづけてくれるわ。分かる？」

コクリと島岡はうなづいた。

「縄をといて上げるわ——」

唐突に美代はそう云って、スラスラと島岡の両手の縄をといた。

「夜明けまで、少し間があるわ——。蛇女がお気に召したら、煮るなり焼くなり、縛るなりあんたの自由よ——」

美代はほんのさき、身につけた寝着をパツと脱ぐと、島岡の前に身を投げ出した。

「勘弁してくれ——」見得も外聞もなく、彼は拒んだ。

美代のうるんだ臉が、きりりと吊り上ると、島岡の頬に小気味よい音がなった。

「意気地なし——さっさと寝ておくれ」

声に驚いて、蛇共が鎌首を上げたのを見て、島岡は腰のぬける思いで、膝頭をガクガクさせ乍ら、部屋にかけ込んだ。

「山の早い夜明けに、彼が恐る恐る土間をのぞくと、美代も蛇の姿もありませんでした。いろいろの側に一包みの握り飯と、H部落までの地図がたどたどしい筆あとで紙片に書いてあるのが残されている許りでした。」

惜しかった様な、こわい様な……。島岡は撫然と私に呟やいてい

ました。皆さんならどうなさる？食って見る気ありやなしや？ハハ、埒外もないグロ話になりました」
人々は一斉に立上りました。このクラブの一室以外、すべて灯の消えたビルの窓から、遙か下界を見下すと、それでも深夜族をねらって、タクシーの流れが、北に南にと、風をきって、ヘッドライトの曳光を残して走り去るのが望見出来たのです。(終)

〔新版〕女体悦虐フォト七十選

Z組七十集

大手札判印画紙(9×13㎝)焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇円

Z1 ゴム猿轡	(梨花悠紀子)
Z2 囚女六三号	(柳初子)
Z3 猪手足吊り	(梨花悠紀子)
Z4 逆エビ縛り	(大塚啓子)
Z5 ローソク責	(東浦ひかる)
Z6 豊臀責め	(絹川文代)
Z7 淫らな縛り	(愛川悦子)

Z8 ザリガニ	(梨花悠紀子)
Z9 引き回し	(東浦ひかる)
Z10 全裸後手縛	(加茂良子)
Z11 豊満被虐	(大井小夜子)
Z12 黒髪いじめ	(大塚啓子)
Z13 足吊り嬌態	(絹川文代)
Z14 黒縄高手小手	(四方清美)
Z15 強烈荒縄責	(梨花悠紀子)
Z16 喰込む白縄	(東浦ひかる)
Z17 くの字の足指	(桜井葉子)
Z18 裸身の受縄	(前本妙子)
Z19 無茶な猿轡	(竹野ひろ子)
Z20 ハリッケ	(梨花悠紀子)
Z21 臍なぶり	(大塚啓子)
Z22 逆手足吊り	(東浦ひかる)
Z23 美肌いじめ	(絹川文代)
Z24 鼻ゼメ仰向	(加茂良子)
Z25 恐怖の瞬間	(若原明子)

Z26 火箸責め	(梨花悠紀子)
Z27 全裸海老責め	(熱海容子)
Z28 ベッドの痴態	(絹川文代)
Z29 足の裏擦り	(大塚啓子)
Z30 閨の女体飾	(竹野ひろ子)
Z31 首絞めゼメ	(大塚啓子)
Z32 鼻孔責め	(若原明子)
Z33 悦虐放心	(梨花悠紀子)
Z34 手枷足くさり	(四方清美)
Z35 寝室のプレイ	(花本京子)
Z36 猿轡の妙味	(梨花悠紀子)
Z37 首縄柱しばり	(絹川文代)
Z38 巻煙草責め	(大塚啓子)
Z39 尻立てポーズ	(桜井葉子)
Z40 エビ責	(東浦ひかる)
Z41 彼女の好物	(竹野ひろ子)
Z42 ワンピース	(花本京子)
Z43 荒縄竹棒責	(梨花悠紀子)
Z44 浣腸責ポーズ	(大塚啓子)
Z45 鏡に映す裸	(山路ミヨ子)
Z46 苦悶に喘ぐ	(大塚啓子)
Z47 酔後の緊縛	(絹川文代)
Z48 逆十字エビ	(大塚啓子)

Z49 全裸猿轡	(東浦ひかる)
Z50 欄間宙吊り	(梨花悠紀子)
Z51 全裸逆エビ縛	(絹川文代)
Z52 荒縄仕置室	(梨花悠紀子)
Z53 庭園の惨虐	(館典子)
Z54 被虐の果て	(大塚啓子)
Z55 痛めた全裸像	(大塚啓子)
Z56 鏡の中の全裸	(愛川悦子)
Z57 セーラー服	(梨花悠紀子)
Z58 檻の緊縛裸体	(愛川悦子)
Z59 全裸股間縛り	(絹川文代)
Z60 オムツ逆エビ	(田中芳代)
Z61 胴縄の重量感	(桜井葉子)
Z62 ゴム人形	(竹野ひろ子)
Z63 縄トゲ責め	(梨花悠紀子)
Z64 女大生恥態	(田中芳代)
Z65 白肌全裸縛り	(絹川文代)
Z66 強制的開股縛	(絹川文代)
Z67 強烈的全裸晒	(愛川悦子)
Z68 亀甲乳房責	(梨花悠紀子)
Z69 ベッドの悶え	(愛川悦子)
Z70 恥しさに耐えて	(館典子)

〔映画通信〕

『秦の始皇帝』の

若尾のハリツケ、火あぶり

東 山 太 郎

大映の「釈迦」につぐ、七〇ミリ映画、第二作「秦の始皇帝」は、七〇ミリの大型スクリーンを十分に生かす迫力のある大スペクタリングだ。

映画で、万里の長城を築いた秦の始皇帝の雄姿が貫禄ある勝新太郎の熱演で楽しめる大型映画となっている。

この作品の迫力あるシーンはやはり二万人の台湾の中国陸軍の協力による戦争シーンで、はげしい

若尾の役は、孟姜女という秦の松江府の名門孟家の美しい一人娘

戦い場や、戦争による悲惨な婦女子の姿などが描かれている。衣服をひきちぎられ、暴力にあう婦女子。この戦争の悲惨さを見て、始皇帝は戦争の惨害から、民を救

松江府の名門孟家の美しい一人娘邸内の池でゆあみしている所へ川口浩扮する学生の需生が役人に追われて飛び込んでくる。そして、孟姜女の美しいハダカを見てハッ

とする。そして彼女の両親に娘とくれと一心に祈る、すると天鳴震結婚してくれと懇望される、自分動して堂はこわれ、ついに長城もは学徒で焼かれる書物を持って逃くずれる、その中には変わりては、占いで、孟姜女ははじめて肌を、役人の前に引き出された孟姜を見せた男と結婚せなければならぬ宿命にある。その男が需生であ

そこで、結婚式をあげるが、そこへ役人がふみ込んできて需生は

捕えられ万里の長城築城の夫に衣を着せられた半ば両手をひろげ

「いつまでもお帰りを待ちます」と孟姜女は泣きくずれる。万里の長城で働く需生は

工事促進のため人柱として生き埋めされる、このシーンもすごい、

それを夢の中で孟姜女が見る、そして夫の安否をたずねるとかわいられたいましめの中で身もたえずこれに襲われさらわれようとする、命を歎願する。「火をかけ」であ

シーンだった。

女相撲観戦記

誕生す『女相撲会』

岡 本 吉 雄

土曜日の午後、帰宅して前庭の手入れをしていると、一通の封書がとどいた。

差出人はローマ字で奇クからのものであることが、すぐ了知された。

開封すると一枚の会則と案内状が挿入されており、それには女相撲会結成について、とその見出しは、特に大きい活字で印刷されていた。

ドキンと胸が高なる。長い間、時間と金をかけて、あらゆる機会にその実現を希望したのであるが、ここに奇クの手によって、それが実行されようとしているのである。

会則には、

一、この会の名称を「奇ク相撲会」とし、相撲愛好者を以って構成する。

一、この会の事務局は奇ク企画部に置く。

一、大会には女力士の名誉を重んじ、撮影等の行為は一切禁止し、個人的話し合いはこれをさけること。

一、会員相互においても女相撲を通じての親睦をはかり、それ以外の社会的地位、経歴についての話し合いをさけること、

等々の規則が記されてある。

案内書には、

四月×日（日曜日）午後一時から東京都北多摩郡××町〇〇神社中庭において、女相撲

会開催、会費は一名三千円、会員募集人員三十名とあり、会場までの略図が添布されている。

私はこの封書を二、三度繰り返えし読み終つてから、ポケットの奥深くねじ込んだ。

四月×日までには約一カ月近くある。私はその日の来るのを子供のように待ちに待ったのである。

やがて、その日、私は朝早くから床を離れ十時には家を出てしまった。会場まで一時間半とみて、十一時には会場に到着するが、どうしても落着いて家にいることができない。

中央線立川駅を下車、青梅線に乗り換えて



〇〇駅に着く。この辺は未だに武蔵野の面影を残していて、気持のよい田園風景を展開している。

それに加えて、心よい陽春のそよ風を浴びながら目的地の前まで歩を早める。

〇〇神社前には「風俗懇親会場」と半紙に筆太に記されてあった。胸が高鳴り足がややふるえ気味である。何か犯罪でも犯すよう気持がなでもない。

案内を乞うと微笑をたたえた受付嬢が

「御苦労さまです」と迎えてくれた。

「岡仁です」

参加券を渡してから控室に入った。十二畳位の部屋が二つ通しになっており、もう二、三の愛好者が顔を見せていた。

いずれも四十才を越した立派な紳士で、その中の一人が

「私は雪田です。この会の世話役を引受けています」と挨拶をする。

「そうですか、でも、よくやってく

れましたね、有難いことだと思っています」「いや、私もこの道では長年、好きで苦労しました。しかし、好きですから……、何とか、皆さんのお役に立ちたいと思っています。」

「で、本日の相撲をとる人、どんな人なんですか？」

「皆さん、普通の娘さんです。御承知の通り奇ク読者の中から、女斗美的なことが大変好きでやっていた、方々を、奇クの企画部が、何んとか説き伏せて出場を願ったわけです。これには大分、奇クの人達も苦労したようです」

と云う。

「そうでしょうね」と、相づちを打ちながら、その取組みを期待した。

あれこれ話し合っているうちに、気持も落ち着き、何か研修会にでも集まったような錯覚を起す。もう三十人を越したのではないだろうか。その中で二人の二十四、五の女性が混っていた。おのずから、紳士達の視線は、この女性に向けられる。

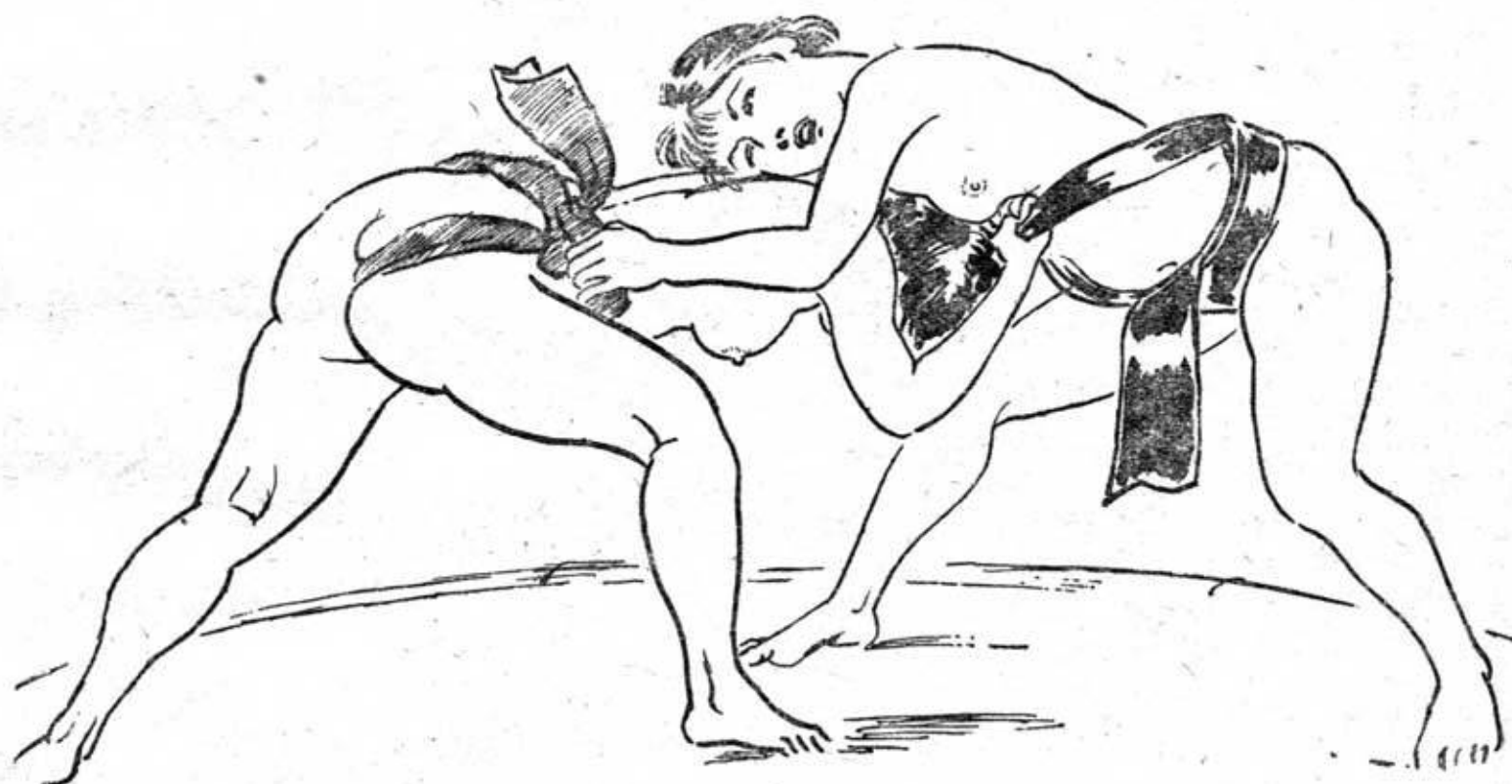
紙面の仲々の美貌であるこの女性も、さすがに大勢の視線の的になっていることを意識してか、始終うつむきかげんに片隅にうずく

まっってしまった。

さて、一時となり、世話人である雪田氏が四十二、三の相撲鬻に黒い和服の女を従えて登場した。

「皆さん、御苦勞様でした。予定の時間となりましたから、この辺で会を開かせていただきます」と簡単な挨拶と自己紹介がなされ、続いて会の内容についての説明に入った。

「皆さんも御案内の通り、本日、出場していただく方々、私共に女斗美を展開して下さる方々は奇ク読者の方々であります。しかし土俵上で、このような大勢の前で相撲をとるところとは始めての経験であろうと思われます。それに加えて、本格的に稽古をしたというわけでもありません。従って、ここに来ていただいた元プロの女力士梅の里さんを行司として招き、最初は梅の里さんから四股の踏み方取り口等について稽古をしてもらおうというわけですね。これが終わりましたから、本日の呼称物と申しますか、四人の方々からトーナメントを行います。それから四人の方々によって、ぶつかり試合、へとへとになるまで戦うという趣向であります。この最後の番組は出場者のお嬢さん方の希望であることを念のために申し添えます。」



と静かに話された。が、一瞬場内の空気は緊張の色がただよった。

異常な緊張感、圧力感というか、そんなものが無言のうちにকাশ出されたのである。次に梅の里がその緊張感をほぐすかのように

「私がここに現れるのは、何か興ざめでござりましょう。でも何かのお役にたてば大変嬉しゅうございます。私も現役を引いてから十年近くになりますが、このような熱心な女相撲ファンがいっぱいやることは大変有難いことだと思っております。こんな年になりましたので、若い娘さんのお相手ができるか、どうか、わかりませんが、どうぞよろしくお願い致します」

と始終微笑をうかべて話しおえた。

○

雪田氏に案内されて中庭へ、何か落着かない表情をたたえながらも、待ちに待った光景がこれから展開されんとする期待を集める全員が胸に秘めていることは、手に取るようにわかった。

中庭中央には土俵が作られ、その四方に蓮と布団が用意されている。女相撲ファンにとって、それを見ただけで、いやが上

も胸の高鳴りを禁じえない。

暫くして梅の里が黒襦子の禪一本、それに続いて、これも同じく櫓落しの相撲鬻、印半纏をはおった美貌の女力士、次が浴衣をまとったパーマの女二人、最後がダスターコートに身をつつんだ女一人が、ややうつむき加減に登場。

梅の里、土俵中央に進み出て

「さあ、ここで四股名によって一応女力士を紹介致します。先ず最初、玉椿、二十二才、五尺三寸、十五貫でございまする」

と櫓落しの相撲鬻の女力士に向って片手を出す。くだんの力士、立上って一礼する表情は恥しさに真赤に染っている。のびきった下半身、水々しい脚線美に一同の視線は集中される。印半纏の下には、きりっとしまった禪姿を連想したのは私一人ではあるまい。

続いて若乃龍、二十三才、五尺三寸五分、十六貫、若桜、二十一才、五尺二寸、十四貫三百、この二人は姉妹である旨の紹介、最後が泣千鳥、二十二才、五尺一寸八分、十三貫五百、紹介を終えて梅の里は四女力士に向って、

「では、四股の踏み方からはじめましょう」と、云えば、羽織っていた衣類をぱっと一

斉に脱ぎすてた。

玉椿はきりっとしめた黒襦子の禪一本さがり。女相撲ファンならば、誰しも求めていた憧れのポーズ。はっと生つばをのむ。

若の竜。若桜はよく見る女相撲の白シャツ、パンツの上に禪姿、泣千鳥はブラジャーにパンツの上に禪、素人としては止むを得ない姿だろう。

「あれ、シャツやパンツは艶消しだよ」

と、五十年配の紳士。

「始めてのことですし、それに私共は御本人の意志を尊重したんですよ」

雪田氏が弁解した。

土俵上では梅の里が本格的の四股を踏む。

それを見習って四人も続く。

「皆さん、股の開きがあさい、ほら、この位、ドッコイ……、それに足の上げ方が低い若桜さん、もっと……」

三十人以上の衆目の前で四股を踏むことはなんといっても、ためらいがちである。が、梅の里の言葉は次第に荒くなる。

女力士達も観念したらしく、次第に型にはまった四股の踏み方となる。次が仕切り、技の説明、玉椿を相手に四つに組む。

「それ、寄るんだよ、それ上手投げ、あなた

そんなへっぴり腰では、ハタカレるよ、それほら、エイ」

と打てば、玉椿はどっと土俵上に四つんばいにおちる。全くの素人に四十八手を教えろうというのであるから、梅の里も汗びっしょり、さすがに年はとつとも、元プロ女力士だけあって、技のかけ方は素早い。

ものの一時間も過ぎたであろうか、女力士達も相撲らしい取口を覚えれば、若さと体力がものをいう。その上、四人と一人では梅の里もおされ気味の模様となる。

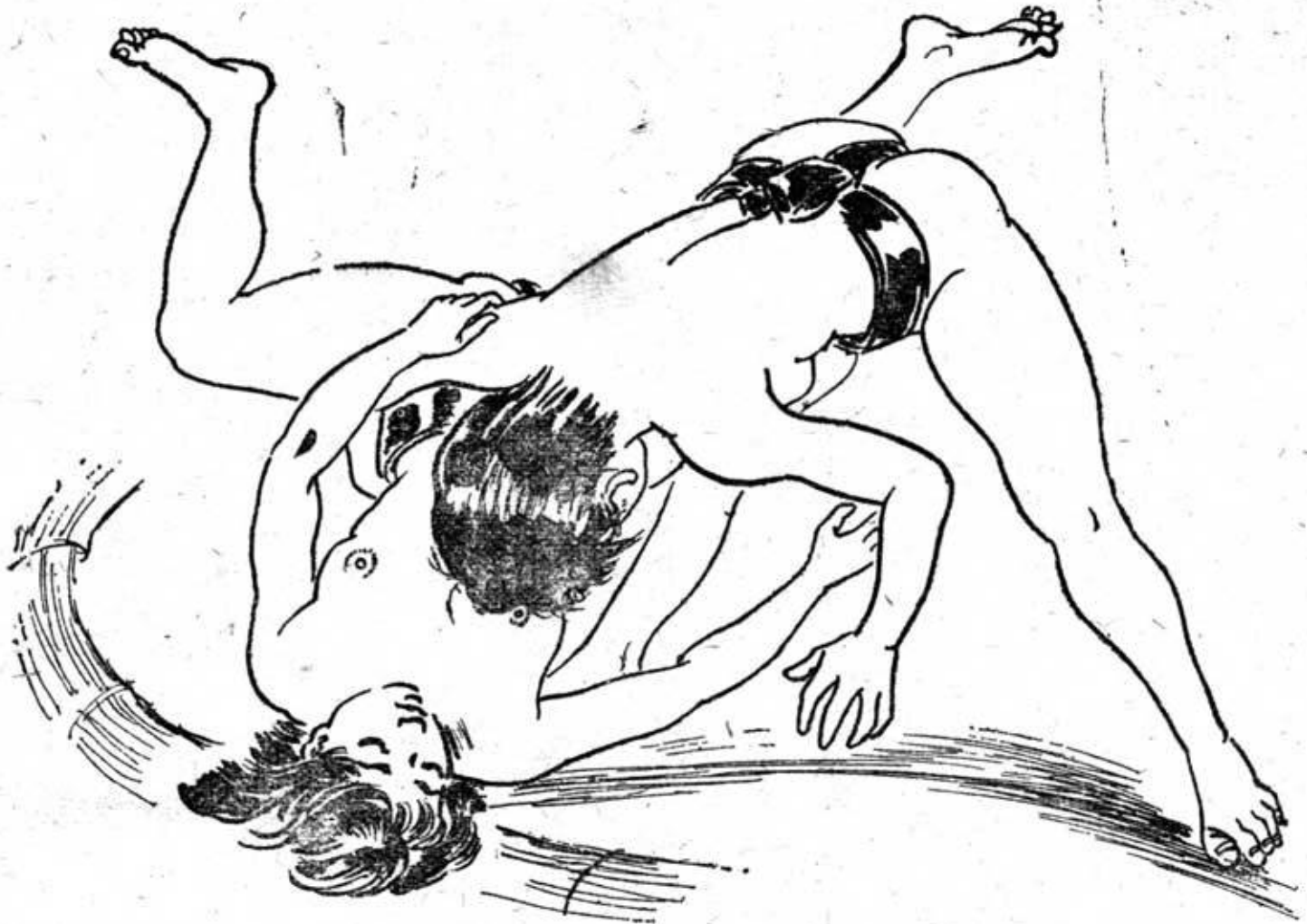
玉椿のきれいに結びあげた相撲鬻も、今は乱れに乱れ、若乃竜、若桜の白シャツも砂にまみれ、それに加えて油汗に白い股にあやしげな色気をただよわせている。

「この辺で皆さんも相撲というものが、大体わかったと思います。では、十分程休憩してあなた方同志の対戦を行いましう。この勝ち抜き力士には、雪田さんから懸賞金がかかっています。頑張りましうね」

と、言う。

四女力士は、す早く衣類を身にまとうと、足早やに控室へ引きあげた。

緊張した空気から開放され、私達は一ト息入れる。ふと西土俵を見ると、最初にみかけ



た二人の女性と視線があう。上気した面持ちは既に、あの恥らった風もなく、土俵上の観戦ですっかり大胆になった様である。

十分の休憩後、黒の装束に軍配を手にした梅の里を先頭に四力士、再び登場。

「東、浜千鳥、西、若桜」
呼出し兼用の行司の声、パツと衣類をぬぎ捨てた女力士二人。

「ハッ」と、一同が感謝の声を流す。両者ともいつの間には先程のパンツやシャツを脱ぎすてた褌一本さがり。ぶつかり稽古で、その雰囲気になれたのだろうか、それとも梅の里にうまく言いくるめられたのかもしれない。

（なんのためらいもなく

塩を手にした両者は堂々たる仕切り、斗志のほどが伺える。

気合あって両者立上り、激しい突張り合いから若桜、もろ差しになって体をつきつければ、浜千鳥、こらえきれずに、そのまま土俵を割って若桜の勝。

続いて東から玉椿、西から若乃竜、両者とも四股を踏めば太股がビリッビリッと震動し、はち切れんばかりの白い尻の筋肉がブルブルンとけい攣する。その度に玉椿の櫓落しの相撲髷が軽くゆれて、何んともいえない情景である。大きく、ふくらんだ乳房も上下に波打つ。

一方、若乃竜も今度はアップにした後髪も異様な色気をただよわせて、十六貫の均斉のとれた女体が大きく、クロズアップして私共の眼前をおおう。行司が気合を充分はかって、サツと軍配を引けば、「エイッ」とぶち当りざま、がっぷり右四つ、両者やや尻を引いての立合いで上手はとれない。

玉椿、機をみて上手褌を取り、右で前褌を引きつけ、右足内掛けの強襲、若乃竜、グツと右足に力をいれて、よくこらえ、玉椿の上手褌をとる。

暫く寄り合ううちに、お互いに顔色は真赤

になり、白い股もふんばった力にパッと桜色に染った。

汗ががふっふっと玉となって噴き出し、腹は大きく波立っているが、共に隙あればつけ入ろうと狙っている。まさに大相撲、玉椿、エイめんどごと、土俵際で捨身の上手投げを打てば、若乃竜、危なく残して、間髪を入れずに下手投げの打ちかえし、両者互いに秘術をつくして健斗する。

若乃竜一呼吸いれるところを両陣をひきつけた玉椿、強引に寄ってゆけば、ばねのように強い足でこらえたところを外掛けに足をとばして、そのまま両者、土俵外へ重ね餅になって転倒、玉椿の勝。

この大勝負は本日の取組中最高のものであった。次に念のため、本日の勝負を記しておこう。

○若 桜——×浜千鳥
○玉 椿——×若乃竜
×若 桜——○若乃竜
○玉 椿——×浜千鳥
×浜千鳥——○若乃竜
×若 桜——○玉 椿

(○印は勝力士)

三戦全勝の玉椿は雪田氏の好意による懸賞

金を手にしたことであろう。

さて、次が勝抜きぶつかり試合。

「両者へとへとになるまで戦う。そんなことをこのお嬢さん達が望んでおられるんです。私も女相撲はずいぶん見ましたが、こんな勝負をみるのは始めてなんです。」

と、雪田氏の弁。先ず若乃竜と若桜、仕切りも一回で立ち、相撲というより激しい斗争である。

最初から相手の首に手をまきつけ、一方は相手の腰を抱きかかえ、足はむやみに蹴とばす。そのうち、抱き合ったように土俵上に倒ると、一方の髪を掴めば、苦しまぎれに首をしめる。

「ギャー、ギャー」と、うめき声。

行司があわててとめれば、今まで静かに見守っていた紳士も

「そのままやらせろ」

「とめる必要はない。やれ、やれ」

の弥次、雪田氏が立上って、

「相撲です。相撲でありますから、ルールは守って下さい」

「相撲じゃない、レスリングでもいいじゃないか」

「相撲の会であります。勝負がつけば勝力士

と控え力士の対戦になりました」

こんな会話がとんだ頃、やっと乱斗も静まり、若乃竜の勝。とび出した玉り、浜千鳥、これを行司が若乃竜と浜千鳥に取組ませ、すざまじい乱戦が展開。

もう、それからは一方が倒れば控えの女力士が飛び出し、一時の隙もなく土俵せましと荒れ狂う。

陣がゆるんでも、それを締め直す暇さえない。行司があわてて、これを締め直す間も、土俵上では、二つの女体があられもなく髪をふり乱しての大熱戦。

弥次を制する雪田氏の声も興奮の紳士諸氏の声援には何の効果もない。

浜千鳥は他の女力士にくらべて、たしかに一歩弱い。しかし、倒され打たれても直ぐ飛び出す気魄には驚く。おそらく女斗美マニヤとしては彼女が随一であろう。苦しげに吐く息も止まらぬうちに、勝負の決った瞬間、直ぐ飛び出し、その番数は一番多かったであろう。

時計は三時を打っても、尚続けられた。激しい息使い、波打つ腹部の躍動、白い肌も真赤に染まり、今は砂と汗にベトベトになった女体は壮観というよりも、妖気さえ漂って、

阿修羅場と化してしまった。

若桜が玉椿に倒され、そのまま息もたえだえになって立ちあがれない。玉椿も力つき土俵上に坐り込んだまま放心の状態である。

これを潮に行司が、

「本日はこれにて打止めに致します」

と、告げる。女相撲をさんざん満喫した紳士諸氏も、さすがにこれ以上の対戦は望まないようである。

「これで本日の観戦は終わりました、控え室にて会計の報告をいたします。尚、御希望の方には梅乃里さんを囲んで、女相撲についての回顧談をききたいと思いますから、お残りの下さい。」

と、雪田氏の挨拶があった。

会計報告には、次のような明細書が記されてあった。

支 出	
一、揮、さがり	二万円（4本分）
一、力士謝礼	二万円（4名分）
一、梅乃里謝礼	五千元
一、会 場 費	五千元
一、土俵作り	一万円
一、雑 費	四千元
計	六万四千元
収 入	
一、会 費	九万六千元（32名分）
残 金	三万二千元

初めての企画としては大成功であった。参加会員も三時間近い観戦にいささか疲労を感じたのであろうか、お茶をすすると、そのまま帰途についた。

梅乃里が現れて、残って者は雪田氏、二人の女性、それに私外五名であった。

梅乃里の女相撲の裏話、雪田氏の今後の企画方針、一般公開による国技館進出などの抱負を、女相撲ファンにとっては、夢のようなプランを楽しくきくことができた。

最後に、二人の女性も次の会には、出場したいという旨の意見が出された頃には、陽もとつぷりとくれていた。

（おわり）

「ゴムマニアの告白」

ゴム椅子のプレイ

津 沢 秋 子（東京）



私は丸の内にある某商社に勤めております二十九才になる独身のBGですが、十月号の

御誌で、京都の梅川幸子様のご告白「ゴムマニアのプレイ」を拝見し、同じ趣味を持つ一人

として、私の常々行なっております「ゴム椅子のプレイ」を紹介させていただくことにいたします。

梅川幸子様に大変似ている点もございますが、私の用意するものは次の通りです。

椅子——普通の椅子でいいのですが、私の経験では背はなるべく高いものがよろしいようです。

私の持っていますのは、木製の角椅子でクッションはビニール張り背も木です。

円座——赤いゴムの小さな浮輪のようなものです。痔の悪い人が使うためのもので薬局で売っています。

水枕——円座と同様に赤いゴム製のもので薬局で買うことができます。

雨合羽——鉄道員の人やお巡りさん等が雨の日に着るゴム引きの雨合羽です。なるべく大きい方がよいのです。羽二重の裏にゴムを引いたレイコートがありましたら、それでも結構ですが、最近殆ど売っていません。広いゴムシートでもいいのです。また梅川様も書いておられる、昔、小学生が着ていた赤や青のゴム引きマントなら、尚いいのですが、これもこの頃は手に入りません。

ゴム長靴——うら表ともゴムのなるべく大きいもの、ひざまでか太ももまでのものが、一番いいのですが、なければ短いブーツで代用できます。

就寝前、アパートの室の戸締りを厳重にして、閉め切り以上の品を用意します。

先ず円座に半分ほど空気を入れ、椅子の上に置きます。水枕も水を入れ椅子の背に立てかけるように置きます。

雨合羽をひろげ、肩の部分を椅子の背にか

ぶせて（ゴム引面を上にして）円座と水枕をすっかり掩うようにします。これで私のいうゴム椅子はでき上りました。

衣服を脱いで裸となり（入浴直後がいいのですが、私のアパートには浴室がついていませんので仕方ありません）ゴム長グツを穿きます。太ももまでのゴムに掩われた感じはなかなかものです。

両足を開いてゴム椅子に向って立ち、ゴム合羽に掩われた背を両手で抱くようにして椅子にまたがります。一寸腰を上げ、円座と水枕を好みの位置になおし、安定をよくしてから、ぐっと腰を落します。

腰の下の方と腹部に接する水枕の冷たいプリプリとした弾力のあるゴムの感触が、ゴム合羽をへだてて快く肌に伝わります。ゴム合羽のぬめぬめしたゴム布は、肌にぴったり密着して喰い込んだようになり、そのタッチはなんともいえません。体温が次第にゴム布に伝って、ゴムが温まってやわらかくなると一層、ぴったりと肌に着密してきます。

椅子の下に垂れ下っているゴム合羽のすそは、うしろ手で背中へ引き上げ、ベルトでとめます。

そのまま、しばらくじっとしていると、ゴムがすっかり私の体温を吸収して、温かくなり、次には汗でぬめぬめとしてきます。身体を動かすと、ゴムと肌とが、きしきしと音を立てるようにさえます。こうして、やがて、このゴム椅子は私を羽化登仙の境地へさそい込んでくれます。

夏はとかく、むれ易くマニヤにとって不満勝ちですが、私はこのプレイによって、毎日を快適に過ごすことができました。寒くなってきましたと、水枕の水をぬるま湯や温湯にかえて使用いたします。

特にゴムの量感は、円座、水枕などのように、空気や液体を入れたものを活用しますと十分に味うことができます。以前は良くゴム引きレインコートを敷布がわりにベッドの中で用いたりしましたが、ゴムの感触は味わえるとしても、量感の方はもう一つ不十分のようには思われました。

あのぬめぬめとしたゴムの感触と量感につかれていますのは、私一人だと思っていたのですが、はからずも御誌で同好の方を発見した嬉しさのあまり、私のひとり胸に秘めていた秘密を告白いたしました。

偏倚雜章

脐石考

須藤 律夫

○

世俗には普通「お脐のゴマ」と言われている、このお脐の垢も医学的には脐石と呼ばれる。産婦人科の医書など見ると時々散見されるが、医学辞典によれば、

『垢、脂、その他の不潔物凝固して脐石を形成し、小は胡麻粒位より大は小豆粒云々（中略）脐石は常時何等の異常なくして存在するも、時として外界の刺激等により脐輪周囲の皮膚の炎症を起す事あり——』などと記されている。

この辞典にもある様に、余り邪魔にならない

いものなので、誰しも多かれ少かれ貯えている訳だが、稀に潔癖症の人など、入浴の度に

はじくり出し、それこそ「片の影も止めない——」と言ったのもある。但しこの場合、お脐はのっぺらぼうとなり、何か寒々とした影を残すのは止むを得ない。矢張りお脐は腹部唯一のアクセサリーなのである。

齒の裏側の齒垢を齒石と言うが、之は脐石と言われる位、黒い、固いつぶつぶなので、その除去には一寸苦勞するらしい。筆者は曾って七、八回目撃した事があるが、お脐の穴の深い人や、ひだの複雑に刻まれている婦人

など、迎も完全に取り出す事が出来ず、マツチの軸は折れ「首が痛くなっちゃったワ」などと呟く。

○

おそばにも「胡麻切り」と言うのがあるがその他せんべいの胡麻、柿のゴマ、油の胡麻など、「胡麻」と言う言葉を聞く度に、私は何時もこのお脐のゴマに結びつけて考えて仕舞う。甚だしい時は成田山で焚く護摩の儀式すらもが（之は字は違うが）お脐を連想する位である。

これは「胡麻」と言う言葉から受けるニュ

アンスの爲めであろうが、それ程に脐石は胡麻に似ているのだ。尤も人によっては「お脐のゴミ」と言う人もある。その他「お脐の垢」と言ったり、稀には「お脐のカス」と言ったり若い芸妓もあったが「胡麻」と言う人が断然多い。それは言葉から受ける感覚から、植物の胡麻を連想せしめ、黒い、小さな固体、愛らしいもの、香ぐわしいもの——と言った様に、きれいな事を好む吾人の習性から来ているのであろうか。

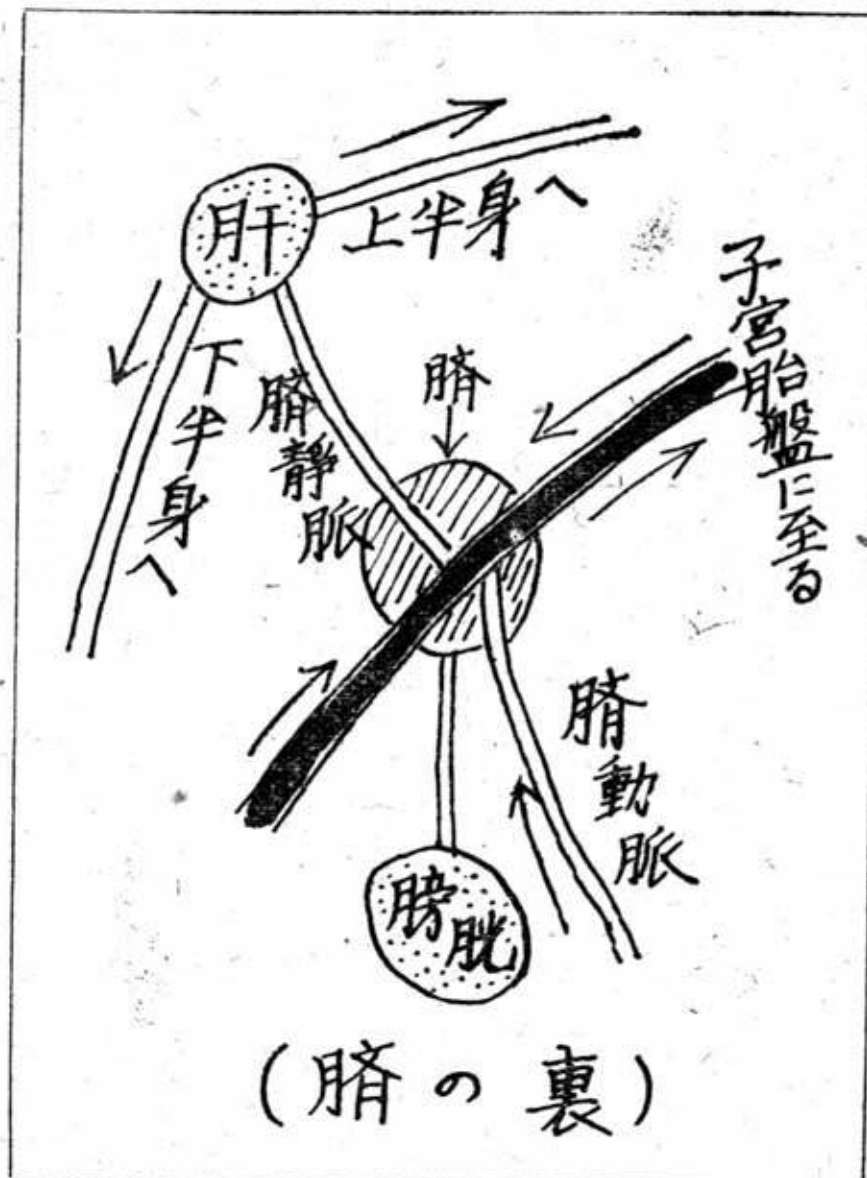
クロス・ワードパズルなど見ても「胡麻」の俗称が普遍的である事がうなづける。筆者は前にも統計をとってみたが、八例の中、ゴマと正解したものが六例もあった。つまり縦の鍵——之を取ると腹痛を起すと言う人もある、その他之に類する出題に対し、ゴミを正解としたものはたった二例しかなかったのである。[ゴ]の様に、ゴマ(或はゴミ)のゴの字は決っていても「マ」か「ミ」か決

「[プク]と二字が決っていたなら「セツプク」と枰を埋める人が多い事であろう。万全を期して「カッブク」と二通投ずる人があっても知れないが。この場合も私の統計によれば、矢張り切腹を正解とするものが断然多かったが、たった一例丈なんと「ゲンブク」と言う正解があった。成る程元服そは出題の通り、昔の人が行った成人式ではあったのだが。

扱、話を前に戻そう。お脐の胡麻取りで首の骨を痛くした経験者も、お有りの事と思うが、一説にはオリブ油を脐窩に注ぎ、柔らかくなったところで軽くまさぐると気持ちよく取れると言う。又噛み捨てる前のガムを脐穴に押し込み、すばと抜くと胡麻も一緒にきれいに取れると言うが、私は未だ経験した事はない。

筆者の友人(この人は或る洋画会社の支配人だが)N君は、曾つて商用でエジプトに旅した事があった。するとカイロの某所に於てどうした事かエジプト美人に猛烈に可愛がられ、楽しい巫山の夢を結んだ訳だが、その時すっかり脐穴の掃除をされたと言う。

筆者思うにあちらではお脐に接吻する事が



め手がない時は運にまかせるより仕方がなからう。話が少し横道にそれるが、之と同じ様な事は切腹の場合にも言はるのだ。「ハラキリ」の事は通常切腹と言ひ、或る場合には割腹、頻度は下がるが屠腹と言う場合もある。クロス、ワードの縦の鍵——昔の人が行ないました——とあり、

童面腹 浅い脐



最も親愛の情を現わすしぐさらしい。

『お蔭でゴマは全部吸い取られ、ひっ込んだお脐も二、三日は出脐のまま、衣服にこすれて困ったよ』友はつくづくと笑い乍ら述懐した事がある。

○

お脐への接吻——それは人によっては快美な刺激を与えるものであるらしい。それは別図参照の通り脐の裏側には三筋の靱が膀胱と肝臓とに走っているの、下腹部の神経に刺激を与えるのであろう。又普通脐窩の美しい窪みは、皆脐周辺の皮下脂肪の為めと言われているが、私はどうも、そればかりではない様に思う。と言うのは、随分と肥えた人でもお腹が何となく力なく、所謂童面腹（別図参

照）でお脐の浅い人もあり、又キリギリスの様にやせた人でも、その腹部はむっちりとしてお脐が形よく窪んでいるのを見かけるからである。

蓋し腹部内臓の諸機関が全き活動を続け、前記靱帯が緊張の度を強めると、脐窩はいよいよ深く内部に索きつけられるのではなからうか。

エジプト美人が激情の余り、友の脐を愛咬した事はうなづけるが、筆者には更に勘ぐった考え方が浮ばぬでもない。それはお脐のゴマが精力剤になると、今日猶一部に流布されている事である。

胎生中、脐が如何に大切なものであったかは、茲に述べる迄もない事だが、成人してからの後の脐、否、むしろその脐石には、回春剤としての有効成分が含まれていると言うのである。つまりお脐のゴマには前記脂肪、表皮断片、繊維切片等の外にも、貴重な胎盤エキスが含まれていると言うのである。それかあらぬか通人の一部には、今日も猶『脐酒』と言うものが知れ渡っている。

之は婦人（勿論美人に如くはないが、成る可くなら脐の深い人）の脐窩に適温の清酒、例えば灘の生一本（之も只の生一本なら猶よ

ろしい）を注ぎ、ゴマの成分が酒に溶け込んだ頃を見計らって飲用するものである。人によつては「不潔な、馬鹿馬鹿しい事」などと一笑に付すかも知れない。然し二、三の知名の士や、又曾つて海外に雄名を馳せたM外相など、その満鉄総裁時代に愛飲した話は有名である。

之に反して下世話に言う、お脐のゴマの多い女は情事に云々又はお脐の黒い女は脐くりを溜めるなど、もっと甚だしいのになると、お脐の穴に米を十一粒容れて行かう時は絶対に懐胎しない等々、その根拠が一体どこにあるのか、私にはむしろ信が掛けられない。

○

東京の一部では「へそばん」とも呼ばれている例のあんぱん、その中央の穴の中には胡麻や紫蘇の実などがあしらわれているのが普通である。之はもう数年も前の事であるが、或る料亭に佳人と対座した時、私は一寸した謎を抱いて仕舞った。（そしてその謎は今日も猶続いているのであるが）刺身のつまに出された紫蘇の実をとり上げると、

『きく江さん、これ嫌いかい？』と私は訊ねてみた事がある。

『あら、紫蘇の実ね、嫌いじゃないわ、よく

お脐に容れるんですけど……」

彼女の語尾は消え入る様に細かったが、私は聞き洩しはしなかった。

——紫蘇の実をお脐に容れる——

そんなまじないも民間療法も私は聞いた事がない。その後色々の書物もあさり、又人にも訊いてみたのだが、今日猶疑問のままである。その時反問してみればよかったものを私は訊ねそびれ、佳人はその後大塚病院で淋しく他界して行った。(このおまじない？読者のどなたか御存知ありませんか？)

○

私の執拗な疑問は未だに続いているが、この頃では諦めて、あんぱんの紫蘇の事ではないかと思う様になった。先夜も銀座西八丁目のクラブ、ユキを訪れた時、番に当たったホステスは余りにも東宝の女優に似ていた。つまり「あんぱんの脐」と仇名される団令子によく似ていたのである。そんな連想から私は尋ねてみたのだが、

——紫蘇の実をお脐に容れるの？ 知らないワ、そんな美顔術って……。彼女はけっぴりな美容法とも思ったらしい、頭から否定されて仕舞った。然しその事が話の糸口となった為めかどうか？その夜の話題は専らユーモ

ラスなお脐の話、それから食べ物に移って奥多摩のへそ饅頭、胡麻をあしらってある浅草の雷おこし、等々、然し落ち行く先はどうしてもピンク・ムードの粹談となる。

『夫婦相和してね、お互いにお脐の胡麻の数まで知り合うようにならなくちゃあ……』『いやだわ、そんなの、少しお下劣ね、それより……』

彼女は巧みに話題をそらすと、その日の三面記事を賑わしたスリの話に移った。

『昔のスリは連も器用でね、お金丈抜いて墓口はもとに還して置いたもんだよ』

『そんな器用な事出来るの？』

『江戸では仕立屋銀次一派が有名だし、関西では「チボ」と言うね』

『じゃあ、須藤さんお得意の英語では何んて言いますの？』

『英語で？英語では「トランフリース」さ』

『トランフリース？』

『そうだよ、盗ってもとらぬ振りすだよ』

『何言ってるのよ、こちら調子がいいわね』

その時バーテンにビールの追加を注文すると、彼女は更に言葉を続ける。

『昔、西郷隆盛の提時計を、時計丈はずしたスリが居たって言うわね』

『浅草の六区では履いている下駄迄スラれた人がいる。江戸の履き倒れ』と言ってね、皆高価な下駄を履いていたんだ』

『何だか怖いみたい、あたしも気をつけよう』

『うっかりしていると恵美ちゃん、お脐のゴマまですられちゃうよ』

『あたしはダイジョービ、ゴマなんてお脐の奥の方ですもの』

『そんなにお脐深いの？』

『深いわよ、五センチ……五センチ位はあるわね』

嗚呼！この深さ五センチの脐、私の記録によれば確認したのは、過去にたった一人しかいない。それよりも、この言葉を訊き出す迄の、恰で掛合万才の様な馬鹿馬鹿しい対話、急に虚無と寂寥感とが襲いかかって来るのだった。

——六二、一〇、二七——

【代理部だより】 ○「悦唐写真集決定版」

(略号「プロ」)は都合により分譲を中止いたします。○「日本版サド侯爵悦唐絵巻」(略号「さ9」)はA5判に変更、「梨花悠紀子吊責特集」(略号「りつ1」「りつ2」)は各八枚一組に変更いたしました。



永^{なが}
田^た
利^{とし}
夫^お

デバカミズムス
窃視症は大概の男が持っているそうだが、幼年時代既に現われるものらしい。

私は小学生時代。まだ学令に二、三年も間のある隣家の小さな男の子が、塀の穴から夢中で私の家を覗いている姿をみつけ、一寸口では表現出来ない気持ちに襲われた事を覚えてゐる。人間の、持って生れた、どうしようもない醜悪さにつかつたという感じだった。

その時、私の家の緑側では、北海道から来て居た、当時既に六十を過ぎていた祖母が肌脱ぎになって日光浴をしていたのだ。覗く者は算え年で五つか六つ。

私自身の窃視癖は満十二才で始っている。それ以前には記憶がないし、始まり方の特殊性から考えて、恐らくそんな性癖はなかったのではないかと思う。

その時、私は小学校六年だった。尤も当時は戦争中なのでドイツ風に国民学校と言っていた。これからの日本を背負って立つ小国民は一人残らず泳げなければいけないというので、区内N遊園地にあるプールで、夏休みを利用した水泳の練習があり、六年生は全員参加した。

女のクラスに香代子という、容貌でも成績でもずば抜けて優秀な少女が居て、私は四年

の頃から此の娘が好きで仕方がなかった。色が一際白く、目はパッチリしていて、フランス人形のような可愛い顔は清楚で詩情があり、併もいかにも賢そうだった。

戦時中の小学生だから、女の子と附合う事は勿論、言葉一つ交す事さえ出来はしない。学校の往復の時や昼休後の分列行進の時に、その特別に目立つ顔をそっと盗み見て満足するのが関の山だった。

Nプールで香代子も水着一つになった筈だが、その姿を見た覚えはない。私が覚えてるのは練習が終って皆が着換えを始めた時の情景だ。私は美少女の普段衣服でかくされている身体の部分を、少しでもこんな機会に見ておきたいと急に思いついた。自分も洋服を着乍ら彼女が水着を脱いで裸になるのを期待に胸を轟かせ乍ら盗み見ていた。

が、女というものはそんな小さい内から男の思い通りにはなつて呉れないものらしい。香代子は水着の肩を外しただけで乳も見せない内に、赤っぱいワンピースを頭から冠ってしまい、後はワンピースの下から手を入れて胴から腰へ水着を降して行つて、とうとう足もとから巧妙に脱いでしまった。次にズロースをはいたが、此の間、白い太腿さえ二度と

見せない程の巧妙さだった。

水着が腰の下へ降りた頃からズロースを履き終るまで、私はかなりの距離を香代子の前までプールサイドを走って行って、覗いてみたいという強い欲望を感じていた。外の女の子や若い女先生達も、同じ更衣をしていた訳だが、彼女等の身体のどこも見たいとは思わなかった。今は記憶が消えているだけで或は思ったのかもしれないが、香代子の様に強く覗いてみたいと思わなかった事は確かだ。

私の窃視癖の始まりは、少年時代の片恋の副産物の様なものだったわけだ。

小学校の上級から中学校一年の始めにかけて、私は何人かの少女の太腿に関する記憶を持っている。私はそれ等の少女達の名前も知らず、顔も覚えていない。皆デパートの中や往復の電車の窓から見た行きずりの同年輩の少女ばかりだ。スカートの短くて腿の下の方が見え出している少女がいて、私は出来るだけ長くその部分を見ることに熱中した。それは戦争の最中に私の為に咲いていて呉れた可憐な路傍の草の花だ。やがて空襲騒ぎが始って誰も彼ももんぺいを履く様になった。

最初の空襲に家を焼かれたとかいう老大佐夫妻とその令嬢が、親類に当る私の隣家へこ

ろがり込んで来た。隣家の浴室は私が一人で寝る部屋と塀をへだてて向い合っていた。冬の日短い。夕方薄暗くなってから浴室の屋根に突き出た小煙突の陣笠の下から紫色の煙が立昇るのが見えると、私はその下にこれから繰上げられる光景を想像して眠ることが出来なかった。

品の良い大佐夫人と、充分に成熟した一人前の女であるその令嬢。そして例の出歯亀少年の姉に当る私より一つ上と三つ下の隣家の姉妹が、そこで入浴する筈なのだ。

塀の手前に大きな椿の木があった。その影にかくればたとえ塀の上に乗っても、燈火管制下の夜闇に助けられて私の姿は見えないだろう。そう気がつく矢も楯も耐らず古い塀をバリバリ鳴しながら強引に上ってしまったが、塀の上に肩を出した瞬間。白いシャツを着ていることに気付いて急に気後れがしてしまい中を覗くことなど思いもよらず、椿の枝をさも意味ありげに折ってみたり撓めてみたりした末、結局下りてしまった。

その後も何回か試みたが、いつも、塀が高い音をさせ過ぎたり、窓が湯気で曇っていたり、急に空襲のサイレンが鳴ったりして一度も成功しなかった。その内私の家は強制疎開

で壊された。

それから一年以上も空白がある。

昭和二十一年の八月。私はまだ疎開先の北海道の山奥に居た。

或昼、週に二日か三日しか営業しない村の古色蒼然たる劇場へ、司法劇団というお役所のお説教劇団が廻って来た。中支から復員して来た従兄が村役場に勤めているので私は無料で入れて貰った、詰らない芝居だったが、娯楽に饑えていた当時の私は結構喜んで見ていた。が、途中で便意を催してどうにも我慢が出来なくなったので席を立った。

劇場の便所の扉をあけた瞬間、私は呆れ返ってしまった。大便所は二つあって私はその後の方へ入ったのだが、前の羽目板に、子供の私が楽に上体を突込める位の穴があいているのだ。誰かが破ったらしい。いかにも山奥の公衆便所にふさわしい豪放さだった。

その時のことも記憶がはっきりして居ない部分が相当あるのだが、私は始めそこに待構えていて前のボックスに誰か女の人が入って来るのを待つて居よう、などとは思わなかった様に覚えている。時代から言っても場所から言っても食糧事情の悪い最中だったから、私は慢性の消化器疾患をやって居り、その為

大分手間取った。誰かが入って来た足音がしたなと思うと、前のボックスの扉があき、ハッとして顔を上げた私の目の前に、激しい排尿の音、胸がドキドキし、頭はカッとなった。時に私は十五才。

その人が出て行くと間もなく私も用を終えた。バンドを締めてる最中に次の女が入って来た。ちよいちよい見られるものではないのだから、此の人の最後まで見ておこう。そう思って再びしゃがんだ。二番目の女を送り出した直後に又足音。今度は男らしく男便所の踏板が暫く軌っていた。大便所から出る所を、他人に見られたりするのは恥かしいので、私はその男が出て行くまでボックスの中で息を潜めていた。男の足音が消えない内に三人目の女。客席の方が急に騒がしくなって大勢の足音がドヤドヤと便所の方へ近附いて来た。

幕が降りたのだ。

私は出るに出来なくなってしまう。同時に腰を据えて出来るだけ沢山のお尻を見てやろうという気になった。

次の幕が開くまで、十分あったか三十分あったか知らないが、入れ代り立ち代り婦人が入って来てズロースを脱ぎ、私の鼻先へ尻を

突きつけてしゃがむ、十何人か、それとも何十人か。そんなことは解らない。私は無我夢中だった。顔がほてって身体がぶるぶる震えた。扉の外では折々どんとと羽目を叩き、「ちよっと、入ってるの?」

とか、

「遅いわね、此の人誰かしら?」

「仕方がない。向うへ入りましょうよ。」

などと言っている。私も、人間が中に居ることをしらせる為に時々自分の手で内側から叩いた。不慮な女がいて、いきなり扉を開けたりされても怪しまれない様に、一旦はいたズボンを下した。

漸く扉外の騒音が消えてあたりがひっそりしてからも、まだ二、三人入っては出て行った。私にとって極めて幸運だったことは、誰一人羽目の穴の向うを怪んで此方を覗く女が居なかったことだ。完全に誰も居なくなったと思われた時、私は漸く自分のボックスを出て何食わぬ顔で客席へ戻った。久しぶりの芝居で客席は超満員だった。その半分が女で、その一割があの時便所へ殺到したとしたら、私は随分大勢の女性達のお尻を続けざまに見するの光栄に浴したことになる。

あんな経験は恐らく一生一度だろう。その

後私は多少の窃視の体験を重ねたが、劇場のトイレットを覗いたことは再びはなかった。

只、こんな話を知っているの、ついでに御紹介しておこう。



私はそれから間もなく、東京へ戻って来たが其後一年程経った頃。バラックで再建されて幾らも経っていないかった（と思うのだが記憶は明確でない。）池袋山手映画劇場の婦人用トイレットの間仕切りの背が低く、男が入ると、前後のボックスの女性のしゃがんだ姿まで丸見えだったそうだ。此の発見を私に教えて呉れたのはUという級友である。

「俺。あの時、自分で自分を変態性じやないのかと思ったぜ。とにかく、こんなこと厭だなあと思ひ乍ら夢中で覗いていて、どうしても出てこれないんだもの。」

と言ったのが忘れられない。Uは其後も時々行ったらしいが、私は「高級」洋画ファンを気取っていたので、「低級な」日本映画ばかりやっている山手映画へわざわざ行く気がせず、その儘だった。まもなく同劇場は永い間閉館して大掛りな改装をやったから、多分その時にでも直してしまつたろう。

もう一つ。大分前の雑誌「文芸春秋」に出て居た徳川夢声氏の文章の中に、戦前、日比谷映画劇場だか有楽座だかのトイレットの壁に穴を明ける常習犯が居り、劇場側で板を打付けておくと、その翌日にはもう穴がうがってあったという。此の穴は誰か何かであけた小さな物で一寸発見され難く、併もしゃがんだ婦人の一番肝腎の部分だけが見られる様に特定の勾配を持っていたというから、流石に帝都の出歯亀氏は北海道の山奥の出歯亀氏なよりもセンスが良い。

終戦直後の何もない時代。東京では大方の浴場が焼失し、僅かに焼残ったみすばらしい風呂を目掛けて時には電車に乗ってまで客が

殺到し、ぬるい、真黒なお湯に身動きも出来ない客が、ひしめき合う光景が続いた。

その頃、私は女湯覗きを何回かやった。

私は依然として臆病で内気で無我夢中だった。只、一糸纏わない女体が見てみたい。その一念でそんな大それた事も出来たのだ。私の行っていた公衆浴場の周囲は真暗で、少し横手へ廻れば人通りは殆どなく、おまけに塀は傷んであちこちに穴があったので誘惑は強力だった。

最初に覗いた時。縁側の所で十五、六の少女が素っ裸のまま横を向いて身体を拭いているのが目についた。これが私が全裸の女身を見た最初だ。その頃Uなどに借りてよく読んだ仙花紙の読み難いワイ本などに、ムッチリした、という表現が無闇にあったものだが、女の人の、腿や尻などの肉付き工合を表現するには、やはり此の言葉しかない、とその時痛切に感じた事を覚えている。

この風呂屋は私の様な者でさえその気になればちよつと覗くことの出来る、いわばデバカミストのメッカの様な家だったので、私その他にも覗く者は多かったらしい。今急に気が附いたのだが、私はその気になったのも出て来た途端に現行犯を一人目撃した故であった

様な気もする。

或る晩、又期待に胸をときめかせていつもの覗き場所へ行ってみた私は、がっかりして了った。塀の破れという破れには、ことごとく板が打附けてあったのだ。

私は其後塀から覗いた事はないが、店の前を通り掛った時や出入店の番台の傍から覗いたことはある。

終戦直後の思出をもう少し。私の家の斜向いに住んでいた、照子という二つか三つか下の女学生が、学校から帰って二階の窓際でセーラー服を脱ぎ、薄いシャツとズロース一つになった姿を縁側で偶然見た事がある。

前記Uと二人、高円寺駅前で別の友人を待っていた時。待ちくたびれてしゃがんでしまった途端に私達の目前で、パツと片足を持上げて自転車に乗った若い女のズロースの股の裏が大きく破れていた。

少し後で近所の映画館へ行った時。アトラクションのストリップを見た。まだ新宿にストリップショウが誕生したかしないかの頃だから勿論こんな言葉は知らなかった。

レビューは見たが私はまだ本格的なストリップは見えていない。見たいとも思わない。見ればやはり楽しいのかもしれないが、玄人の

女が、フットライトやスポットライトを浴びて公然と裸を見せるのか、と思うとそれだけで感興が殺がれてしまう。ストリップは男の窃視癖を満足させる所にコマ・シャル・ヴァリュエーが成立つのだそうだが、窃視の醍醐味は素人の女の、普通かくれている肉体の部分が、思いがけず目に触れる所にあるのだと思う。金を払って購えるというものではない。

此の時のアトラクションは、田舎から連れて来たのではないかと思われる程の、よく肥って背の余り高くない、いかにも素人臭い十八、九の女の子が、踊りながら思いがけず裸になったので感興は充分だった。

目のパツチリした一寸可愛い娘だった。それと同じ頃。窃視には、何の関係もないが、もう人が忘れていている女の惨殺事件が池袋にあったのでついでに書いておく。彼女は全裸にされ、庖丁で耳鼻を剃がれ、乳房をえぐられ、肋骨を切取られ、最後に鳩尾から肛門まで腹を引割られたのだ。二十三年九月十八日の私の日記に出ている。

翌年から私は或官庁の新聞配達のアルバイトをやった。今はもうないだろうが庁舎のあちこちに人が住んでいて、その一つに角谷という人がいた。その官庁の渉外局に勤め、英

字新聞を取っていた人だから相当の教養はあった人だろう。地味な身装の、余り美人ではないが背のスラリと高い、二十一、二と思われる一人娘が居た。どこかへ勤めていたのかもしれないし、午後案外早い時間に家に居ることもあったから、案外どこかの女子大へでも行っていたのかもしれない。おとなしそうな人だった。私に遇うと毎も、良く聞取れない小さな声で挨拶して呉れた。

或る真夏の早朝。新聞を持って行くと下ばかり一つの半裸で肌着を探して部屋から部屋を歩き廻っているのが、開いている玄関から見た。新聞を入れれば厭でも音がして此方に向くので、その瞬間だけ私は目を伏せた。目を上げた時には、細い両腕で乳房をかくしながら襖の蔭へ逃げて行く後姿が見えた。もう一度あんな姿が見られたら良いと毎も思っていたが、これは無理な望みだった。彼女は其後、私に遇うと真赤になって下を向いてしまい、一言の挨拶も出来ない風情だった。こんな内気な人の裸体がストリップなどで見られますか？

とつづくに接収解除されているが、N・H・Kと日比谷公園の間に何とかいう米軍のクラブがあり、ここに勤めている女の中に、五尺

足らず、色白で、ムッチリと柔かな肉付きの勇敢な少女がいて、夏になると腿が三分の二も露出する小さな白いパンツをびったりとはいて内幸町の舗道を歩いていた。腿の肉の揺れ工合まで手に取る様に解る程なので、よくG・Iに大声でひやかされていた。お化粧などは控え目で上着は地味なのでパンパンとは思えなかった。思いたくなかったと言った方が正しそうだ。

同じ頃、O保健所へ健康診断を受けに行った。私と同年輩から少し下位の男女学生が数人レントゲン室へ入れられた。一人の女学生の胸に明瞭な病竈が認められるというので、担当医師が私達をレントゲン台の前に集めて見せて呉れた。三角形の小さく張った乳房を出した儘レントゲン台の上に立たされていた少女が、集って来る私達の顔を見てオドオドと羞らっていた表情は好ましかった。

原宿の駅では、どこかで泳いで来た帰らしい、水泳パンツにジャケツを引掛けた丈という姿の三人のアメリカ女が、私の直ぐ前を歩いていたことがある。腿の太さは日本女の三倍位に見え、肉が固く締って色が白く、圧倒的な素晴しさだった。白人らしい粗い肌には日本女の滑らかな肌目の細かい肌とは違っ

た肉感がある。赤いウールのパンツで、それだけをぴっちり包んだ巨大な臀がモリモリと動いていた。

アーニー・パイル劇場の横では、私と交らない位の背丈の、小柄な十七、七の少女が下着の様な白い羅から小麦色の腿をあらかた出して車を降り、私の横を通過して劇場へ入って行った。腿肉はピッタリと緊って肌は滑らかで、日本人かと思っただが、当時同劇場は日本人でさえあれば、どんな人物でも一切オフ・リミッツだったらしいからアメリカ人だったのだろう。第一其の頃、半裸姿で都心を歩ける日本娘はまだ居なかったと思う。前記白パンツ嬢などは大変な例外で、だからこそ私は鮮明な記憶を残しているのだと思う。勿論私は都心に関する知識に於ける専門家ではないが、終戦直後から二十八年頃までいろいろなアルバイトで随分都心で生活した。二十四、五年頃はまだ、真夏になっても今の様に思い切った二の腕を丸出しにしてしまう女性は非常に珍しく、電車の座席に坐っている真前で吊革に掴んでも貰わない限り、女の人の腋窩は簡単に見られなかった。当時大柄でよく目立つ洋装美人が一人だけ、そうやって私に見せて呉れた脇の下に、男に負けない位の黒

毛が密生していて随分堪能した。

病院という所は浴場についてデバカミストを楽しませてくれる。尤も、丹羽文雄氏の小説に、嗜虐癖のある看護婦が、男患が大勢窓から覗いている女患の大部屋で、女達に全部尻を捲らせておいて、五寸もある注射針を根本までズブリと突刺して、ストマイの注射を楽しみながらして行くという描写があるが、こんな派手な興行を見るのは一寸無理だろう。

私も一時Aという病院に通ったが、ここでは、処置室の廊下際に長椅子があったので、廊下から見ていると、注射して貰いに入った女が、長椅子の端の所に立ってスカートを捲り上げ、ズロースを脱ぎ、丸いお尻の線を見せながら、長椅子の上に両手を突き、俯伏すると、看護婦の持った注射が犠牲者の尻に迫って行く、という影絵芝居が曇硝子に映って見えた。ストマイの注射は相当痛いので、その女の表情なども併せて想像していると身内がぞくぞくして来る。稀にそっかしい看護婦が扉を少し閉め忘れて行ったりして、通りがかった年輩の男がわざわざ中を覗き込んだりする情景もあったが、私自身はシルエット以外で此の加虐劇を見たことはない。

A病院の前に行っていたB病院では、診察室の中に椅子があつて五、六人宛纏めてそこへ入れた。一番端の椅子に坐ると衝立カーテンの隙から、診察椅子や診寝台の一部が見えた。

二十三、四日と思われる、少しやつれた、彫の深い顔の娘さんがシュミーズを腰の下へ垂らして、診寝台の上に、頭をこちらに向けて仰向けに寝た姿は忘れられない。

女が仰向けに寝ると乳が横に拡がって丘が平地に近い程近くなるということを知ったのは此の時だ。

A病院ではよく顔を合す堀江という、オールドミスがかった小柄な人が、仰向けにされている所を見た。白い、薄いブラジャアをつけていたが、その周辺から脇胸の方まで乳肉が固く張っていて、身体に似合わぬ逞しさだった。

朝鮮戦争が始って間もない頃。フィンカム基地でメイドをしていた、当時二十二才の、友人の姉が一時帰宅して寝ている時、右の乳が寝巻から飛出しているのを通りすがりに見た。真丸で、珠の様な、という言葉がぴたりした。とても血色がよくて熟れたトマトの様だったが、乳房はやはり白い方が楽しい。

A病院は、一つの診察室に二人の医者がいて、二人宛患者を入れたので時々相患が女だった。女の患者は仲々肌を見せないし医者も思い切って裸にしないので、その割に裸を見る機会には恵まれない。その点かえって和服の女の方がいい。洋服の様に身体の一部をちよっと出して、直ぐかくすということが出来ず、背中に一寸聴診器を当てる為だけに腰から上をすっかり半裸にしなければならぬ。水商売らしい、色っぽい、肉付きの良い娘が、血色の良い、肉の盛上った背中を丸くして、脱いだ着物でしっかと乳房をかくしながら、背中を診察されている姿を一昨年の初夏に見た。こんな姿はこれから益々見られなくなるだろう。此の三月には中年の尼さんが、レントゲンの透視の為に、袈裟や法衣こころもから襦袢まで取って、真白な薄い腰巻一つになった。

去年の或日呼ばれて勢良く入って行くと思いがけず、小柄で肌の粗いズングリした娘がスカート一つになって診察を受けて居り、途端に胸がドキドキし身体が震えて困った。彼女の乳房は肌は美しくなかったが形は美事なウェッペリン型で前に突出していた。診察中二度程横目で見たら、一度はそのウェッペリン飛行船の様な乳房を双つ共露出した儘、背

中にスーツを引掛けて、医者の話を聞いて居り、二度目はスカートを下腹の下までずらして、見事なお腹を丸出しにして診察台に寝ていた。完全と言いたい程の球形で、凝った様に固そうで、あんなに大きくて真丸なお腹は他に見たことがない。

もう一人。少し派手な服装の、美しいお嬢さんが上半身はシュミーズ一枚になって、診察台の上に仰向けに寝かされ、立膝を重ねて脚気のテストをされている所へ入ったことがある。スカートは三寸程捲られ、膝を立てているので、もっと奥の腿まで見えた。裸の脚に、緑色地に繊細華麗な花模様の、上等布地のスカートが映って美しかった。

大学には余り思い出がないが、米子という栗色の肌をした、清潔な感じの、背の高い女子学生が、夏になると一時、脇腹まで見える様な肩ぐりの大きい、薄いローブを着て来た。

四年の時、地下のフエンシング部の練習所を退屈まぎれに覗いたら、一年か二年の活発そうなお嬢さんが、白い長ズボンのお臀を遥ましく突出してサーベルを構えていた。真後へ廻ってよく見ると小さな綻びがあって、ポーズを交える度に、ムッチリした尻肉に密着した、半透明の薄いパンティに包まれたお尻

があちこち覗いて見えて一時間位立去れなかった。此の綻びは直ぐ繕われてしまった。大体私はスポーツをやっている女性のお臀や腿を見るのが好きだ。日比谷公園のテニスコートにはよく自転車で行った。

今私の住んでいる家の便所の窓からSという工場の寮の十の部屋がそっくり窺える。窓には硝子代りにベニヤを並べて打附けた部分があり、此の隙間に目を当てていけば向うからは絶体解らない。私がこれを専らに愛用していることは言う迄もない。

二階は、男の独身者ばかりなので詰らないが、北端の部屋に端正な顔をして仲々肉体の美しい青年が居り、去年の夏の真夜中、遅く帰って来たのか窓を開け放ったまま、素っ裸になって身体を拭いていた。私には男色趣味は殆どないが、此の時は悪い気持がしなかった。

その下の部屋には十五、六と十七、八の姉妹が居る。妹の方はもっと小さい時パンツ一枚の姿を二、三回見た。子供も同然の貧弱な身体割に、乳だけは大きかった。姉の方は腰に怪我をして鏡を見ながら繻帯を巻いている半裸体を見た。腹が太々としていて血色の良い褐色の肌をしている。

真中の部屋には前記の妹の方と同学年らしい少女と、三十五、六と思われる小柄で色白の母親が居る。此の少女の身体を私は一番多く見ている。まだ子供だがスナリして割に均齊のとれた身体をして居り、夏の夜など小さなシャツにパンツ一枚の姿で、電燈の光を浴び乍ら室内を歩き廻っている時の太股などは仲々逞ましく見える。併し乳は小さい。顔は繊細な感じの瓜実顔で美しく、肌の色は栗色。これが一寸惜しい。一昨年の夏、母親が彼女のズロースを脱がせ、ミシンで繕っている間暫く、私の方に、小さな可愛い尻を向けて、身をくねらせて待っていた姿は忘れられない。その頃は時々シュミーズも附けないでズロースを履き換えていたが、去年あたりから漸く大人になったと見え、そんな事をしなればかりか肌さえ余り見せなくなった。母親は娘よりずっと背が低いが流石に成熟した女で、太腿などは二、三倍もある様に見える。身体の透いて見える羅のシュミーズをよく着ているが、乳房はもう萎びているので腹から下を見なければ詰らない。寝る前に黒いズロースをミシンの上に脱いでおく癖があり、朝早く窓際でよく履いているが、太腿から上は絶対に見せない。姿と違って肌は真白で悪く



女体切腹の構想

芸者意気

辰巳の腰巻切腹

扇 芝

彰義隊士芳野は上野の山を敗走して、今は深川の春の家の馴染み、小染の許に隠れている。一日、二日目にはさしたることもなくすぎたが、三日には探索の目は、この辰巳まで広がって一步も出歩くことが出来なくなってしまうので、止むなく自決の覚悟をきめて奥羽の同志の許に出発することを小染に相談する。小染も恋人の頼み故、方々を奔走したがその甲斐なく、遂に抱主にまで、芳野を放逐する様に云われる。

芳野はそれを聞いて、春の家を出ようとするが、小染はどうせ死ぬなら私の所で死んでくれ、不束ながら私も一緒にお供すると云っ

て無謀をとめる。しかし明後早朝を期して深川一帯を探索するという布令に驚いた抱主はどうしても今日明日中に退去を要求する。そこで小染は芳野にせめて此の部屋で切腹する様にすすめる。そして私も一緒にお供するか許してくれと云う。が、芳野はそれを断り明朝早く退去する、そして潔く斬死する覚悟を述べる。小染はその言葉を聞いて自分も共に死ぬ決心をする。

その夜の小染は緋縮緬の長襦袢まで脱ぎ赤い肌着と腰巻一つになった。

翌朝、芳野は春の家を退去する。そして小染は覚悟の自害を遂げるべく、昨夜名残の衾

ない。

南端の部屋には時々大柄で色白の美しい娘が遊びに来る。ここの主婦の妹らしい。夏になるとシュミーズを透して豊かな太腿や腹が見える。二の腕も太くて恰好が良い。ここの長女はまだ小学校六年位だが五尺に近く、大人っぽい美貌なので将来が楽しみだ。昨年の秋。毎もの様に便所へ行きがけに覗いたら、ずっと背の小さい男の子に竹の鞭で脅される遊び(?)をしていた。男の子が、

「立て。しゃがめ。立て。後を向け。右を向け。左を向け。しゃがめ。両手をつける。」

などと気紛れに命ずると、顔を赧らめて恥かしそうに笑い乍ら言う通りになっている。

命令は段早くなり、可憐な女奴隷は鞭打たれるのが怖さに一生懸命それに従う。男の子は汚ならしい恰好で醜悪な顔をして居り、彼女は品の良い洋服を着ていたので、私には野蠻人に捕えられた姫君の様に思えたものだ。

併し私の期待に反して男の子はとうとう彼女を鞭打たなかった。

話が前後するがNという友人の姉さんは身体は小さいが整った理知的な顔をして肌の真白い美人だった。Nが十八の夏に夭折し友人達とお悔みに行った時縁側に坐って挨拶し、

で着けた赤い腰巻の上にま新しい緋の腰巻をあて、矢張り昨夜の赤い肌着と緋縮緬の長襦袢の上に白無垢を着た。その上に外出着を重ねて芳野を送って行く。あたりはまだ暗く、乳色のもやがあたり一面に立ちこめている。辰巳の出口である一ツ橋あたりにさしかかると、折柄巡回中の官軍の兵士にとがめられた芳野は、一刀のもとに斬り倒す。

今はこれまでと小染は胸許をくつろげ用意の短刀を見せ、「貴方はどうせ武士だから腹を切るだろうが、私も辰巳の芸者、せめて腹を切って芸者の腰巻腹をお目にかけたい」と云うと芳野も一緒に死ぬことを肯く。二人は手を取り合って、近くの小染の知り合い家を訪ねて一室をかりうける。

小染は芳野の返り血で汚れた着物をぬがせ自分の帯をといて外出着を脱ぎ、着ていた白無垢を着せる。赤い長襦袢姿の小染と白無垢姿の芳野は、じっと目を見合って笑うと肯きあって静かに仕度にとりかかる。

芳野は帯を押し下げて胸許を寛げ下腹を大きく広げ小刀を抜いて切先三寸ばかりを残して懐紙を巻く。

小染はといった帯を脇におき、しごきをゆるめて腰部あたりできっちりしめ直すと肩をす

はめて長襦袢をはねて諸肌ぬぎ更に赤い肌着も脱ぎすて、ゆたかな乳房からなめらかな肌をすっきり露わにする。次に胸にまいた腰巻をハラリと腰まで広げる。

長襦袢の膝前をかき開き赤い腰巻を右前をたっぷり引き摺り出してから黒塗の短刀の鞘を払ってこれを刀身にまく。そして更に膝前を割り広げて上体の安定をたしかめて、短刀を左脇腹にグサと突き立て、そのままの深さで臍下四寸位のところを一気に右に掻き切ると、真赤な血汐の中に腸が少し見える。

小染は刀を抜きとり「芳野様」と叫ぶ。

芳野は「小染、見事だ」と云うと、自らも小刀をぐざりと突き立てる。

「貴方」と振り仰いだ小染は更に臍にぐざりと突き立てる。

芳野もすでに真一文字に切り終えている。

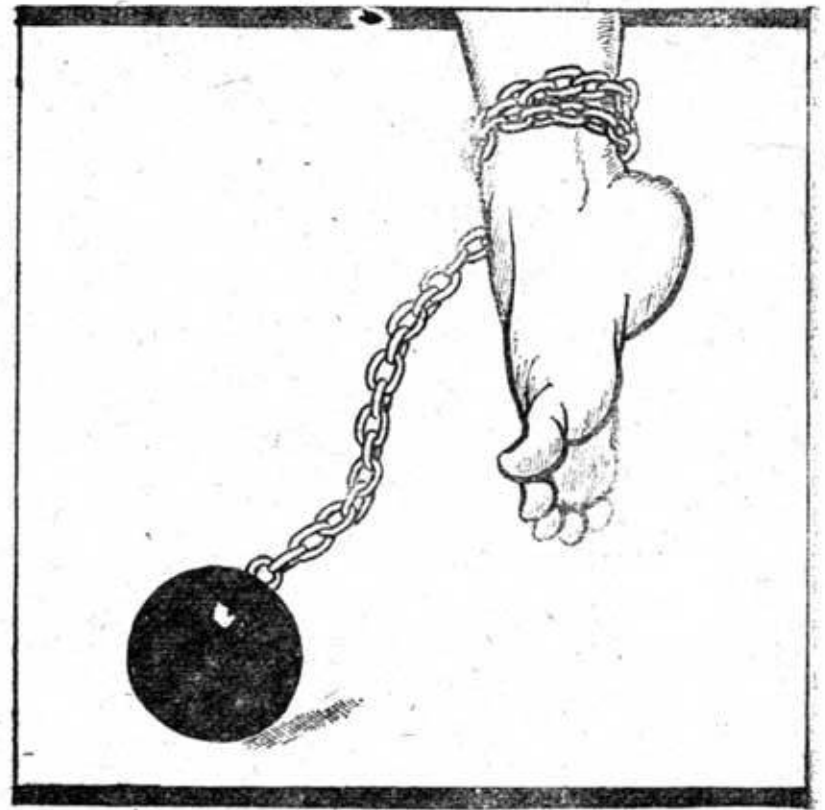
小染は「貴方、お先に」と呟くと自らの刃の上にのしかかる様にして突伏し息絶える。早や右脇まで十分に深く切り終えた芳野は、返えす刀で頸動脈をはねて、小染の上に折り重って息絶えた。

官軍の兵士が乱入したときは、小染と芳野は血まみれとなって見事に果した切腹に、安らかな死に顔を見せていた。

一寸立ち掛けた時に純白のワンピースの裾が持上って白い片腿が見えたので時ならぬ喜びが味わえた。少し後で一緒に墓参に行った時も、そのワンピースの背中中のホックが二つも外れていたもので、肉の薄い、美しい背や肩がかなり覗いて見え悩ましかった。他にも友人が居たので彼を姉さんと喋らせておいて私は後からついて行った。その癖友人仲間でNの死を一番悲しんでいたのは私だった。人間の心の複雑さよ！天国のNも私の非行を寛して呉れることだろう。

Yという友人の姉さんは三年程サナトリウムに行き、五尺三寸、十六貫の素晴らしい身体になって去年戻って来た。ブラウスから剥出しの腕は身体の割に細かったが、肌は滑らかな帯紅肉色で美しかった。話ながら無意識にスカートを捲る癖があつて、酷い時には半分も露出してしまふ太腿は、坐っている故もあるが、太くて樽の様な感じだった。あんなに太い腿を私は今の所ほかに知らない。

Y自身も女性的な所を多分に持った男で、こういう友人に限って私はソドミアを感じることもある。去年の夏会った時にはランニングに真新しい猿股という姿だったので、背の高い細身の肉体を充分に鑑賞した。



長篇MS小説

宇宙のどこかで

△或る無期徒刑囚の告白から▽

佐 治 麻 造

追放奴隷の生活

窄衣の刑をやっと解放された私を女奴隷は橋の下で私を迎えて呉れました。

グッタリした私は砂の上に横たわって、彼女がいろいろ喋るのを聞き乍らウトウトしました。大きく喘ぎますと胸の骨が痛み思わず呟きました。暫く眠った私は少しは元気を取戻して眼を覚まししました。すぐく腹が空いて居ます。

「あら、もう起きたの？お腹空いてるでしょ。餌探しに行きましょうよ。私のごみ箱を教えたげるわ」

私達が橋の下を出た途端、頭上の土手で大勢の足音と、数多くの

鉄鎖が鳴る音が聞えました。見上げますと、看守達に監視された徒刑囚の一群でした。私達の頭上を少し通り過ぎた所で土手から川原に追い下されます。足を踏み込ませ、腰の連鎖に引かれて転げ落ちる囚人達も居ました。男囚女囚それぞれ十名宛ばかりで、男の看守一人と婦人看守二人に罵られ叱られ、そしてビンタを喰い乍ら、順々に手錠と連鎖を解いて貰い、煉瓦色の囚衣の上衣と短い股引を脱いで、はげちよろけの褌一本になり、素肌の上から再び腰に鉄鎖を巻かれて二人宛繋ぎ合わされて行きました。

「砂を取りに来たのね。けど刑務所って、監獄に較べりゃ楽なものね。あんな扱いで済ませて貰えるんだもの。」

私の傍の女奴隷は溜息をついて呟きましたが、向うの方の徒刑囚

達は渾一本の姿で川風に吹かれてうなだれて立ちすくんで居ます。一人の若い女囚が腰に締められた鎖の冷い感触に堪えかねたのでしようか、そっと手の指を腰鎖にかけて工合を直しました。途端に婦人看守がめざとく見付け、革鞭が尻に激しく鳴り、女囚は身をよじって赦しを乞いました。

土手の上にシャベルやモッコ等を積んだ大型トラックが停車し、囚人達は与えられた道具を担いで川の中に追い込まれました。

「さ、早く行きましようよ。」

何の関係も一応はない事はよく分っては居るものの、看守達に発見されるのが何だか恐ろしい私達は、こそそと土手に這い上って裏通りに逃げ込んで漸くホッと致しました。

女奴隷が連れて行って呉れたごみ箱は、制限範囲ギリギリの所にある会社の寮の勝手口にありました。貪り食べた私は肩で口の端を拭い、その大きなごみ箱の所在をしかと頭に刻みつけました。

「これからどうするの？ 私は矢張り橋の下で暮れる迄居るわ。」

看守、殊に婦人看守の制服姿を見ると恐ろしくて堪らない私は、彼女と別れてぶらぶらとほつき乍ら駅に戻りました。土産物店の前で首をかしげて立って居る見おぼえのある若い婦人を見掛けました。旅館の浴衣を着て居ますが、その婦人は一昨日川のふちで男を逮捕した婦人刑事でした。捕えた二人の男女を留置しておいて、この温泉で息抜きして居るのでしょうか。駅の便所で水を飲み頭を冷した私は、人影がないのを幸いに便所の出入口に近い片隅に坐り込みました。久し振りに満腹しましたし、大きな息も、自由に出来ます。窄衣の痛みは全身に残って居ますが昨日の苦しみを思えば天国の様でした。濡れたコンクリートの床をひんやりと尻に感じ乍ら、

痒い鼻をザラザラした壁にこすりつけたりしてボンヤリ過して居ますと、靴音が響いて誰か入って来ました。出入口の隅にうずくまった私の前を通り過ぎた二人連れは、私が顔を挙げた時には既に後姿でした。男女二人のアベックで、黒髪を無造作に後ろで束ね、ピッチリと体に合ったグレイのスーツを着た婦人は、紺の背広の右腕を抱えて居ます。男子用の便所に御婦人が入ったりして、いくら仲が良いと云ってもおかしいなと考えましたが、ハイヒールを床に鳴らして立ち止った婦人が組んだ腕を離して男の肩を押し、私に横を見せて向い合った途端に合点が行きました。男が深くうなだれて居たのも道理で、彼の両手には前で嵌められた手錠が光って居り、上衣の下で打った腰縄が手錠を押えて居るのがチラと見えます。腰縄の後ろから延びた二条の捕縄が上衣の横を少し持ち上げる様にして前に回り、其の端を婦人の左手が握って居ました。

「どうしても我慢できないの？」

白哲の横顔を引締めて婦人が云いました。

「はい。お願いします。」

男はうなだれたまま上眼使いに婦人を見て悲しそうに云って喘ぎました。

「けど、おかしいわねえ。囚人食で下痢するなんて、初めてだわ。ま、仕方ないね。ちょっとお待ち」

護送される容疑者と婦人刑事らしいのですが、そんな場合にハイヒールをはいて居る婦人刑事を私は珍らしく見ました。並んだ板戸の一つをあけて中を見回した彼女は、右肘に吊って持った黒い大きな目のハンドバッグを開きかけましたが、

「あ、そうか」

と呟いて、大きく開いたスーツの胸許に手を差し入れました。細い銀の鎖で首に吊った平たいブローチに結びつけてあった鍵で男の手錠をカチャリカチャリと外してやった婦人刑事は、その鍵をブローチと共に再び丁寧に胸許の中にしまい込み、身を屈めて腰縄をも解いてやりました。男は手首を撫で乍ら待ち遠しそうに足をビクビクさせて居ますが、婦人刑事は手錠をポケットにしまって、

「まだよ。ちょっとしゃがんで……」

今解いた捕縄を男の首に巻きつけて結びました。

「そら、これやるわ」

成人刑事は、ハンドバッグから数枚のチリ紙を出して男に与え、漸く許しを与えました。待ち兼ねた男は首に捕縄をつけたまま飛び込みます。

「戸はあけたままよ。」

縄尻を握った婦人刑事は冷やかに云って、戸の柱に軽くもたれ、中の様子を横眼でチラチラ見乍ら落着いた手つきで煙草に火をつけました。

「未だなの？」

五、六服紫煙を吹いた彼女は、未だ長い吸いさしを床に投げ捨てハイヒールで踏みつけ乍ら急がしました。覗き込まれた男は恥かしそうな低い声で何か云いました。

「早くお済ましよ。誰か入って来たら、私の方が恰好悪いじゃないの。」

婦人刑事の顔が私の方を向きました。細い半月型の眉に大きな黒い眼、赤い唇の下顎はうつむくと丸く微かに二重になって刑事には勿体ない位の美人です。

「おや、あそこに、あんなのが居たのね。気が付かなかったわ。ホラ、上げるよ、お喰べ!!」

彼女が投げってくれたキャラメル粒が七、八米の弧をえがいて私の膝の前の水溜りに落ちました。ガチャガチャと身をもがいて後手の指で探って拾ったキャラメル粒の紙を剥き、再び床に落した粒を今度は口で啣える私の姿を面白そうに眺めた彼女は、コンパクトを取り出して鼻を叩き初めました。入って来た中年の紳士が眼をパチパチさせ乍ら用を足し振り返りつゝ出て行きました。続いてドヤドヤと数人が出たり入ったりし、顔をしかめた婦人刑事は捕縄をぐいぐい引張って鋭く叱りつけます。漸く出て来た男は消え入る様な態度で顔を赤くして恥かしがって居ました。

「おい、詰らんもの見てないで早く行こうぜ。もう汽車が着く頃だよ」

立ち止って見物して居た若い男を仲間がせき立てて連れ去りました。婦人刑事はハッとした様子で小さな腕時計を見やりました。

「お前のお蔭で乗り遅れそうじゃないの!! 早く手をお洗い。」

男は首の縄を引張って、私の横にある手洗場に来て私を見て顔を歪めました。婦人刑事はポケットから取出した手錠をカチャカチャ云わせて男の背後で待ちました。スカートで掩われた彼女の腰から腿にかけての豊かな線が私の眼前二米で焦れたように足踏みし、化粧品の香りが強く漂いました。手を洗い終えた男は一瞬ポケットを探りかけ、そして振り向いて情けなさそうな顔をしました。婦人刑事のきびしい顔をチラと見やった男が上衣の裾の辺りでおずおずと濡れた手をこするかこすらない中に、彼女の左手が縄尻を持ったままさっと延びて男の右手を捕えます。

「腰縄だけで勘弁して頂く訳には行かないんですか？ おとなしくしますから……」

既に鉄環の喰い込んだ右手首のそばへ、左手首を揃え乍ら男は涙ぐんで云いました。

「馬鹿をお云い!! お前はね、業務上過失だから此の位にしてやってるのよ。つべこべ云うと揮一本にして足にも鎖つけてしょっぴいて行くわよ。そら両手を下ろして……」

婦人刑事はボンボン云い乍ら男の上衣の下で再び腰縄を打ち終えて手を洗いました。

「さ、おいで!!」

クシュッと微かに鼻の奥で嗚咽した男の右腕をグイと左手で抱え右腕にハンドバッグをぶら下げた婦人刑事はよろよろする男を叱りつけ乍ら駅の中へ急いだのでした。

男は婦人刑事より十五センチは背が高く、顔が浅黒く引締まった太い眉の好男子だったし、遠くから眺めれば似合の男女の睦まじいアベック姿とも見える彼等の後姿が、腕を組んだまま消えるのを私は便所の床に坐ったまま見送ったのでした。

「食べる物さえあれば追放されてもいいじゃないか。これで手枷が前で、足の鉄丸さえなければ云うことないんだがなあ。」

深夜の駅の軒下で寝そべった私は傍らの女奴隷に呟きました。

「フフフ、それに、縁もゆかりもない人達になぶりものにされなければね。けど未だあんた知らないだろうけど雨が降る日はみじめなものよ。濡れねずみになってごみ箱漁りをするのは……」

突然懐中電灯の光が私達を照らしました。巡回の警官に見られたのです。

「此奴等!!」

警棒が激しく尻に鳴り私達はウツと息を詰めました。

「ノー、痛かったわねえ。けど、こんな事位してもいい筈だわ。私達は、畜生並みなんだものねえ。あのお巡りったらやつかんでるのよ。きつと……」

立ち去る警官の後姿を見上げて彼女は呟きました。

翌朝もいいお天気で、点呼を受けた私達は餌を求めて街に出ました。

「どうしたの？ もっと早く歩けないの？」

「今朝はどうしたのか足首が痛くて痛くて……」

「そう。今日辺りから一週間位が、一番痛むわよ。私もそうだったわ。」

漸く辿り着いた例の会社の寮のごみ箱の前で私達は浅間しいさかいをしてしまいました。

「駄目よ。あんたばかり食べちゃ。もっと体を退けてよ。私が食べれないじゃないの。」

しかし矢張り男の私の方が小ぜり合いに勝ってしまい、彼女は口惜しそうに涙ぐみました。勝手口から小娘が出て来て、面白そうに私達の有様を眺めて居ましたが、やがて持って出たちり取りのごみを、上の蓋をあけて投げ込み。

「お前達、食べるのはいいけど、あとを散らかして行っちゃ駄目だよ。云うことをきかないと取出口の蓋をお前達の手や口じゃ開けられない様にしてしまうからね。」

「ハイ、よく分りましたございます。」

「あとは綺麗にしておきますから、恵んでやって下さいまし」



私達は小ぜり合いを中止して額を地にすりつけてお慈悲を乞いました。小娘が消えると私達は再び取出口を奪い合いましたが、私はやがて満腹して彼女に位置を譲りました。夢中で顔を突込んで探って居た彼女は泣声を上げました。

「もう食べれるものがないじゃないの。此の恩知らず!!」

「御免御免。つい、あんまり美味しいもんだから……未だある筈だ

よ。」
一生懸命に謝りましたが、彼女は怒ってすねました。

「いいわよ。どうせ、あんたなんか、そんな人間なのよ。犬や猫以下よ。あ、そうだわ。今度あんたが窄衣掛けられた時にはもう放つといでやるから!!」

私は何とかきげんを直させようとしたが、

「ああ、腹が立つわ。指が動いたら振り上げてやり度いわ。ついて来ちゃいやよ。」

と、ぶんとやぐれて川の方へ行っていました。仕方なしに駅に戻った私が隅の方でうずくまって居ますと駅前にジープが一台停ってほろの中から四、五人降り立ちました。続いて捕縄で腰を繋ぎ合わされた男女が、追い下されました。私が偶然にもそれぞれが逮捕される現場を見た例の二人でした。女は逮捕された時の浴衣を着て居ますが、男の方は逮捕時に着て居た盗品の服を取上げられたものと見えてピッチリした猿又一枚だけの姿でした。二人共はだしの素足で敷石を踏み、後手錠の身を深々とうなだれ、お互いに顔をそむけ合って人々の視線に晒され乍ら立ちすくみました。女の腰から延びた縄尻を握った婦人刑事は世にも晴やかな顔付で囚人達を追いついて、それを囲んだ数人の私服と一緒に駅の中に入っていきます。

「おい君、席は大丈夫だろうな？」

年配の男が若い男に訊ねました。

「ハイ。駅長に頼んで取ってあります。」

「そうか。じゃ、お嬢さん、私は会議がありますので…。汽車が出る迄お送りし度いんですが、これで失礼します。いや、お手柄でしたなあ。連れて帰るのが遅れた理由は、私の方から適当に連絡しときますから御心配なく。ハハハ…」

年配の刑事は笑い乍ら手を振って立ち去りました。

「けど、御婦人独りで大丈夫かな？」

「大丈夫だよ。心配ならお前、自腹切って一緒に行けよ。ハハハ」

「ホホホ、御心配なく。も一つ手錠持ってますのよ。汽車の中では二人の足を片方宛繋ぎ合せときますわ。」

「へーえ。しかし何分にも殺人犯ですからな。充分気をつけて下さいよ。」

談笑する刑事達を背に、二人の囚人は、唇を噛んで立って居ました。女囚の乱れた髪が額にからんで、彼女はうるさそうに頭を振って身をもだえました。

「可哀想に。多分二人共死刑か終身刑だな。」

私はそう考え乍ら改札口の中に消えて行く彼等を見送ったのでした。

ひる近くになりますと、便意に堪え切れなくなって、川の方へ足を向けました。橋の下で寝転んで居た女奴隷の京子は意外にもきげんを直して居ました。川原の砂を足で掘ってしゃがんだ私に彼女は笑って話し掛けました。

「先刻は、はしたない事云ったりしたりしたわねえ。私も悪かった

わ。」

上眼使いにいたずらっぽく微笑む彼女を、私は思わず抱き締めてやり度くなりましたが、それは叶わぬ事でした。少し離れた川下の方では今日も徒刑囚の男女が腰の辺り迄も水に浸って川底の土砂を浚って居ます。小舟の前後に二人宛の女囚を鎖で繋いで川面をあちこち曳かせて、舟の上に立った婦人看守は容赦ない鞭を、水に濡れた囚人達の背や胸に振って居ました。考え様によっては、彼奴等より今の俺達の方が楽だな等と考えて居ましたが、やがて川原に集められて坐った彼等が配られた食事を頼るのを見て矢張り羨ましくなりました。

其の夜半から降り出した雨は朝になっても止まず、駅前交番での点呼の時は、婦人警官は建物の中から顔だけ覗かせた後、暫く雨に打たれたまま放置されました。

「もう綺麗になっただろ。お行き!!」

雨の降りしきる中を、ごみ箱を漁るのは本当にみじめな思いでした。軒下に身を寄せては追い立てられて、満たされない腹を抱えて漸く橋下の乾いた砂の上に坐り込んだ私達は溜息をつきました。

「雨が降るとね、ごみ箱迄捨てに出て来るのがおっくうなものだから少いのよ。雨上りを待って行くといいわ。」

午後おそく雨が上るや否や川原から這いずり上って餌を求めに行きました。今日は全くついて居ませんでした。

「しめしめ今しがた捨てたばかりよ。」

代る代る頭を出入口に突込んで夢中になって食べて居ますと突然尻を蹴り飛ばされました。市の清掃人が車を奴隷に曳かせてごみ集めにやって来たのでした。

怨めしく見送る私達を尻目に、市の奴隷達がさっさとごみ箱を空にしています。

「悪く思うなよ。こちとらの仕事だからな。」

年取った奴隷が長い鎖で繋がれた両手で、地面にこぼれた野菜の切屑等を拾い集め乍ら私達に低く云いました。

「今日はもう駄目よ。どこに行ってもないわ。大体五日目毎にやって来るのよ。けど勿体ないわねえ。」

力なく曳き摺る鉄丸の重さが一しお骨身にこたえ、私達は悄然と再び戻った川原で川水を腹一杯飲んで砂に寝そべったのでした。

一週間が過ぎて再び窄衣の日が来ました。今にも降り出しそうな空の下で情容赦もなく窄衣を掛けて締めつけられた私は覚悟を決めて駅の軒下で身じろぎもしないで坐り込みました。女奴隷は前回の時と同じくいたわり慰さめて呉れ、私は涙をこぼして嬉しく思ったのでした。

「雨が降るといいこともあるわね。」

沛然と降り出した雨のしぶきで窄衣の革が湿るのを防ごうと私の前に身を寄せて庇って呉れて居た彼女は、少し小降りになると斯う呟いて路上の水溜りに口を寄せました。少し妙な味のする溜り水を口うつしに飲ませた彼女は私の顔を覗き込んで、

「あんた。私がついて居てあげれるのも今日でoshiまいよ。此の次からはあんた独りばっちよ。我慢出来る？」

「我慢出来ないってどう仕様も……ないよ。」

「そりゃうだけど。お慈悲を願っても無駄だろうしねえ。」

ふとした事から転落した彼女でしたが、矢張り育ちの良さを見せ、まるで自分の事の様に私の身を案じて呉れるのです。彼女が自

ら語った様な悪事を働いた女性とは到底考えられませんでした。

女追放奴隷との別れ

翌々日の朝、点呼が済むや、現われた奴隷管理所の係官は無造作に彼女、追放整理番号六号の女奴隷の鼻環にカチリと曳き縄の先の金具を嵌めると、自転車に飛び乗って走り出しました。魂消る悲鳴と鉄丸の音が交錯し、アッと云う間もなく彼女は私から引き離されて曳かれて行きました。追放期間が済んで、御主人様の許に帰る事を許されたのです。残された私は、彼女のために喜びましたが、反面如何しようもない淋しさ心細さが湧き上るのを抑えることは出来ませんでした。もはや語り合う相手もなく、独りぼっちで橋の下に横たわりますと止めどもなく涙が流れました。彼女のお蔭で飢えはどうやら凌げますが、心に大きな洞穴が出来た様な気持でした。彼女が駅の軒下でよく坐り込んで居た場所に尻を下ろし夜空の星を仰ぎ見ますと、彼女のかすれた様な甘い声が聞えて来る様でした。今頃は、御主人様から食物をあてがわれた彼女は、檻に入れて貰って安心して寝て居るだろう、いや永い間責め苛なんだ鉄枷を外して貰った痕を撫でて吐息をついているに違いない、等とあれこれ考えますと懐かしさは一層つのるのです。誰か追放されて来ないかとの淡い期待も毎日外れて、又一週間が過ぎて恐ろしい窄衣の日がやって来ました。薄笑いを唇に浮べ乍ら締め金具を締めつける婦人係官の顔がまるで鬼の顔に見えたことでした。

観念した私は駅の軒下の片隅で身じろぎもせずに飲まず食わずで一昼夜を頑張り通したのですが、朝になって見ると矢張り垂れ流して居ました。どんな罰を食うか知れたものではありませんでした。

死物狂いに口で掃除し舐め取り乍らハッと気付きました。今迄もきつと垂れ流して居たに相違ない、とすれば彼女が黙って舐め取って始末して居て呉れたのです。そう思い至ると矢も楯も堪らなくなつて、窄衣の苦しさもものは、号泣してしまいました。泣き乍ら広場を這いずって駅前交番に辿り着いた私は未だ忍び泣きして居ましたが婦人警官は私の気持に気付く筈もなく、

「朝っぱらから誰かに苛められたの？」

「い、いいえ……」

「そう。じゃ横手に回って待っていい」

窄衣を外して貰って呼吸が楽になった私は、地べたにしがみつく様にして慟哭しましたが、管理所の婦人係官は、

「窄衣取って貰って泣く奴は初めてだわ。」

独りぼっちになりますと、又しても心に浮ぶのは白樺荘のやさしい奥様の面影でした。毎日、ごみ箱漁りの他は朝から夜更け迄、川原に坐つて白樺荘の方を向き、何度も何度も心からのお詫びとお赦しをお願い申上げ続けました。しかし其の頃は奥様は白樺荘にはおいでにならなかったのです。孤独な日は一日一日と過ぎ明日は又あの窄衣を掛けられねばなりません。数えて見れば第五回目の窄衣の日で丁度追放が済む勘定です。食物は兎も角、水だけはあると助かるんだが、何か容れ物でも拾つておこうと思つてキョロキョロし乍ら橋の下から駅の方へ鉄丸を曳き摺りました。滅多な物を拾うと泥棒猫扱いをされるのがおちです。

裏通りには適当なものが見付からず思い切つて商店通りに出ました。通りに出る角に大きな食堂があり、勝手口にはでかいごみ箱が据えてありますが、このごみ箱の蓋は私の手では開かない事はよく

知つて居ます。食べ残し等がどっさり捨ててあるに相違ないごみ箱を横眼で睨んで通り過ぎようとした時、その陰で二人の娘が話して居るのが聞えました。

二人共未だ二十才前のほんの少女で、両方共他の店の給仕らしく淡青色の制服に白いエプロンをして居ました。どうやら一人が片方を叱つて居るらしく激しく頬を打つ音がしました。撲られた方の少女は涙声でしきりに何か詫びて居る様子です。

「分つたね？探し出して元通りにして持つて来て見せてごらん。それからね、今夜から当分の間、裸かでお店の床の上に寝るのよ。若し探し出せなかったら、鞭を当てるからね。」

一人の少女は威丈高に云い捨てると中に入りました。残された一人はごみ箱の蓋に手を掛け溜息をつき、立止つて居た私に気付いて泣き笑いの表情を浮べました。

「フッフ、私が撲られるの見てたの？私ね、ホラ、ずっと川上の感化所に入れられてたのよ。」

彼女が持ち上げて見せたスカートの下の両膝は革枷と革紐で短かく繋ぎ合わされて居ました。

「ここで首尾よく勤めたら一年早く出してやるって云われて来てるのよ。私の他にも五人居るわ。」

彼女は、後手錠の私では如何とも出来ない仕掛の蓋を造作なく開けてごみ箱の中を覗き込みました。

「私達、残り物をあてがわれてるのよ。けど先刻の喰べさはあんまり汚ならしいので捨てたのよ。そしたら班長さんに見付かって油絞られた訳なの。」

あけられたごみ箱から漂う匂いに私にとって堪らない程で思わず

涎れが出そうなのですが、彼女は鼻にしわを寄せて棒切れで掻き回しては顔をしかめて居ました。

「あら、あんた欲しいんだろ。唾を呑み込んでるわ。フッフ、けど駄目よ。固く云われてるの。一かけらだっていけないってさ。可哀想だけど…。私は恵んで上げたいのよ。悪く思わないでね。ああ、もうどこに行ったか分りやしないわ。勝手にするがいいわ、縛るなと鞭で打つなと…。」

彼女はやけくそで呟いて蓋を閉めました。

「私達の他に普通の、つまり自由な娘さん達も五、六人居るのよ。その人達が代る代る私達の班長さんになって、私達をこき使うって訳。朝早くから夜おそく迄、追いまくられてさ、外から鍵の掛かる室に入れられて寝るのよ。あーあ、一遍でいいから、映画見たいなあ。今夜から久し振りに手錠足錠嵌められなきゃならないわ。畜生!! 鞭をいくつ呉れる気かしら? あーあー」

彼女は溜息をついて中に入って行きました。通りに出た途端、私は恰好の容れ物を見付けました。道の真中に放り出してある古い砂糖壺です。プラスチック製で、ふちが欠けて所々ひしゃげて居ますし、これなら拾っても叱られないだろうと周りを盗み見してから口に啣えました。急いで立ち去ろうと顔を上げた途端、三十米程向



うからこちらに歩いて来る奥様の姿を見付けて驚喜しました。啣えた砂糖壺が口から離れて落ちるのにも気付かず、夢中で駆け寄りました。両足の鉄丸の重さのじれったさは舌打ちしたくなる程です。「ああ、びっくりするじゃないの!!」

鉄鎖と鉄丸とそして首の音響器とを鳴らせて足許に身を投げ出した私を見て思わず立ち止った奥様は驚いて小さく叫びました。

「奥様。私が悪うございました。骨身に泌みて、分らせて頂きました。お慈悲ですから……もう……お宥下さいまし……」

「まあ、何かと思ったら三太なのね。おおお、重そうな鉄の玉を二つもつけられて……。鎖の太いこと!! 枷は鉄で打ってあるのね。」

「……」

「もう何日になるかしら。たしか期間は二十日、いや三十日だったかしら。辛いかい? 食べ物はどうしてるの?」

私は唯全身をもだえてひれ伏したまま、お慈悲を乞いました。

「私ね、暫く旅行してたのよ。旦那様の用でね。お前にか可哀想だけど、お前を追放してあるって事すっかり忘れてたわ。忙しくて忙しくて……。大分やせたじゃないの?」

二人、三人と人が寄って来ました。奥様は眉をひそめて居ましたが、やがてキッパリと

「兎も角、決められた期間は罰を受けなきゃ矢張りいけないわ。そりゃ今すぐにでも宥してやる事は出来るけど……。あと少しだろ? 辛抱するのよ。さ、退いて!!」

やさしい中にもきびしさのある奥様は、さっさと立ち去って行きました。

「奥様、お慈悲でございます。お赦下さいまし。お赦し……」

鉄丸を曳きずって泣き乍ら跡を追う私をちらと振り返って眉を寄せた奥様は、折よく通り掛ったタクシーを呼び止めると、足袋とふくらはぎの白さをチラと翻えして乗り込み、車は走り去ってしまいました。

「邪魔だよ。どこかに消えな!!」

通りがかりの若い男に蹴られた私は泣く泣く起き上がりました。落

した壺を思い出して探しましたが見当りませんでした。

奥様にあんなにお願いしたのに、と少し口惜しくなりましたが奴隷の分際は何とも出来ません。駅の軒下にうずくまって、囚われの身の悲哀を嘆き、明日の窄衣を恐れおののいて震えては忍び泣きをするばかりでした。

翌朝になりますと、あたりの様子がいつもとは違う様でした。早くから多勢の駅員達が駅の内外を清掃し、町の人達もいっになく早くから道路の掃除等をし初めたのです。

「こら!! とっとと消えやがれ、此の野郎」

駅員に箒の柄で小突かれて追立てられた私が大分早いとは思いましたが、駅前番交の前で正坐して居ますと婦人警官が欠伸し乍ら出て来ました。早く来過ぎて叱られるのかとおそろるおそろる振仰ぎましたが、彼女は制服のスカートの裾を少し持ち上げて腿の辺りを搔き乍ら、

「今日はね、宮様が御見えになるのよ。二時過ぎの汽車でね。お見苦しいといけないから、お前は今日中、檻に入れとくわ。」

窄衣をギリギリと掛けられた後、交番の中へ追い込まれました。入って左手に鉄格子扉の監房があります。幅一米半程、奥行は三米位の板敷で、鉄丸と鎖鉄を重々しく曳摺って入って来た私を見て、奥の方で壁にもたれて居た一人の男が吃驚して顔を上げました。

「近藤。出ておいで。」

近藤と呼ばれた男は、私と入れ違いにのそのそ立って房を出しました。未だ二十才前の与太者風の少年でした。

「何でえ。ちょっとスケのお尻を撫でただけじゃねえかよ。」

鉄格子扉を音高く閉めて施錠した婦人警官は、虚勢を張って悪態

を吐く少年の頬に激しくピンタをくれてやってから、手早く両手に手錠を嵌め、捕縄を結んで引き立てて行ってしまいました。水一滴すら与えられないで、そのまま放置された私は、鉄格子扉に頬を押し当て横手の壁にもたれて、舌を長く出して小刻みに喘ぎ続け乍ら永い時間を待ちます。見馴れぬ若い婦人警官が机に向って何かペンを走らせて居るのが、鉄格子越しに見えますが哀願した所で所詮無駄なこと、悪くすると余計な痛い目を見るのが落ちです。突然駅の方が騒然とし、そして静かになり、婦人警官は立ち上って制服の居ずまいを正して交番の前に直立しました。宮様とやらがお着きになったのです。やがて大きな黒塗りの高級車が音もなく交番の前をゆっくりと通り過ぎました。

車の中で高貴な顔立ちの二人の男女がにこやかに微笑んで居るのがチラッと見えました。私が檻から漸く出して貰った時は既にとつぷりと暗くなって居ました。駅の軒下のいつもの場所に這いずった私は、今朝たつぷりと撒かれた打水が敷石の凹みにまだ溜って居るのを夢中になって啜りました。

追 放 解 除

漸く追放期間も終りに近ずきました。明日は又あの穿衣で苦しまねばなりません。明後日には白樺荘の奥様の許に帰れるのだと思いますと流石に嬉しくなりました。夜になって早目に駅前に戻った私が軒下で坐って居ますと汽車が着いて多勢の人々が溢れて出て来しました。珍らしくタクシーの乗場に行列が出来て、端が私の近くに迄延びて来ました。邪魔物にされてどやされるかも知れませんが、明日は食物を口には出来ませんから、もう少しごみ箱を漁って来よ

うかと鎖を鳴らした途端、

「あら、お前は!!」

頭上近くで浴びせられた婦人の声に思わず尻を再び地について見上げました。淡い外灯に照らされた和服姿のその婦人は社長の御嬢様でした。私が殺した事にされてしまった故社長の令嬢、そして私が裁きを受けた法廷で決定的な証言をされたあの御嬢様が、女盛りの臍たけた姿で眼を丸くして見下ろして居たのです。

「矢張りお前なのね。私を覚えてる?」

どうして忘れる事が出来よう、思わず怨めしく見上げて、そして声もなくうなだれた私に、彼女の張りのある甘い声が降って来ました。

「どこかで見た様な男だと思ってたのよ。やっと思い出したわ。ずい分変り果てた姿だけど、どこかしら残ってるわね。奴隷にして貰ったのね。懲役辛かったかい? けど今どうしたの? 独りで鉄丸つけられてウロウロしてる様子だけど…」

太い男の声が、

「今、追放されてるのさ。何かヘマをやらかしたんだろ」

その男の声にも微かに聞きおぼえがありました。其の時は思い出せませんでした。

「早くおいでよ。僕並んでるんだよ。」

幼い男の子の声がしました。彼女は夫と共に愛児を連れて此の温泉町にやって来たのです。

「ホホホ、もう昔の事は赦して上げてるのよ。早く御主人様の所に帰らせて貰いなさいな。ほら、お腹へってるでしょ。これ、お喰べ」

深く深くうなだれた私の膝の上に、新しいキャラメル箱の箱が一つ投げ与えられ、彼女は小走りに立ち去って行きました。やがて言い様のない口惜しさが微かな恥しさと共に胸中に湧き上って来て涙が頬を流れました。いくら泣いたとて仕方ありませんが、彼女の誤解を解くすべもないのが悲しくて残念で堪りませんでした。昔を思い永い間泣いて居ますと人影も少なく夜も更けて女の声が間近で聞えました。

「フッフ、泣いてるじゃないの。可哀想に」

「いくら何でもこんな風にだけはなり度くないわね。ね、少し苛めてやろうっと」

二人連れは夜の女らしく夜目にもどぎつい化粧をして安香水の匂いをプンプンさせて居ます。私達追放奴隷にとっては大の苦手の連中でした。先刻お嬢様が恵んで下さったキャラメル箱を無意識の中に脚の間に隠し乍ら哀願のまなざしで彼女達を見上げます。

カクテルドレスの胸を大きく開いた女が、いきなり煙草の火を私の胸に押しつけました。身をよじる私を低く嘲笑して今度は靴先で執拗に、そして巧妙に刺戟を与えます。男を知りつくした彼女達になぶられた私は脂汗を流して呻きました。人目がない所で捕まったら、とてもこんな事では済みませんが、人通りが絶えず、交番も近くにある有難さで、彼女達は私の顔に唾を吐きつけて笑い合っ立ち去りました。

漸くなぶり物から解放された私は、唇と舌と歯とで苦心さんたんし乍らキャラメル箱をあけて貪り初めました。両手は疾うに棒の様に硬張り切って居て指先は全然動かないのでした。夢中になつてしゃぶり続けて居ますと、本当に突然思い出しました。先刻お嬢

様と連れ立って居た男、即ちお嬢様の良人のことです。彼は、故社長の会社に於ける嘗ての同僚だったのです。確か芦原とか云った。名は勇二郎とか何とか云う名だった。女好きのするハンサムだったが、ねちねちした男で私の事をいつも内心そねんで居やがったが……昔の事、刑を受ける前の事が走馬灯の様に再び思い浮んで来て、私の胸は形り裂ける様な思いでした。みじめさに堪らなくなつて思わず身動きをしますと、非情な鉄枷と鉄鎖がガチャリと鳴って嘲笑しました。

、衣の一昼夜が過ぎると、待ちに待った朝が来しました。

「最后なんだから穿衣のままで管理所迄走らせてやるわ。」

管理所の婦人係官は冷たく云いましたが、流石に鼻繩はつけないで自転車に跨がって、私の尻に鞭を当てました。尻から太腿にかけて無数に付いた鞭痕が裂けて血が流れましたが、車上の婦人係官は容赦なく鞭を振り続け、私は倒れつまるびつ、半死半生の状態で管理所の門の中に倒れ込んだのでした。漸く弛められ、そして除かれた穿衣の蘇生の思いを感じた途端、鞭痕に薬剤を塗りたくられて喚いて地べたを転げ回りました。太い針で痛い注射を受け一室に追いつまれました。追放を受ける時、鉄枷を鉄で打込まれた室です。

「さ、外してやるわよ。じっとしてないと大怪我するからね。いいかい」

高速回転する電動工具で、鉄が切断されて行きます。最初に首環が、次に足枷が、そして最後に手枷が私の体から外れました。両腕は後手になったまま硬直した様です。

「枷をよく磨いておくのよ。お世話になったんだろ。」

婦人係官は云い捨てて立去りました。

漸くの思いで前に回した両手首は見るも無残な枷の痕です。重い鉄丸を三十日間曳き摺つた両足首はもっとひどい有様でした。ガラシとした室の中で長い間ボンヤリとうずくまったままだった私は漸く気を取り直して枷や鎖や鉄丸を磨き初めました。手は殆んど云う事をきかない状態ですが、兎も角命じられた事はやらねばなりません。三十日間、我が身に鉄で打ち込まれて居た鉄枷を床から持ち上げて見ますと、それを外して貰った有難さが泌々と感じられました。鞭を堪能する迄当てられた尻や腿の後ろ側が火の付いた様に痛みますので膝をついて尻を浮かせた姿勢で一生懸命になって硬張った手と指で鎖錠を磨き上げます。三十日の間、屋外の雨風に当たった鎖や枷には錆が浮いて居て中々除れませんでした。それにしてもずい分長い間放置され、正午もとくに過ぎて鎖錠磨きも済みましたが誰も来ません。室の床に積まれた枷や鎖の類を眺め、飢と渴きを忍び乍ら待つて居ますと、漸く婦人係官がやって来しました。

「今お見えになったから連れて帰って貰うのよ。おいで。あ、それからね、お前の刑は懲役三年が追加されたわ。」

生地獄の様な監獄に又も三年もブチ込まれると云うのに、その決定と云い渡しはあとにも先にもこれきりなのでした。

事務室の前でおすみさんが手錠を持って待つて居ました。

「まあ、凄いい枷の痕ねえ。手錠嵌めるの可哀想な位だわ。さ、手を出して」

おすみさんに手錠を嵌めて頂いた私は本当にホッと致しました。

「足錠は勘忍して上げる。本当はね、重いので持つて来なかったの。

この『錠』は流石にいいわね。一カ月放つといつてもビクともしてないわ。」

彼女は覗き込み乍ら云いました。

「辛かっただろ。ちっとは骨身に泌みたかい？」

「ハイ」

「何だかフラフラしてるわね。どうしたの？」

「ハイ。昨日から何も食べて居りませんので……」

「フーン。じゃ帰ろうね。おいで」

私は空腹で倒れそうでしたが鉄丸のない身は軽々として、いそいそと鼻繩を曳かれて白樺荘に帰ったのでした。

「けど三年も刑が延びて可哀想ね。一日も早く自由になり度いことだろうにねえ。」

奥様は憐れんで下さいましたが、詮方ない事でした。

「食物や水は貰ったんだね。じやすぐ仕事をおし。大分溜ってるわよ。」

「ハイ」

ひれ伏していた体を起して立上りかけますと、

「ホホホうそよ。いくら何でも可哀想なものね、今日は休ませて上げる。明日から一生懸命働かなきゃ駄目よ。さ、体を洗って着物を着て。アラ未だ手錠外して貰ってないのね。」

革猿又の錠を掛けられ、上衣を着せて頂いた私は懐かしい物置部屋に鼻環を繋かれ、嬉し涙をポロポロこぼし乍ら手足を伸ばして天国の様な眠りについたのでした。

(再び)旅館にて

故社長のお嬢様の一家即ち彼女とその良人と坊ちゃんの三人が白樺荘に泊つて居られたのは意外でした。お爺さんや女中達では隅々



迄手が回らないで大分荒れて居る庭を念入りに掃除して居ますと、三人揃って散歩に出て来られ見付けられました。

「あらまあ、又会っちゃったわ。お前、この家の奴隷だったの？もう赦して貰ったの？」

お嬢様に聲を掛けられて私も叶驚しました。

「おい、お前。俺を憶えてるか？え？」

彼女の良人勇二郎の太い声がしました。

「……………」

「憶えてるかときいているんだ。どうなんだ。どうなんだ？」

呶鳴られた私は

「ハ、ハイ。あなたは…いえ旦那様は…芦原…様でございます。」

「フ、フ、フ、憶えてたな。いかにも芦原勇二郎、今じゃ姓が変わって菊小路勇二郎さ。この由美の養子になったんで

な。ハハハ。で奴隷の気分はどうだい？鎖に繋がれて暮す境涯も気楽でいいだろう？」

私は唇を噛みました。せめて睨みつけてやり度いと思いますが、お客様の顔を見るのは奥様から禁じられております。

「しかし、お前もずい分悪党だったけど、おとなしくなったなあ。見ろよ、きちんと地べたに坐つてら」

彼は矢庭に庭下駄の足を上げて私を蹴り倒しました。

「あら、あなたおよしなさいよ。はしたない真似をなさるのは。けど此の家はずい分取扱いが寛やかなのね。ま、何でもいいわ。お前、おとなしく罪の償いをおしよ。」

勇二郎はいきなり唾を私の頭に吐きました。

「フ、フ、フ、うまく命中したな。此奴のツルツルの頭を見るとムカムカして何かいたずらしたくなるよ。」

彼等は楽しげに立ち去り、私は手の甲で眼をこすって起き上りました。しかし乍ら、此の時あの様に幸福そうにして居た彼女、菊小路由美が何年か先であの様な非運に見舞われ、そして思いも寄らない姿で私と再会する破目になろうとは露だに思わぬ事でした。

或る日の夕方、妻らしい婦人にいたわれる様に伴われて、四十位のやつれた男がやって来て二人で泊りました。帽子を脱いだ彼の頭は坊主刈りでしたし、女中達の話によれば彼は其の日刑務所を出て来た男なのでした。彼等夫婦は四日程泊って、受刑生活に痛められた男の体を癒しましたが、私はあんま等させられ乍ら其の男の話を聞く事が出来ました。又、或る日ふらりと独りでやって来た老人の口からは、私が生れる前の事だった泰平洋戦争の時の話をつぶさに聞く事が出来ました。そして又、数奇な運命にその半生をもてあそばされ傷ついた心身を湯治に養う初老の男の話をも知る事が出来ました。それ等の話に就いては、さきに少し触れた元スチュワードスの女奴隷の話と一緒に後で一つづつ申上げたいと思います。彼等の話を聞きますと非運に哭く人間は私独りだけではない事がよく分り、少しは諦めもついた様な気持が致しました。

それはさておき、私が追放を赦されて白樺荘の奥様は許に帰ってから三カ月ばかり経った或る日、奥様からお払い箱を云い渡されたのです。

「もう、お前もここに来てから一年以上ね。いろいろ御苦労だったわ。今度ね、他の所で働いて貰うことにしたの。急だけど今から連れて行って上げるわ。」

私は眼の前が昏くなりました。

「何か：何かお氣は召さない事がございましたのでしょうか？お慈

悲です。お傍においてやって下さいまし……」

私は合掌して額を地にすりつけて哀願しました。(C)

「ホホホ：お前は何も落度はないのよ。追放の罰を受けてからは本当に神妙によく精出したわね。私もね、いつ迄も置いて上げたいのよ。けどね、こんなこと云っちゃいけないんだけど、実は旦那様が今度国会に打って出られるの。解散はもうすぐらしいわ。それでこの半年ばかりは、私もいろいろ奔走してるのよ。そう云う訳だからね、お前を或る所に差上げて力になって頂くという事なのよ、分った？」

私はガックリと頭を垂れて鳴咽を堪えました。

「お前の所有者の名義は、今迄通り私なのよ。」

希望が少し甦えりましたが

「そして時期を見て切替えるのよ。ま、兎も角お前とも今日でお別れと云う訳ね。向うに行ったら旦那様の為にしっかり精出してよ。お願いするわ。」

嘗て死刑を宣告を言い渡された時と同様のショックでした。暫く茫然として居ましたが、私はやがて地面にしがみついて慟哭しました。奥様はそんな私の有様を深いまなざしで見つめて居られた様でしたが、とうとう何もおっしゃっては下さらず、お考えも変わらなかったのは勿論のことでした。奥様にとっては、私も憐れんでやり度いでしょうが、何よりも大切な旦那様の為なのですから致し方ないことです。奥様に促がされて、此の白樺荘の人々全部にお別れの挨拶をして回りました。やさしくして呉れた人達の時は勿論のこと辛く当たった人々の前でひれ伏す時にも涙が止め度なくこぼれ落ちました。

「これで皆に済んだわね。じゃ、可哀想だけど、これ……」

奥様がその柔い手で痛くない様に静かに嵌めて下さる手錠足錠の味を噛みしめて味わいました。

「さ、行きましょう」

鼻環にカチリと曳縄の金具がついて私はよろめき乍ら奥様に曳かれて下町の方に連れて行かれたのでした。連れて行かれた所は、ずっと川下の方のお邸で、その附近では群を抜いて大きな構えの家でした。

「ちよっと待っという」

奥様は、通用門を入った所の立木に私の鼻縄を繋いで家の中に入って行きました。手入れの行届いた庭や、少し成金趣味の門の構え、そして深い木立ち越しに銅瓦がくすんで居る宏壮な建物等を眺め乍ら、白い砂利石の上に正坐してずい分待たされました。漸くのこと、よく肥えた婦人が奥様と一緒に、庭道の曲り角に姿を見せて、

「ああ、あれね。じゃ折角だから貰うときですよ。労働者は一人でも多く欲しいのよ。けど名儀の書替えは一段落してからにした方がいいねえ。」

「ええ、それはもう、よく分って居ますわ。何分よろしくお願い致します。何しろお宅様のお力添えがないことには……」

「フ、フ、フ、そんなこともないだろうけどね。もう主人が帰って来ると思うわ。待って会って行かない？」

「そうですわねえ。ではそうさせて頂きますわ。」

遠くの方で立止って居た二人の婦人は、そのまま踵を返して立ち去り、あたりは再びシンと静まりました。やがて門の外に足音が聞

え微かな呼鈴の音がして現われた女中さんが通用門を開きました。やって来たのは水色の事務服をブラウスの上に着た若い娘さんでした。

「お電話があつたので来たんですけど……。又一匹お買いになったんですってね。ア、これね。」

娘さんは私の方を顎でしゃくり乍ら云いました。

「じゃ、連れて帰るわね。おいで。」

私の鼻縄を立木から解いた娘さんは縄を短く握ってグイッと引張りました。鼻縄を曳かれればどう仕様もありません。あのお優しいかた白樺荘の奥様ともこれでお別れなのです。鼻縄を曳かれるままによろよと門を潜り乍らホロリと涙が流れました。連れて行かれた所はすぐ近くで、ブロックの塀に囲まれた広い敷地のあちこちに倉庫の様な工場の様な建物が幾棟か立ち並び、事務所の前を初め所々には土建用材が積んであります。敷地の奥の方は、崖に面して居て、崖の上には今出て来たお邸の豊と木立ちが見えて居ました。

「連れて来たわよう」

女事務員が事務所の硝子戸を少し開いて叫びますと赫ら顔のガツシリした男がのっそりと出て来ました。

「こら、立て!!」

男は私の頭の先から足の先迄、ジロリと見ると次は後を向かせます。

「割合にいい体をしてるでしょ。これなら、少しは役に立つと思うわ。」

女事務員が鼻縄を握ったまま、赤い唇の間から白い歯をチラと見せて横合いから云いました。

「ウン。まああの奴だな。えーと番号はと……。あ、鍛冶屋は居るだろうな？」

「ええ。居る筈よ。番号は私が刷るわ。」

塗料と道具を持ち出して来た女事務員は、中から出て来た同僚の娘さんと一緒に、私の背、胸、そして両方の尻に番号を刷り込みました。

「お前の番号は丁度三十だよ。よく覚えておおき、あ、主任さん、これのね、名儀書替えは少し遅れるんだって。うちの札つけとく？」

「つけときゃいいじゃないか。名儀なんかどうでもいいやな。早いとこ始末つけて今日は、そこいらを掃除でもさせときな。こら、此の野郎、キリキリ働きやがれ。怠けやがると承知しねえぞ」

いきなり蹴倒された私は、彼がいつの間にか手にした革鞭の雨を全身に浴びて悲鳴をあげました。衣服の上からとは云え、男の鞭はこたえます。

「ヒーツ。よ、よく……分りましたでございます。」

「分ったら来るのよ。」

情容赦もなく鼻繩を引張られて工場の棟に連れて行かれました。

天井の高いガランとした感じの工場の片隅では二、三人の工員風の男がのんびりと腰を下ろして煙草を吹かして居ます。薄汚い感じの機械類があちこちに据えてあって簡単な金属加工なら大抵間に合うと云う程度の設備でした。

「あら、あんた達サボってたら駄目じゃないの。今に現場からヤイヤイ云われるわよ。さ、これに鎖をつけてやってよ。」

「又一匹来たのかい。どっこいしょ。」

立ち上った一人の男が傍を通り抜け乍ら女事務員の胸の辺りを素

早く撫でました。

「いやーん。好かんわ。」

私の縄尻を握った娘さんが身をくねらせて嬌声をあげました。

「おい。えーと、三十号だな。ちよっと来い。」

男に呟りつけられた私は、工場の隅の物入れの所に引張って行かれて、男が顎で示した鎖や鉄枷の類を手錠の嵌まった両手に持たされて鍛冶場に運びました。

「お圭ちゃん、はずしてやれよ。」

年かさの男が鉄を火の中に投げ込み乍ら云いました。

「あら、そうね。私貰った鍵どこへやったかしら？」

私をお邸から連れて来た女事務員は、事務服のあちこちを探した末、二個の鍵をつまみ出しました。

「えーと、こっちはあの錠の分ね。そら、手を出して……」

彼女は私の体に指先が触れない様に気を付け乍ら両手の手錠を外して呉れました。足錠は自分で外しました。

「着物も脱ぐのよ。奴隷の癖に生意気だわ、人並みに着物なんか着せて貰ったりして……。これからは揮一本だって駄目なんだから。」

白樺荘の奥様のお慈悲が籠った古着を脱ぎ捨て乍ら私は懸命に涙をこらえました。

「どれ、鉄も焼けた様だな。こら、この鉄床の傍に来い!!」

先ず足枷を嵌められました。太い少し錆びた鉄鎖の両端の鉄の環を足首にあてがわれて蝶番がガタリと閉まり、合わせ目の孔に焼けた鉄が通されて鉄床の上で大きなハンマーで打ち込まれます。追放の罰を受けた時も枷を鉄で打ち込まれたのですが、其の時使用された電動鉄蹄工具の様な訳には行きません。ハンマーの一打ち毎に鉄

枷が足首の骨に響いて痛くて堪りませんでした。二本の鉄鋲で右足首に嵌め終えられると左足首に、そして次には腰鎖も鉄留めです。両足首を繋ぐ鎖の中央についた別の鎖の他端に其の中央を結合された腰鎖が腰骨の上で思い切り締めつけられ、腰の後ろで金具で留められ、更に金具にも鉄鋲が打ち込まれました。

鉄床を背にして鎖を鳴らしてしゃがみ、腰鎖の金具を鉄床の上にあてがって鋲とハンマーを待って居ますと何とも云えないみじめな気持ちでした。真赤に焼けた鉄鋲の熱が打ち込み終えてからじわじわと金具を介して皮膚に感じられて来ます。

「あと首環だけね。でもうまく嵌められたわね。やけども怪我もさせないで……」

「ああ、此の前の野郎かい。あの野郎が体をくねらせるもんだから手許が狂っちゃわあな。此奴は割と神妙だよ。」

次第に増して来る腰の後ろの金具の熱さに私は思わず呻いて手を後ろに回し、少しでも金具を肌から離そうとしました。

「ヒー、あ、あつつつ……」

腰鎖を腹部に深く喰い込ませ、両手を後ろに回して身もだえを始めた私を見て皆は大声で嘲笑うのでした。

「ハ、ハ、ハ、もう冷めたろ。な、お情深いもんだろ、お灸を据えてやったんだからな。腰の凝りが吹飛んだろ、ホラ、次は首だよ。肘をついて横に寝ろ。そうそう」

首環はいろいろな大きさの物を二、三試された末、一番ぴったり合うのを嵌められました。鉄床を背にして鍛冶場の床に横向きに寝て、首の後ろで鉄鋲を打ち込まれるのです。ハンマーが耳の傍で空を切り、激しい音と振動が頭に響いて、恰かも鉄を生身に打込まれ

る様な気持ちでした。鉄の札も首の後ろで首環に鉄留めされました。「そら、これでお終い。立て!!」

頭を蹴られて立ち上った私は地下足袋の古いのを一足与えられました。足首の所は切取って極く浅くしてあります。

「御主人様のお慈悲だ。足を怪我しねえ様にこれを穿け。但し一足だけだ。なくしたり穿きつぶしたらはだしだぞ。貴様今迄何かはかして貰ってたらしいが、見るてえと靴底みたいな足の裏をしてやるじゃねえか。お縄を頂戴してから長いんだな。まあ、いいや。御定法だからはかせてやらあ。合うかどうか知らねえぞ。足の方を合わせるんだな。」

少し小さ目でしたが致方ありません。

「はいたか。そら、これは貴様の手錠だ。嵌められて居ない時は腰鎖の左側に吊っとくんだぞ。」

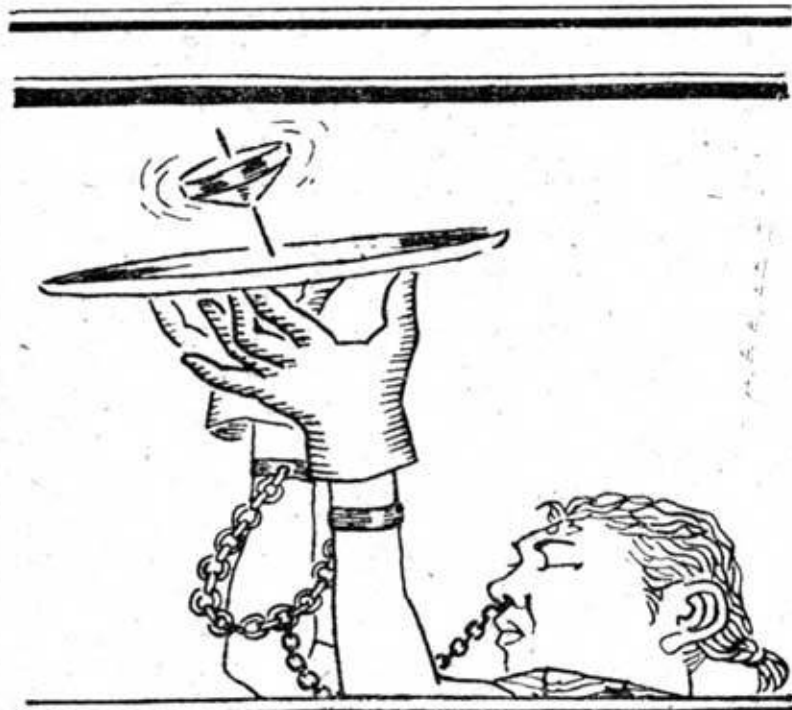
渡された手錠は二個のU字式の環を短い鎖で繋いだ旧式のもので少し錆びて居ましたが、ずっしりと重量感がありました。

女事務員の指図を受けて其の日は敷地内を掃除して過しました。

足の鎖は約六十センチもありますし、腰に吊った鎖も充分長いので動き易いことは動き易いのですが、何分にも鎖の太さは驚く程で少し急な動きをしますと、鎖の重さに振回される感じでした。日が暮れて、約二十名程の奴隷達が作業から帰って来ました。全部屈強の男ばかり、一日の労役に疲れ果てた様子で重い足鎖に両足を引摺る様にして鞭に追われて居ます。

「あ、帰って来たわ。手錠掛けたげるからお出し。」

女事務員に重い手錠を前で両手にガッチリと嵌められて、奴隷達を追って帰った男の手に引き渡されました。



〔奴隸国探検〕

サルジニア探訪記

(第五回)

阿留品 又 怒

やがて鉄の扉は重々しく開けられ、僕達は警戒のため銃を持った兵士たちの敬礼を受けながらその中へ入った。

中には更にもう一つ高いコンクリートの塀があった。ナハール君の説明では、外側の塀はサルジニア国の兵士が守り、特別の者以外は絶対に中へ入ることも外へ出ることも許されないのだとのことだった。そして中の塀は男の奴隸と女の奴隸が収容される二つの棟があり、その間にはまた高いコンクリートの塀がめぐらせてあるとのことだった。従って同

じ塀に囲まれておりながら、外側の兵士と、中の男奴隸と、そして女奴隸とは、全く違った世界で生きるように完全に交渉は断たれており、彼らが入り出す時だけが、わずかにその姿を介間見ることの出来る機会だというのである。

僕たちの馬車は女奴隸用の矯正所の扉の前で停った。

そしてその巨大な鉄の扉が重々しく開かれ、ナハール君は容赦なく馬車を踏み入れた。

そこで僕が見たのはちょっとした広場だった。それは砂地の多いサルジニアには珍らしい小石が散らばった凹凸の激しい地面で、その上を六人曳きの挽車が二台と、立ち馬にされ、鞍を背に負った女奴隸が五人、それぞれ荷物や女監督を載せて訓練にはげんでいた。鞭のうなりと鋭い叱声……悲鳴がないのは、それら女奴隸が全部轡をはめられているからと分った。

「ここに散らばっている小石は輸入品なんだよ」

ナハール君は女監督たちの目礼を顎で返し
ながら僕に云った。

「女人馬の足の裏を鍊えるには、なめらかな
床や砂地では駄目だから、わざわざ角の toga
った小石を運んできたのだよ」

馬車は第二の鉄の扉まできた。扉が開くと
同時に、僕は女体の絨毬を認めた。かの女ら
はいろとりどりの絹の水着をつけられ、両
手、両足を枷と鎖で壁に固定され、廊下の床
すれすれのところに吊り下げられていた。

ナハール君は靴のまま女体絨毬の腹のあた
りを踏みしめた。固い踵が柔らかい腹を非道
く凹ませ、女体絨毬の顔は苦痛にゆがんだ。
しかし悲鳴やうめきは聞かれなかった。

「こいつらの舌は全部切つてあるから、どん
なに暴れたって一言も云いはしないよ」

ナハール君は乱暴に歩きながら云った。

僕はグレタ医師と先を譲っていたが、男尊
女卑のこの国の習慣に従い、先に足を踏み入
れることにした。

女体絨毬の踏み心地は素晴らしいものだっ
た。どのような練達の職人が腕によりをかけ
て織ったとしても、どのような高価な材料を
使ったとしても、それ程の柔軟な感触は得ら
れないであろう。

かの女たちがぎっしりと、隙間もないほど
に並べられているので、その身体が宙に浮い
ているにもかかわらず、僕の足許がゆれるよ
うなことはなかった。

僕たちが女体絨毬を渡りおえ、立派な扉の
ついた応接室へ入ると、矯正所々長と名乗る
皮の背広を着た、タイトスカートの中年の女
が現われ、膝まづいた。

断わるまでもなく、僕たちが応接室で腰を
下ろしたのは女体安楽椅子であった。かの女
たちは矯正所へ比較的軽い罪で送られてきた
のであり、ナハール君が眼を楽しませるため
にやってくる時にのみ利用されるべく飼われ
ているとのことだった。

「グレタ医師が実験向の奴隷を五匹必要だと
云つておられるから手頃なのを探すべく案内
してくれい」

女所長は恭々しく一礼して、応接室の外部
になにか合図した。すると這い馬にされた女
奴隷が鎖を曳きずりながら三人あらわれた。

僕たちはそれにまたがり、女所長の後に従
った。

頑丈な鉄格子が開けられると、丁度拘置所
と同じような両側の壁に鉄の扉の見られるコ
ンクリートの廊下が続いていた。

最初の扉が開けられ、女所長は説明した。

「吊しの部屋でございます」

そこにはまるでソーセージのように、親指
吊りにされた女奴隷が五、人天井からぶら下
げられうめいていた。かの女たちの腰にはゴ
ムのパンティが穿かされていた。

「矯正所へ送られてきた奴隷は必ずはじめに
五十時間、こうして吊り下げられるのでござ
います」

女所長は、丁度肉屋が鉤に吊り下げられて
肉切れを扱うように、女奴隷の身体を棒の先
で小突いてゆれ動かした。

女奴隷はもう身動きする力もないらしく、
されるままに、ぶらんぶらんとゆれ動いてい
た。ゴムのパンティもいささかならぬ排泄物
にふくらんでいた。

グレタ医師は女人馬の上から冷静に観察し
ていたが、直ぐ二人の女奴隷を指示した。

「実験に使っていただくなんて幸運な奴だ」

女所長はつぶやくように云うと、部屋の間
に控えていた女監督に吊り下げを中止するよ
う命令した。

グレタ医師に指さされた女奴隷は、二人共
床に下ろされてもぐったりしてしまっていた
が、太股に鞭を受けてやっと思いで膝まづ

いた。

「ありがとうございます。ありがとうございます」

かの女たちは頭を幾度も下げ、しびれてしまった両手をだらりと前にぶら下げ、切られてしまった舌で言葉にもならぬ言葉でお礼をぶつぶつ云った。いや云ったというよりそれは呼吸をしたといった方が適切であるかも知らない。

かの女たちの親指からは革の紐が外され、直ぐ綱鉄の首枷、手枷、足枷がまとわせられ、それらを太い鎖で連結されてしまった。

「あと三匹でございますね」

女所長の言葉にグレタ医師は軽くなづいた。

次の部屋では鉄砲手錠にされた女奴隷たちが、三角形の鉄材を並べた床に壁を向いて座らされていた。

よく見ると、かの女たちは各々その背にジャッキのような小さい器具を革紐で背負わされておられ、そのジャッキがおのの差をもつて鉄砲手錠の鎖を押し上げていた。



「身動きしたら、このジャッキは一センチ宛上げられることになっております」

女所長は説明した。そして一人の女奴隷を指さしながら言葉を続けた。

「この奴隷めは、こらえ性のないやつと見え

ます。ジャッキがこのように押し上げられ、肩は脱臼寸前にございます」

たしかにその奴隷は無残に持ち上げられたジャッキのゆえに、鎖が引っ張られ、腕がねじ回げられ、背にはいたいたしい皺が寄っていた。そして上から覗き込んだところでは、その胸や腹は、はち切れそうにびんびんに張っており、針でもつついたら、たちまちピーとさけてしまうかと思われるほどだった。

しかし、そこにはグレタ医師の意にかなった女奴隷はいなかった。

そうして僕たちはエビ責めの部屋、逆エビの部屋と見て歩いたがグレタ医師は、その中から一人しか選ばなかった。かの女も舌を切りとられていくらしく、呼吸のような、言葉にならぬ言葉でお礼を云わされ、首枷と手枷と足枷に連結された。

次の部屋は抜歯の部屋だった。

それは歯科医の治療室とよく似ており、部

屋の中央に鉄と皮でつくった椅子が置いてあり、その横には歯科医の使うのと同じようなペンチや鋏や針があり、その前にはグライダーやモーターが置いてあった。

ただ歯科医と違うところは、椅子の足首、手首、胴、首、額のあたるところに、女奴隷を固定するための皮バンドがとりつけられ、強制的に口を開かせるための器具と鎖がたれ下っていることであつた。

そして現場の空気をのみ込ませ、恐怖を心の中に滲透させるため、部屋の間隔には腰を折り曲げねばならぬような小さい鉄の檻がしつらえられ、次の治療を受ける患者、いや女奴隷が、おのおのの檻にうずくまりながら五人、こちらをおそろおそろ眺めていることだつた。

一人が檻から引き出され、三人の女監督によつて、またたく間に椅子に固定されてしまった。

そして器具と鎖に引かれて口が強制的に開かせられた。

モーターが唸りグライダーが回転する。歯を削る気味の悪い、歯の浮くような音。

「もちろん麻酔剤は使用しないのであります、抜歯の苦痛を長びかせるために、ああし

てグライダーで歯を削るのです。」

女所長は僕たちに説明した。

「グライダーで歯を抜き易い形にするといふこともありますが、あの音と響きは奴隷どもの心を、ちぢみ上らせるのに効果があります。矯正所に送られてきた奴隷は、その且て犯した罪により、必ずこの抜歯の部屋を通らねばなりません。」

僕は恐怖に顫えおののきながら、同輩の苦痛を眺めている檻の中の女奴隷たちを見た。

その時グレッタ医師がいった。

「あとの二匹は、これとこれが良いわ」

瞬間、指さされた檻の中の女奴隷の表情に喜びがみなぎった。

実験用のモルモットの代りをつとめさせられるとしても、やがて間もなく自分の身にふりかかるであろう抜歯の拷問の火の粉をはらいのけることができたのである。

直ぐそれらの女奴隷は檻から引き出され、首枷、手枷、足枷がつけられ、鎖で連結された。

「これでグレッタ医師の用件は済んだんだが」とナハール君はいった。「君はこの後の見学を希望するかい？」

僕はそれ以上見たい誘惑を感じたが、僕個

人の理由でナハール君やグレッタ医師をつきあわせるのは悪いと考え、しばらくのためらいの後、見学を許してもらえらるなら次の機会に譲つても良いと答えた。

僕たちは応接室に戻り、首枷を鎖でそれぞれ連結された女奴隷を女所長から受けとり、女体絨毯の上を通つて六人挽きの女人馬車に乗った。

五人の女奴隷たちは車の後部に鎖を固定され、車の動きにつれて、珠数つなぎのまま走らねばならないようにされた。

ナハール君の手の鞭が鳴り、女人馬は走りだした。車の後部につながれた女奴隷も、それにつれて鎖をがちゃつかせながら、遅れまいと必死についてきた。この先どのような運命が待っているにせよ、矯正所から一刻も遠ざかることがうれしく、かの女たちは不自由な足枷もいとわず、一生懸命走っている様子だった。

既に亜熱帯地方の、輝やかしい、きらきらする太陽は沈みかけていた。そのまばゆい、灼熱の光は、あらゆる狂気をも常態に見せ、どのような残忍な人間の心をも当然のこととする不思議な力があるように思われた。

兵士たちの敬礼を受け、僕たちの車は元来

た道を引き返しはじめた。

畠で働いていた奴隷たちは、そのおのの首を連鎖され、監督に曳かれて獄舎へ帰りつつあった。しかし僕たちが通りかかると、遠近にかかわらず、監督に鞭を鳴らされ、たちまち土下座した。

僕は車の後ろから、鎖を鳴らせ、懸命に駆けつづける女奴隷たちが、グレッタ医師のどのような実験に供されるのだろうかと考えた。

ッハール君はそうした女奴隷のことを考えてか、車を往路ほどには急がせず、鞭を控え目にしか鳴らしていなかった、僕の気がかりな様子を察したか、にやにや笑いながら云った。

「いやに後ろが気になるようだね」

「うん、奴隷が転びやしないかと思ってね。」

こんな道で鎖に引きずられては、かなわないからね。」

「大丈夫だよ。そんなことは曳かれている奴隷が一番よく知っているよ。足枷に慣れているから、知らない人が見るほどあいつらが走るのは困難でないよ。それにたとえ転んでもりむいたところで矯正所の苦しみから較べれば楽なものだよ矯正所から出されたといっても、刑罰が免除されたものでないのは、あい

つらが一番よく知っているからね。倒れたって車は停まりはしないよ。」

女奴隷たちはすこしずつ口を開け、喘ぎはじめていた。しかし、それでも必死な表情に変わりなかった。むき出しにされた乳房が揺れ、鎖はガチャガチャと鳴っていた。

「鎖をつけて走ることなど奴隷どもにはなんでもないことだよ。それより訓練されているとはいえ、こうした車を曳いている女人馬のほうが楽じゃないだろうよ」

女人馬も後ろ手にされた拳を握りしめ、汗で身体を光らせながら走っていた。帰路鳴る鞭の数が少なくなったとはいえ、その背や太股には、嘗て当てられた鞭の跡が赤いみみずばれをつくっていた。多分、その傷口には汗が滲みつき、ひりひりと痛んでいることであろう。

「陽が沈むまでに着かせよう」

路の半ばまできた時、ナハール君は突然云った。そして鞭を激しく女人馬の背に振りおろした。

女人馬は鞭を当てられると身顫いし、たちまち足を速めた。

そして車に曳かれる五人の女奴隷たちも、それにつれて足枷の鎖をせわしく鳴らしはじめた。

めた。

しばらくは何事もなかった。女人馬はそのたくましい尻を振り振り走りつづけていたし女奴隷たちも、乳房をぶらぶら揺れ動かしながらそれについてきた。

しかし館の姿が大きくなり、太陽が地平線の彼方にわずかにその姿を隠しかけた頃、女奴隷の一人が足枷の鎖をもつらせ、とうとう心配していたように転んでしまった。当然、首枷の鎖に曳かれて、彼女は殆ど宙吊りのまま道路を引きずられねばならぬ。

女奴隷の小さい悲鳴（舌を切られているので普通の悲鳴をあげることができないからのだが）を聞いた瞬間、ナハール君はちらっと後ろを振り向いた。

そして沈みつつある灼熱の太陽と、巨大な姿を間近に見せはじめた館との距離を目測した。

ナハール君が舌打ちしたのは、車を走らせることに、あるためらいを感じたからであろう。

しかし車は停らなかつた。ナハール君の手の鞭はいささか狂気染みた勢いで鳴りはじめた。

「陽が沈むまでに着けば褒賞をとらずぞ。着

かなければ罰じゃ」

ナハール君の言葉と共に、女人馬はいきり立ったように、その足をあわただしく運びはじめた。

「奴隷を馬の代りに使う利益は、こんなところにあるんだよ。畜生じゃあ僕が云ったって全然通じないからね」

ナハール君は、それを見て満足そうに云った。

しかし転んだ女奴隷こそ災難だって。彼女は速くなった車に曳かれて眼を白黒させてもがいていたが、なかなか立ち直れず、道にこすりつけられねばならなかった。そのためかの女の太股や足先などは、すりむけ血を流しはじめていた。

そして他の女奴隷も、それにつられて首を俯向け、なんとかしてかの女を助けてやろうとするのだが、走ることが精一杯でどうにもならぬ様子だった。

「実験にさしつかえないだろうか、あんなに身体をすりむけさせてしまつては」

僕はそつと聞いてみた。

「すりむけたって平気だよ。どのみち似たような実験をやるんだから」

ナハール君はグレタ医師にたずねもしない

で言下に答えた。そしてドイツ語でグレタ医師と何事かを云いあつて哄笑した。

「その中にグレタ医師の実験室を見せてあげるよ」

ナハール君は云った。その顔からは未だ笑いは消えなかった。

「今夜は新着の奴隷を見てやらねばならないから君もそれにつきあつてくれ給え。明日の午前中は軽い罪の奴隷をいたぶつてやろう。実験室はその後に見てもらつても良いね。」

曳きずられていた女奴隷は、どうしたはずみでか、急に起き上つて、血みどろになつてしまった脚をひたむきに動かしはじめた。

多分、女人馬があまりに早いので、足枷をつけられた他の女奴隷は遅れがちになり、首枷と首枷をつなぐ鎖が引っぱられ、その間にあつて同じ鎖につながれた転んだ女奴隷は、すこしづつ首枷を引き上げられ、それにつれて体勢を立て直すことが出来たのであろうか。

その顔には、転んだ時の恐怖と、傷口にたいてくる痛みと、転ぶまいとする真剣さに、素晴らしい緊張が溢っていた。

いや緊張は他のどの奴隷の顔にもあつた。多分かの女たちの心は、不自由な足枷の鎖を

もつらせないで、どのようにして車の速さに遅れまいとするかという努力に集中され、他のどのような事柄も思い浮かばなかったに違いない。

太陽はその頂上をわずかにのぞかせるにすぎなくなった。

館は間近である。玄関には執事をはじめとする。いろいろな枷や鎖や水着をつけられた女奴隷たちが、たくさん居並んで出迎えているのが見える。

ナハール君の鞭は更に激しく鳴った。

女人馬の背は汗できらきら光り、鞭の痕はむごたらしい赤いみみずばれを幾条も残していた。

またしても一番後ろの女奴隷が転んだ。

悲鳴。しかし、振り返つたのは僕だけだった。かの女は首枷の鎖に曳きずられ、道路をまるで荷物かなんぞのように転がった。しかし先の女奴隷のように、首枷の鎖に引きずりおこされるという幸運はめぐまれないであろう。最後尾であるがゆえに、ただひたすら引きずられ、身体のあるがゆる個所を道路にすりつけ、すりむけさせられねばならない。

起き上ろうとする空しいあがきの後に、かの女の身体はみる間に血にまみれていった。

太陽は沈んだ。

しかし車と館との距離は未だ僅かにしろ残っている。

次の瞬間、車は玄関に滑り込んだ。

「遅れたぞ。」

ナハール君はぷりぷりして叫んだ。

「罰じや。太陽に負けた罰として女人馬どもは明日一日絶食せい。今夜も餌をやらぬわ」かの女たちは、今しがたの激しい運動に大きく肩や胸を波打たせ喘いでいた、そしてその頭は悲しげに俯向いていた。

曳きずられた女奴隷は血まみれになり、起き上る力もないのか打ち伏したままうごめいていた。

他の女奴隷たちも汗をびっしょりかき、立っているのがやっとといった様子だったし、先刻転んで幸運により起き上ることを得た女奴隷も、すりむいた傷口にしみる汗の痛さに顔をしかめながら、地面にへたばっていた。「この者どもはグレタ医師の実験室の壁につないでおけ」

ナハール君の命令で、女監督はかの女たちを無理矢理立たせ、よるめき喘ぐのも構わず鞭と鎖で引き立てていった。

僕たちは這い馬に乗り、女奴隷たちのちゃ

らちゃらいわせる鎖の音の中を、女体安楽椅子まで行った。

「運動をしたので、ちと腹がへったな」

ナハール君は安楽椅子に、どっかり腰を下すと云った。

早速、女体テーブルの上に料理が運ばれてきた。

僕は食った。残酷なこと、無惨なことを見た後では食事が不味いなどと贅沢なことはいえなかった。そしてそれは美味かった。もちろん料理の豪華さ、料理人の腕の確かさもあった。しかしそれより重要なことは、僕がナハール君の日常生活にすこしづつ慣れ、次第に同化するよう感化されたからかも知らない点にあった。

食後しばらくして、僕は風呂に入った。ただしこの時には、グレタ医師はその実験室へおもむき姿を消していた。

金の枷と鎖をつけられ、ビニールの水着を着た女奴隷たちからマッサージその他、あらゆる奉仕を受けた後、僕たちはさっぱりして女体椅子に戻った。

料理皿は既にとり片付けられ、葡萄酒と果実のみが女体テーブルの上に置かれていた。

ナハール君はそれらを口にふくみながら、

執筆に新着の奴隷を連れてくるよう指した。お膳立ては整っていた。

待つほどもなく、三人の女奴隷が金の枷と鎖をつけられ、ビニールの水着姿であらわれた。そしてその先頭には女監督が鞭を手にしてつきそい、かの女たちを導いていた。

例のようにナハール君の前で、かの女たちは膝まづかせられた。それらは全部金髪であり、その皮膚の色、眼の色からして明らかに白人の女だった。

つづいて二人の女奴隷が女監督につきそわれて現われた。一人は混血児らしい顔立ちをしており、もう一人はインド人らしく、色は黒いが素晴らしく整った容貌を持っていた。「あたらしく奴隷にしていたきましたものでございます。どうかよろしく御教育下さいませ」

かの女たちは、恐らくそうナハール君に云えと鞭でおどされ教え込まれたのであろう、口々に同じことを云った。しかしその顔にはある羞恥と努力が認められた。

「神妙な態度は賞めてよい。しかしその方どもの心は奴隷になり切っておらぬようじゃ。たっぷり鞭の痛みを味あうがよい。そしてその方たちの身分を覚えるがよい。ここへ来て

枷をつけられた限り、自由であった昔は忘れ去らねばならぬのじゃ。奴隷の烙印がおされた限り、その方たちが元の社会へ戻ることは不可能なのじゃ。先ず入れ墨をしてやれい」

ナハール君の言葉と共に、女監督や女奴隷たちは忙しく立ち働いて手術台に似た平らな台を運びこんできた。

最初に金髪の一人が台上に四肢を押えつけて寝かされた。

女監督の一人が、太い針と特殊な墨を持って台の傍らに立った。

針がたっぷり墨を含んで、女奴隷の白い透けるような額の一点を深くつき刺した。

同時にのたうちとうめきがはじまった。口に嵌り口具がはめられ、そのうめきは、且て籠の中で薬の切れた女奴隷の発したものと同じ声に変わった。

つづいてこめかみ、足の裏と針は容赦なく墨を皮膚の奥深くまで注ぎ込んでいった。

その後やっとナハール君から執事に鍵が渡され、注射のアンブルが一本用意された。そしてそれが女監督の手に渡され、のたうつ女奴隷の股に注射された。

たちまちのたうちとうめきはとまった。そして押えられていた四肢を解かれ、かの女は台上から降された。

そうして五人のあたらしい女奴隷は、入れ墨の儀式を執行されていった。

すべてが終わった後、ナハール君は膝まづくかの女たちに云った。

「入れ墨の苦しみをよく覚えておくがよい。注射薬がない限り、あの苦痛から逃れる方法はないのじゃ。たとえ元の社会へ戻ったとしても、注射薬はしさに、この館が恋しくなるじゃろう。つまりぬ考えがおきたならお互いの額にある入れ墨を眺めるがよい。それはけし粒ほどに小さくとも、その方たちの頭の中をひっかきまわし、身体を引きさくのじゃ。しばらく休むがよい。そして監督に奴隷の心得をよく教えてもらうがよい」

かの女たちは、その額の小さい黒い墨跡を見せながら入れ墨のお礼を云わされ、女監督に導かれて引き下っていった。

意外なほど時間は早く経っていた。僕は案外疲れているのを知った。

しかしその思いはナハール君とて同じと見え、僕にねだるよう誘った。

僕たちは互いに女人馬にまたがり、そのおのおのの女体ベッドへおもむいた。

(未完)

☆賞金☆

優作	一篇に付	一万円	若干篇
秀作	一篇に付	五千元	若干篇
佳作	一篇に付	二千元	若干篇

☆規定☆

一、真実味溢れる告白、どうしても発表してみたいという自らの手記、或は自分で体験された貴重な事実を盛り上げた体験記を広く読者の皆さまの中から求めます。文章の巧みさよりも、実際に体験されたもので

懸賞（告白と手記と体験）原稿募集

あるという真実の裏付のあるものが大切だと思ひます。従つて必ず自作のものであることは勿論、未発表のものに限ります。

二、枚数には制限はありません。用紙も必ずしも原稿用紙でなくとも結構です。締切日も別にやかましくきめませんから、いつでも、どしどしお寄せ下さい。入選作は最近号に掲載の上、賞金をお送りします。応募原稿は読者原稿と区別するため第一頁に「懸賞告白」とお書き下さい。

私は本誌の告白体験を読んで和服を着た女の人の妖美な下着であるお腰の好きな方があるのを知り心強く思います。今回思いきって

私の奇妙な体験記録を、投稿することにしました。

私は他人に公言出来ない秘かな楽しみを持つ



「告白」

「ネル」のおこしに魅せられて

越 野 信 敏

っているのです。それは和服を着た女の人の最上の肌着である、下半身をつつんでいる一片の布であるおこしなのです。しかも私が好きなのは綿ネルで仕立てられたお腰なのです。このようになったのは、先天的にそのような性質があったのだと思われます。私が小学校五年ぐらいの時でした。叔母がしばらく私の家で暮らしていました。叔母は私の母とは反対に和服を常に着ていましたので、お腰やそれに用いる布地等も多く持っていたようです。私は晩秋から初春にかけて叔母と一緒に寝るのが好きでした。それは叔母がトキ色のネルのおこしをしていたからです。私は足が叔母のおこしに触れると大変気持ち良い感じがしたので記憶しています。又虫干しの時に叔母のネル地を私が触れているのを見つけて、信ちゃんはその間にネルが好きなのと、いったのもおぼえています。その内叔母も嫁にいったといなくなると私の母はネルの類は全然用いなかったので、ネルは私の家には全くなくなり残念に思ったのでした。学校の帰り道にある物干場によく何枚かのお腰が干してありました。私は何故が知らず知らず目がその物干場にゆくのでした。私はそれが楽しみになって来るのでした。そして思春期の頃は

完全な『お腰とネル地のフェチシスト』になつていました。この頃より雑誌等にお腰が何したとかいうような個所を見ると私の胸は高鳴ってくるのでした。又女性同志の会話で「おこし」という言葉が耳に入った時など私の心は妙にうづき私も一緒に話をして見たくないのでした。その女らしいおこしという言葉に私は深い情趣を感じるのです。

そんなわけで、私は和服を着た近所の奥様や女中さんを見るたびに、きつとあの和服の下には柔かいトキ色や赤色のネルのお腰が肌にまとわれているのかしら……と空想するのでした。そのくせ気の小さい私は和服を着た女性の裾の所をじつと見つめてお腰を確かめようなどという事は出来ないのです。だが私の部屋の窓から近所の家の物干台がよく見えるので学校から帰ると眺めてネルのおこしが干されてあるのを探すのです。それを見つけると双眼鏡でよく観るのでした。私が友達の家に行った時、その友達の母が何かの用事でこたつから出る時、着物の裾が捲れて長襦袢の下からチラッと桃色のネルのお腰が見たので私の目はそこに引かれその友人の母をうらやましく思いました。またある時、私の家の隣に私が用事をいつかつて勝手口から入

った時、その家の奥様のネルのおこしが洗うため台所の縁の上に他の洗濯物と一緒に置いてありました。私はそのお腰に目が吸いついてゆき、たまらなくなつてそれを手で掴みました。が、すぐ元通りにしておきました。この時から一度ネルのお腰を肌に直接してみたという欲望がつのつてきました。このように私が女の人のお腰に異常な興味を持つようになったのは、生れつきそのような性質があり、それがあの小学校の時、叔母のネルのお腰に触れたため急に意識に上つてきたのだと思います。

十六才の頃は、電車通学をしていたので駅の階段を急いで来られる女性の裾が乱れ、よくお腰が見られるのが楽しみでした。風の強い日などに風に向つて行く女性たちの裾が捲れお腰が見えることもありました。しかしこのような事では満足せず、女の人が直接肌につけられたお腰が欲しくてならぬ事もありましたが、気の小さい私は誰にたのむ事も出来ず大変悩みました。

十六才のとき大変良い事がありました。それは女中を置くことだったのです。その女中さんは「知恵」といふ常にと和服を着ている人でした。

それから私の楽しみが一つふえました。

「知恵」さんのお腰を知ることでした。知恵さんは三十二才ぐらいの年増でした。私は彼女が立ち廻る時、和服の裾のへんをよく見ながらどんなお腰をしていられるかしらと早く見たくてしかたがありませんでしたが、一日目は見られませんでした。三日目は学校が休みなので少し寝すごしてしまいました。目をさました時、知恵さんは着物の裾をはしょつて掃除をしていました。私ははしょつた着物物の下に赤いネルのお腰をまとっているのが目に入りました。が、すぐ知恵さんは私が見ているのに気付いて、あわてて着物の裾を下してしまいました。私はそんなものは見てないようなふりをして起床しました。翌日の朝知恵さんは、自分の洗濯物を庭の物干場に干して見ました。彼女が行つてから私は物干場に行つて見ました。見るとトキ色のネルのお腰が肌襦袢や何かと一緒に干されておりました。年増女の肌にぴったりとまとわれていたなまめかしい、そして柔らかなネルのお腰！私はそれを見ている内自分の胸に熱いものこみ上げて来るようで、そのお腰が欲しくなりませんでした。しかしそれを盗むような事はどうしても出来ないし又知恵さんに言っ

て分けてもらう勇氣もなく、この時は大変苦しみました。ある日曜日でした。私一人家で留守をしていたので、悪いと知りながら知恵さんの部屋に入り押入から行李や箱を出して彼女のネルのお腰や肌襦袢を探しにかかりました。先ず行李をあけて上の着物を取って見ると赤いネルの一枚トキ色の三枚あり、その内トキ色のは大分洗ったと見えて色もあせ、ネルの特色である起毛が大分取れて本当のネルらしい感触はありませんでした。他の三枚は起毛も取れていず本当にネルらしい肌ざわりでした。それらを広げて頭からかぶると年増女の甘美な体臭がかすかに感じられました。ああネルの柔らかい肌ざわりは私のお腰へのしゅうちやくを激しく燃え上らせるのでした。それらを自分の素肌にまいて見たくなりましたが、知恵さんにすまなく思い止めました。そして又元通りにして置いたので知恵さんは気が附かれなかったようです。それから一週間後のある日、私と知恵さんだけ家に留守をしていました。午後知恵さんは買物に出かけましたので、その後彼女の部屋に入ると、丁度肌着を換えたらしく部屋の隅にまだ肌のあたたかみが収まっている白ネルの肌襦袢とトキ色のネルのお腰があるのを見

つけたのです。ついに私は知恵さんの肌にまわれ洗っていない肌着類を手にする機会を得たのです。その時の私の気持を想像下さい。私は素っぱだかになると先ずその柔らかいトキネルのおこしを身にまとい次に白ネルの肌襦袢を着て最後にメリンスの長襦袢を着ました。そして部屋の中を少しあるいて見ました。するとあるくたびに内股にトキネルがまつわりついてその柔らかい感触は何んともいえず恍惚としてしまったのです。その内お腰を汚しそうになったのでつらかったが全部を元通りにして置きました。このような悦楽の味も二年ほどで終わりました。それは知恵さんが嫁に行くことになったからです。知恵さんがいなくなつてから道で知恵さんぐらいの女の人を見ると、すぐあのころの事が思い出されました。私は今一度女の人がまいったお腰がして見たくなりましたが近所の女中さんに云うことも出来ずあきらめるのでした。又遊廊の女の人たちの中には私のような者を理解してくれる人もいたそうですが、今日では昔の夢にすぎないようです。

一寸、ここで私のネルとお腰に対する考えを申し上げてみましょう。女のお腰に綿ネルがよく用いられているのは、あのネル特有の肌ざわりに関係していると思われれます。その証拠に婦人雑誌等には和服の下着の所でネルのお腰は裾さばきが悪く用いない方がよいと書いてあります。それなのに多くの女性、とくに年増の方たちは好んでネルを用いているようですが、これはあのネル独特の肌ざわりということになるでしょう。

又昔の本など見ると昭和初期ころは十七八才の女の子でもネルのお腰をしていたようです。そのころをなつかしく思います。次にネル地についてですが、一般に綿ネルの方が肌ざわりがよろしいようで、私も綿ネルが好きです。そしてネルは出来るだけよく起毛させ光線にすかして糸の目が見えないくらい十分起毛されたものが本当にネルらしい感触があると思います。色は絶対トキ色か赤色にかぎります。このように私はネルのお腰についてはその起毛状態、トキ色であることについて注意をはらっています。又白い晒の所はある程度太く紐のないものが良い。私は女の人がしているお腰がネルであることを知るため綿ネルの両端にある耳で判別出来ます。私は一度女のような着物をきて私の大好きネルを毎日まっていたいです。私は洋装の女性には興味がありません。私は呉服屋をやつて私

の好みにあったネル地をつくらせネルのおこしの好きな女の人に喜んでもらいたいと考えたりします。

話を前に返しましょう。知恵さんがいなくなつてからは、私は近所の干物の中にネルのおこしを見つけては、それをながめ知恵さんの思い出にひたつておりました。外出した時など和服を着た女性を見ると必ず裾の所を見てネルのお腰がチロツトでも見えたら私はあらためてその女の人を眺めるのでした。さてその内私の家の隣に新しく仲居さんらしい人が越してきました。名前は川村喜美といいますが、お喜美さんと呼ばれていました。年は二十八九でした。大変面白い人でしたので私の家とも交さいして私も隣に出入するようになっていました。そんなときの十一月のある日、私は留守をたのまれ、その時お喜美さんがもし遅くなったら裏の洗濯物を入れて下さいとたのんで出かけていきました。そこで早速裏にまわって見ると桃色のネルのお腰が干してあるではありませんか。私は知恵さんのお腰をもてあそんだ記憶がわいてきて少し早めに入れて二年ぶりに女の人の肌にまわられていたお腰を十分楽しみました。それはちやうど知恵さんのと同じような肌ざわりでし

た。その日それで終りにして元通りにして置きました。お喜美さんが帰って来て礼をいったので、きまり悪い思いをしました。それから数日後、丁度日曜だったので、お喜美さんは今日一寸出かけてきますので私に本でももつてきて留守をして下さいませんかとのまされたので、引受けて行くとお喜美さんは着換をして出かける所でした。「後はよろしくたのみますよ」と云つて出ていきました。

私は急に知恵さんの洗濯していないおこしのことが思ひだされ、きつとお喜美さんも肌着をどこかに脱いでいったはずだと思つて部屋を探すと部屋の柱の所にいつも着ている着物があったので何げなくその中に手を入れて見ると柔かいネルの感触が感じられ、着物の下に洗濯してないトキ色のネルのお腰が見つかりました。私はそれらを身にまといて他のお腰を探すため行李類を開けて見ていくと行李の半分ぐらいたの所でネルの手ざわりがするので上のものをどけると赤いネルで作った冬用の長襦袢様のもの桃色のネルのお腰4枚これはすでに十分起毛されていました。さらにはその下には多分お喜美さんが自分でお腰等をつくるため買ったと見られる桃色のネル地が三メートルに切ったのが二枚、赤色の一枚ありました。私はそれらを部屋中に広げ洗濯してないトキ色のネルのお腰を素肌にまいて他の4枚のお腰を体中にまきました。

そしてその臭と感触に恍惚となりそれらを頭からかぶったり抱きしめたり色々なことをしている内にお喜美さんに見つかつてしまったのです。始めは大変おこられました私が今までの事をよく説明すると分つてくれ信ちゃんはその間にネルやネルのお腰が好きなのと云われました。私は家の人に云わないように何んべんもたのみました。家の人には云われずにすみしました。その上お喜美さんにお腰の作り方を教えて貰いましたが体臭のするのは恥かしいからといってどうしてもくれませんでした。けれど私はそれで我慢する事にしました。

以上色々変な事を書きましたが、なんとおかしい奴と思われるでしょうが、私と同じような人が色々書いているのを見て勇気を出してペンを取った次第です。私はこれから色々お腰についての知識を広め又将来結婚するときは私の気持をよく理解してくれしかも和服の好きな女性と結婚したいと思ひます。しかしだんだん和装がなくなつていくのは本当にさびしい感じがします。何とか和装がなくならないようにしたいものです。現在私は二十三才ですが知恵さんのようなネルの好きな女性と文通がしたく思っています。これで私の告白を終わります。他のお腰フェチス トの方にいくらかでも参考となればさいわいです。



〔異 譚〕

雪^{セン} 隠^チ 蠅^{バイ} の 怪

正 夢 比 呂 目

泰三君は性来雪隠蠅が大嫌いなのでした。

もっとも、そんなものを好いて居る人なんぞ、凡そ此の世の中には無いでしょうが、彼が雪隠蠅に対するそれは、嫌いと言うよりも、寧ろ恐怖に近い方なのでした。

広い世の中には、弁当のお菜に南瓜の煮付けが入れて有ったのを見て、氣絶して了ったと云う人もある位ですか——。

そう云えばアノ胴体のいやに長細い黒茶色の羽根をピカリと光らせて、何となくグロテスクな容貌の雪隠蠅を、極度に忌み厭う泰三君のその氣持も、満更無理でもない氣も致しますし、それに此の時の彼の体内には、長年潜伏していたものと思われる梅毒菌スピロヘ

ーターが、また活躍を始めていた様でしたから、マ、ア、何やかやの事情が入組んでの一つは精神的な苦しみも手伝って、とうとうあんな氣の毒な結果に成ったものだろうと思われるのですが——。

そこで、是からの此の話は、その泰三君が未だ病院で割合元氣にして居た頃に、見舞に行つた親友の筆者にだけ、密かに打明けて話した雪隠蠅に対する恐怖と、彼自身の身の上ヒントを得て、それに幾分の推測を筆者が加えたものである事を御了承あり度い。

大阪に生れて大阪に育ち。そうです。ですから山辺泰三君は「純粹の大阪人だ」と云う事になるのです。それが——。

その時分は誰しもが左様であつた様に、アノ終戦後の見渡す限りの焼野原と、何がどうやら見当もつかぬ混沌たる世相を眺め、思い巡らす時、いくら生れ故郷の大阪が恋しくとも、食わんが為には？の決心をして遂に現在のこの北九州の炭礦に来て了つたものでした。

早いもので、アレから七年。その七年目の六月に思いもかけず脚氣を患つたのでした。

N礦業所I支部である小さな礦業所の所属医は、彼の病名を、脚氣並ニ神經痛とつけて注射及び薬餌療法を始めました。

然し、どう云うものか此の療法では少しも効き目がなく、七月も末になつて、癒くなる

どころか何となく得体の知れぬ症状をさえ呈してくるのでした。

私症病患者の保険休養日数は六ヶ月。まだまだ大丈夫期限の切れる迄に日はありますがそれも家族持ちの身であってみれば、経済上そうウ、カウカともして居れないので、意を決した泰三君は遂にN本部迄出向いて行って診察を乞う事にしたのです。

本部で診察してもらってからの彼は、「矢ッ張り本部でなければ駄目だなア。」と、何度も嘆息して言うのでした。

本部の内科医は暫くの間、丁寧に泰三君の軀を診察してから、もう一人傍に居た科長とみえる人に、何やら報告相談している様でしたが、やがて今度は二人してもう一度繰返して診察し、終ってから先に診察した方が泰三君に向って、

「君、梅毒をやった事があるネ」

と高飛車に念を押す様に云うのでした。

「はい。あります」

とたんに彼は釣り込まれる様に、そう答えて了ったのです。

尤も、事実身に覚えもあつたからなのでしたが――。

今年四十余才になる泰三君は、若い頃、相

当に女道楽をやったものでして――、

それが、アノ、商売女とばかり、つまり当時で云う女郎買と云うアレです。

そうですねエー、もうずっと昔の、昭和五年頃だったと思いますが、悪性の腫物が沢山出来て、体も非常に気倦くて困った事があつたのですが、無論お医者に診て貰いました、その当時でいう六〇六号注射等もして、一寸はそれで体の調子も良くなったのですが、最後の血液検査までは終わっていませんに、マア、誰しも若い頃には有り勝な、差当りさえ体の調子が悪くなければ、もう医者に掛ける金でまた遊べる、と云ったその認識不足の不心得をやったものです。

それから永い歳月の経ったこん日迄には、其の後も随分と悪遊びをやっていました、畢丸炎等もやりました事があります。

然し最後に、アノ大太平洋戦争で大阪が空襲に遭う以前には、相当まとまった金を軀に掛けまして、病毒駆逐を計って血診も陰性無毒の証明を取っていたのです――。いいえ、終戦後は唯の一度も商売女とは関係していませんのですが――、ひよつとすると、あの頃の内地にはもう完全な良薬が少かつた時分だから、表面は完全治癒になっていても、その

実、あらゆる薬効力にも不備な点が、あつたのかも知れないと思うのでした。兎に角――。

それで、泰三君はとうとう入院加療を要す――と云う事になりました、いまこの本部病院内科病棟十三号室に収容されて、そして、はっきりした病名の付かぬまま半月ばかりが経過しました。

無論。放って置かれた訳ではありません。

大学からも専門医師が招かれまして、泰三君の脊髄からは水を探り、又、腕から、耳からの反応検査が行われ、その結果、完全確実と迄は云えないが先ず、潜伏性梅毒菌が脊髄を冒しつつある為の歩行困難。と云う事になって加療が始まりました。

ペニシリン六十万単位と、ビタミンBCの注射。それに一週間目おきに、サルバルサン静脈注射等が彼に与えられる治療法なのでした。

医者は回診の折に彼に言ったものです。

「実を云うと、君のその症状が、我々医師としても果してどの程度を以って、治癒したと云い得るかに付いては問題なんだ。が、まあ気永に養生する事だネー。」と。

近頃泰三君は又アノ梅毒菌スピロヘーター

が、体内で活躍を始めたらしい節々の痛みを気の故ばかりでなく感じる様になって来ているのでした。

退屈な病院生活の裡に、夏の行事のお盆の賑いも心なく過ぎて行きました。

社宅に残して居る家族の身に、思いをはせているのか泰三君は、ベッドの上に端座して「あー、今年の盆は、私に家が居てやれんので、子供達にも何一つ身の廻りのものが出来ていまい？可愛相に」

そう低く呟いては嘆息を洩すのでした。

彼の自宅には、四才になって、小児麻痺の為に未だ歩行の叶わぬ長女と、今年七十三才になる老母も居る。

それに、こちらに来てから娶った、

戦争未亡人であった今の妻とその連子が二人も居て、どちらも普通ならもう心配のない生長した娘なのだけれど、それが一人が脳膜炎を病った事のある半痴呆である。もう一人の姉の方は、それと二才違いでもう年頃の娘であり、無論この方は不具ではないが何となく腺病質で、それに、こう云った娘の子によく



有り勝ちなひがみも手伝うのか、何故か親に親しまうとはしない。それと、経済的な悩み。

これ丈け心配を持って入院している泰三君の気も堪ったものでは無かったろうと思われる。

唯一つ良を云えば、彼の今の妻が封建制の中に育って来た苦勞人である丈に、少々位の

苦しみや貧乏にはメゲずに、小児の世話や老母の面倒を看て呉れる事でしたが、然しこれも日常生活の上から見ても、純粹の都会人として育って来た経歴を持つ泰三君の性格とは、余りにもかけ離れた所謂下層行為が多いので又しても、泰三君は苦り切る事が度々でした。二週間近く姿を見せなかったその妻が、アノ小児麻痺の子供を背に負ぶって、今日はこの病院に夫なる彼を訪れて来ました。

彼は遽に嬉し相に、その子を膝に抱き上げて遊ばせ乍ら、妻からいろいろと家庭の事に就ての報告相談を受け、また彼からもそれぞれ指示を与えるのでしたが、暫く来られなかったその理由に対しては、お盆の日の朝早くこの子がケイン、を起して一時は生死の境をさ迷い、医者処で五時間近くも寝かせ、十本からの注射を打った事。更に又、それを案じて老母は持病の狭心症を起し、大いに困ったと云う事等を聴かれた時、人一倍感傷的な性格の彼は顔色を変えて驚き、汽車の時間を案じてその妻子が早々に帰って行った後迄も浮かぬ顔色に胸の動悸を高めて居るのでした。

筆者がのちに思った事です、泰三君の容

体の悪変は、どうやらもうこの時あたりから運命の黒点を現わしかけていたのでは無かったか？と、で、この辺でもう一度、彼のその症状容体に就て委しい説明をして置きましょう。

歩行が叶わぬ——。と云っても、彼のそれは全然歩けない、と云うのでは無いのでした。が兎に角、現在も猶初めのアノ脚気の薬を内服として渡されている程でしたから、その卦も充分あるのでしょうか、それよりも実際の処苦痛を感じるのは、腰の廻りを何か幅の広いゴムバンドの様なものに締め付けられる様な重々しい感じで、体を延すと、びりびりと腰から下に痙攣を起して、足もさながら棒の様に重い。

また歩けば脱腸の時の様な不快感が——、それと、筋肉の痛み。

それでいて外観からは、さして、気付かれぬ。まアこう云った状態でしたから、誠にイヤハヤ困ったものなものでした。

偕、先の日。彼の妻子が訪ねて来てから、恰度数えて三日目の朝。もう八月も余すところ幾ばくも無いこの日。今日は朝から氣持よく晴れ渡った良い日和に、病室の内も何となく気の晴れる思いの心地よさなものでしたが、

何ぞ計らん泰三君の身に執つては、この日こそアノ、雪隠蠅の奇禍？に遭う可きそれが仏滅。三りんぼになろうとは？

脊髄を冒されているとは云え、頭脳にはさして、影響を感じぬ（そう思つて居たのだが？）彼は、此の朝、医師の回診も終つて日課の注射も受け、昼食迄の一刻を好きな道らしく、原稿紙にペンなど走らせて居たのだったが、この時。

「山辺さん、お電話ですよ。」

と、看護婦の一人が知らせて来た。

「はッ——」と瞬間何ごとか胸騒ぎを覚えた彼が、急げぬ脚を無理矢理急がして、看護婦詰所に飛び込むと、引ったくる様にして受話器を耳に——。

思い掛なく、妻の連子であるアノ神経質な上の娘の急病入院を知らせて来た。

収容場所は、我が家の町の、社会保険病院だとの事。

病名は盲腸炎だとの事。

「困った事になった。」

昂ぶらせては成らない神経を、又しても昂ぶらせ、胸はやたらに動悸を打つ。

彼は電話を了ると、真直に病室に帰って来たが、先程から便意をもよほして居たので、

原稿紙の半切れを揉み乍ら、廊下へ出てすぐ便所に在る便所へ入って行ったのです。

大体、彼の様な症状にある者は、極めて便秘の場合が多いのでして——、だから

便意はもよほして便所に入つても、容易な事では脱糞が出来ないで、結局臭い目の仕損になる時も度々なのでした。

定められた大便所のボックスの中で、永くしゃがんで居る事は、泰三君に執つては、アノ大嫌いな雪隠蠅の跳躍を見る時間が永い、と云う事で性来雪隠蠅には恐怖に近い嫌悪を感じて居た彼としては、何よりも辛い事柄なのでした。

で、この時も彼は、

「どうか、雪隠蠅が居ない様に。来ぬ様に」

と心に祈り乍ら、大便所に入り、しゃがみ込んだものでした。

だのに、意地の悪いもので、彼がしゃがみ込むと、まるでそれを待って居たかの様に、何処からともなく二匹、三匹と姿を現わしたのが、その雪隠蠅では有りませんか——。

「チエツ、こん畜生。シーシー。」

泰三君のこの時の服装は、丸首アンダーのメリヤス肌着に、下はゴム入ランパンツでしたので、パンツを下にズリ下げていれば、両

手が空いていたのです。

で、彼はその左手では、嫌なものを見まいとして掌で顔を隠し、右手を盲目滅法に打振って、その雪隠蠅を体に近づけまいとしたのでした。

それで、夢中になって手を振っている裡にどうした弾みか？

「パチン」と、その右手が同じ右の腿を激しく叩いて了ったのです。

と、同時に何となく厭な予感に、反射的に顔を掩っていた左手を除けて、叩いた腿の個所に眼を止めたのです。

「ふエーッ」

とたんに彼は、何とも形容のつかぬ叫声をあげて立上りました。

夢中で叩いた掌と腿との間に挟まって、何とアノシユウ怪な雪隠蠅が一匹、体汁の出る程に強く圧し潰されていたのです。しかもその雪隠蠅の潰れていた個所は、毎日両腿に交々打っているペニシリン注射の針痕のところなので、大体が毎日の注射で少し赤味を帯びて腫上っていたものでした。

泰三君は、真蒼になって病室に帰って来ました。

気の故か？針痕の疵口から、潰れた雪隠蠅

の体汁が泌み込んで、何かしら奇怪な症状を引起し相な妄想にとらわれて――？

その夜、彼は四十度からの大熱を發して、驚夢に呻され続けました。

夢の中で、アノし、う、怪な雪隠蠅の容貌が、スクリーンでの大寫しの場面の様に、顔の上からのし掛って来て、逃れ様としても、どうした事か身動きも出来ないのですでした。

翌朝の回診に、医師も、

「どうして、こんなに熱を出したんだらう？」と首を捻りました。

世の中では、氣の持ち様。神経の遣い方に依って、飛んでもない怪異な事も、起るものと見えます。

ですから泰三君のこの時のも、医者に診せて正しい医学の上から判断させれば、案外当然？の理屈で治療の方法もあったのではないか？と思われるのでしたが、それも、しかし――。

雪隠蠅の潰死した個所の、右の腿の注射痕が不思議にも化膿してきたのです。

一体、ここでの患者はペニシリン注射を受ける時、その両方の腿か尻かの裡で、自分の希望の個所を出し示せばよいので、従って、どう云う積りなのか彼がこの日からのペニ注

射には、必ず尻を希望して腿の膿痕を見せもせず、且つ、誰にも黙って居たので、自然、医師や看護婦達にも知られる事なく、命を終った後の死体検証に始めて発見される、と云う事に成って了ったものでした。

悪い事は重なる見え、泰三君の發熱から中二日置いて、又も自宅から電話が掛ってきました。

この時の彼には、もう、予感と云うよりは寧ろ正確に近い六感が働いて、それは定めて老母の身の異変であろうと思われたのでした。

果せる哉、電話はそれでした。

狭心病に、是迄にも何度か経験のあった七十三才のその老母。これだけの家庭の異変と過労に持病の起らぬ筈はなく、昨夜から命も危うくなつて、嫁親子の居ない留守中（つまり泰三君の妻子は社会病院で附添い中）家には痴呆の娘の一人でどうにもならず大騒動となり、近所の人で看護中との事でした。

「駄目だッ」

彼はもう泣き度くなりました。

何もかも何とも成らない環境なのでした。でも、是はもう放って置く訳には行きません。

彼は、担当の医師に事情を話して三日の暇を乞い、急拠自宅への帰路に就きました。

脚も心も殊更に重く切なく――

偕、帰宅してからの泰三君が、自体どの様にして家庭の難事処理し、無理したかに就ては、ここでは一応省略致しますが兎に角、それから数えて四日目の夜。また病院に帰って来た時の彼のその憔悴し切った様子は、傍で見る目も哀れな程でした。

彼と同じ病室には、彼の他に二人の患者が各々のベッドを離して横臥していたもので、同室三人がこの私症病内科患者収容の規定になっていたのです。

そして、その病院に帰った夜から翌一日中又も大熱を發して苦しみ魘され続けました。

彼の身にしてみれば、誠に氣拙い事にも成ったものです。

事実、翌朝回診に来た医師も、追に顔をしかめて首を傾けましたが、

「何しろ、四日間注射をしなかったんだからなァー。それに、大分無理もして来たんだろぅし――？」

と、左様云って、差当りの処置を看護婦達に命じておいて、サツサと引上げて行くのでした。

泰三君には然し、この時、誰にも見せも話でもない一つの秘密があったのです。

それは、かの腿の傷痕に就いてでした。

自宅に帰って居た四日間に行った相当な無理と、それに、化膿して潰れた傷痕から湯が浸ったのとで、今はもうその傷痕は相当大きく又醜くアバケて、然かも、しかも泰三君のその眼には、何と奇怪にもその傷痕のアバケが、アノ醜怪な雪隠蠅のそれに似ている様に見える事なのでした。

翌日の昼下り、彼が不図また用便を思い立ったかの様に、便所に入って行ったそれから程なく、

「ぎえーッ」

と云う様な異様な呻声に、折から同じ便所に行き合せて居た他病室の患者が、驚いて急を他の人々に告げ、人々が恐るおそる大便所の扉を開いてみると、何と、泰三君は爪切りに用いる小型の洋鋏を咽喉に突立て、既にもう虫の息でした。

どうして、そんな鋏を便所の中へ持って入ったものか、何故自殺しなければならなかったかに就ては、誰一人知る人もなかった筈でしたが、この時、彼の入って居た便所の床板の上に三四匹の雪隠蠅の死骸が転がっていた

のを、そんな、騒動の最中に矢張り氣に止めた人も有りませんでした。

間もなく息を引取った彼の死体を検証した

医師は、

「脊髄を冒していた梅毒菌が遂に脳に上って氣が狂い、発作的に兇行を演じたのだ――」と、そう断定した。

無論この時になって、裸体にして見た泰三君のその腿に、異妖な腫物の潰瘍が在るのを発見はしましたが、すべては会社の直屬病院での出来事です。今更その傷痕に兎や角詮議立てする程のお人好しの医者も居なかった様でしたし、また便所を清めた掃除婦の小母さんにしてからが、

「まァ氣持の悪い、雪隠蠅が、三匹も四匹も死んでいる」

と云っただけで、無造作に掃き捨てて了ったに過ぎなかったのです。

かくて、我が親友、山辺泰三君のその靈魂は哀れにも「脳梅毒發狂死」と云う忌わしい汚名のままに、いま地下に眠って居るのであるが、筆者は何かしら、彼の死因が脳梅毒ばかりでなく、アノ雪隠蠅にからまる何物かが禍したのではなかったか？と思う次第なのであります。(完)

〔雪俊遙だより〕

革の拘束具についてのアイデア

雪 俊

遙

革の拘束具に就て、いろいろな人がいろいろなアイデアを発表して居られるが、工場などで使う調革が切れた時。革と革とをどうやって繋ぐか御存知の方は案外少ないのではないかと思う。

レーシングという金属製の刃型があつて、これは機械工具店で売っている。私は以前から此のレーシングを一度、小説「影の国」の中で使つて見たいと、いろいろ想像を逞まして居たのだが、三十を過ぎると男も公私共に多忙、いまだ醒めず池頭春草の夢で、とても奇ク誌とばかりお附合ひして居られぬまま一日に至つてしまった。今月は月末まで少々暇があるので、余暇を利用して、此のレーシングに就ての私のアイデアを発表した

い。

これは先の鋭く尖つた鍵の手の棘を左右交互にくつつけて梨状に伸した様な物である。鍵の手が左右交互だから横断面はほぼ四角となり、四隅の一隅だけがあいている。その反対隅が左右の刃を直線に結ぶ基根部となるわけ、左右一対の刃ごとに、基根部に斜線状の切り込みがつけてあつて、好みの長さの所で、その切り込みから折り曲げれば簡単に切断出来る。ベルトの大きさに合わせて、レーシングの大きさもいろいろある。

私一流の生硬な表現で恐れ入る。こんなことを書くより現物を見て頂くと手取早いのだが、誌上ではそうも行かない。知合いの工場か工具店に行つて頂くに限るというもの。

工場でベルトが切れると、プーリー（滑車軸）から外して切断面を鉄などで平らに切る。熟練工なら切れる前に、ベルトの緩み具合で、何程切つて縮めた方がよいか位解るらしい。切断部の長さに合わせてレーシングを切断し、あいている一隅で切断部を挟み、鍵の手の曲つた所を、裏表交互に少しずつ、ハンマーなどで叩いて、刃先を革の中に埋めてしまふと、ベルトの先に細長く金属の袋が出る。もう一方のベルトの切断面にレーシングを埋める時は、前のレーシングとジグザグに噛み合つて袋に隙間を作らない様に注意することが肝腎だ。左右のレーシングをジグザグに噛み合わせたら、その穴へ横から針金を通す。なるべくなら穴の大きさ一杯一杯の針

金をペンチで打ち込む位がいい。レーシング専用の銅線もある様だ。たったこれだけでレーシングで繫いだ部分は、ベルトが古くなって、手垢と油で汚れ、カスカスに弱くなって至る所が手で強く引張れば、プツンプツンと切れてしまうまで保つ。

此の汚れ古びて調革の役割を果せなくなつた様なベルトは、手触りが湿って重たく、肌は黒光りしていて、精密機械だと幅も二厘位の手頃なので、持った人間は誰でも一寸、そこに居る女工のGパンのくい入った臀を叩いてみたくて仕様が無い衝動を覚えるものである。その時も針金を外して、レーシングを鞭尖に使えば、音も痛みも手触りも一段と冴えること請合ひである。

私が此のレーシングを知った時、真っ先に思い浮べたことは、奴隷制時代のアメリカで、素っ裸の奴隷女に馬車を曳かせていた御者も、広い農園の中の畦道で、若し、女の腰から伸びた車曳きベルトが、全力疾走の真最中に、プツンと切れたら、馬車を停めて、ぶ

つぶつ言いながら車から降り、こんな風にベルトを繋ぎ合わせたものだろう。と言うことだ。

ベルトを切らした女はついでに、遅ましい黒光りする裸の腰や太腿を、二、三回。ビシッ、ビシッ、鞭で撲られたに違いない。そんなことをされなくても彼女は、ベルトを切らした罰は、その後で充分受けているのだ。何故ならレーシングで繫いだベルトはほんの少々

ザ
ピーナツ
ニンがくつつかう



だが最初よりどうしても短くなるので、その後の全力疾走では、馬車の重味が他の牝馬達よりそれだけ強く、彼女の腰にはまった枷具を肉に喰い込ませるに決っているのだから。

或時、女工の一人がベルトを切った。あいにくスペアのベルトは大きいばかりでその機械の段車にはまらなかった。仕事は急ぐので工具屋に電話を掛けていては間に合わない恐れがある。止むを得ずその大きいベルトの

端の方を一種位そいで幅を狭くすることになった。ところが新しい革を鉄で切るのだから簡単には行かない。鉄の刃の根本を上と下から掌で強く押してやっと五耗程進む。切口を挟み直して又力一杯鉄を押す。その力でベルトがずれるので中腰になって、手前の方を始終踵で踏み押えていなければならぬ。もう一人の女工は向う側にいて身体を反らせて片手で引張りながら、もう一方の手で、そがれた細い革紐をわきに引張って、鉄が進みやすくしてやらなければならない。

Gパンと七分パンティの女工二

人が、ワイワイキャアキャア。大変な騒ぎ。暑いので汗はだらだら流れる。新しい革独特の鼻の曲る様な異臭があたり立ちこめる。鉄を持つ女工は疲れ果てて、ハアハアと息も苦しげに、豊かな胸を波打たせている。

私はすぐこれは『影の国』に使えらると思つた。

革命前のエジプトかどこかの海港の異邦人向きの売春宿（ブロッセル）で、十二、三の少女ばかりを置いている所があるという話を、十年前前に「中央公論」か「世界」で読んだことがある。嫖客が来て女を撰ぶと、マスターは少女と一緒に革の鞭を渡すのだそうだ。

そんなブロッセルの大広間。まだあどけない少女達は二人宛組にされて、裸で客の前に立たされる。大きな厚い革の布と、鉄が一つずつそれぞれの組に渡され、号砲一発。少女達は競争で、自分達を縛り上げ、鞭打つ為の革紐を自分達で作るのだ。見張りのマスターの手には、赤、緑、紫のマジック・インキ。革紐が途中で切れてオシヤカを作る度に、その組の作業は中断され、二人の少女は可愛らしいお臀を二つ並べて客に向けて立たされ、赤いマジックで、一、二、三、と柔らかなお

尻の肌記号を記される。

紐幅が一種以上誤差のある不良品を作った少女達の腹には緑のマジックで、指定した本数に足りない少女達は不足数を右の股の附根の裏表に多過ぎた少女達は左腿マジックは紫。出来上り順は背中に大きく不良数とは関係なく、そして最後に、夫等の成績のすべてを総合して、一組宛折檻が行われる。出来上り順の折檻を行う鞭の先には片側だけ留めて、片側の刃は剥出したレーシングが附いている。並んだ刃は肉に刺さり、皮を引裂く。それは他のどの鞭よりも痛い。だから少女達はどんなにオシヤカを作ろうとも、とにかく早く作業を終えた組が勝なのだ。

私の想像は、此の程度の段階はすぐ通り越してしまう。

世にシャム双生児というのがある。身体の一部がくっついている為に、別々の肉体を持ちながら、常に同一行動を取って居なければならぬ双生児で、くっついている箇所は、後頭部とか背中の一部とか臀部などが多いらしい。私は医者ではないので確言出来ないが、くっついている所を真二つに切離する両方とも死んでしまうとか。

レーシングを少し改良すれば普通の双生児

をシャム双生児にしたり、又離したり出来る筈である。ザ・ピーナッツだの、こまどり姉妹だのが裸でシャム双生児にされ、日劇の舞台で歌っている光景を御想像下さい。楽しいではありませんか。

天然シャム双生児は肩と肩。二の腕と二の腕という風に大体身体と同じ箇所がくっついているらしいが、此の人工のシャム双生児だと、一方の頬に他方の太腿とか、他方の下腹部に一方の両乳をくっつけると言った芸当も出来るわけだ。

拷問の一種だから相当不自然な態位も強制し得るとなると、組合わせは無限に想像出来る。その上、人数を何人でも増やして行くことが出来るだろう。ローマの將軍クラッススはスパルタカスの奴隷叛乱を鎮圧した後、何と六千人の叛乱奴隷を一挙に磔刑にしたという。

私は今迄、磔だから六千人一緒に出来たので、海老責とか石抱きの様な不自然な態位の要求される拷問を、六千人も一ぺんに行うことは想像も出来ない様に思っていたが、たとえば肱と膝を無限に連鎖させるという形で、六千人の裸の女奴隷がローマへの街道の両側に、海老責の姿勢のまま一直線に並んで死を

待っている図などの想像

も、これなら可能と言える

だろう。しかも彼女達は皆

縄一本掛けられていないの

だ。後手の手首と二の腕が、

海老の様に曲げられた身体

の顎と両足首が互のレーシ

ングでくっつけられている

為に。その中で一人だけ特

別大きく逞ましい裸身に、

おびただしい切傷、鞭傷、

火傷を受けて、猶も齒を喰

いしぱり、美しい眼を怒ら

せて貴族達を睨み上げてい

る裸女のレーシングは燦然と黄金に輝やいて

いる。彼女こそ此の叛乱を率いた女闘士なの

だ。傍の副官と参謀数名も、逞ましく陽灼け

した裸に銀のレーシングが眩ゆく喰い込んで

いる。

無論女体と女体をくっつけるばかりが能で

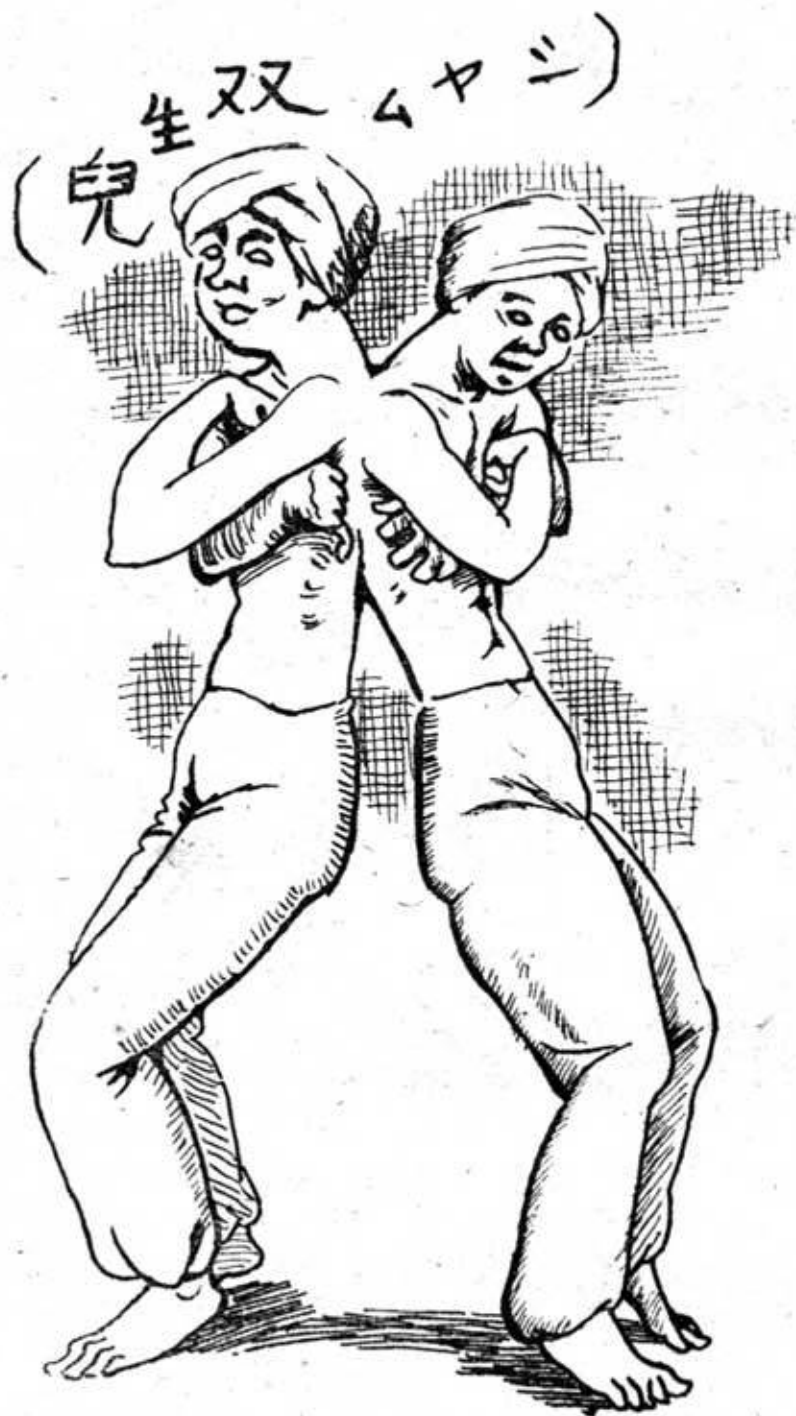
はありません。女体と革。女体とゴムをくっ

つけても結構。映画「天草四郎時貞」の中に

丘さとみが馬に括られて、ひきずり廻される

場面があったが（私はテレビの予告篇を見た

だけなので、間違っていたらお許しを乞う）



で馬と一緒に走り廻らなけ

ればなりません。乱れる赤

い裳からちらちら見える真

白な、肉付きのいい足。紅

唇を衝く悲鳴。絶叫。馬の

いななき。

しかし元来私は時代劇は

好きではない。拷問は現代

の文明社会で白昼公然と行

われなければ、その魅力を

完全に発揮したとは言い得

ない、と頑迷に信じ込んで

いる伝奇家なのです。そこ

で島原を白昼の銀座通り

に、馬を、流行の尖端を行く四つ目玉のスポ

ーツ・カーに、そして時代劇女優を、男も及

ばぬ幅広い肩と腰とを持つ長身なグラマーの

私の恋人に取換えて撮影のし直しと行きまし

よう。

ニュースを伝え聞いた白昼の銀座四丁目

は黒山の人だかり。ビルの窓という窓。屋上と

いう屋上にも貴方方の顔が鈴生りです。日本

橋のオフィスで、課長や係長や男の社員や女

事務員達が見ている前で、床にきちんと跪

き、胸の大きくあいた驚グレイのスーツでピ

貴方が映画監督だったら、勿論あんな画面に
はしないでしよう。長い馬の手網の端にレー
シングを植え、さとみ嬢は可哀想だが白いふ
くやかなお腹を露出させてカメラの前に立た
せる。貴方の命令を受けた助監督君が、さと
み嬢の豊満なお腹にもレーシングを埋め込ん
で、手網と連結させるのです。痛がって暴れ
ない様にあらかじめ両手は後手に縛っておき
ましよう。馬の尻に鞭をくると、驚いた馬
が猛然と駆け出す。手網がじかにお腹の皮を
引張るので、女優さん是否応なしに、全速力

ツチリ包んだ肉体美の上半身に、ギリギリと後手の本縄を掛けられた私の恋人は、注射針を長い棒の先に括りつけた責道具で、スカートの上から、豊かな臀を突つかれ、突つかれ、うなだれることも、観念の眼を閉じることも許されずに、人だかりの日本橋通りから銀座まで歩いて引立てて来られます。

〈対話〉

妊婦二題

瀬沼四郎

A 女 秘書

「キミのところ、秘書嬢がかわったね」
 「うん。以前の子が妊娠しちゃってね」
 「それで、やめたのかい？」
 「まあそうだが、会社の都合にかこつけて妊娠第八カ月の終りまで勤めてもらった」
 「……」
 「毎日大きなお腹を抱えて出て来るのが、」
 「……」
 「……」

真中には、明るいセピアレッドのスポーツ・カーが一台停っているだけです。車の真後まで引立てられて来た彼女は、大きな身体に一杯羞恥を漲らせて、溶け去る様ないじらしさで洋服を脱ぎます。ピシリ、ピシリ。魁偉な裸の背に鞭を当てられて、群集に向って直立する彼女。私は心の寛い所を見せて、彼女をどんな姿勢で引廻すか、貴方方の御意見に任せましょう。こんな恰好にすることに決まりました。

「しかし、おかげで三カ月ばかり、だんだん膨らんで来る彼女のお腹を横目で眺めて暮した。とても楽しかった」

「なるほど」

「ときどきピクツ、ピクツと胎動するのが妊婦服の上からよく分った」

「……」

「ところが、それだけじゃないんだ」

「と言うと？」

「彼女、亭主に内緒で株をやって、最近の暴落で二十万ばかり損をしたらしい。その二十万ばかりを、ボクがボンと払ってやった」

「へえ、何も代償なしでか？」

「もちろん下心あったのとき。タダじゃ貰いにくらうと勝手な理くつをつけて、」

した。手は後手。言うまでもないことです。肉付きのいい背中、下部肩胛骨のなだらかなふくらみの尾根と、両手の小指と外脇に、フアスナーの様なレーシングはめられ、遅ましい後首を擱んで前屈みにされた彼女は両手を力一杯、背中へ捻じ上げられ、小指と肩胛骨のフアスナーを、左右交互に留められてしまします。痛さに魂消る悲鳴。宙に浮いて後を蹴る両脚。突き立てられた巨きいけど可愛いお臀に、鞭が、はっきりした赤線を刻む。

驚嘆みにされた首筋がますます下へ押しつけられ、両方の鎖骨を両方の膝に突き合わせ、レーシングで留められ、膝と膝もレーシングでくっつけられる。中腰でお尻を精一杯突出し、まるでひよこか駝鳥の様な頼りない姿にされた彼女は、その頼りない恰好を決定的にする為に、踵を思いきり持ち上げさせられて、爪先立つ、二纏で立たされ。踵を下に下すことが出来ない様に、針孔を地上すれすれにして、長い長い絹針を、踵の真中へ逆さに突き刺されるのだ。

その姿のままよちよちと、彼女は膝から下だけで歩いて、スポーツ・カーの本当の真後まで進まされる。そして最後に鼻の頭から鼻

妊娠の最後の二カ月のヌードを撮らせてほしいと……」

「それで、承知したのか？」

「そこはそれ、平素の信用がモノを言つて、彼女、ボクの嗜好に大いに理解と同情を示してくれたってわけだ。それから二カ月間、出産寸前まで、毎週彼女をホテルに呼び出して、猛烈に妊娠ヌードを撮りまくった」

「オール・ヌードも撮らせたのかい？」

「もちろん、オール・ヌードも撮らせてくれた。しかしこちらの目的は、雄大なポンポンを拝ませてもらふことにあるんだから、隠すべきところは隠したのが大部分だ。ところがそんな中に、かえって面白いのがある。ことに臨月になってから撮ったのに、いいのがある」

「ラージ・ポンポンじゃしょうがないが、一度彼女のヌードを見たかったな。美人でグラマーだったからな」

「それに芳紀二十三歳と来てるからね。すばらしい妊娠ヌードだった」

「それじゃそのうち、ゆっくり見せてもらいに行くかな」

B 妻の妊娠

「じつは、うちのやつが妊娠してね」

「ほう、それはうらやましい。それで奥さん。今何カ月だい？」

「七カ月ぐらい」

「そうすると、もう大分大きいな」

「ボクはキミとちがうから、これ以上大きくなったら、どうしようかと思ってる」

「奥さん、元気かい？」

「うん、まあね。ただ、便秘するので困ってる」

「浣腸したらどう？」

「毎日五〇〇CCずつ、温湯浣腸をしているんだ」

「キミがしてやるのかい？」

「そうだ。でも、はじめはいやがってね」

「そりゃそうだろう」

「このごろは、向うから催促するようになった」

「失敬失敬、ついこんな話をしちまって」

「いや、面白かった。帰ったら早速女房にこの話をしてやろう」

「奥さん、どう言うかな？」

「これが本当のケツ作だね」

「奥さんによろしく」

「ああ。しかしキミ、ボクが家内に浣腸したなんて、家内に言わないでくれたまえ。恥ずかしいからね」

「まったく、うらやましいな」

の中梁を通って唇頭まで、目鼻立ちの大柄な美しい顔のド真中に、縦一文字にレーシングをはめ込まれてしまうのだ。

特別仕立のスポーツ・カーはバックのスペアタイヤが普通より後に突出す様に着いているので、タイヤの下端に縦に植えたレーシングを彼女の鼻のレーシングと交接させても、車の後に続く白い豊かな駝鳥の裸身は、頭から足先まで車の陰にかくれる様な恐れはない。黒々と一際濃厚な排気ガスを、のけぞった咽喉や豊かな胸に吹きかけて車は、滑る様になめらかに、ゆっくりと動き出す。タイヤに鼻を引張られて後の駝鳥もよちよちと歩かねばならない。真紅の筋目のはっきりした白いお臀を突き立てて。

車は少しずつ、少しずつ、速度を上げる。

タイヤにくっついてのけぞった彼女の魁偉な美貌が苦痛に歪む。ハアハア、ハアハア、と喘ぎが次第に烈しく早くなる。一定の速度に達すると、爪先だけでは引きずられる巨大な軀を支えきれなくなって横倒しとなる。

それから……、いやもう止そう。時間がない。時間があつたら又来月。お目汚しの駄文で失礼……。

関谷夫人讃

花田一郎

私は東京へ出て来て十五年、知的な労働でもかなりつつこんだことを巾広くやっています。生活の単純化——そんな必要から、私の部屋へ月刊紙が運び込まれたことは稀です。三犬新聞など購読したことさえないので。みんな外で間に合わせます。週刊誌も私の部屋へはいったら最後、翌日はもうゴミ箱の中へはおり込まれる運命にあります。月刊誌すら一週間も私の部屋に滞在したものは稀です。奇クもその例外ではありません。

けれ共愛読していないという意味ではありません。毎月欠かさず読んでいます。それは昭和二十五年の寒い頃——十一月頃だったかな、あるいは二十六年早々だったかなという覚えではありますが、寒い夜だった記憶があります。あるいは二十六年四月頃だったかも知れません。大塚の駅の手前の、都電通りの

新刊書店で、農家で俵を縛る縄で、乳房をくびれる程縛られて、あうむけにされた女の胸部の写真を見つけたときの驚きと喜びをはっきり思い出すことができます。最古の愛読者の一人でしょう。奇クの全てを知っている筈です。

月刊誌すら滞在させない私の部屋に、今貴誌の12月号の関谷夫人のグラビア写真が三ページと同じく塚本鉄三氏の記事が六ページ。更に1月号のグラビア五ページ、塚本氏の記事十ページ。合計二十四ページが切り抜かれ、のりではり合わされてあります。恐らくこれは私の精神生活の伴侶として、私の部屋に永久に滞在するでしょう。

はり合わされた二十四ページの最初のグラビアのページにはペンで「奇譚クラブ一九六二、十二月号。」

masochism [meazokizim] の一つの極致と書き込まれてあります。奇クの十数年の歴史をふり返って、古川さん、川端さん、いろいろと思い出に残る女人像はありました。けれども共そういう人びとの印象も、この関谷夫人の像の前では薄れざるを得ません。古川さんの手記にせよ、川端さんの姿態にせよ、その中には男を求めるせっぱつまったあせりがありました。その言動のふしぶしに、マゾを売り物にする何かがありました。読者は追いつめられた両嬢のあせりを紙面から感じ取り、何かマゾ以外の何かが鑑賞の中に混って来てあせりを感じるのを禁ずることが出来ませんでした。

関谷夫人の出現は、そうしたものを完全に払拭し、マゾヒズムを純粹に抜き出した形で表現したことで、高く評価されてよいでしょう。

う。恐らく今後歴史を積み重ねて、何十年かの奇クの歴史で一番思い出に残る人といわれたとき、私は躊躇なく関谷夫人の名前をあげるでしょう。

貴誌に類する雑誌が、だんだんとふえて来ているのも私は知っています。しかしこうした思い切った飛躍ができるのは、やはり奇クとそれを与える京阪神地方の人びとの力によるものだと思ひあたり、私は「だから京阪神は好きだ」と思わざるを得ません。関谷夫人はあるいは私たちの内面生活を変えてしまう



賭犠にされた女

クロード・ユガ画

働らきをしているのかも知れません。

関谷夫人に望みたいことは只一つ。それは高峰秀子さんがもう愚作には出ないということです。マンネリズムにおちいった関谷夫人を見ることは私たちにっては、破壊された偶像を見るのに等しい。満足できるアイデアのない月は、いさぎよく棄権して頂きたい。そういう人が一人はいるということが、いかに奇クを重からしめる所以でもあることかーと思います。

最後にアイデアを一つプレゼントしておき

ます。「情婦マーン」これは永井荷風が熱愛した映画ですが、今リバイバル上映されています。その原作として名高い「マーン・レス・マオ」の最初のところで、流刑に処せられたマーンが馬車で数人の娼婦と一しょに、胴のくびれを鎖で馬車につながれ、顔をかくして貴婦人のはじらいを見せながら運ばれるというところがあります。そのときロベールと出会うのです。

胴のくびれを鎖でつながれた女——これくらい、女体を家畜につきおとした描写を私は知りません。流石はアベ・プレボオだと思ったものです。

山の中腹に三米ぐらいの小さい木があります。その木の二五糎ぐらいのところへ胴のくびれを鎖でゆるくつながれ、木に向って坐るのです。両手は小枝をしっかりとつかむのです。両手首は又しっかりと縄でくくられ、ゆるく木に結びつけられるのです。

そして背後から塚本さんはじめ数人の鞭打ちを背と尻に受けるのです。マゾの荒野で遂に狼たちに追いつめられた一匹の牝獣を表現するのです。かなり許された自由は、多くの表現の可能性を残しているでしょう。

それはもうプレイではありません。私刑です。動機は嫉妬です。

塚さん始め編集部に更によいアイデアがあれば一笑に付して頂いて結構です。



(リポート)

△テレビ▽に現れた緊縛場面

ああ後ろ手に縛られて

田村清彦

昭和三十七年十一月二十一日(水)の夜八時から八時半までのNHKTV第二チャンネルの放送は素敵だった。

連続講談劇「花の天一坊」という題で、このドラマに、美貌の女優、福田公子が出演した。あでやかな振り袖姿の腰元として、番組の前半、庭先におり立っている天一坊(坂東鶴之助)のそばへ現われたとき、「ああ美し

いなあ」と私は目を瞠った。その着物は、綸子ちりめんのような光沢を持ち、まるで総鹿の子絞りのような柔かい感触のもののように見てとれた。

大岡越前守から秘かに命を受けて住みこんだ女の間者という、彼女のその夜の役柄から推して、当然、私は、ある場面を予想した。

——しかし、あの美しい姿で後ろ手に縛られ

るということになる、あの背高に結んだ帯が邪魔して、高手小手というわけにはゆかない。まあしかし、この人の縄目姿はさぞかし素晴らしいだろうな——

私は期待に胸を弾ませながら見ていた。この私の期待は見事に的中し、私の願いはかなえられた。

越前守からの回し者であることを見破られ

た福田公子は、胸高帯をしめた振り袖姿のまま、後ろ手に縛られ、一人の武士に、後ろから縄尻を取られて、天一坊のいる広間に引立てられてくる。彼女は、そのふくよかな高胸を黒い縄で二重に縛しめられ、両手は後ろで縛られて、神妙に歩を運ぶ。両方の長い袂が美しく垂れている。まことに折り目正しい古典的な振り袖姿であった。

座敷に引立立てられてきた福田公子は、縄尻を取られたまま正坐する。天一坊が「その女を捕えてなんとするのか」と言い、天一坊と天一坊の参謀格の武士とのあいだに、二、三、台詞のやりとりがなされる。

まもなく、「あちらへ連れてゆけ」という参謀の命令にこたえて、縄尻を取る武士が、縄尻を引きながら「歩みませい」と言う。福田公子は、典型的な美貌の持ち主だから、まさに天下一品の、気品ある捕われ姿だ。

彼女がすぐに立たないので、武士がもう一度「歩みませい」と命じる。これに促がされて、彼女は、うなだれたまま、しずかに立ち上る。

こんどは、福田公子は、Uターンをし、こちらに背を見せて、もときた廊下へと、下を

向いておとなしく歩いてゆく。長い袂が後ろ手の下で美しく揺れた。

このときの、この美しい女優の心事のほどは、どんなだろうか？どんな気持で、両手を後ろに回されて、どんな気持で縄目を受け、どんな気持で歩かされているのだろうか？——私は、そういったことがらを、いろいろと考えていたのである。

両手首は背中中の帯のすぐ下で縄で縛られていた。さながら、滝れい子画伯の流麗の筆致によって描かれた絵姿を見る思いであった。なんという魅力的な優雅さなのであろうか。もしも、あの帯の結び方が、普通のお太鼓結びであつたら、両手首を高々と括しあげるこゝろができたろうにと、私には、その点だけが惜しまれた。私は、その美しい捕われ姿を眺めているうちに、妖しい胸のときめきを覚えそのあとも悩ましくて仕方がなかった。

だが、この美しい後ろ手姿が画面に現われたのは、時間にすれば、四分かんほどのことであつた。私は、もっともっと、長い時間、彼女の括られた姿を見たいと思った。

次回で、このシリーズドラマは完結すると

のことであつた。十一月二十八日（水）の午後八時が待たれた。

ここで思い出すのは、長谷川一夫・中村扇雀・花柳小菊・林成年らが主演した今年の春の東宝歌舞伎のことだ。この舞台の録画放送は第六チャヌル（ABCTV）で観ることができたのだつた。

中野実作「楼門の殺人」の後半の場面で、花柳小菊が、あのしなやかな身を、後ろ手、高手小手に縛られて引立立てられ、牢屋へ入れられる美しい姿を見せてくれたのである。そのとき、花柳小菊は、両手を思い切つて背中中の帯より高いところへ回して、高々と括られていた。もし、あのときの着物が、目もさめるように華やかな長袖のものであつたら、その美しさは最高のものであつたらうにと、私は残念に思ったものだった。

その点、限らない美しさを見せた福田公子の振り袖姿は、短い時間とはいえ、欠しづりに私の目を楽しませてくれたわけで、期せずしてこの特異な番組を放送してくれたNHKに対して、同好の士とともに感謝したいと考へる次第である。

創作

『悪魔の唇』

田沼醜男

明美ちゃんは浅草でストリップをやっています。ことし十六になったばかりなのに五尺五寸もあって、とても大きいのです。目方も凄く重くてこないだ測ってみたら十五貫八百もあったと云っていています。私は同じ年ですが明美ちゃんには、とてもかなわないのです。喧嘩をしたって負けてしまうと思います。

私は中学の頃から、明美ちゃんが好きでした。明美ちゃんは、お転婆で、意地わるで、とても綺麗でした。私は勉強はよく出来たのですが身体が弱いのでみんなからいじめられ

ていました。明美ちゃんは反対で勉強は出来ないのに、スポーツはなんでも得意だったので凄く人気がありました。私は明美ちゃんが好きで好きで死にたいほど好きでしたが、明美ちゃんの方では、私みたいな性質は大嫌いだと云っていました。だから私は一生懸命明美ちゃんのお気嫌をとって明美ちゃんの命令なら、それこそなんでもきかなければなりませんでした。試験のときなんか自分の答案のほかに明美ちゃんのも書かされたりした位です。

中学が終ると明美ちゃんは身体がいいので

ストリップパアになって有名になりました。私はいくら勉強したって明美ちゃんほどに有名にはなれないだろうと思うと、なんだか馬鹿らしくなっていました。それで高校に行くのもやめて明美ちゃんに家来にしてくださいに頼みました。明美ちゃんはいくら勉強が出来ても世のなかに出れば結局自分みたいに魅力のある身体をした女にはかなわないことが判ったかと云って、明美ちゃんはこまかいことが嫌いなのでアパートに来て女中がわりの仕事をするなら家来にしてやると云いました。それなら明美ちゃんのそばにいられ

るので私はよろこんで家来になりました。

私は家来でも、明美ちゃんの家来だから嬉しいのです。家来の仕事が辛いと思うときでも明美ちゃんの顔を思いだすと愉しくなります。家来の仕事はお料理から雑巾がけから、それこそ数えきれないほど沢山あってとてもむずかしいのです。明美ちゃんは勉強が出来てもなんにも役にたたないと云って笑います。がたしかにそうなのです。私は勉強なんかしないで明美ちゃんに家来の仕事を仕込んでおいて貰えばよかったと思います。

でも私は洗濯は名人です。明美ちゃんは大変な洋服はみんな洗濯屋に出してしまいますから私が洗うのは下着だけです。私は明美ちゃんの下着が好きです。明美ちゃんの下着はどれを見ても恰好がよくてスベスベしているのです。私は自分の下着が恥しくなる位、こんな綺麗な下着を毎日着ている明美ちゃんはやっぱ凄いなと思います。ただ下着の名前はみんな英語なので、そんな英語は学校では教わらなかったで間違えたりすると明美ちゃんにはひどく怒るのです。明美ちゃんは下着の名前を覚えなないと御飯を食べさせないと云って怒るのです。御飯を炊くのは私でも御飯を買うお金は明美ちゃんのお金なので御飯はや

っぱり明美ちゃんのものなのです。私は御飯を食べさせて貰えないとおなかが悪くし、それに英語の勉強は大事だと思って一生懸命に覚えしました。

スリッパというのは明美ちゃんが洋服の下に着ている長い下着のことです。白いのと黒いのがあって黒い方が高いのだそうです。私も黒い方が明美ちゃんが綺麗にみえるので好きです。

ペチコトは、スカートのなかにはくのです。かたい蚊帳のような生地で顔をこするととてもいい気持です。

ブラジャはバストにあてるのです。眼鏡のような形をしていて、明美ちゃんをよくふざけて私の顔にかぶせるのです。でも私の顔はバストではないのでうまくかぶさらないのでしまいに二人して笑ってしまいます。

パンティというのはパンツのことです。私のパンツはダズダズだけれど明美ちゃんのはひどく小さくてたたむと片手でにぎれる位です。明美ちゃんは身体が大きいのにパンティは小さいのですから、ヒップのところがち切れそうにみえるのです。それが凄く恰好がいいと思います。私がそう云ったら明美ちゃんは怒ってフトモモで私の頸を締めました。

明美ちゃんのフトモモは、とてもふとくはりきっていますから本気で締められたら私の頸なんかすぐに折れてしまうのです。頸が折れれば死んでしまうので私は一生懸命にあやまってやっとなおして貰いました。でも私は明美ちゃんのヒップをほめたのに、いじめられるのは不公平だと思います。明美ちゃんはパンティは七十枚も持っていてズラリとならべると白だの黒だの赤だのピンクだのいろいろな色があつてとても綺麗です。明美ちゃんはパンティは毎日はいかえるのです。

ストッキングは長靴下のことです。ゴムのようにのびるので明美ちゃんのフトモモがいくらふとくても大丈夫なのです。でも線がほつれることがあつて、そうすると明美ちゃんはヒステリーみたいになって怒るのです。そして私の洗濯のしかたが悪いせいだと云って往復ビンタをくれるのです。はじめて往復ビンタを貰ったときは、私は男の子の頭は尊いところだからと云って親にもぶたれたことがなかったのでびっくりしてしまいました。明美ちゃんにそう云うと明美ちゃんはせせら笑って私の親なんかは古いから、そんな馬鹿なことを云うので男などというものは女の手でひっぱたかれなければ正気がつかないのだと

云うのです。でも私はそのうちにだんだん慣れてしまっていて、いまでは明美ちゃんのまっ白い手がピシヤリ／＼ピシヤリ／＼と小気味よい音をたてて私の頬に炸裂するたびに、ますます明美ちゃんが好きになる位です。でも平気な顔をしていては反抗するみたいなので、わざとこころがったりすると明美ちゃんは満足してやめてしまうのです。

でも私は明美ちゃんに叱られてばかりいるわけではありませんせん。たまには可愛がって貰うことだってあるのです。同じ年の女の子に、可愛がて貰うというのは変だと思われるかも知れませんが、明美ちゃんはとても十六とは思えない位大きくて堂々としているので、その前にでるとついそういう具合になってしまふのです。私は下着の名前をちゃんと覚えてしまつて洗濯も上手になったので、明美ちゃんに感心して可愛がってくれまし



た。可愛がって貰ったのは、そのときがはじめてなので、それから私は私になにか感心なことをするたびに可愛がって貰えるようになりました。

ある晩、私が明美ちゃんの下着を洗っていると明美ちゃんはニヤニヤして見物していましたが、突然私の前に来てスカートをまくったのです。でもストッキングをはきかえたいときには明美ちゃんはいつもそうやってスカートをまくるので、私はいつものようにしゃがんでストッキングのいちばん上のガアタアのところを手をかけようとしてしまった。する明美ちゃんは凄く力のあるシタハラでポイン／＼と私を突きとばしたので、私は倒れたまま叱られるようなどんな悪いことをしたのだろうと思つて考えていると、明美ちゃんは私の頭をまたいで立ちはだかりました。私はおそろのおそろ見上げました。まくり上げたスカートの奥で明美ちゃんのあのフトモモが一際

しろくみえました。

——ジレットタイタラアリヤシナイノカワイガ

ッテヤルンジャナイカノ

——ば、ばく叱られるのかと思って……。

——バカノココロナメルノヨノ

明美ちゃんはいきなりドシンと腰をおろしはりきったフトモモを私の口に押しつけました。私はもう頭がカッとして夢中になってベロベロと舐めました。舐めても舐めても唾がどんどん湧いて来て明美ちゃんのフトモモは私の唾でテカテカに光りました。その日は明美ちゃんは黒いパンティをはいていてその上ストッキングもつけたままでしたが、それが一層明美ちゃんのフトモモに大胆な表情を与えていました。私は唾で綺麗な下着をよごしてはいけなのでフトモモのつけ根の露出したところだけを何度も舐めまわしました。明美ちゃんはゲラゲラ笑っていましたが、私はこんなムッチリしたフトモモをもっている明美ちゃんの偉さがつくづく身にしみて判ったような気がしました。最後に明美ちゃんはパッとマタをひろげてそのあいだから私を見下しました。

——ドウ、アタシノアリガタサガワカッタ？
——うん。

——コレカラモ素直ニイウコトキクノヨ。ア

タシノ命令ハゼツタイナンダカラ。ヨク

ッテノ

——う、うん。

——ソノカワリアタシガ感心ダナトオモッタ

ラパンティモヌイデカワイガッテヤルカ

ラネ。タノシミニシテテイイワヨノ

でも明美ちゃんはこの約束だけはなかなかかなえてくれそうもありませんでした。私はもっともっと明美ちゃんの云いつけによく従って一日も早くパンティを脱いで可愛がって貰いたいものだと思います。あんまりそのことばかり思っていたので夢にまでみた位です。でも夢のなかでは私が舐めようとするとヒップはピッチリとパンティをはいていて、明美ちゃんが意地わるそうに笑いながら見下しているのです。とにかくこの日からというものはますます明美ちゃんに卑屈になつて行き、明美ちゃんはいよいよ残酷になつて行ったのです。

お風呂のことをバスというのですがバスの仕事では私はいつも失敗ばかりしています。明美ちゃんは自分のことは自分でせよという言葉の反対みたいな性質なので、ことにバスにはいったが最後、私は徹頭徹尾明美ちゃん

の手足のかわりになって働かなければなりません。それに明美ちゃんはわざとわがままを云って私を困らすのが面白いらしいのです。

明美ちゃんは生まれつき、人をいじめるのが好きな性質ではないかと思うのですが、いじめられて辛い思いをするのは私なのに、その私は明美ちゃんが死ぬほど好きなのですから不思議なものです。明美ちゃんは私みたいな性質をマゾヒストというのだと教えてくれました。明美ちゃんは身体が大きいので明美ちゃんにファン・レタアをよこす人はマゾヒストの人が多いのだそうですが、明美ちゃんはマゾヒストなんか軽蔑するだけで、それこそ鼻もひっかけてやらないのだと云っています。

明美ちゃんがバスにはいりたいときには私を呼んで服を脱がさすのです。明美ちゃんの服は思いもよらないところにホックだのジッパだのが附いているのでこの服はどうなっているのかと頭に入れるまでが大変です。明美ちゃんは私に脱がさしておいて自分ではそれこそ指一本動かそうとはしないのです。そして私がまごついたりとすると明美ちゃんはとても短気なので、すぐに私をぶったり蹴ったりするので。私は明美ちゃんのお気嫌をよ

くしておかないと、また可愛がって貰う愉しみが消えてしまうので一生懸命に脱がせようとするのですが、慌てたら最后決してうまく脱がされるものではないのです。でも下着になれば私の得意なのでとても手際よく行くのです。ペチコト、スリッパ、ブラジャ、パンティ、ストッキング……みんな私が手塩にかけたなつかしい布地です。私は下着のことにかけては着ている明美ちゃんよりもくわしく知っている位なのです。

明美ちゃんはハダカになると一層大きくみえて凄く恰好がよくて、まるでアメリカの高級車かジェット機みたいです。バスには大きな鏡があって明美ちゃんは、その前で私とならんで立ってみるのが好きなのです。明美ちゃんのそばにならぶと私のハダカはまるっきりちっぽけでしなびてみえるので明美ちゃんにはわざとそうやって私をからかうのですが、私は恥しいよりもなによりもう心の底から明美ちゃんに圧倒されてしまうのです。ところがその私が明美ちゃんの身体を流さなければならぬのだからたまりません。大きな明美ちゃんをすみからすみまで磨きあげるのは、それこそ並大抵の苦勞ではないのです。そして明美ちゃんと来たら私が息をきらして

洗っているのも知らん顔で鏡を見たり鼻歌をうたったりしているのです。そのくせ洗い終ってから調べてみてちょっとでも気に入らないうところがあると遠慮会釈なく文句を云うのです。

——アタシノカラダハ芸術ナノヨ。ナニサ、
コノアライカタハ。ウエストノヨコノト
コモウイッペンアラウノ！

それでも私は明美ちゃんの身体を洗わして貰えるのを心から感謝しているのです。何故かというところも明美ちゃんに教わったのですがストリップのお客さんはストリップアの人たちのハダカを見に来るので、お客さんはお金を払うのに、私はただで明美ちゃんのハダカが見られるのだし、その上洗うときには手でさわれるのですから有難いと思わなければ罰があたるのです。

ただ一つだけどうしても困ることがあるのです。私は明美ちゃんを洗っているとどういふわけかだんだん頭のなかがボウツとして変な気持ちになって来るのです。ところがそのうちに明美ちゃんは家来のくせに生意気だと云いだしたのです。そして明美ちゃんにたいして尊敬の気持ちが足りないからそんなふうになるのだと云うのです。私は明美ちゃんには心

から征服されてしまつて崇拜しきっているのに変な気持ちになるのですから、そんな云いかたをされるのは、とても悲しかったのですが、明美ちゃんはこのごろではますます残酷になつていたので口答えでもしようものならそれこそどんなひどいお仕置きをされるか判らないと思つて明美ちゃんのまえに頭をすりつけてあやまりました。

それからはいつでも変な気持ちにならないように気をつけていたのですけれど、明美ちゃんの大きな身体にさわりはじめるとまるで電気にでもかかったみたい頭に頭がながかすんで来るのです。

変な気持ちになつていのが明美ちゃんにみつかりでもしようものなら、それこそ大変な目にあわされます。明美ちゃんの眼はもともとあがり眼なのですが、そのあがり眼がなお一層キリキリとつりあがつて来て、いきなり物も云わずに私を踏みつけるのです。バスはタイル張りだし、明美ちゃんは十五貫八百もあるし、それに明美ちゃんの足のマニキュアした爪が情容赦なく肌に喰いこんで来るのです。私は痛くてたまらないので思わずヒイヒイ音をあげてしまうのです。そうすると明美ちゃんは眼をキラキラさしていかに気持ちよ

さそうにじいっと私を見えるのです。こうなったら私がいくらあやまっても血を見るまでは勘忍してくれませんか。明美ちゃんはきたならしい虫けらをつぶすみたいにキング・サイズの重みをかけてぎゅうぎゅう踏みにじるのです。

いつだったか一度だけあんまり痛いので夢中になって明美ちゃんのフトモモにしがみついて行ったことがあるのですが、結局私は明美ちゃんの強さをいやというほど知らされてしまったのです。私がフトモモにだきついた途端、眼のまえにある明美ちゃんの豊満な腰がグイッと一ひねりねじれたかと思うと私はいとも簡単にタイルの上に振り落とされてしまったのです。明美ちゃんはニヤニヤ笑っていましたが、私は自分のありったけの力をだしてもかなわないバネ仕掛けのような明美ちゃんの腰をただただ見守るばかりでした。もともと明美ちゃんと私とは身体の出来具合がちがうのでしょうか。私の身体が一山いくらなら明美ちゃんの身体は高価な舶来品のよくなものなのです。それに明美ちゃんはストリップで毎日きたえあげているのですから、私は男でも女の明美ちゃんに負けてしまうのです。

私は明美ちゃんにそれほど痛い目にあわされていくのですから嫌だと思うのが当りまえなのにマゾヒストの性質なのでタイルの上をのたうちまわりながらますます明美ちゃんが好きになってしまふのです。なにしろ私の頭の上には明美ちゃんのはりきったミルク・タンクが聳え立っていますし眼のまえには私の胸ほどもあるフトモモが二本立ちならんで貧弱な私を脅迫するように迫って来るのです。私は心の底から心服の気持が湧いて来て、やっぱり明美ちゃんは偉い、私なんかはいくらいじめられたって、それがちょうどいいのだと思ってしまうのです。

しかしなんといってもいちばん辛いのは夜になってからです。明美ちゃんは夜は大抵男のひとを連れて来て明けがた近くまでふざけているのです。私はそのあいだずっと台所で起きていて明美ちゃんの命令を待っていないければなりません。男のひとは日本人のことは滅多になくてほとんど外人ばかりなのです。たまに日本人が来ると明美ちゃんはどういうわけか私にシーズン・バンドを出さしてパンティの下にそれをつけるのです。明美ちゃんには勉強なんか嫌いだったから英語も出来なかったのに外人と付き合っているせいかいまでは

ペラペラで、とても発音が綺麗で私なんかそばで聴いていても明美ちゃんが何をしゃべっているのかさっぱり判らないのです。それでもこんなに外人が多いのはすこし変だと思つて訊いてみますと明美ちゃんはふざけて私を蹴とばしました。明美ちゃんは本気で蹴とばしたのではなかったので痛くはなくても私もおかしくなって笑ってしまいました。それから明美ちゃんにいろんなことを教わりました。

明美ちゃんは日本人よりもアメリカ人の方が好きなのです。どうしてかという日本人は人種が低級なのでアメリカ人にはどうしたってかなわないのです。日本人は身体も貧弱で無恰好だし文化だってひどく遅れといえるのです。だから日本人の女のひとは心の底ではみんなアメリカ人と結婚したがっているのです。ことに明美ちゃんは外人に好かれるタチなので日本人なんか眼中になくて日本の男の黄色い腕でだかれるなんて想像してみただけでもゾッとするのでそうです。そして日本の男なんか明美ちゃんの日本人ばなれのしたハダカを拝ませてキイキイ泣声をあげる位夢中にさしてやってしぼれるだけお金をしぼったらあとは古雑巾みたいに捨ててやるだけで明

美ちゃんの純情はアメリカ人のためにしまつてあるのだそうです。日本人が来るとシーズン・バンドをつけるのも、そうすれば早く追いだせるためだと云うのです。

私は明美ちゃんがいっのまにこんなにいるんなことを覚えたのだらうと思つて感心してしまつと、ますます明美ちゃんが偉く見えて来たのです。でも日本人の女のひとがみんなアメリカ人を好きになつてしまつたら日本人の男はどうなるのだらうと思つて心配になつて来たので明美ちゃんに訊いてみると明美ちゃんは日本の男はマゾヒストが多いからみんな明美ちゃんみたいな綺麗な女のひとの家来になればいいので、いくら明美ちゃんだって日本の男がなんでも従順にハイハイ云うことをきいていれば、たまにはお情けにフトモモの一本位抱かしてやらないこともないと云うのです。私はそれではみんな私と同じことになるので、そんなふうになるとは思えないのでよく考えてみると私は外国の映画に出て来る女優のひとが好きなのです。だから日本人の男は外国の女優のひとの写真を見て愉しめばいいのだと思います。明美ちゃんにそう云うとニヤニヤして笑っているので私は冗談に、私だってアメリカ人の女のひとと結婚し

て貰いたいのだけれど結婚してくれそうもないし明美ちゃんは外人みたいな身体つきをしているので家来にして貰つたのだと云いますと明美ちゃんはさもおかしように笑いだしてしまいました。明美ちゃんは夜帰つて来ると大抵酔っぱらつていて荒らっぽくなつていたのでこわいのです。私は急いで明美ちゃんのうちへまわつてハイヒールを脱がさすのですがハイヒールは西洋菓子みたいに綺麗な明美ちゃんの足の形そのままに作つてあつてピタリキュウのキュッキュとはまりこんでいるのでなかなか脱がされなくてそうすると明美ちゃんはすぐにイライラして来て私を蹴とばすのです。明美ちゃんの脚は凄く長くてハイヒールをはいているとちょうど私の胃のところに明美ちゃんのマタが来る位長いしヒザをキュツとのぼすと両脚がピッタリくっついてしまつて水の漏れる隙間もない位まっすぐでスマアトな脚なのに明美ちゃんの身体はどこを見てもコリコリひきしまつていて筋肉質なので、おどろくほど力が強くて私などひとたまりもなく蹴り倒されてしまうのです。それで私は外人が見ているまえで明美ちゃんに蹴り倒されるのでとても恥しいのです。私もそのあとはもっと恥しいのです。私は

パンツ一枚のハダカにならされるのです。明美ちゃんは私がハダカになるとまるっきり貧弱でみっともないので、ますます残酷になつて来ていい気持がすると思つたのです。それで私はハダカにさせられてそれから明美ちゃんたちの足もとに四つんばいにならされるのです。そうすると明美ちゃんは私の背中にドンと地響きたててまたがるのです。またがるとき明美ちゃんは電車のなかやなんかで女子高生の一ひとがよくやるようにスカートのうしろの方を勢よくパツとはねのけてまたがるのです。ですから明美ちゃんはスタイルブツクからぬけ出て来たような恰好をしています。私の憐れな背中では明美ちゃんの下半身に着だけで踏み敷かれていと同じなのです。外人は呆れたような顔をして眺めています。明美ちゃんが綺麗な英語で何か云うと青い眼が大胆な表情を浮かべて来て猛然と私の背中にまたがるのです。明美ちゃんはキングサイズだし外人はとても立派な体格をしているので私は二人の重みで背中の骨が折れてしまうのではないかと思つたのです。私が死ぬ思いで我慢しているのに明美ちゃんはリュウリュウたるヒップの下わずかパンティ一枚だけへだてて踏み敷いた私のことなど忘れたみたいに外人とふざけ合うのです。

黄色い明美ちゃんの嬌声が挑発するように耳をつんざいても私は一生懸命明美ちゃんたちを支えていなければならぬのです。でも明美ちゃんがふざけてバタバタ暴れたりすると背中が弓なりに曲がってしまつて、それに明美ちゃんのストッキングをパンティに吊っているガアタアの金具が私の肌にギリギリ喰ひこんで来たりして、それがひどく痛くてつい横眼で見ってしまうのです。そんなときには大抵明美ちゃんのスカートをパンティのあたりまでまくれあがっていて、あのまっ白なフトモモが容赦なく私の眼にとびこんで来て、明美ちゃんは私の上にまたがっているのですから見えるのはフトモモの裏がわでなんだかいともより一層ふとく残虐に見えるので私はうっとり見惚れてしまうのです。

明美ちゃんたちは合わせると四十貫近くもあるのですが、明美ちゃんは私がいくら重くてもそれは明美ちゃんの身体がいいから重いので、かえって有難く思わなければいけないのだと云うのです。でも明美ちゃんたちがあんまり暴れると私は力が弱いので腕が馬鹿になつて来て乗りつぶされてしまうことがあるのです。そうすると明美ちゃんはバラ色に血のはったフトモモもあらわにひっきりかえつ

てしまうので眼尻を決して私に躍りかかるのです。そして私の耳をつかんで無理やり引立たせておいてあのキングサイズの身体にみないぎる物凄い力で私をはり倒したり蹴ころがしたりするのです。私は明美ちゃんの思うままにころがされながら、それでも明美ちゃんにたいして恨みがましいような気持はすこしも湧いて来ないのです。

それでも明美ちゃんにお仕置きされているうちはまだいいのですが、明美ちゃんは飽きっぽい性質なので私をいじめるのに飽きて来ると今度は外人に私を責めさせるのです。よく遊びに来るジミイという外人があつて見るからに男らしいたくましい体格で、それに凄いはど奇麗な眼をしているのにひどく残忍な性質なので私なんかジミイの澄みきった青い眼でちょっとにらまれただけで縮みあがつてしまふ位です。ところが明美ちゃんはジミイに抱きしめられると骨の髄までしびれてしまふと云つて、そしてとうとう結婚の約束までしてしまつたのです。いつもは明美ちゃんは外人にだって大きな顔はさせておかないのにこのジミイにだけは明美ちゃんがふだん馬鹿にしている日本の古い女みたいにおとなしくてジミイに何か云われると涙ぐむようなこと

さえあるのです。でも私の分際ではただ明美ちゃんが結婚したら捨てられてしまふと思つてそれだけが心配で、それこそどんな云うことでもきくしジミイのこともそうなれば御主人と思つて真心からつかえるからどうか捨てないで下さいと明美ちゃんの脚に顔をこすりつけて頼んでみたのですが明美ちゃんは結局ジミイ次第だと云うのです。だから私はどんなにジミイに痛められても明美ちゃんのそばにいさせて貰いたいのぞなんとかしてジミイの好感を得たいと思うのです。

ジミイはいかにも女のひとが夢中になりそうな凄い笑顔で私を見すえていますがいきなりサツと腰のバンドを引抜くのです。バンドは革でそのバンドが私の身体中背中といわず胸といわずときには顔にまでまともに落ちて来て私は皮膚がズタズタに破れて血だらけにされてしまふのです。でも反抗してみたところで私は明美ちゃんの腰の力だけで振り飛ばされる位なので負けてしまふに決まっています、それにジミイ好に意を持って貰いたいのぞ私に出来ることと云えば四つんばいになつたままヒイヒイ云つて部屋の中を逃げまわる程度が関の山なのです。そのくせそんなときにもジミイと眼が合つたりするとジミイの眼

は凄く奇麗で私の方はしなびたようなハダカで四つんばいになっているので、いかにも人種が低級なことが判ってとても恥しくなってきた何故だか自分でも知らない間にニヤニヤ笑ってしまうのです。

明美ちゃんは同じ日本人なのに私の身体から血が流れるたびにニクズキのいい脚をバタバタさせてキャアキャア笑って見ているのです。私は痛めつけられて息もたえだえになりながらマゾヒストの悲しさに明美ちゃんがふるいつきたいほど凄艶だと思ってしまうのです。しまいに明美ちゃんもパツとスカートをまくりあげてストッキングのガタアをフトモモの横のところからはずしてジミイと二人して私を痛めるのです。こうなったらもう行きつくところまで行かなければ駄目で私が一生懸命この世にも美しい若い恋人たちの足もとに頭をこすりつけてお慈悲を願ったところで勘忍してくれるものではありません。

——ナニヨノ ホントハイジメテモライタイ
クセニノ アタシタチハイジメタイホウナ
ノヨ。ダカラチヨウドイインジャナイカノ
そう云われてみればたしかに明美ちゃんの云う通りなので私はやっぱり生まれつきひどい目に合わされるのが運命なのです。

揚句の果てに明美ちゃんたちはダンスをするのです。もともと明美ちゃんはとてもダンスが好きで外人が来るといつでも踊るのです。がダンスが出来ない私でも見惚れてしまう位うまいのです。そして私の上でダンスを踊ることを思いついたのもジミイなのです。明美ちゃんはストリップで使う凄くカカトの高い恰好のいいハイ・ヒールを見合わせてニヤニヤしながら長い脚をもちあげて私の頭に片足かけるのです。フンワリとあたたかい風が明美ちゃんのスカートの奥から流れて来て私はこれから自分をキュウキュウの目に合わせてくれる筈のハイヒールのカカトのところに接吻しなければならぬのです。そうすると明美ちゃんたちはサツと私の頭をまたぎ越して二人して私の身体を踏んずけてダンスをします。私は身体を踏まれるのは慣れているので割と平気なのですがハイヒールのカカトはとても痛くてそれにストップ用なのでカカトが錐のようになっていてこれで踏まれると身体中悲だらけになってしまうのです。それに明美ちゃんたちは踊りだしたらもう靴の下に踏んずけられてのたうちまわっている私のことなんかそっちのけで気持よきようにピタリ身体をくっつけて踊っていて、明美ちゃん

んは五尺五寸もあるのでジミイとそうやっている外国映画の恋人たちのように似合っていて私は巨人国へ来た余計者みたいな気がして来てやっぱり明美ちゃんはちっぽけな日本人なんかより生まれつき外人にふさわしい立派な女性なのだと思います。そして私はどんなに痛くても音をあげたりするとこの残酷で美しい恋人同志のあまい雰囲気から叱られるのです。

こないだロックンロールとかいうダンスをしたときには死ぬかと思いました。凄く乱暴なダンスでそれに私はそのまゝにバンドとガタアでいやというほどお仕置きを受けていたので身体中血だらけになってウンウンうなっていたのですけれど明美ちゃんは肉感的な嬌声をはりあげてジミイと踊りまくっているのです。でも私は乱暴なところがとても明美ちゃんに似合うダンスだと思いました。リズムに合わせて明美ちゃんは凄く勢で腰を振るのでスカートの傘のようにまくれあがってそのたびに甘酸っぱいような臭いのする風が私の鼻をなぶり明美ちゃんのまっ白な下半身は否応なしに私の眼にとびこんで来るのです。明美ちゃんはその日は真赤なパンティをピタリとはいって私を踏んずけるたびにはちきれそうなヒップがブルンブルンと揺れるので

す。さつき私を痛めるときがアタアははずしたのでストッキングがすこしずりさがって、て精悍なフトモモの筋肉がひきしまったりゆるんだりするのが見えました。私はこれが見収めかと思ってその巨大な下半身をなつかしく見上げていたのです。そのうちにジミイが私に気がついて青い眼でじっと見つめているので私は恥しくなって明美ちゃんのヒップやフトモモを見るのはやめました。するとアツ

と思う間もなくジミイの頑丈な靴が私の顎を蹴上げ男らしい、よく透る笑声がきこえました。続いて明美ちゃんのハイヒールが躍りかかって来て私の顔を滅茶滅茶に踏み砕いたのです。このはなやかなハイヒールは明美ちゃんがストリップでお客様を魂の底までトロトロに誘惑してしまうときにはくハイヒールなのだと思つたのが最後に私は眼の前がまっくらになってそのまま気絶し

てしまいました。

気がついたときにはあの嵐のように猛烈なロックンロールも終っていてホッとしましたが、私は左の眼が見えないしひどく痛むのでさわってみると明美ちゃんのハイヒールで眼玉を踏みつぶされたらしくどすくろい血糊が手につきました。そして、その日以来、私は片眼になりました。ジミイと明美ちゃんはいっ結婚するのかまだ判りません。(おわり)

限定版 特別号 案内

第一弾、第二弾、第三弾、第四弾と引続いて刊行された本誌の限定版特別号は、その豪華なモデル陣の美女を縦横に駆使して、素晴らしい緊縛ポーズを展開しております。第二弾はいち早く売切れとなりましたが、第一弾、第三弾、第四弾も今や残り少なくなりました。縛られた美女ばかりの艶妖ポーズと四馬孝画の緊縛画集とによって、どうか痺れるような責めの醍醐味をお楽しみ下さい。

第一弾

緊縛フォト・アラベスク

略号「あらべ」 定価五〇〇円

本誌の黄金時代のモデル嬢の素晴らしい緊縛姿ばかりを集めた匂うばかりにあでやかにも美しいフォト集です。全巻二十六項目、七十七葉に亘り、文字通り表紙から裏表紙のハシに至るまで、すべて緊縛女体のむせかえるような、むんむんするムードで埋めました。まだお求めにならないマニヤの方は、是非コレクションの一端にお加えになって、その妖美のエキセントリックをお楽しみ下さい。

第三弾

緊縛写真グラフィック集

略号「グラフ」 定価五〇〇円

絹川文代、大塚啓子、愛川悦子、桜井葉子、等の本誌で育てたベテラン・モデル嬢の活躍による最も優秀にして鮮明、且つ魅力的な緊縛艶姿ばかり百十五態を集録した「グラフ」です。誌面いっぱいに所狭しと盛り上げる大型グラフィックの迫力は、きつと皆さまを、この妖しい異常美の縛りムードの中へと誘い込むことでしょう。女体緊縛マニヤの皆さまに自信を以ておすすめ出来るグラフィック・フォト集です。

第四弾

緊縛フォトと緊縛画帳

略号「別特」 定価五〇〇円

三十六葉に及ぶ四馬孝描く粒選りの傑作責画集のケンランたる陳列に加えて、本誌の発掘した新人モデルである、四方清美、花本京子、柳初子、山路ミヨ子、館典子、熱海容子、前本妙子、浜千代子、大井小夜子、加茂良子等の新鮮な悦虐姿態と加賀利江子、藤田節子、萩千恵子、桜井葉子、絹川文代、大塚啓子、須川令子などの代表的ポーズによって味をつけました。どうぞ御一見下さるようおすすめします。

私の責め資料行脚

小 さ な 窓

泉 辰 之 助

(一)

「渋谷行はもうお終いよ」

と云い乍ら銀座尾張町の、地下鉄の階段を上って来る女があった。

阿部一郎は、まだ其れほど遅い時間とは思わなかった。

「やあ、礼ちゃんじゃないか」

「まあ、阿部さん」

自然二人は肩を並べる恰好になって、有楽町の方へ歩き出した。

「弥助(すし)でもどうだね」

「結構だけれど、今から車で渋谷まで送って下さない。東横線の終電に間に合うわ」

「よし、それもよからう、だが大分お急ぎの

様だね」

阿部は中型の車を止めた。丁度お二人連れには狭からず広からず、誠にお誂え向きと云った車である。

「ダンスお上手になったわね」

「まあお蔭様でね、ダンス位やれなくてはキヤバレー一つ行けないからな。然し今の若い御婦人は、皆んなお好きな事だね」

「男の人だって同じ事よ」

「けだるい様なブルースだの、甘い匂のするタンゴだの、ジッと聞いているだけでもいいからな、誰だって踊りたくなるよ」

「そうねえ」

「早く覚えりゃよかったんだがね、元来、僕という人間は、心臓が弱いタチだから、相棒

がいないと、中々とり懸かれないんだよ」

「すると近藤さんは貴方にとって、悪友でもあり、善友でもあるのね」

「まあ、そう云う訳になるか」

戦争という永いブランクな期間があった阿部には、とてもダンスなど習う様な余裕にも、環境にも恵まれず、漸く戦後の激しい世相の変化に足並を揃え様と焦せるばかりであったが、同じ会社の若い連中の一人である親友の近藤に、先ず相談した。彼も同じ考えであったから、たちまち謀議一決して、丁度近藤の昔馴染の新子に又相談をもちかけた。

新子は(ナンダつまらない)と云わぬばかりの顔をしていたが、結局彼女のアパートを土曜の午後解放して、ボックスから此等幼稚

園の連中を教えてやろうという気になった。熱心に集って一カ月、漸くどうやらレコードのテンポに合う様になると、もう小さい部屋などで、やっついては詰らない彼等は、新子の勤め先へ押出した。焼けない銀座裏の露路の中にある其の店は、落着いた銀座らしいバーで、其処に礼子もいるのである。ステップを踏むぐらいが精々という広さだから、ダンスなどほんの口実で、今では待ち合い場所となり、そこから夜の街へ流れ出るのが、いつも決ったコースになっていた。

「中目黒、どの辺？」
「祐天寺の方へ少し行ったところ」

車は礼子の下宿に曲る角まで来た。

「じゃ、ここで失敬」

阿部には其の時まで何の邪心もなかった。

「一寸寄って行きませ

ん。お茶ぐらい御馳走してよ」

急に礼子に手を引っぱられて、つい下りて了った阿部は、自動車のテールランプが闇の中に消えて行くのをボンヤリ見送った。

「汚たない家よ」

女らしい心使いからか礼子はそんな事を云

って、細い小路の生垣を先に立って歩いた。

成程あまり奇麗ではないが、其れでも小さくぐり門を入れて、一寸離れめいた横手の方へ案内した。

「中々静かでないね、それに家の人とは顔を会わさなくてもよいので、こんな時には全く大助すかりだ」

部屋は流石に女の住居らしいなまめかしい空気がどことなく漂っていて、阿部には急に、別の世界へ来た感じが強かった。

「今夜はいやに蒸すこと、貴方、早く上着をとおとりなさいよ」

「ウム、まず脱がせて貰おうか」

礼子は電気冷蔵庫から、冷たいおしほりを持って来てくれた。

「阿部さん本当に汗かきね」
「僕は一寸暑いと、これだから閉口だよ、殊に礼ちゃんみたいな奇麗な女の前にいると余計だね」



「うまい事ばかり、私本気にしてうわ、一寸失礼」

彼女はそのまま隅の方へ行って、なんの遠慮もせずにワンピースをさらりと脱ぎ捨てた。それがあまりにも自然だったので、阿部の方が、まともに見ていられない程であった。スリッパだけになった礼子は、サントリイの角瓶を茶棚から出した。

「これでいく？ それともビール」

「いいよ、ビールは買いに行くだろう」

阿部はさっき地下鉄で礼子に会った時は、相当酔っていた様だが、今は却って、一寸こうやって彼女と二人、差向いでウィスキーグラスをなめるのも誠によき哉と、思わずにはいられない程の、センチメンタルになっていた。

「君、第三の男のチターの伴奏は素敵だね、こんな時、あんな音楽を聞くとたまらない」

「レコードあるわ、かけましょうか」

「家の人に悪いね、こんなに遅くなって」

「でも低音にすればいいでしょう、妾も大好き」

礼子はポータブルを開けた。

あの何んとも云えないチターのスリラーな旋律が流れ出した。

「ウン、矢張りいい」

「いいわねえ」

二人ともウィスキーをなめ乍らふけていく夏の夜を楽しんでいた。

「礼子ちゃん、前から思っていたんだが、君バアリにどこか似ているよ」

「有難う、フフ」

実際、彼女のプロフィールが第三の男のバアリに似ている。そして今スリッパだけの礼子の中肉中背とも云える肢体が、この映画の女にそっくりの様に思えて来た。

「涙のワルツもあるわ」

「第三の男をもう一度」

と阿部は注文を出した。

「ハイ、どう一つ」

彼女もすっかり彼と気分が合ってしまった、角瓶をとり上げた。

「君こそどうだい、飲めよ」

二人は知らず知らず、グラスを重ねて行った。

「ああ降って来た」

その時、ポタポタと軒を打つ雨の声が出た。

「ね、阿部さん、面白い事ないかしら、貴方この間、湯河原かへ行ったでしょう、どうだ

った？」

「そうだったね、別に面白い事もなかったけれど」

「男の人って得だわ、会社の仕事なんて云って、温泉でどんな事して来たか？」

「よせよ、まあ芸者ぐらいは来るさ、そして馬鹿騒ぎもするが、僕は元来宴会というやつが嫌らいでね、こうして静かに飲んでいる方が、どれ程いいか」

「妾が貴方の、あの人なら尚いいんだけれど、そうでしょう」

阿部は湯河原の宴会が果ててから、若い妓と一緒に家族風呂に入ったことを思い出していた。

「面白いと云えばね、礼子ちゃん、その宴会に来た芸者がこんな話を話して呉れたよ。：その妓はもと東京にいて、土地はどこだかハッキリ云わなかったが、其処へ住替えたばかりで、様子は分らなかったが、おかあさんという人が、とても優しくして呉れるので、これなら辛抱出来ると思っていたそうだと。ところが、ある料亭からお座敷に来るように電話がかかって来たので、支度していると、おかあさんが（お前さん、今晚の家あんまり気が進まないようなら、帰って来てもいいんだ



よ」と云われたが、其の時は、なんの事だか見当が付かないまま出かけたそう。お客は四十年輩の人で、小唄かなんか歌うし、気楽な面白い座敷と喜んでいたが、愈々四畳半へお退けという事になったんだ。別に不思議がる事もない、あの社会では当たり前くらいな事なので、妓も男の後からついて行った。おきまりの赤い夜具、スタンドの灯と枕元のフラスコがあるばかり。

すると長襦袢だけになった妓にその男が（其処へ立って御覧）というんだそう。

一寸変なお客と思ったけれど、何んの気も付かず、云われるまま夜具の上に立上ったのだね」「それから、？」

「まあ黙って聞き給え。今度は床柱の処へ向うむきになれと云うんだ。妓は男の云う通りスラリと背中を見せて立つと、男が妓の燃える様な姿にうっとり見とれて居るものだと思つた瞬間、その背中に焼火箸を当てられた様な痛さが走った、そして続けざまに二度三度。妓が振り返った時、男のかがやく様な眼と、鞭が映ったのだ。妓は我知らず（助けて）と叫ぶと、半ば倒れ乍らも襖の処まで逃げ出してそう。ところが襖など開く道理がない。男は又追って来て今度はうつ伏せの姿勢になった妓の、尻から太腿の方へ鞭を振り下ろすのだ。妓のあまり大きな叫びに女中が入って来て、（まあまあ）と男との間に入って呉れたそう。

（この妓じゃ仕様ないから）といって漸く男をなだめてくれた。

（妾その時、本当にビックリして）と妓は僕に云っていたが、誰だってビックリするよ。

男は何んでも歌舞伎関係の者だそうだが、初めての妓を呼んで、突然そうした行動に出るし、その料亭もいいお客だから、次から次ぎと妓を物色していたらしいのだ。その妓のおかあさんも薄々噂ぐらいは聞いていたのかね、出懸けに一寸は注意したんだが、それ程

具体的に知っていなかったんだろう」

「妾だって、突然そんな事されたらビックリするわ」

「然し僕は更に驚いたよ、男から鞭で打れたり、縛られたりして虐められる事に異常な趣味を持った妓が遂に見付かって、恐らく今でも、円満に二人の関係が続いているそうさ。そして銭湯へ行って、その妓に会うと、肌に鞭の痕が残っていても平気で入って来るし、その土地でも、決つて了つた二人の仲だから、却つて他の妓は安心して、ただ興味を以て眺めているだけだそうだよ」

「まあ、本当かしら」

「本当の話だよ」

「少しは分る様な氣もするけれど」

その時、阿部と礼子の眼と眼とが、パッとぶつかった。そしてそのまま暫らくは動かなかった。其はそれ程の永い時間ではなかったろう。然し二人にとって、非常な深い霧の中に包み込まれた様な一瞬であつた。

「阿部さん」

「うん」

「妾、体が弱い……」

礼子は後の言葉を続ける事が出来ず、眼を伏せた。

阿部は店で見なれた礼子も、今ここに、ス

リップ一つになつてゐる礼子も、肩から胸にかけての引締つた肉体は素晴らしいと思う。

いつかステップを踏み乍ら抱き合つた時、背に廻わした手に感じられた彼女の肌に、こんなにも若い女というものは、張切つた肉体を持つてゐるものかと驚いた程であつた。

「体が弱い？」

「ええ、そう見えないでしょう」

顔を上げた礼子の眸には、女の潤いと羞恥とが入交つた、複雑なやさしさと烈しさとが現われている。

「礼ちゃん」

阿部は思わず礼子の手をとつた。そして彼女を強く抱き締めた。

「阿部さん、妾とうから貴方が好き、好きなのよ、妾を礼子などと呼ばないで、妾、文子というの、文子と呼んで」

そして矢庭に、阿部をつき放すと、彼女は体を畳の上に投げ出した。

「阿部さん、妾を打って打って」

彼女は喘ぎ続けた。

阿部は余りにも女体の変化の激しさに却つてためらつた。

（自分はどうすればよいのだ）と思わずには

いられない。

女はじつとして動かなかった。

阿部はハツとした。いつの間に、革ベルトを手にしてゐたろう。

「文子、文子」

遂に鞭は彼女の背に打ち下ろされた。

女のむき出しになつた丸い肩から、滑らかな背にかけて鞭は鳴つた。引締つた腰、豊かな尻、そして太腿、ストッキングまで取つて了つた可愛い白い足まで。

今はもう何物もない。そこには、天と地の間に二人あるばかり。

女の顔には、その時、満ち足りた喜びが溢れていた。阿部はその時ほど、女を可憐なものと食べたことはなかった。

礼子は自然と自分の後へ廻わした。

「妾を縛って」

阿部は後に廻して組み合わされた女の両手を、片手で強く握りしめた。

「文ちゃん」

女はうなずいた様に見えた。阿部は又一方の手で、自分のハンカチを引出すと、女の口に当てがった。

最初は小さな窓かも知れない。

然し悦虐の窓を開けたものは誰だ。

(二)

阿部はそれから度々礼子の部屋を訪れる様になった。

「ねえ、伊藤晴雨って人、知っている」

「ウム、名前は聞いているが、それがどうかした？」

「話はこれからよ、昔、そうね三十年位前の事かしら、(変態資料)という有名な、会員組織の雑誌があって、その晴雨先生の、御自分の奥さんを逆吊りにした写真が、先生の知らない間に載って了ったんですって、妾、何んとかして是非見たいわ、阿部さん、その雑誌探してよ」

阿部は礼子から云われて急にアバンチュールな気持になった。何んとかして其の雑誌を探し出して、彼女に見せてやりたい、自分も見たい。彼は早速、先ずその百万弗劇場に行つて見たが、狎奇演劇から万才に移り、今は更に映画館になつて了つていた。浅草にもストリップ劇場も数あるが、責め場を扱っている様なスチールも見当らず、雑踏の巷を花屋敷の方へ曲った。

十二階があつた辺りか、小屋掛けの衛生展覽会式の見世物の隣りに、新刊古雑誌共に列べている本屋が眼についた。相当の店構えだ

から場所柄、何かの収獲もあるうかも知れないと入った。予想に違わず、(犯罪公論)、(グロテスク)など昭和初期発行のものが隅の方にあつたので、急に食指が動いて、一つ一つ掘り返して見たが、目的のものなど勿論ない。二十年以上の歳月を経た今日から見れば、時代のズレが可成り眼につく。赤色盛んだった当時、却つて比較的こうした風俗研究雑誌が一方大いに流行した事は想像出来るが、戦後の現代には遠く及ぶべくもない。阿部はすっかり落膽して了つた。

然し彼は暇さえあれば、毎日の様に書店街へ出懸けた。

神田は小川町から駿河台へ、それから神保町九段迄の表と裏を廻つて三崎町水道橋、これだけでも一日仕事には難しい。だが、段々と本屋あさりにも特別の興味を抱く様になった。

本郷の東大前では、この方面への収獲はなかつた。駒込肴町附近迄歩いたが無駄足であつた。焼けない頃の東京の地図を頭の中に描き乍らあの辺に古本屋があつたと、思い出をたどりつつ、点々と歩く事が非常な興味をそそる様になつて来た。青山車庫前から言益坂の両側にかけても、相当な古本屋街だが、特

殊なものではなかつた。彼の調査網はこうして次第に拡大して行つた。

阿部が渋谷で映画を見、喫茶店を出た頃はもう夜になつていた。彼は散歩の軽い気持で東宝の前を通過して左に玉電のガードの方へ歩くと、右側に予期しない古本屋があつた。

小さい店で、無論大したものもあるまいと最初は期待もかけずに入つたが、其処で目的の(変態資料)の揃いの一束を遂に発見する事が出来た。夢中で結んだ紐をといて、頁をめくつた。アッタ、アッタ。三頁目に伊藤晴雨苦心の作品たる裸女逆吊りの写真が載っているではないか。彼は嘘ではないかと眼をみはつた。勿論、女の両手は後ろ手に縛られてはいるが、腰巻は足首の処で結ばれていて、僅に女の最後の羞恥の姿をからくも保っている。然も姪み女だ。無残にも、ほどけた髪の毛が垂直に地上に向つて垂れ下り、凄惨の氣眼を覆わしむばかりだ。

阿部は本屋の云う通りの代金を払うと、宝物でも抱える様に礼子の店へ飛んでいつた。

礼子をこんな姿にしようとは思わない。然し礼子の方から望まれたら、どうしよう。最近、彼女に圧倒されて了つた阿部は胸を躍ろかせ、足をすくませた。(戦後篇おわり)

女体切腹秘話

腹切り地蔵縁起

石井章造

都では十年ぶりにやっと応仁の乱が収まったというのに、関東ではまだ上杉、長尾、足利三氏が三つ巴になって戦っていた。

上杉顕定の重臣太田道灌は無類の戦略と武勇を以て古河公方足利氏に属する各地の城を次々に攻略し、文明十年には長尾景春の拠城たる秩父の鉢形城を攻めんとして春ごろから先ずその周辺の弱小城砦を叩きつぶした後、七月には遂に鉢形城を陥し入れた。

私はこの戦いの史蹟を調べに出かけたのだが、特にこの戦いの時に陥された桜山城の姫君が落ちのびる途中で自害し、それを祀った

地蔵があると秩父石青史録に出ているので土地に何か言伝えでもありはしまいかと淡い望みをかけていた。

桜山城は上州、信州方面に通ずる街道に沿い、荒川と白石川との合流点近い山の中腹にあって、鉢形城の北の抑えをなしているが、今は在りし日の面影をわずかに土畳に留めているにすぎない。

私は土地の教育委員で郷土史の研究をやっている田中正夫さんを煩わして旧家、寺院を尋ね廻った挙句、さる旧家からはこりにまみれた姫地蔵縁起という絵入りの一枚刷りと腹

切比丘尼草紙という写本を見付けだした。これは終の数枚が欠けた虫くいだらけのものだったが、それを元にして果しない過去への空想にひろがって行った。姫地蔵は城あとから東北に二丁ほど隔った山の傾斜面に草に埋れてあり、土地の人は姫地蔵といって今でも四月十六日にお祀りをしている。比丘尼とはもと姫の侍女だった秋葉尼のことである。

文明十年四月十六日、桜もすぎ、樹々には若い若葉がういういしく芽生えて、何時もの年なら白石川のはとりに草つみに行こうとい

うのに今は何と恐ろしいことであろう。日ごと夜ごとの戦いに城方の手負い討死は増すばかりだが、侍たちはみなこの土地根生いのものばかりだから頑強に闘っていつかな引くことではない。だが貯えの兵糧も心細く、女達は手負いの手当と首化粧に血に酔ったようになっていた。それも空しく搦手からどつと攻立てられていよいよ落城ときまり、城主矢野庫之助、奥方をはじめ十二、三人の重立った御家来衆は櫓に入り一統に生害をとげた。

綾姫とそれに付添う乙葉、あきの兩名もどこまでもお伴を願って櫓に入ったが自害は許されず、泣く泣く城を脱出することになった。櫓の外ではときの声がそこかしこから唸るように聞えてきて、その中から刃の打合うすさまじい金属性の響きが^{つんざ}撃くように飛出して行った。櫓の中では大殿をはじめ車座になった面々は或は切腹、或は刺違え次々と最期をとげた。血の匂い、うめき声、刃を刺通す気合いの声は地獄さながらの有様だった。

中にも二宮の局は奥方に先んじて双肌ぬぎ短刀を左の脇腹に突立てるとみるや右のかたへ一気に引廻した。あまり速く引廻したので血はさのみ出なかった。飯田左兵衛尉がつと馳せより大刀を振上げて介錯しようとする

二宮の局は首を振り、血に染んだ短刀を腹から引抜き、やがて振下しざまにプツリと左の脇腹に突立て、じりじりと膺の上を通って右に引廻した。いかな気丈な局もこの深手に何条たまるう、苦しさのあまりウーンと呻ってのけぞると、お腹に力が入ったものか、二筋の切口はパツと大きく口を開け、どつとばかりに血が吹出すと見るや、みのわた、このわたもだらりと垂下って出てきた。ドンと板の間が鳴ると二宮の局は前に倒れてそのまま息は絶えた。あきは恐ろしさに齒の根をがたがたとふるわせ、思わず顔を覆った。

櫓に放った火は障子から天井に燃えうつり、煙はうずを巻いてはや堪えがたく、煙はじりじりと髪をこがすばかりに迫ったので、今はこれまでと櫓の片隅の板をはずし、夢中で繩梯子をふみしめて下るとブーンとかび臭い土の香がした。抜け道をたどり漸くの思いで空井戸まで抜け出た。

空井戸は谷あいの人目につかぬ草のしげみであって、蓋は雑草と泥とに覆われていたが、ぐっと押上げると案外造作なく持上った。隙間から砂がザラザラと振りかかって来ると同時に館が焼け落ちてくすぶっている焦げ臭さにおいと薄煙がブーンと鼻にしみ込んでき

た。三人は急に悲しさがこみ上げてきて抱合った。あたりはまだ薄明いので井戸から出られない。

何刻待^{とき}ったことだろうか、それはそれは永い時間がたった。ワーンという声が遠くから時々響いてきた。落ちのびてゆく味方を追討ちする声であろうか、その度に身の縮まる思いがした。

やがてとつぷりと日が暮れたので三人は音を忍ばせながら空井戸を脱けだし、草のすれ合う音にも心して谷あいをよじ登り、小径を縫って城山の東北の中腹にたどりついたが、途中で二度も討ち死した首のない死骸につまづいて胆を消した。

卯月の空には上弦の月が淡くかかり、時々薄雲の中にかくれてはまた光を投げかける。館の余燼は人影を映し出すほどまだ薄明るくただよっていた。ここまで来ると樹々はまばらで、丈ののびた萱が姿をかくすのに頃合いだった。振り返り互いに見かわす涙に濡れた片頬を館の残火がほのかに照した。

いきなりヒューッと羽音がしたかと思うと綾姫はアッと小さい叫びを立てて前にのめった。驚いて乙葉とあきがかけよると矢は綾姫の太もものにのぶかに突刺っていた。さては見

付けられたかと思うと胸は早鐘を打つように高鳴ったが、乙葉は素早く綾姫の裾をまくり上げて懐剣を抜くや矢に沿ってぐさりと突刺した。戦の間、味方の手負いの手当になれた乙葉はこうしなければ矢を抜くことは出来ないことを知っていた。御辛抱遊ばしてと低く云うと懐剣と矢とを一緒に握って力まかせにぐいと抜取り、自分の帯をくるくると解いて引裂き、綾姫の創口をしっかりと結えた。

血は思いのほか出てこなかったが、姫は痛手にたえねかて立てそうもなかった。

「さアしっかり遊ばして、もう直きお山が下りられます」

そうはげました乙葉はあきと二人で両脇から姫を支えて歩こうとしたが、綾姫は一二歩踏出したかと思うとへたへたと崩れるように坐りこんでしまった。

再び乙葉が姫の肩に手をかけて引起そうとした刹那、黒い影がつと走り寄って乙葉の手をぐいと引寄せると、胃のあたりの水月に当て身をくらわせた。黒い影は敵方の身分の低い雑兵だった。手早く乙葉の帯で綾姫をぐるぐる巻きに縛ってしまった。あきは十五才でなりも小さかったせいかな雑兵はじろりと見ただけで手出しはせず、悶絶して倒れた乙葉の

裾をびりびりに引裂き、その姿では逃げられぬようにした。胸を開かれあられもない姿にされた乙葉に雑兵は飢えた野獣のごとく襲いかかった。

あきはようやくの思いで綾姫の縄目をとくと、綾姫は締めつけられた腕をさすっていたが、

「とても逃れぬことゆえ妾は恥しめを受けぬうちに自害します。そなたは百姓の娘ゆえ早くこの場を逃れて親もとへ戻って下され、短い馴染みであったがよう仕えてくれました。礼を申します」

と云うとすらりと懐剣を抜きはなち右の袖で巻き、はや帯をゆるめて脇を押し開いた。

綾姫はあきより二つ上の十七才、臍たけて天女にもまがうばかり美しく、殊にひそかに小島主人と契りを重ねてからは妖しいまでに女の悩ましさが襟もとにも乳房にも輝くようににじみ出てねたましい位だった。

あきは事の成りようの止め立てすること出来ぬのを知ってただ涙にむせぶばかりだった。ためらって去りかねているうちに綾姫ははや懐剣を左の脇腹に突立て、齒をくいしばって声も立てずにゆっくり臍の下あたりまで引廻し、白い肌からは血がぼたりぼたりと滴

ってきた。姫は左手をがくつと膝につくと豊かな乳房を波打たせながら

「苦しい……もう駄目」

ととぎれととぎれに云った。

乙葉は力まかせに抱きしめる男の力のはげしさに正気を取戻した。はねのけようにも男の力に到底打勝てぬことを知ると、乙葉は手を伸して男の脇差を引抜き、脇腹に力まかせに突刺しそしてえぐった。男はギャツと悲鳴をあげて体をつっ張らせたかと思うと直ぐにぐったりなってしまった。

恥かしさも打忘れて夢中で姫の傍にかけよると、姫は刃を握ったままもはや引廻しかねて喘ぎ苦しんでいた。

「おいとしや姫君さま、乙葉もお伴を致します」

と取りすがって、

「お引廻しになりかねてはお殿様のお名にもかわります。乙葉が御介錯申上げますゆえただ潔く御最期のほどを」

涙で声はくもった。綾姫は黙ってうなずくと懐剣を握った右手に左手を持ちそえ、ウツと一声突き込むと二寸ばかり出ていた刃先は全く腹の中に没入し、握っていた手はぴたりと腹に押しついた。

唇をかみしめてウーンと呻きながら体を左へねじるようにして見事に右へ引廻した。刃は蒼白くほえんで、皮を切り肉を裂きながら悪魔のように血をなめた。夜目にもわかるほど血がシュッと飛び散り、そしてどっと溢れ出た。血の奔流の中からはらわたが浮囊のように浮び上った。綾姫は苦しまぎれにこれをつかむと目をかっと大きく見開き、額からは油汗がたらたらと頬に伝った。

「姫君さま」

乙葉は叫ぶと後から抱くようにして左手で姫のふくよかな乳房をぎゅっと掴んで押上げ、姫の手に持ちそえて姫の顔をじっと見つめて体をしかと抱きしめたが、気を取り直すところ免と言わざば腹に突刺った懐剣を引抜くや深々と乳の下に刺通した。

綾姫はうんとおのけざると、左の手をあげて乙葉の手をつかみ、押しつけるような恰好をしたかと思うと、その手を急に突張りブルブルとふるわせてガックリ首を前に垂れた。乙葉は綾姫の胸から懐剣を抜取るとはげしく頬ずりしてワツとばかりに声を立てて泣いた。

花の顔も色失せて死の影は額のあたりに漂い、薄目を開けて苦しみのほどがありありと残っている。胸から腹にかけて一面に唐紅に

染み、お腹の血ははやかたまりかけて、どろどろの餅のようにべったりと粘りついていていた。

乙葉は綾姫の衣服の前を合せて合掌した。

そしてあきに向い、

「さア片時も早く逃げて——奥方さまやお姫様の御回向を頼みまする」

という綾姫のなきがらの直ぐ左に端座して短刀のさやをはらった。

あきは地べたに体が吸いついたよう動けなかった。怖さ、悲しさ、いま一つえたいの知れない胸をしめつけるような亢奮で綾姫の切腹を一部始終、一挙一動ももらすまいと見つめていたが、乙葉にそう言われるとハッと我に帰った。だが腰は抜けたようにすっかり力を失って立上ることさえ覚束なかった。

乙葉はただ着物を肩にかけているだけというのも同然で、胸から下は膝まで何一つ被うものもないあさましい姿だった。が、着物をピリッと裂いて懐剣をくるくると巻くと逆手にとり、左手で左の脇壺を押寄せてお腹の皮をぐっと緊張させると、南無とばかり片手突きで左の脇にグザと突立てた。乙葉は女盛りの廿三才、若々しい娘の姿態からはむせるような肌の匂いがかげろうのように立ちこめて

いた。だが目は恐ろしいばかりに吊上り、クツと低いうめきを立てたが、左手を右手の上に重ねて右の下腹めがけてキリキリと斜に切下した。所々から血しぶきがはねかえると下腹は次第にべつとりと朱に染って行った。

乙葉は一たん短刀を引抜くと腰を浮かせて立て膝になり、今度は短刀を腹から一尺ほども離れた所から左の下腹めがけてはずみをつけて力一ぱい突通し、ウームと一声呻くと右の脇壺めがけてサツとばかり切上げた。前の創とは丁度臍の下で交叉し、創は×形の十文字になった。

四つの弁になった創口が花びらのようにパツと開くとどつとばかり血がしぶきを上げてほとばしり、はらわたが後から後からもくもくと盛上るように溢れ出た。乙葉は短刀を更に創口に差込み、下腹めがけ突込むと二度三度えぐり廻した。

やがて立てた膝をパツタリと曲げ、左手を地面について体をささえ、前こごみになって短刀の柄頭を地面につき、震える手でやっと切先を鳩尾に押当てると体の重みをかけて押しかぶさるよう短刀に向って体をおつけて行った。短刀の柄を握った右手は手首までも腹の中に埋れ、刃の先は背につき抜けて、青

白い切先が血のあぶらにいぶれて鈍く光った。

絞り出すような声でム……と唸ると右の脚をぐいと伸した。手は草をかきむしるようにして土は爪の間にくい込んだ。息はまだ絶えず、咽がヒューヒューと鳴った。苦しきあまり手について体を起そうとしたが、とてもその力はなく、又ばったりと倒れた拍子に横向になり、斜めになっている山の中腹をコロコロと転り落ちて行ったが、やがて仰向になつて止り、ウーンと体を突張るように反らせたかと思うと咽がゴロゴロと鳴って、そのまゝ動かなくなった。

着物はわずか肩にまとわりついているだけで胸も背も血と砂にまみれてむき出しになり腹には溢れ出た腸が盛上っていた。もうとっぷりと日は沈み、空をこがした館の炎も消え、三日月が淡く甘く乙葉の白い肌を闇に浮出させていた。

あきは体をこわばらせて見ていたが、思わず起上つてせめてなきがらに着物をかけておこうとした時、後の方で何だ何だと二三人の男のだみ声がした。敵に見つけられたかと思うとあきは急に兎のように飛上り、跳ねるようにして下の草むらの中におどり込んだ。あ

そこだという声と共に荒くれた足音が後に追ってきた。

夢中で草を分け小径をとび、何度もころんで手や膝をすりむいたが、それさえ気付かず一目散に山を駆け下りた。ヒュー、ヒューの矢の羽音がしたが、どんな小径も知りぬいてゐる小柄で足早のあきの姿をとうとう見失ってしまったらしく、もう追かけて来る気配はしなくなった。

藪をくぐり小川をとび越え、一里あまりの道を息せき切つて我家にたどりつくと、あきは氣を失つて戸口の前で倒れてしまった。

あきの家には年老いた耳の遠い父親が貧しく暮していた。村の衆はあらかた近村の身寄りを頼つて戦さを避けていたが、あきの父親は家を守つて籠っていたので、早速に介抱されて恐ろしい夢を見ながらも体の疲れから丸一日は正体もなく眠りこけてしまった。目がさめると綾姫のことが氣にかかり、恐いもの見たさも手伝つて城山へ行つて見たいと云いだしたが、父親から頭ごなしに叱られた。二日の間をおいてあきは父親の耳の遠いを幸いに土搔きを腹にさして真夜中に家をぬけだした。

城山について先日場所をさがしてみると、闇にもくつきりと浮んだように白い綾姫と乙葉のかばねはまだそのままに横つていて、屍臭にまじつてプーンと血なまぐさいにおいが漂いこめている。

あの烈しい劔の打合いの音もせず城山は静まり返っていた。何ごともなかったかのように草木は深く眠り、月は薄目をあけたように宙天にかかっていた。

近寄つて見れば綾姫は無惨やあおのけにされ着物ははぎ取られ、胸に刺つた懷劔も見当らず、少し足をひろげ手は堅く握りしめて虚空をつかむかのようにしていた。血は胸よりも腹に多くこびりついて夜目には黒々と見え、体は氷のように冷たかった。乙葉は自害したままの姿で短刀を握った拳は腹の中深く突込んであり、腸は空しく体の外にこぼれ、草の間に垂れ下っており、あたりの草には点々として血の塊りが飛散っていた。

あきはせめて二人のなきがらを埋めようと土搔きで土を掘起し、どうやら一尺ぐらいの深さに掘ると二人を埋めて土をかぶせ、夜が白みかけはじめたので心を残しながらも急いで逃げ帰った。



戦いが終ると逃げていた百姓衆も村に帰つてすき、くわを取り、村は再び平和な農家の姿に戻った。

父親は病気で亡くなり、あきはひとりぼっちになったが、村の手伝いなどして細々なが

ら暮して立てていたが、やがて世話する人があつて与作という小作人のところに婚いだ、四年ばかりしてこの人も亡くなりまたもとの一人暮らしをするようになった。

あきは綾姫、乙葉、そして父親、夫などの

菩提を弔うために髪をおろして比丘尼となり、名を秋栄と改めて近在を廻って勧進し合力をあおいだ。天にも地にも一人の身寄りさえない秋栄尼は何か恐ろしい因縁を感じて勧進にせいを出し、綾姫と乙葉の回向のため地蔵尊の建立を思い立った。帰命頂礼地蔵尊、大悲の本願有がたき、あわれ拙き我等かな、娑婆のいとまのあきやらず、かかる浮世に長らえて、楽しむ心にまかすとも人間わずか五十年——打ち鳴らす鐘は昨日は東今日は西と悲しげに秩父の里の空気をふるわせた。

綾姫御最期のさまを物語るとはじめは聴く人もみな涙を流して聞き入ったが、同じ話も二度三度となると興が薄くなると見えて断られることが多くなった。

ある時、綾姫切腹の模様を仕方話にして見せてくれれば銭もたんとやると言われ、恥しさをこらえ思切つて胸を押開き、有う合う小刀で腹を切る真似をしたところ、それが評判になり、腹切り比丘尼といわれ、何処かしこでも腹切りのしぐさをさせられるようになった。

度重るにつれて恥しさも段々とうすらぎ、苦しみながら死んでゆく態を大仰にし

ぐさするようになってきた。見ている男たちの目がまだ子供を生んだことのない若後家のなまめいた乳房や下腹に吸いつけられるように注がれるのを見てとると、わざと乳房をつかんだり下腹を撫でたりして悩ましく振舞って見せた。そして刃引きの短刀で腹を突いたり切ったりするときの感じに何時しか強い執着を覚え、家に帰っても独り寝の淋しさに眠れぬ夜はひそかに短刀を取出して、燈心の灯かげで双肌をぬぎ、切腹の真似をして腹にはみみずばれが絶えぬようになった。

廿九才のとき酒を振舞うて貰い、酔った勢いで真刀で二寸ばかり本当に切ってしまう、血が止らずに大騒ぎをしたこともある。その当座は本当に腹を切った疵を見たいと何処でも受けて招かれたが、見る人はやはり真白な肌に突立てるのがよいらしく、疵あとはあまり喜ばれなくなってしまった。

明応四年、城が落ちて十七年目、秋栄尼は卅二才になり、辛苦が実って地蔵尊の石像はやっと出来上った。四月十六日、綾姫と乙葉の遺骸を埋めた地に鎮坐し、桜山の衆や近在の村人も集って賑やかに供養することができた。誰とはなしにこれを姫地蔵と称した。

腹切り比丘尼草紙は秋栄尼が村々を勧進して廻った所まであって地蔵尊供養の件りは破れて失われている。或は秋栄が地蔵尊の守りをして天寿を全うしたかも知れない。だが：

秋栄は近ごろ何がなしに思い悩む日が多かった。孤独の闇の淋しさ、身の行末、若さが失われてゆくうつろさ、ここで一生地蔵様の堂守をしてくちはてて行くのかと思うと何とも云うに云われぬわびしさに苦しめられた。

供養の酒盛りがすんで村の衆が潮の引くように散って行ったあと、秋栄はひとりぼつんと取残されて急に泣出したような寂寥感にひしと襲われた。死ぬ、死ぬのだ——何処からか誰かが耳もとでささやいた。そうだ死のう、死んでお姫さまの所へ行こう。あのやさしい美しい姫は妾の手をとって一緒に泣いて下さるに違いない。供養もすんでこの世での妾の務めはもう終った。

憑れたように秋栄は地蔵尊の前に坐った。料理のために持ってきた細身の庖丁はいつの間にか右手に握られていた。双肌を押しぬぐと思切って下腹まで押下げ、左手でゆっくりと腹を二三遍なでた。不思議と落着きが出てきて、あたりを見廻したが人影は更になかった。

た。せめて最期は華々しく見事に切って、すがは腹切り比丘尼よと云われない。

丸くふくらむほど腹に一ぱい力を入れて左の脇腹に押当てた庖丁をぐいと突込んだ。だが刃の先が鈍っているせいか突刺らず徒らにただ腹の皮を凹ますだけだった。秋栄は怒ったような顔をして刃先を凝視していたが、強く腹の皮を押したまま手を右に動かした。刃が一寸と動かぬうちに皮膚がプツッリ切れたと思った途端、刃の先は二寸近くグサツと腹の中にもぐり込んだ。ウワッー声にもならぬ声を立てた秋栄の顔からはさっと血の気が引いた。

刃を持つ手は裂いて行く跡を一分一分見とどけるかのようにゆっくりと右の方へ移動して行った。刃が通った跡は皮膚の下脂肪層が上下にまくれ上り、プツプツと点のように血がにじみ出てきた。小さくだらだらとこぼれる血もあればシュッシュッと勢よく散りしぶく血もある。それがいつしか集って黄色い脂肪を赤く染め、下にたらたらと垂れて行った。

臍の下あたりまで切裂いたころ、秋栄の額は冷汗にべっとりとぬれ、クラクラッとした。齒をくいしばって痛みをこらえ、遂に右の脇

腹まで引廻すと秋榮はせわしげに肩で息を七つ八つ立続けにした。目は血走ってギラギラと異様に輝き、頬は急にげっそりこけ、引つたようにゆがんだ。

左手は無意識に創口を押えていたが、右手は吸付けられたようにびったりと腹に密着して緊張のあまりブルブルと小さき震えに震えていた。

十七年前の綾姫の姿が幻のように目に浮んだ。やさしく、しおらしく、美しく、そして痛々しく切腹する姿が——それなのに私は荒れている。秋榮は何を思ったか刃をくると逆に回して今度はいま切ったばかりの創口を右から左へ向って再び切り廻しはじめた。弾力性のある強靱な皮膚と筋肉はすでに切裂かれていたから刃は殆ど抵抗なく撫でるように腹膜を切開いた。壇の口から水をあけるように血がごぼごぼと音を立てて流れ出し、大腸と一緒にペラペラした膜がぬるりとはみ出してきた。

歯をきりきりとかみ鳴らしウムムと唸ると早や臍の少し左下まで引切った。腸がぷーッとふくらむように流れ出て血の奔流の中に押流されて股から膝の方へ垂下って行った。

庖丁を腹に刺したまま手を放して地べたに

手をつく、庖丁はひとりでにカラリと地面に滑り落ち石に当ってカランと音がした。口がからからに乾上った。水が欲しい、水、水！今の望みはただ水だけだった。両手を地面につけていざりのようにはいずりながら地蔵尊に供えたどぶろくの瓶に手を伸すと、喘ぎ喘ぎぐいぐいと咽を鳴らしてむさぼるように呑んだ。

そしてどたと前に倒れ、気が遠くなって行くのをはつきりと感じた。死にそうだ、妾はもう死ぬ——時々フーッと引込まれるようになったかと思うとまた意識が盛り返してくるそんな波を二三回繰返したとき、腹の中がかき廻されるような激しい痛みを感じてハッと我に帰った。腹は切っても酒の酔いは廻る。蒼ざめた顔に少し赤味がさしてきた。前に垂下っている腸が邪魔になって仕方がないので切って棄てようと手さぐりで庖丁をさがしたが手にふれない。目はも半ば霞み、霧の中に漂っているようで物がしかと映らなかった。

桜山城は、その名に背かず桜の木が多かった。城山の館跡から地蔵堂のわきに一本移し植えた桜は今年は春が遅かったので三四日前がやっと満開だったが、昨日の風ではや散りそめた。

秋榮は必死に最後の力をふりしぼって膝に手をつき上半身を起し、奇蹟のようにすくと立上ると脚を開いて仁王立ちになった。血は腹を赤く色どったばかりではない。胸の所々に飛散り、着物もべったりと紅に染み足まで流れ落ちる血にまみれていた。

四月の淡い夕日は最後の光を投げかけるように彼女の姿を照し出した。

その仁王立ちも一分と続かなかった。嘔きけともめまいとも云いようのない不快な感じがこみ上げてきたかと思うと、秋榮の体はくち木を倒すように桜の木にぶつかり、それからドスンとおおに倒れた。花が散った。それは彼女がこの世で瞳にうつった最後の像であった。手足をぶるぶるツと震わせてもがいたが、それきり静かになってしまった。桜は哀れむように、そのなきがらの上に花吹雪を散らした。

野良帰りの子供が秋榮のすさまじい死体を見つけて村に知らせると村中は大騒ぎになった。腹切り比丘尼が本ものの腹切りをやったぞや、はらわたがまだ青大将のようにのたうっているぞよ、のうこわやの恐しやのと女子供は身を震わせたが、それよりも好奇心の方が強かった。蟻のように群れ集った人垣のす

き間からのぞき見る娘もいた。
さすがに哀れと思い、且つは崇りの恐ろしさ
に村人は地藏尊の傍らに土深く秋栄を葬っ
てやった。

× × ×
姫地藏は腹切り地藏とも呼ばれ、毎年四月
十六日には、ささやかな供養をし続けてきた
が、江戸時代の延宝六年が丁度二百年忌に当

るので、地藏堂の管理をしていた成就院で
地藏縁起の一枚刷りの板を起した。腹切り
比丘尼草紙も、その時に作られたものである
う。
(おわり)



浣腸マニヤの独言

クリスター・フェチシズム

夢 原 弘 一

ガラスで造った浣腸器、イチジク浣腸、
エネマシリンジ、イルリガートル。なんで
あのようなものが、これほどまでに私の胸
に迫ってくるのだろうか。実際、私は自分
ながら不思議に思う。

私はアパートの独り住居、その点、いろ
いろの点で便利なこと多いが、それだけ
に孤独な淋しさということも身に沁みて感
じられる。六帖の部屋に独りこもっている
と、自分だけが、広い日本の中で、自分だ
けが、このような浣腸器に、これほどまで

執着しているのかと、空恐ろしい気のする
きがある。

『自分ひとりだけが』というのが、たえきれ
ないくらい、いらだたしき、やりきれなさ
を感じさせる。△浣腸▽この文字を見るだけ
で、私の胸は妖しくふるえてくる。この文字
のふんだんに出てくる雑誌。だから、私は奇
クを座右から離したくない。独特の温かいニ
ュアンスのあるこの雑誌が好きだ。

同じ△浣腸▽という文字が出てきても、医
学書のそれは、冷たくての棘あるいやらしさ

と嫌悪がつきまってくる。私たちが好
む『浣腸』は医療のそれではなくて、もっ
と温かくて夢のようなベールに包まれた雰
囲気のものである。

私はいろいろの浣腸器も好き、若い女性
に浣腸もしてあげたい。いや、文章になっ
ている浣腸の場面の描写も大好きである。
そして東浦かおるさんのように、浣腸が好
きだという若い女性に逢ってみたい気持も
する。でも内気な私は、そんな女性と逢っ
たところで、只黙って顔を赤くしているく

らいがオチだとは思うのだが。

何故、私がこのようになったのか、自分でもよくわからない。幼い時、よく浣腸されたというような記憶は全然ないし、長じてからも、そのような機会はなかったし、又、現在でも浣腸されてみたいと思ったこともない。

だから、このような性癖は生れつきだと自分では思っている。いろいろの浣腸器のコレクション、といっても全部薬局で求めたきた新品なのだが、私の気持としては、実際に多くの若い女性に浣腸を施して、薬品で変色したような古い器具が欲しいのだが、現実ではそういった品物の入手方法がないので、かなえられそうにもない。

私の空想としては、××〇〇子18才、何年何月何日、浣腸実施、というようなラベルをはった諸々の浣腸器を保存しておきたい。そして、その時の場面の描写を日記帳の文章として残しておきたいと思う。

「私の浣腸日記」と銘うって、五人、十人と浣腸を施した女性の人数が増えていったらこんなに楽しいことはないだろう。同志の中には、自分で自分に浣腸を施すことを

喜ぶ人も多いように、記事で拝見するが、このような人は、同じマニヤといっても仕末がよい。私のように若い女性に対して浣腸を施したいと願う者は、現実には果されないものだから、いきおい器具を集めたり、或は飛躍的な空想に思いをはせたりするようになる。

その点、私たちのようなクリスター・フェチリストにとっては、本誌の浣腸記事並に浣腸フォトは恰好のテキストになる。いろいろの空想を描く、といっても、私は文章は下手だし、それに、いざ文章に書いてゆくと、折角の楽しい空想が空想でなくなってしまう、楽しみがなくなってしまうので、ペンを持つことをしない。楽しい空想は、あくまでも私の頭の中だけの夢に終わってしまう。

だから、誰に気兼ねすることもないし、又他人に迷惑をかけたり、悪い影響を与えたりするような心配は一切ないと言ってよい。

私の空想に現れてくる女性は、他の人達と同様に美しい若い女性に違いないが、可憐な感じの羞かしがりの女学生といったタイプが多い。先月号の「責め場面の空想的読書法」を書かれた真奈部さんのように文章が上手だったら、私も自分の空想の一端を御披露する

のですが、手紙一本満足に書かない私のペンでは、おぼつきません。それで、断片的に書いてみます。

対象の女性は先に書いたタイプの人が多いのだが、時には、淑やかな美しい奥様といった時もある。要は羞恥心の強調といったところに狙いがあるのだと思っている。浣腸器で一番好きなのはガラス製の二〇Cか五〇Cのもの。例えば姐御が身内の娘に対するリンチ（飲み込んだダイヤを出させるといった設定で）のときなどは、イリガートルなんか、面白いと思うが、これは病院が連想されて興味薄、ガラスの次はいちじくである。

家庭的なところが好きである。雰囲気としては、手足を押さえたり、縄で縛ったりは好まない。説得によって、やむを得ず諦めて浣腸を施してもらう、然し羞恥心が非常に強いので軽い拒否をつづけるといふところに最大の興味を抱く。だから、いつもそういう空想に傾く。でも、現実には浣腸が出来たのだったら、理想の設定でなくなってしまう、いや、実際だったら、手がふるえて出来ないだろう。

髪^{かみ}

の

虫^{むし}忍^{にん}頂^{ちよう}寺^じ芳^{よう}子^こ

妾はしらみではありませんが、髪の中に住んで居る虫で御座います。それも汚い不潔な髪ではなく、黒い艶やかな黒髪で、乱れ毛一筋もなく美しく結び上げられた日本髪の髪の中に住んで居る虫で御座います。一体なんの虫だって、まあそんな詮索はお止めになって下さいませ。兎に角髪の精みたいなので御座います。馥郁と鬢つけ油のおう、綺麗に櫛づけられた髪の中、その冷やかな感触をたのしんでいる美しい虫とでも申しませうか。ある時は前髪の中に、或る時は髻の中に、又髻の中にいる時はそれが高島田とか、結綿丸髻だとかに依って夫々おもむきが違い、実

にそのたのしみの変化は、誠に最上の愉悦と申さねばなりません。

ところで妾がこの先とてつもない面白い話を致します前に、先ず妾の生い立ちを話さねばなりません。生い立ちと云いまして、決して木のまたから生れたのでもなければ、成虫の生む卵から生れたのでも御座いません。無論天から降ったり、地から湧いたりする様な魔法使いでも御座いません。日本の歴史が生れてから歴史の中に生きる魂で御座います。日本結髪史の中の精で御座います。だから妾は年をとりません。この妾を果して世の人々は御存知で御座いませうか。今までに

色々有名な歴史著述家即ち風俗研究学者とでも云いますか、又美人画家とか、風俗画家とか、そんな人等に妾はどれだけ貢献を致しましたことでしょう。恐らくこの陰の大きな力を誰人も知っておいてではないと思えます。

太古の時代、平安朝から奈良朝と移り進んで、室町時代から織田、豊臣の時代を経て徳川期に入って妾の魂の向上は最高調に達したので御座います。巧まざる自然の髪を岸辺の水鏡に写し、可憐の乙女の情は思わずして野に咲く花を手折りて己が頭に差したことで御座いませう。斯くして人間の美への探究は

やがて粗末な髪結び方から、鏡が出来、頭飾品も出来、様々の髪かたちの結び方を思いついて、輝くばかりの爛熟期となったので御座います。

古来よりの浮世絵を見ます時に、世の人々はそれに脈々として流れる、結髪史上大いなる文化の匂を判然と知ることが出来るものと思えます。髪かたちに依って、自ら分たれた老若貴賤貧富の別、そして喜怒哀楽の情を表現するに恰好のものとなったので御座います。これをして最大の美的価値ありと云わずして何んで御座いましょう。妾の活躍や目覚しきものがあつたので御座います。

絵師や、人形師の心には申すも及ばず、炎のような情熱を以って激励し、町家の若い箱入り娘の結綿に、仇な後家の水車の鬘に、殿中奥深き御殿女中の高島田に等……、妾の魂は、髪の中となつて、黒髪的美を作り上げ、その美の中に全てを捧げて、歓喜に打震えて居たので御座います。端正に結われた髪ばかりでなく、壊れている様の髪でも、夫々の感情を表現して、悲しみ、苦しみ、果ては悩ましい情を表わす時、それは妾が一生懸命になつて、夫々の美しさを出す様に、努力をしているので御座います。

やがて時代も移りて、この徳川期の爛熟期を峠に明治、大正、昭和の初期となって愈々衰微の兆、顕著となつて、妾の魂の寄るべき所も少くなりしを嘆くに到つたので御座います。しかし之れを以って妾の命、旦夕に迫れりとなすは尚早、妾の魂の輝く歴史は矢張り連々と続き、美は永遠に美であり、千古不滅で御座います。

妾はまだまだその寄るべき所を思い考えて多忙を極めたので御座います。演劇に、映画に、芸者衆のかづらや、婚礼の花嫁かづらにまで、髪の中となつて生きたので御座います。妾は現代でも生きて居ます。日本髪を持つ美しさは永遠に不滅のもので御座います。その美しさはこの妾が生きているから、虫となつて黒髪の中に巣くっているから御座います。心ある人は妾の生きている姿を愛の目なぞして眺め慈しんでくれたので御座います。

斯くして世の多くの人が、この永遠の美を忘れ去らんとする時に、妾はここに、本当に心からその美を謳い、愛で慈しんでくれる一人の人を紹介致さねばなりません。又本当にその人を知っているのは、この妾だけで御座います。それは黒髪の中に生きると同時に、

妾はこの人の胸の内にも生きているからで御座います。この人が妾の本当の美しさを知つて下さつたのは、今に始まつたことでは御座いません。幼い時分に己に子供心に知つていて下さつたので御座います。

大分昔のことになりますが、お芝居に出る女形のかづらに居た頃で御座いました。妾は芝居の筋書等はどうでもいいのですけれど、美しく艶やかに結われた高島田に妾の魂が光り輝いている時で御座いました。その時に、まだ幼いその人が、家の誰かに連れられて、その芝居を見て来られたので御座いました。その芝居の筋書の中で、その人は子供心に、何を感じ銘なされたのか、熱烈な目ざしで見詰めていられたのを覚えています。

というのは、ある一場面で、中央に階段のある縁先のような、お白洲の場で御座いました。真中の高いところに、お殿様が坐つていて、両側や、縁先の下の方には、腰元や、侍や、下郎が多勢並んで居て、階段中央下には筵が敷いてあり、それに白無垢の長襦袢を着た、高島田の女が坐らされていたので御座いました。お殿様は非道く怒っている様で御座いました。女は両手をついて、恐ろしさに震えて居る様でしたが、そのうち如何様な結果

になりましたか、やにわにお殿様の一喝の命で、数人の下郎が、その女に急いで寄って来て、忽ちのうちに高手小手に縛り上げてしまいい、そして女の水々しく結ってある高島田を笄を抜き取り、元結いを切ってさばきにしてしまったので御座います。可哀想にその女は、身も心も絶え入るばかりに泣いて居ましたが、一人の侍の打ち下す烈しい咎に耐え兼ねて、とうとう裾も露わに横へ倒れてしまったので御座います。

妾は髪の中である以上、絶対的普遍のもので、妾の主観は赦されないで御座います。ですから妾は、縛られた女形の演技が、上手に行きます様に、無惨にも、壊された髪形を出来るだけ美しくくずし乍ら芝居を助けてやっていたので御座います。

それから芝居はどうなったか、その女は髪はくずれ身は縄をかけられて、荒々しく引立てられて行ったのは覚えて居りますが、次の幕でしたか、もっと後の幕でしたか、矢張り記憶に残っているのは、何だか穴倉のような場面で御座いました。舞台真中の柱に、先刻の女が、立姿に、足と云わず、太股と云わず、腹、胸、とグルグル巻きに縛られていたので御座います。それにこの女一人じやな

く、外に三四人の女が、夫々別の柱に同じ様な恰好で縛られていたので御座います。それが皆キッチリと白布で目隠しをされていて、あるものは桃割れに、あるものは結綿に、責め苛まれて髪のかたちはくずれ、白い顔に黒い髪の毛が垂れ下って、その二筋三筋を、赤い小さな口に噛みしめていたので御座いました。

無論妾はこの時でも、桃割れの髪の中にも結綿の髪の中にも居りました。それは妾というものは、一人で否一匹というか、一匹で居て一匹ではないので御座います。

この情景の余りにも、怪奇的で、魅惑的なに幼いこの人は、心のうちで驚きそして心から感銘してしまいました。

妾はこの時ばかりでなく、他の時でもお芝居で髪を持つ役割が如何に重大なものかを知っているの御座いますから、この怪奇な場面でも縛られた女等の髪に妖奇的で魅惑的な雰囲気を出す様に努力したので御座いました。

観客席には、矢張りあの人が瞬きもせずに見詰めていられました。未だ子供乍ら、その眼差しの鋭さに妾は何か押されるものを感じました。その反面妾はこの人ならではの思

信頼の念が起きて来るのをどうすることも出来なかったので御座います。本当に妾を理解し、本当に心から妾を愛してくれる人は、この人より他にないと確信したので御座います。

芝居の後の筋書は、どうなったか知りませんが、このことあって以来、妾はこの人と到るところで出会う破目になったので御座います。けれどそれは決して心悪いことではなく、お互に心打ち明けない片想い同志の恋人に会ったような気になったので御座います。それは以心伝心と云って、云わず、語らずのうちに、お互の心が解りました。けれど妾はこの人の心に入る切ること出来ないし、又この人も妾に恋を打ち明ける時期でもありません。それほどにまだこの人は若かったので御座います。

この人が中学校を卒える頃には、どうにもこうにもならならほどに、恋病に落ちてしまわれたので御座います。生来が内気な質の人で、そのためか、絵を良くし、一人で居る時等は、唯恋人恋しさに、面影を画いて、寂寥を慰めていたので御座いました。しかし嘗ての幼かりしあの時のお芝居を見てから、三つ子の魂百までの例の如く、この人の心の奥底

に、責に悶え苦しむ美女の、妖艶な姿体を楽しむ性癖を潜在せしめてしまったので御座います。人知れず、密かに苛まれる女を画き、髪は苦悶のため乱れさせ、それが確かに、私の虫が蠢いているのが如く、私の精が漂うが如く画かれていたので御座います。荒縄でがんじ搦めに縛られた女が、手に黒髪を巻きつけて引きづられていたり、二人三人と乳房に縄の食い入った裸女が、お互に長い黒髪を結びつけられて、尚その上、それに縄を結えて天井へ引っぱり上げられていたり、赤いてがらの大丸髷が、根が抜けてがっくりと髷が落ち、立膝をした片足に足枷をはめられて、うなだれていたり、なかなかの絵達者で御座いました。

専門学校を卒業し、実社会に出た頃は、もう完全にいきませんでした。本業の仕事は疎かになり、間借りの下宿に居る時は、蒐集した伊藤晴雨画伯の絵を、写真を、眺めたり、進んでは自分でポーズを作り、それを作画して見たりしたので御座いました。外にある時は、妾に会うべく、狂気の様になって、巷をさまよい歩いたので御座いました。遊廊に遊んでは、日本髪の女を買いました。路上で花のように美しく結った結綿等に会った時は、

本当に我を忘れて見詰め、思わず後を追って行ったり致しました。雨のそぼ降る日等、ネオンの光に輝く濡れた舗道を、つぶし島田が相合傘で通って行った風景、こんなのを見た時、この人はどんなに烈しい、嫉妬と羨望を感じたことでしょうか。傘もささずに、背広の襟を立てて、ソフトの鍔を深く下げて、飛び込んだバーの酒に酔いしれるので御座いました。

この人はもう妾なしでは生きて行くことは出来なくなったので御座います。このひたむきな情熱に、妾は全く同情せずには居られなくなりしました。何んとかして、この苦しい思いを叶えさせて上げたい。しかし妾からはどうすることも出来ません。口を聞くことすら出来ない妾は、髪の子だからで御座いますもの。

だが、だが、遂に時機到来致しました。この人は妾に恋を打ち明けたので御座います。私も嬉しゅう御座いました。今日の来ることを、どんなに待ったことでしょうか、この人の恋に悩んだ、陰惨な顔の影は、掻き消す如く消えて、明るい希望が見えて来たので御座います。

この人は、羞しさを泳いである美容師に苦

衷を打明けて、日本髪の結髪法の教授を請うたので御座います。熱情溢れるこの言葉に、美容師も動かされ、遂に半年の物凄い努力も実を結んで、様々の日本髪の髪かたちを自分のものにすることが出来たので御座います。

もう妾は、この人の胸中にまで自由に入る事が出来る様になりました。甘い恋の私語をたのしめる間柄となりました。妾はこの人の意のままに、花嫁さんの高島田に、舞踊のかづらに、花の如くに美を咲かせることが出来る様になったので御座います。

恋の勝利者となったこの人は、明けても暮れても、妾なしではいられませんでした。妾のために、お小遣いの殆んどは、簪とか、鹿の子縮緬の掛物とか、果ては朝市とか、縁日に出る古道具やから、時代ものの差物を探し出して買い求めたので御座います。この人の机の引出しや、トランクには、数々の櫛、簪、それらも様々の形のものの、派手な娘のものや、町家の女房風のものや、花魁の差す様な大形のものまで、安物のセルロイド製のものから、立派な鼈甲のもの、簪にしても、珊瑚の玉簪から、銀の平打、様々の差しもの、掛物が入っているので御座います。そして部屋の上には、何時も馥郁と咲き香う日



本髪のかづらが置いて御座いました。花魁のように、笄を一本差しにした、つぶし島田に、赤や青のリリアンの束にした房を、鬘に結んで掛けてあったり、おしどりの鬘に赤い鹿の子を掛け、いたづらを下げた前髪に、矢張り赤い縮緬の前結びを掛け、塗りの櫛に、塗りの櫛を差してあったり、こうして時々髪容を変えて妾との恋の語らいを楽しんでいるので御座いました。

斯くして今は、髪の子である妾が、美しい日本髪の中に生きているのか、又はこの人の心の中に生きているのか、最早こんな区別をつけるということが、愚かなこととなってしまったので御座います。美しい黒髪と、妾と、この人とは全く混然一つとなって、不可分の関係が結ばれてしまったので御座います。

ところがこれほどまでの関係柄になつたにも拘らず、この人にしては尚、割切れない憂悶があったので御座います。それは外でもありません。というのはこの人は恋をしたので御座います。髪の子である妾とこの人の心とは一連的な絶対的なものとすればこの人も男性であった

からで御座います。

幼少の頃に見た、あの芝居の印象、ガッチリとこの人の心に喰い込んだ、あの根深い感銘、全くこの人の心を捉えてしまって、唯の平凡な人にしてしまわなかったで御座います。人一倍、情熱の高い芸術家にしてしまったので御座います。敢えて妾はこの様に申上げるので御座います。

奇人画家、伊藤晴雨画伯の例の様にはありませんが、この人の心に、画かれる女性はいずれも皆無惨にも縛られて、長い黒髪は乱れて、口は猿轡を噛まされて、絵にされてしまったので御座います。勿論このための絵画きではありません。表面的には、純粹の日曜画家で、そして立派な技術者で御座いました。

この人は、本当に苦しんだので御座いました。恋を打ち明けても、絵の中の女と同じ様になってくれるかが、大きな煩悶の種で御座いました。それからというものは、楽しい乍ら、物狂ほしいばかりの、努力が続けられて行ったので御座います。

この人が、彼女に恋を覚えたのは、彼女が日本趣味であったためばかりでなく、切れの長い眼のどこかに、哀愁を漂えた風情が、この人の心を恋の囚にしてしまったので御座い

ます。

彼女は、幸にして日本髪が好きでした。この意の、同じうしていることの解かった時は、この人は天にも昇る心持して喜んだので御座いました。この人は、慎重に、自分も日本髪が好きばかりでなく、自分で結髪することを話したので御座います。彼女は、その珍らしさに一寸驚きましたが、反って喜んだように御座いました。

それから、勇氣百倍、心楽しい日々を送ったので御座いました。彼女が茶会に出る時には、桃割れに結ってやったり、お正月や節分には高島田や結綿に結ってやったり、正月や節分には高島田や結綿に結ってやったり、お芝見物には、華やかに花簪の一つも、趣きを変えて、人の羨むほどの、情景を撒き散したので御座いました。嘗ては羨ましがったことを、今は反対に人を羨ましがらせることが出来たので御座いました。それはなんとまあ、素晴らしい、ロマンチックな光景でしたでしょう。美しい夢のような、雰囲気に包まれて、二人は肩を並べて歩きました。あてやかな彼女の姿は、まさに絵から抜け出たように御座いました。行き交う人々は、思わず感嘆の声を出して、ふり返って行きました。

妾は彼女の美しく結い上げられた結綿の中にあって、どんなに誇りを感じたことで御座います。この人と彼女との、恋の甘い私語に、髪も重だげにさし俯いた顔には、始終にこやかな微笑が、心の喜びを隠し切れないままに浮んでいたで御座います。妾も嬉しさの余り、あるかなしかの、そよ風に、差した花簪の房をハラハラと揺り動かしたので御座います。

しかし喜びに浸っているうちでも、この人は絶えず、彼女への教育は忘れませんでした。機会ある毎に、それが映画にしても、一つの小説にしても、たおやかな、可憐な女性に、責め苛まれることの美しさを暗示して行ったので御座いました。

この方法の一つに、演劇を見ることは、確かにいい方法だということ、よくこの人も気が付きましたし、妾も同じ考えで御座いました。というのは、妾の本当の姿を見るのは、演劇でも、歌舞伎と新派しか外にありませんでした。床山がどんな苦勞をするか、一寸この味は、この関係以外の人にはお解りがないと存じます。

小説にしても、大衆小説には、女性の危難に会う場面も出て来ますが、文豪泉鏡花の小

説にはありません。艶麗極りなさには、この右に出るものはありませんでしょう。数々の小説の中で、可弱き女性の本当の美しさが、読むものをして耐えられないほどの、切実さを伺うことが出来るので御座います。

斯くしてこの人は、彼女と結婚したので御座います。結婚の喜びを、今ここでくどくどお話し申上げても詮ないことで御座います。妾がこれから申上げますことは、又これは、妾しか知らない、二人の秘密の世界で御座います。この二人の世界に、妾というものが、又なくてはならない存在ですから、見せつけられても仕方のないことで御座います。妾は髪の子としての、喜びを感じていればそれでいいので御座います。

この人が、彼女を、今ではもう奥さんを、被責の囚人にしてしまったに就いては、さほど困難を感じなかったことを付け加えて置かねばなりません。

節分に婚礼の式を挙げて、その年の、半袖のブラウスを着る夏の頃ともなれば、二の腕や、手首に、余程注意力の強い人でなければ、気がつかないほどの、縄の跡が、微かに残っている時が御座いました。無論妾はよく知っていますが、妾自身、そのことに就い

て、一役買っていると同時に無上の悦びを感じているのですから、何も人に話す必要もないことで御座います。

それはまだ残暑もきびしい八月の終り頃でした。朝から鬱陶しかった空も、夕暮れの時からぼつぼつと降って参りました。土曜日のこととて、二人の間には約束が出来ていたのでしょう。夜も更けて、人の訪う心配も、全くない時分に、この人は奥さんを鏡台の前に坐らせて髪を梳き始めました。髪の子である妾は、こんなに梳かれたら、梳き取られてしまふとお考えになるでしょうが、虫であつて虫でない妾は、妾の美しさを知る人の心に通う、髪の子で御座いますから、決して梳かれません。

着々と結び上って行く、根かもじを入れて髷から、鬢へ、前髪と、妾は限らない喜びを味わい乍ら、油にしっかりと濡れた、つややかな黒髪の間を、跳び廻っていたので御座います。最後に出来上ったのが、なんと立派な高島田で御座いました。髷の根から丈長を下し、飾り元結をピンとはね、中差しを一本髷の中に通し、平打の銀簪を差し、前髪の傍にビラビラ簪を差してしまえば、美しくも御殿女中の髪が出来上りました。

この人は、油になった手を布で拭き乍ら、その出来栄に、我乍らうっとりと見詰めるので御座いました。濃くお化粧なされた奥さんの、なんとまあよく似合うことでしょう。婉然と笑われた、そのお顔は、この世の人とも思えぬ、不思議な美しさがありました。

それが、それが、お芝居では御座いませんが、次の幕には、ああなんと無惨にも、身は裸にされて、裏庭の一本の木に、縛りつけられているので御座います。木の後に手をまわされた、荒縄が、乳房の上を、二の腕の上を痛々しげに喰い込んでいたので御座います。

あたりは、漆黒の闇ですが、開けた雨戸から洩れる淡い光は、漸くこの二人を闇から浮び上らせ、雨は細かい銀線となって、二人に降りかかっているのです。この人は雨合羽を着ていますが、奥さんは哀れにも、濡れた地面に、きちんと坐られ、膝がくづれない様に、膝にも荒縄が、ぐるぐるかけられているので御座いました。折角綺麗に結い上った高島田も、そぼふる雨のために濡れ、鬢から髷から、責め苛まれて、額にかかるみだれ毛から、ぼたり、ぼたりと雫が落ちました。だからと云って、決して髪の子の美しさは、壊れてはいません。それは妾がいるからで御

座います。島田の鬘は根が抜けて、がっくり傾いて、夏と云え、雨に濡れれば矢張り寒いのでしょうか、ビラビラ簪が心なしか震えているように見えるので御座いました。

こうした姿の奥さんを、眺めているこの人の手には、松の枝が一本握られて、雫のつうと流れる、濡れた真珠の肌に、時々ざっざつと尖った松の葉を突き立てるので御座いました。その度に、奥さんは悲痛な、呻き声を立て、荒縄の喰い入った身をよじらせるので御座いました。雨に濡れた荒縄は、全く惨たらしくも、乳房や、腕、太股に千切れるばかりに喰い込んで、かけられた荒縄の締るのには奥さんもことの外、官能の愉悅に襲われるように見えるので御座いました。

松葉を突き立てられる度に、身は悶えて、髪は後の木に当り、遂に元結いも切れて、干々に乱れでしきるので御座いました。寒さのために、赤い唇も黒くなり、劇しい刺戟のために、憔悴の色も濃く、目には隈が入り頬に垂れかかる乱れ毛を、噛み締めて、雨の中に縛られた姿は、妖艶と云おうか、凄艶と云おうか、当の二人もさること乍ら、客観的立場にある妾までが、興奮の渦に落されたような気持になるので御座いました。

この人は又、奥さんのきちんと坐ったまま縛られた膝の上に、大きな庭石を乗せるので御座います。本当のそろばん責というのは、もっと凄惨なものでしょうが、簡単に大石を乗せられただけで、この人も、奥さんも、そして妾も又変った刺戟で御座います。大石を揺り動かしたり、松の葉で突いたり、髪の毛を握って頭を振り動かしたりして、この人は愛する奥さんを責め苛んで二人は悦楽の極限に達して行くので御座いました。

雨はなかなか止みそうにもありません。家の中から洩れる電灯の光に、植え込みの木々の葉は雨に濡れてきらきら輝き、夜も相当更けた頃には、二人の快楽も終りを告げ、予め用意して置いた、浴場で冷えた体を温めねばならないので御座います。ぬるい湯からひりひり体にしみるの我慢し乍ら元の体にするのに相当の時間がかかり、乱れた髪も洗うのに後仕末が大変で御座いました。

扱、ここでこの人の奥さんの事に就いて、一寸紹介をして見ましょう。

妾は髪の子である以上、それも特に日本婦人古来の美しい黒い長い髪の子である以上、別に妾はこの奥さんだけに、好意を寄せている訳のものでは御座いません。職業や、貴賤

は問いません。唯、美しく艶やかな、ロマンチックな長い黒髪が、妾の生命で御座いますから。けれど悲しいことで御座います。時代の移り変りは、妾の生命も締め、妾の寄るべき所を狭めて行く様で御座います。

しかし、妾がこの人の奥さんに絶大なる好意を寄せている訳は、言うに及ばず、二つと比類のない、美事な黒髪の持主であるからで御座います。その豊かな長い髪は、油を含んでしっとり濡れ、素直に延びた髪、その冷やかな感触は、全く宝石以上の宝石で御座います。その髪の中を駆けめぐっている時の妾の気持はもう唯夢の中、もし奥さんが、輝くばかりの日本髪を結っておいでになる時は、唯々天国、極楽、浄土、絶対的歓喜の言葉で以って表現するより仕方が御座いません。

洋服というものを召されたことのない奥さんは、何時も粹好みの着物を着、普段は長い髪を器用に束ねた束髪にし、用事の時は、前垂れにたすきがけ、夕方に旦那様であるこの人を迎える時には、たまには黒襦子の襟のなかった着物にでも着替えてそれが丸鬘にでも結っていたら一分の隙もない、絵か、お芝居の人か、というのがこの奥さんで御座います。

告白……………私の懷想談

サジ女学生とその奴隷

鷹島みどり

私は一昨年、高等学校を卒業し今ではのんきに家でぶらぶらして花嫁修行をしている二十三才の娘です。しかし、私の花嫁修行というのは、いわゆるマゾ男をからかう遊戯なのです。ここには、女学生時代の思い出を抜き書きしてみました。

○ 私的女学生時代の思い出の中には随分危険な（女として）ものや思い出しただけで背中がゾクツとするようなスリルに満ちたものがあります。その中から面白そうな所だけ抜き書きしてみようと思います。

その頃、私はたしか女学校二年生のお転婆盛りでした。家庭はよく不良少年少女を扱った映画にある様に、父は五つばかりの会社の重役やら顧問等をしていましたので、自然私は奔放になり勝ちだったのです。母は私が十二の時に亡くなりました。父は母が亡くなる前からもうそうだったのですが、更に一層乱行を始めました。しかし、私には月三万円程度の金をくれました。女学生の私にとってはお小使いとしての月三万円というお金は十分過ぎる程でした。

そんな頃、戦争中疎開していた静岡の農家

の子供（といっても私と同年ですから子供というのは変ですが、疎開当時は私も彼もまだ子供でしたから）が父母に死に別れ、わずかなばかりの土地も売り払って遂に生活に追われ父をたよってやって来たのです。

父も疎開中や終戦直後は、その家に変世話になったのでしたから何とか計らって上げようと言いましたが、私は当時、彼から野菜や穀物等を貰いに行く度にいじめられたので、彼にはいつか復讐してやろうと考えていたのです。私は父に頼んで彼を家の使用人として雇うようにしました。初め父は恩人の息

子だから会社の秘書にでもしたいと記っていましたが、結局私の願いをおし通してしまったのです。

彼は父母に死なれてからの生活苦の為かすっかりいじけてしまつて、昔のような活発さは全然見当らず、父や私に対しては絶対服従する様な態度をとっていました。民主主義の世の中でも、彼は自分自ら封建主義を基いているかの様でした。

父は殆ど会社を回っていて、夜もキャバレーとか待合とかで遅くなるので、彼（博志といいますが）は結局私の小間使い同様でした。私の靴を磨く事はもちろん、私の着物や下着の洗たく、食事の時の給仕等はすべて彼にさせました。殊に私は脂足で、ストッキングの裏なんか、べっとり足の形に色が変わるくらいなので、洗濯以外にも、足の裏や指の股なんかを拭かせました。それ迄は女中を二人置いていたのですが、博志が来て二週間後には、若い女中にはヒマをやり、老いた婆さんだけを残しました。

朝、私が学校へ出掛ける時は、ちゃんと玄関に靴を揃えさせ、靴へらを持ち待らせる様にしたり、帰ってからは蒸しタオルを用意させて顔、手、足等を拭かせたりしました。特に私

は足をよく拭かせました。殊に私の足を拭かせる時、彼は喜んでやるようでした。又、書棚の本等は全て彼に肩車させたり四ツン這いにならせて上に乗ったりしながら本を取り出したものでした。それでも彼は私に対しては「お嬢さん、お嬢さん」と崇めて、どんな無理な言いつけにも背きませんでした。もっとも少しでも文句を言おうものなら、こう言っておどかしてやるつもりでした。

「博志、お前はこの家を追ひ出されたら、行く所がないんだろ。追ひ出されない様にしっかり働かなきゃだめだよ」と。

こんな状態で結局博志は私の奴隸的存在となったのでした。私達の学校は女学校と言っても男子共学に切り変えられたため、女子と男子の割合は三対二位になっておりました。

私は一年生の時から既に数人の男子から交際の申込みを受けたのですが、皆な私を女子としか思わず、私に奉仕しようという気持がないらしく、その上ガールフレンドとしてアクセサリー化しようとしている様に思われたので全部ふってやったのです。そこへ博志の奴隸的奉仕をする出現ですから、私はこの男こそ、いじめぬいてやろうと思ったのでした。

博志が来てから四カ月目、つまり七月上旬

でしたが、私は初夏の信州霧ヶ峰へ博志を供にして出掛けたのです。諏訪には父の別荘がありましたから、丁度別荘をホームとしてまわりの山々を楽しもうと思ったのです。七月上旬の信州はまだ比較的涼しく人影もまばらでした。

私達とはいうより私と奴隸の博志は——上諏訪からバスに乗り霧ヶ峰の麓の終点で降りて、青草ののび初めた草原へ回ったのです。ヒロシに食物等の入っているバッグを持たせ私は何も持たず、のんきに流行歌等口ずさみながら草かげの道を歩きました。昼近くになると流石の高原も日光の直射で暑くなり、もう歩くのが嫌になりヒロシに言いつけたのです。

「ヒロシ、私、もう暑くて疲れてしまつて歩けないわ、それにほら、ハイヒールで来たでしょ、足が痛くって、もうとても歩けないわ。どうかしてよ」

博志はあきらかに当惑したらしく困った顔をしていましたが左側のから松林を指して、「では、お嬢さん、あそこの林の中で一休みして行きましょう。そうすれば疲れもじきになおりますから」

と言いつつ私の手をおそろおそろとって林



まで行ったのです。

「ちょっと博志、私の靴脱がせてよ」

と彼の眼前に足をつき出しました。ハンカチで額や首のまわりの汗を拭いていた彼は、私の足をみてちよっとどきまぎした様子でしたが、「早く」と急がせるとあわてて、赤い

ハイヒールに手をかけて脱がせてくれたのでした。

十分ばかり休んでいる間中、私は靴の中でむれた両方の足を彼にもませました。今度は草原をやめてから松林の中を進む事にしました。

「今度は林の中を進んだから、お前肩車して私を乗せて行くんだよ。いいわね」

彼にしゃがむ様に命じ、私はジャンパースカートで彼の頭を包む様にして肩に跨った——というより首に跨ったのでした。スカートの内にこもっていた体臭が彼の嗅覚をして大いに興奮させた事は、彼の息使いのはげしくなった事からも充分伺えました。

約一時間ばかりの間、彼の鼻をおさえつけたり、耳を引張ったり、つねったり、又、スカートをかぶせて目かくしをしたりして彼を適当におもちゃにして弄びました。その中、さすが頑健な彼も私を背負ったままで歩きまわらされたので遂にノビてしまいました。私は彼の顔の上へスカートを揚げ薄いパンティのお尻を乗せていました。

「ヒロシ、のびちゃったの？ のどがかわいているでしょう。お水あげようか。こう見えても私はなさけ深いのよ」

肩に提げていた水筒を渡して顔からお尻を上げました。実はこの水筒には、ちよっとしたいたずらがしかけてあったのです。それは林の途中で、空になった水筒をもって清水の出ている所へ水を汲みに行くといって私は彼から見えない所でスカートをまくって水筒の

中へお小用したのです。清水で冷やして暖みを去って戻って行ったのでした。

彼が美味しそうに飲むのを眺めて「ウッフ、知らぬが仏とは、こんな事を言ったんだわ」と思いながら

「ヒロシ、どう味は？ 美味しい？」

と尋ねたら

「ええ、お嬢さん、とっても美味しいです、

これほど美味しい水を飲むのは、生れてはじめてです。まるで胃の中がしびれるみたいです。何だか清涼剤でも溶け込んでいるんじゃないかな」

こう答えたのです。私はふき出す様に

「ウッフ、そんな水なら、どこにだってあるわ。私の家にだって、私の居る処なら、いつでも飲めるのよ、もっと欲しければあげるわよ、お望み？ ウッフ、だってそれは私のウッフ私の、ウッフ、どう驚いた。お前は、私の、オホホホ、美味しい、美味しい、もっと欲しいなんて言って飲んだのよ。おまけに清涼剤が溶けているとかなどといって……。アハハ、好きだったら、今度は毎日飲ませてあげるわ」

彼は、なんだか、わけのわからぬふりをしていました。そうとわかると感激したよう

です。それ以来、私は朝はもちろん、学校から帰った時も、彼をトイレ代りとして使用したのでした。狭苦しいトイレへ入って自分の手を使うより、この方が手もよごさずに済みますし、わざわざ室を出る必要もないのですから最高ですわ、ウフン。こんな豪華な生活を楽しんでいる同性って、あるかしら？

○

次にもう一人の奴隷のことについてお話ししましょう。

さて、夏休みには学校の男子の一人を奴隷として扱いました。最も彼はアルバイトとして私の用事をする事になったのでした。

この時は、湖のボートの中で彼を使いました。湖の名が記憶にないのが残念ですが、割合広いのにボートは三そう位しかなく、人も居ませんでした。料金も安かったので三時間借り切りとしてアルバイトの男子幹夫にオールを持たせたのでした。その湖は広いのですが入江が多く囲りはガケになっていて岸には降りる事が出来ない妙な湖でした。二時間ばかりすると私は尿意を催しました。博志ならすぐ便器として使ったのですがこの場合はそう簡単にはいきません。幹夫に言いました。「困っちゃった。私、トイレへ行きたくなっ

ちゃったわ。どうかしてよ」

「さア、困ったなア、岸へはあがれないし引き返すには相当時間がかかるし。こんな時、男なら便利なんだけどなア。まさか女じゃ水の中へするのは無理だからな」

「じょうだんじゃないわ、私、もうどうしよう。出ちゃいそうよ。ねえ、幹夫さん、何とかしてよ。ねえったら」

「だって……」

「じゃあ、アルバイトのお金、倍にするから私のたのみきいてよ。ねえ、早く返事してたら」

「しかし、お金を倍もらったって、どうしようもないよ。ここじゃ、困ったなあ」

「ねえ、お願いよ。あそこの入江の繁みの中なら誰にも見つからないんだもの。いいじゃないの。ねえ」

この時、彼が素直に「よし、じゃあ」と言ったのには、私もいくぶん驚きましたが、後で考えてみると彼にはマゾの血が流れていたのではないかと思われまます。

その後、学校で彼に会っても二人でニッコリと笑を交すだけです。が、三年生になってから再び彼を使う事になったのでした。そのことは又、あとで書くことにします。

(体験小説) 〓 応募原稿

男ごころと浮気ごころ

岐阜県高山市西町二二五

梓 加 代 子

庶務課勤務を命ぜられた尚子は、その係長戸田の後に随って入社挨拶に連れて廻らされた。

「此度庶務課に入られた佐藤尚子さんです」

戸田は労務、資材、・画、経理と一わたり紹介して廻って呉れた。一人々々の名前を云われても、それを覚え込むこと等は及びも付かぬことで

「どうぞよろしくお願い致します」

と云い乍ら社員の多くの眼を、いやが上にも意識する気づまりを気付かないではいられなかった。その中に在って尚子を好奇以上の妙にぎらつく眼で眼鏡の底から凝視している男にはっと気付いた。戸田は確か

「こちらは藤原さんです」

と云ったのが耳朶の底に残っていた。その時の藤原が示した瞳の色を思い起すと、尚子は何か慄然とならないではいられぬ気持ちであった。

もうすでに若いとは云えない尚子は、そのような中年男の好奇心を通り越した眼差には圧倒も微動だもしない。一種の不逞々しいものさえ身に着けて冷然と見やることに慣れ切っている現在であった。

併し藤原の視線には、それだけでは片付けられぬ何か目には見えぬ怪しい糸のような作用があり惹かれるものを覚えるのだった。

彼は決して美男子と云うものでもなければ

亦尚子を魅了するに足る程の知性の閃きも沈潜も認められはしなかった。只尚子に向けられる瞳の異状な恐怖めいたものが感じられるに過ぎなかった。

この時の彼女のインスピレーションは矢張り単なる想い過ごしでないことが後になって判って来た。藤原は折あらばと尚子に誘惑の触手を延ばそうと内心画策をめぐらしていたものに相違なかった。

そしてその機会は程なくしてやって来たのである。浮草稼業にも似た土建会社の常として同じ処に長く逗留することを許されぬ社員達は、その全部が家族を離れて工事場の合宿の殺風景な雰囲気仕方に耐えられずに行かな

ければならない。そしてその日常の味気なさを紛らわすものは手近かの女達にむけられることも極めて自然の成行であった。尤も大抵の社員は一カ月に一度位は帰省して妻子の顔を見るのが常例となっていたが。

そして美貌と云う程の尚子ではなくとも、この山深い工事場の単調さの中に処女の頑なさを出して瑞々しく成熟し切った今が女盛りのその物腰は、矢張り中年男の好心をそそり立てるものが多分に発散していたに違いなかった。

その上、尚子が山に入って来る迄の噂が余り高かった為、勢い皆の期待は大きなものとなつて行つた訳だった。つまり彼女のその様な声価を高からしめた原因は大したことでもなかったが、人の噂は何につけても拡大されるのが例である。

彼女はT市にある本社の入社試験に合格し、再度の呼出しを受けて山の工事場にやられることを云い渡された。その時の注意事項の一つとして携帯品の話が出たのである。話が進行して行きかけた時、傍に同席していた四十を二つ三つ過ぎた位の社員が「お嫁入りとは違いますから、大きな姿見などは持って行く必要はありませんがね」

揶揄と侮蔑を込めた口調で薄ら笑いを浮かべて尚子に対して云つたものである。

「そんなことは、つまり常識の問題でしょうね」

彼女は殊更にこりもしないでにべもなく云い放つてやつた。

「いやこれはどうも、常識の問題と来ましかね。うわはは……」

その社員の畑中は大仰に頭を掻いて恐縮の態を装い他の社員達と顔を見合つて破顔一笑したのだった。その哄笑の中には如何にも自分の頭脳の程度を尚子に一言で指摘されたばかりの悪さを隠蔽しようとするさもしさのあることに彼女は気付くのであった。

このような事実が山の奥のこの事務所にも噂は忽ちに伝つて

「此度来る事務員ってのは仲々容易な者じゃないらしい。何しろ畑中君を一言の元にやつけたと云うんだからな」

「何でも前身は新聞記者だったそうだね」

噂は噂を生み次ぎ次ぎと波紋は広がって行つた。

とにかくにも一寸した小都市に在る一小末寺とは云い乍ら寺院に生を受け成長して来た尚子が、何を好んでこの様な山間の殺風景

な工事場にまぎれ込んで来なければならなかったのか。事務所の誰彼は日と共に尚子の身辺の事情を知るにつけさまざまの秘められた奥深くの何物かを嗅ぎ出そうとし、又勝手に脚色してもみたりしてより以上の好奇の眼を以って接しようとするのであった。

山間の人家まばらな何の娯楽機関もない工事場の慣例として、酒がその対象となり親しんで行くようになることは当然過ぎる事柄ではあつたろうが、実によく何かにかこ着けては飲むことの多い職場であつた。尚子はこのような社会には始めてのことであつただけに驚異の眼を瞠ると共に、その底に横たわるこれからの生活の暗い投影を前途に予感する気持でもあつた。

その夜も社員準社員の全員が一堂に集り、山奥の寒村には不相応の数々の御馳走を前にして酒宴が始められた。此処に働く女達は昼間からその準備に忙殺され、魚と野菜に取り組んで如何に男達の嗜好欲をそそるかに腐心しなければならなかった。

愈々盃が各自の手に執られると銚子を持って女達は右往左往し、彼等に酒を注いで廻り時に盃を強いられれば、それを見事に干す術さえ心得ていなければならなかった。

何のことはない芸妓と酌婦の代用品にも余儀なくならされる訳であった。

炊事場の床の上に一升びんが林立する頃は六十何人もの酒席の喧騒はお話にもならぬ位であった。唄う者、手拍子打つ者、踊る者、訳の分らぬ大声でわめく者、さては泣き上戸や喧嘩をおっ始め出す者さえ出て来ると云う始末だった。

尚子は出来る限り、そのような席には出ること避けて炊事場の片隅に小さくなって洗い物に向っていた。

揃って酒豪ばかりの彼等は酒好きの通有性として、一カ所だけで飲むことに満足しないので次ぎ次ぎとその河岸を変えて飲み歩くのである。酒宴も半ばを過ぎると三々五々彼等は連れ立って消えて行き、附近のちゃんな名ばかりのような飲み屋に入り、或はたった一軒きりの旅館兼業の料理屋めいた家に上り込んで又飲み直しをし出すのであった。然しこれ等とても或はその家にいる若い女達に接することが大半の目的であったのかも知れない。

この様な雰囲気は絶えず醸される中において、男女の愛欲の縮図が、くり拡げられることも又必然の成行と云えたのであろうか。「さあいい子だからしっかり掴まってね。部

屋へ行って休まなきゃ駄目じゃないの、ね、いいでしょう、さっさと歩くのよ」

背後の廊下から聞えて来る聴き覚えのある声に尚子は仕事の手を一寸休めてさっと振り返った。そして思わずどきりと鼓動の脈打つような想いに気付いた。

右腕一ぱいに抱え込んでその半身をびったり喰付けるように軀を密着させてよたよたと歩みを運んで行く男女の二人……

「うんうん」と云うような呟きを喧騒の人声の間に響かせて全身の重量を放りかけて行く男はK課長の余りにも不ざまな醜態であり、女は甘才を過ぎたばかりの尾崎優子の姿であった。

尚子は次ぎの一瞬、わけの分らぬ苦痛が、みぞ落ちの辺りを閃光のように横切るのを覚えた。

あの様な姿態を眼の辺り見たのは、ここ幾月振りのことであつただろう。彼女は郷里の市に居る高木の姿を切ない気持でよび起さないではいらなかった。所詮は他人同志として生きて行くより外ないと自ら断ち切ったきずなであり、彼とは惜別の泪の間に固い決意を抱いて飛び込んで行った謂わば自己嗜虐の山の工事場の職場であつた。

妻子ある彼の家庭を思えば余け者の尚子の位置は余りにも罪深いものであり、この儘三角形の一边をなし、平然と生きて行くことの屈辱には、その自尊心と潔癖が到底赦すものではなかった。

彼女の意識した一瞬間のみぞ落ちの痛みはつまり彼を恋うるためのものであつたことを勃然と悟り、尚子はぱっと頸の辺りまでも紅に染めるのだった。

K課長と優子の姿態は尚子のような新来者の瞳にさえ決して通り一ぺんの上役とその下に働く女事務員の域とは云えない何かがあった。彼等の喰つき合った肉体からは最早お互を知り尽した気安さと四辺の者の眼差を黙殺した横着と、その上に腥ぐさい情感が青い燐を上げてゆらゆらとゆらめいてさえた。

尚子の驚きの表情などは颱風の前の一個の虫けら程の価値もなかった。

こんな情景を忙しく立ち働く他の女の同僚達は何の関心も示さぬ泰然さで看過して行った。むしろこんな事実を目撃しても盲目となることに否応なく慣らされた彼女等の神経と云う方が適切なのかも知れなかった。この様な理不尽で又むき出しの痴態が他の社員に刺戟と影響を与えぬ筈はなかった。

尚子は洗物も一段落したので、しばらく息抜きに思いつら人影の余り見えぬ事務所へ行き、彼女の机に坐って三、四人で喋り合っている男達の高声の話を聞くとともに耳に止めていた。

暫らくすると大部酒の回ったらしいとろりと濁った眼の藤原が、何気ない風にぶらりとやって来た。然し彼は別にその話の仲間入りをするでもなく、時折薄く色の着いた変形の眼鏡を光らせては尚子の横顔や俯向いた理知的の顔などにきらりと視線を浴せるのであった。それは万一同子の視線と空間で偶然にもぶつつかれば、それがかっきりと受止めて絡み着き、その上言葉で語る以上の表情を両眼に托し、眼に物言わせる機会の倖僥を希う彼の魂胆からであった。

「佐藤さん一つダンスやろうか」

話の途中で沢木が尚の方に向き直って云いかけた。

「あたしダンスなんて全然出来ないもの」



それでも尚執っこく追い縋ろうとする沢本を見ると

「藤原さん、助けて」

尚子は思わず彼の肩に掴まって、はっとした。こんな無意識の態度が、彼の酒の力を借りて半ば麻痺状態となっている六感にどれ程の強靱で鮮烈な媚態となつて迫ったかに気付いたのだ。然しその時はもうどうなるものでもなかった。尚子はぎよっとし乍ら彼の頬に浮んでいる表情を見逃すまいとちらと見てやることを忘れなかった。彼は只何となくにやにやと頬を崩しているようであった。

この様な思いも設けぬ一駒を投げたことに藤原の感情は遂に一点の灯をともされた想いであつたのだろう。親近感尚子の掴まった肩の辺りの感触を想起する毎に深められて行く気持であった。

その夜以来と云うもの藤原は棟続きの女部屋にやって来ては尚子に

「一ぺん位散歩につき合ってくれたっていいだろう? ねえ、佐藤さん」

「そんなこと御嫌遜でしょう。」

沢木は（かくしたりしても、ちゃんと分っているよ）と云わんばかりに、尚子の腕を執ろうと手を延ばした。

「いやな人ね、ダンスのダの字も知らないって云っているのに」

彼女は思わず大声になり乍ら沢木の手を振り切って後退した。

「何ちゅう冷めたい人なんだろうな」

こんな口調で彼は哀願とも冗談とも取れることばを云いかけるのだった。けれど尚子は根底から冗談としてしか受取らぬ素振りを見せて決して相手になろうとはしなかった。

五月の爽やかな微風が頬を快よく吹き渡る頃、N会社側の主催になる起工式が盛大に挙行された。式の終わった後では例のように酒宴になり、それに招待を受けなかった社員や飯場の労務者達にも祝い酒が出て、その夜は何処も此処もお祭気分のように賑わい、深更まで放歌や酔っぱらった大声は消えることもなかった。

藤原達招待を受けた者達も改めて仲間に入つて、こちらの会社側の者ばかりの酒の席が設けられ、一しきり又大騒ぎを演ずるのであった。しばらく盃を傾けていた藤原が何か癪にさわることもあったのか、突然眼の前の銚子や盃を手当り次第に放げ出し始めた。酒は銚子の口からどくどくと溢れ出し御馳走は皿ごとひっくり返って塵だらけになり、赤飯は折詰を飛び出して辺りにばらばらと散乱すると云う惨状であった。

女達は手がつけられず只「あれあれ」と茫然自失の態で、どうしてよいかの分別も湧か

なかった。

傍に居合せた二三人の同僚がこれではとても堪らないと彼をなだめようとするのだが、猛り立った藤原は益々居丈高となるばかりだった。これ迄いくら飲む機会があったとは云い乍ら、こんな乱暴をしたり大声を上げたりする彼は見たことがなかった。

「俺の気持が判るかってんだい」

幾度目かの藤原の喚き声に尚子は炊事場から顔を出してのぞきみた。同僚達に腕を押さえられて彼は座敷から廊下に連れ出されようとする所だった。それでも彼はなされる儘になつていようとはしないで、振りもいだ手を力一ぱい襖にぶつけた為、紙は破れて大きな穴が明き、ばたと音をたてて倒れて行った。

「まあまあ、そんなにしなくても」

「あんたの気持はよく判っているから」

とか何とか口々になだめられ乍ら、彼は不承々々無理やりに事務所の方へ連れて行かれた。

尚子達は早速走り寄って、その狼藉の跡を綺麗に始末しなければならぬ。尚子はその辺の社員達に

「何をあんなに怒っていたの」

と訊ねてみたが誰もその原因が何であったか見当さえも付かぬ面持ちであった。

尚子はばらばらにばら撒かれた赤飯を箒ではき寄せていると背後で

「佐藤さん、藤原さんが一寸来て欲しいんだって」

と炊事婦の葉ちゃんがエプロンの裾をぐるぐる右の人差指に巻きつけ乍ら呼びかけた。

「え、藤原さんがあたしに一体何の用があるって云うの？」

「何だか知らないけど、事務所まで来て呉れて、私にそう云ってくれてことだったから」

葉ちゃんは云われたことを伝えるだけだと云い終ると何処かへ姿を消して行った。

「本当に何の用かしら？ いやだわ、あたし藤原さんなんか用なんてある訳ないもの」

葉子の言葉を聞いていた傍でこれも藤原の後始末をしている同僚の恵子に云いかけた。

「何だか知らないけど早く行ってやらないとあの人又乱暴し出すからね」

「それもそうだけど、あたし何も悪いことした訳じゃないし、人を呼び付けたりしなくても良いじゃないの」

尚子は然し恵子を相手に押問答をしていて

も仕方がないとは思ったが、先刻のあの乱暴の後の今彼に何の用も分らぬ儘呼び付けられることは薄気味悪くてならなかった。と云つてこのまま素知らぬ顔をし続けることは尚更不可ないと考えると、彼女は怖る怖る藤原のいると云う事務所へ行ってみるより外なかった。

彼はたった一人で椅子を背によりかかるようにしてこちら向きになつて居り、尚子の入つて行く姿態を直ぐにとらえた。

「藤原さん、用って一体何ですか？」

つとめて無関心を装つて尚子は訊ねてみたが彼は眼鏡の底の熱い眼差で彼女を睨み上げるように眺めたきり暫くは無言であつた。尚子はふつと彼のその視線に蛇の眼と共通するようなものを感じて身震いするような気持ちだったが、負けてはならぬと云うように

「葉ちゃんに聞いて来たんだけど、用があるって話だったのでしょ？」

と傲然とも見える語調で云つた。それは何か怒りの言葉が発矢と放げられるであろう彼の機先を制する手段でもあり、又挑戦を意味する口調でもあつた。

「そんな喧嘩腰でやって来なくたっていいじゃないか。ねえ佐藤君、散歩につき合つてく

れよ」

彼は先刻の権幕は何処かへ消えてねつとりと絡むように哀願するのだった。

「なあんだ、そんなことでわざわざ人を呼びつけたりしたのね」

尚子は少し拍子抜けしたようになり乍ら、それでも（此度はこれ迄の様な冗談として柳に風では済まなそうだな）と藤原のてらてら脂の浮いた額をじつと凝視するのだった。

「僕の相手じゃ嫌だつてんだろ、おい彼女、何とか返答しろよ」

次第に彼は調子が荒く雲行は悪くなつて来るらしい。座敷で怒鳴つたり物を手当り次第に放げついたりした、あの乱暴も彼の真の心の中には尚子に向つての鬱憤晴らしであつたのではないかと思われて来、そう思いかけると確実性を帯びた想いが、その胸に根を下して行くのだった。

はるばるとこの山の奥に謂わば恋の逃避行をして来た尚子が、今亦心ならずも再び愛欲の泥濘に引張り込まれようとする自分を見出して、彼女は女ひとりの歩む道の多難さを改めて嘆息する気持ちでもあつた。

併し彼との愛欲図を臆面もなくこの工事場に拡げ狭い山間の人々の好話題となることに

甘んじて行ける尚子でないことは判り切った事実である。

それに別れて来た高木ですら一カ月に一度か二度の逢瀬をひしとそれこそ胸も潰れよと抱擁し熱い唇を寄せて

「明日の朝までじつとこうやっていようね」等と溜息まじりに囁いても勝手に自分一人が興奮しその衝動の結果自分丈けがさつさと満足を感じれば、後はうるさい者のように、そそくさと身支度を終えて時計を気にし乍らあたふたと自宅に帰るのである。

自家に在つてはその妻に片鱗も悟られまいと御機嫌とりに汲々としなければならぬ。それが男の通有性であることを尚子は身を以て感じ過ぎる位に感じていた。

つまり妻に対して何の不平不満も特別抱いていなくとも、他の一寸好心をそそる女にはその袖を引いてみたくなると云う浮気ごころの衝動に過ぎないのであつた。

藤原とて歴とした家庭持ちの男である。彼も又その内の一人であることに間違いはなかった。そして又此処でも心ならずも一人異性の仇敵に等しい存在を造り出して行かねばならぬ本意なさを、彼女は併しじつと耐えて行かねばならぬのだらうかと考えるのだった。

緊縛フォト撮影の実際

△関谷夫人緊縛日記▽

塚 本 鉄 三

十月九日（火）晴

私の自由日記には、それだけ記して、あとはブランクのままである。

先日、六日に関谷さんと別れて以来、私の頭を支配していたのは、三日後に約束した撮影のことばかりであった。

三日後という近い日を指定したということは、六日の日の撮影で或る程度彼女の期待にそい得たためかもしれない。第一回の時の緊縛はなんとしても手ぬるかった。今にして思えば、六日の第二回目の時にしても、手加減し過ぎた嫌いだ。ないでもない。

今度こそ、身体が二つ折りになるようなエビ責め、全身の骨という骨が、ぼきぼきと音を立てるような逆エビ縛り、それに彼女の好むムチ打ち、浣腸責めは勿論のこと、ありとあらゆる責めを加えてやろう。私は、あしで、こうしていろいろプランを練った。

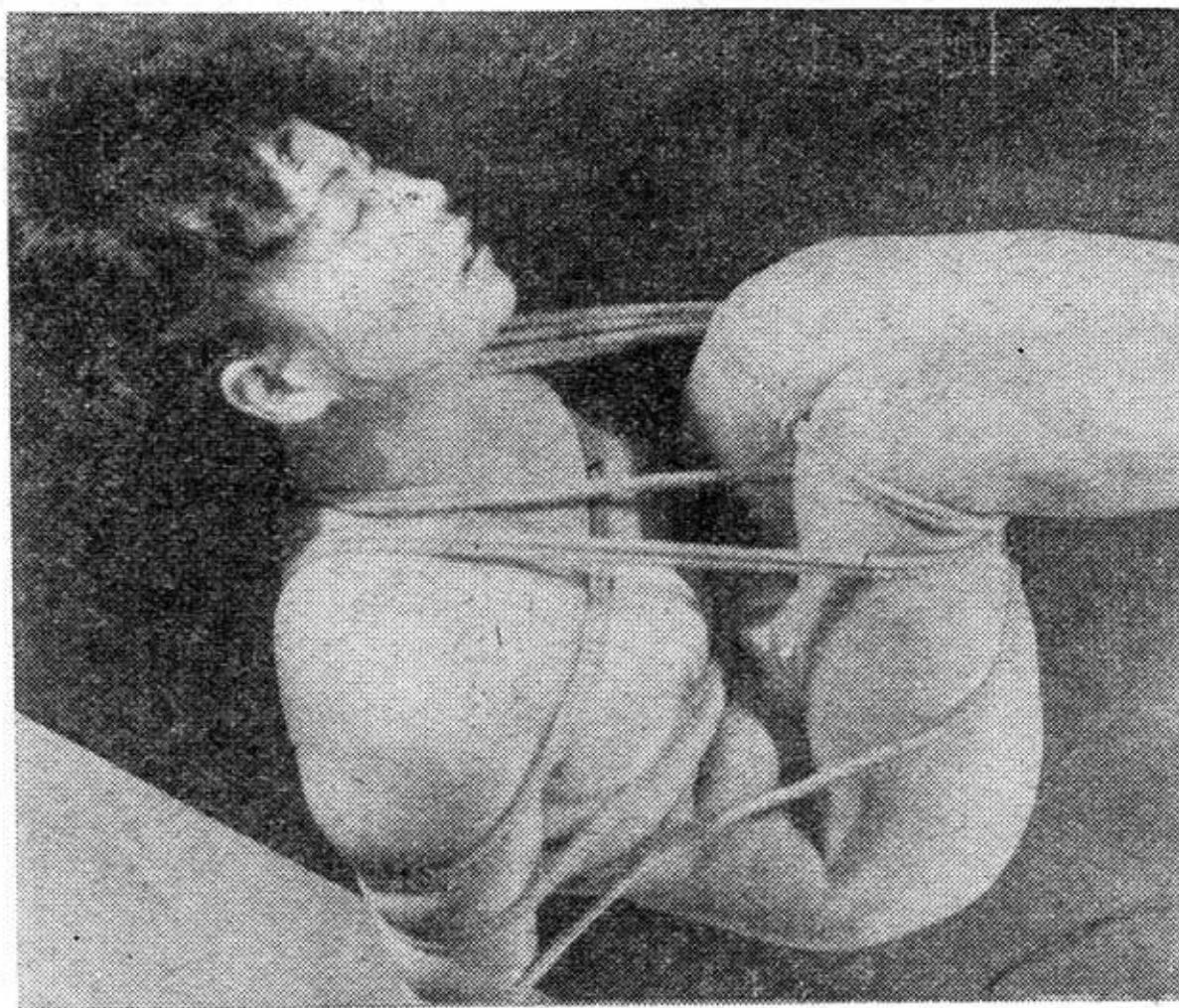
「妾、今までされたことのないような責め方でも結構ですわ、教えて預きたいんですの」と、この前、言っていたっけ。とにかく、ぎゅうぎゅうという目に合わせたい。只、苦手なのは、彼女の極めて上品な物腰と、丁寧な言葉遣いだ。つい、こちらも話しあっている

るとかしてまってしまう。

その日、私はこの前に写した中でいいものを手札型に引伸した印画紙を準備して約束の時間に、先日の家を訪ねた。

彼女はすでに坂の下の十字路まで迎えに来てくれていた。余り交通量はないらしく、道いっぱいに秋草が茂ってサンダルをはいた彼女の白い足を半ばかくしている。

ピンクのレースでふちどりのエプロンをして、若奥様市場へお買物といったスタイルである。どうも、彼女は相手の意表をつく癖がある。このときから、彼女のペースにはま



りそんな気がする。

「いらっしやい」

笑顔を見せた彼女は、さっさと坂道を登ってゆく。左側は石垣を築いた豪邸といった感じのお屋敷、こんもりと樹が茂ってひっそり

としている。日中だというのに、一向に人通りはない。家も少いせいだろう。

見事な枝ぶりを伸した松の木の下をくぐって勝手口から家へ入る。カチンと内から鍵をかけると、「今日は、誰もいませんのよ」

と、何気なく言う。そんな言葉も彼女の口から出ると上品で、何の嫌味もない。

「お飲みになりません」

南米豆とおカキを添えて、冷えたビールを二本持ってきた。丁度咽喉が渴いていたときなので有難く頂戴した。彼女もコップに二、三杯は飲んだであろうか。目のふちがほんのりと赤味を帯びる程度、腰を落ちつけて飲めば、相当いける口かもしれない。

彼女が化粧を直している間、私はトランクをひっくりかえして、撮影の準備をする。彼女の身仕度に化粧は、まことに素晴らしい、今までどのモデルよりも早いといっってよい。プラジャ―ははずしてしまって、バタフライ

一つの立派なグラマーぶりを目の前に現す。

『きつければきつい程私は嬉しいのです』という彼女のことだから思いきり厳しくしてやればいいじゃないか、ということになるが、写真撮影となれば、そういうわけにはいかない。やはり美しいポーズをとらさねばならない。先回のムチ打ちで、乱射乱舞をやって失敗しているので、今度こそは、一発必中の快打を放つことが肝要である。

先ず最初の狙いである本格的なエビ責めを行うため、両手首を背中中で合せて括る。どんなに力をこめて縛っても、痛くしても、跡が残っても、苦情がないので、その点楽だ。

ぎゅう——と締めつけると、手首、指先がみるみる充血してくるのがわかる。ピンクのマニキュアした指先がピクピクと疼れんする。痛いためか亢奮のためか、私にはわからない。が、目の前にある美しい指が手首を締めつけたただけでみるみる変色してゆくのは、何かしら、これから激しい責めを暗示し、期待しているようで心楽しい。

殊更手荒に、二の腕、胸への縄を掛けてしめつける。肉づきのよい上膊の筋肉が、縄のところだけ窪んで、それだけ、余のところがぶくっと膨れ上る。真白で生毛さえも見当ら

ない胸元から乳房。縄にくびれて赤味を帯びてきた腕の皮膚に、汗線のようなふくらみがふつふつと出ているところ、など、私は仔細に観察する。

カメラで撮れるところは十分印画紙に現しもしようが、とにかく、彼女の全身いたるところ肉眼で先ず鑑賞することにする。

皮下脂肪の程よくのった下腹は、お臍を中心として可愛いえくぼを見せている。鳩落のところ、思いきり締めつけて蜂の胴にしてやりたいという気持ちに襲われる。

強靱なバネを持った太股を膝のところで縄を掛けて、首と連繫して全身を二つ折りにしようとする。然し、両膝と頭とをいくら密着したところで、頭が膝頭につくだけで、実際には余り苦痛には感じない。生ぬるい縛り方になったなあ、これじゃ第一回目のときと大して変りばえしないじゃないか、という気持ち焦りを起させる。こんな時、辻村隆氏だったら、きっと、素晴しく強烈な縛りを展開して泣かせるのになあと考える。

で、ここで、私は大きな失敗をおかしてしまった。自分の縛り方の生ぬるさをカバーするつもりで、ムチを取り出していた。その時何んということなしに、革ムチを——先を十

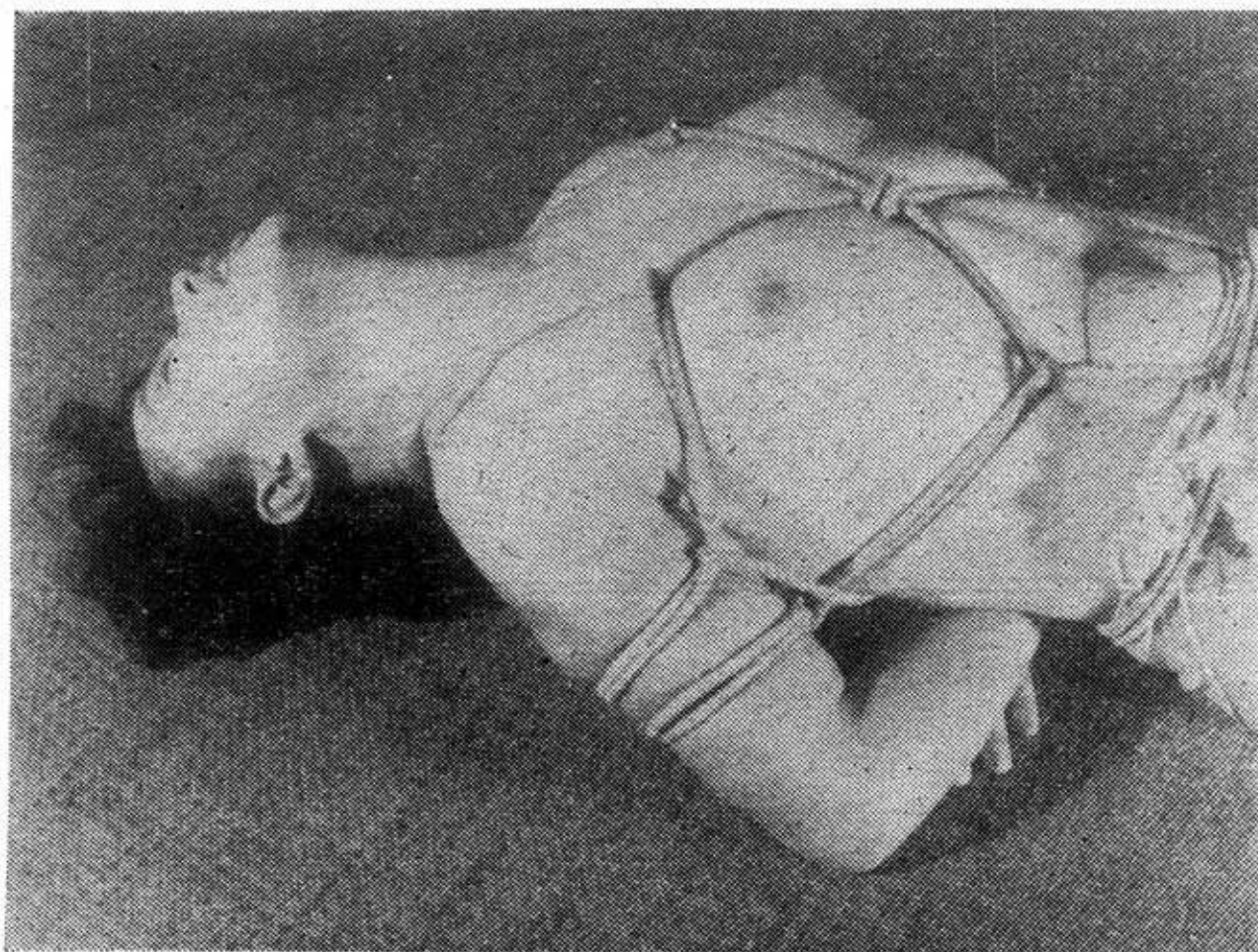
数本に分けた、彼女のために特に準備したムチ——を右手にしていた。十分油をしみこませて柔軟さをつけておいた革ムチを彼女の肌で試してみたいという潜在意識を抱いていたためか、私は軽い冗談のような一打を彼女の臀部に当てていた。

彼女はその一打で忽ち激い反能を示して横倒しに簾の敷物の上に倒れた。ほんの軽い撫でるような一打、しかも、お尻全体を掩うバタフライの布の上から叩いたのだから、そうこたえるわけではないのだが、彼女にしては待ちにまった一打であったのかもしれない。それにしても、ムチを持った者としては、このピクンと飛び上るようにしてドンと横倒しになる演技には、エキサイトしないわけにはゆかない。

最初、そんなつもりではなかったのだが、自分の放った軽い一打が、こんなに適確な反応を示す、その打ごたえは、まことにこたえ

られない快感だった。続いて、二打、三打、と続けざまに十回ばかりムチ打った。

彼女は足を揃えて伸ばし、縮め、次いで片

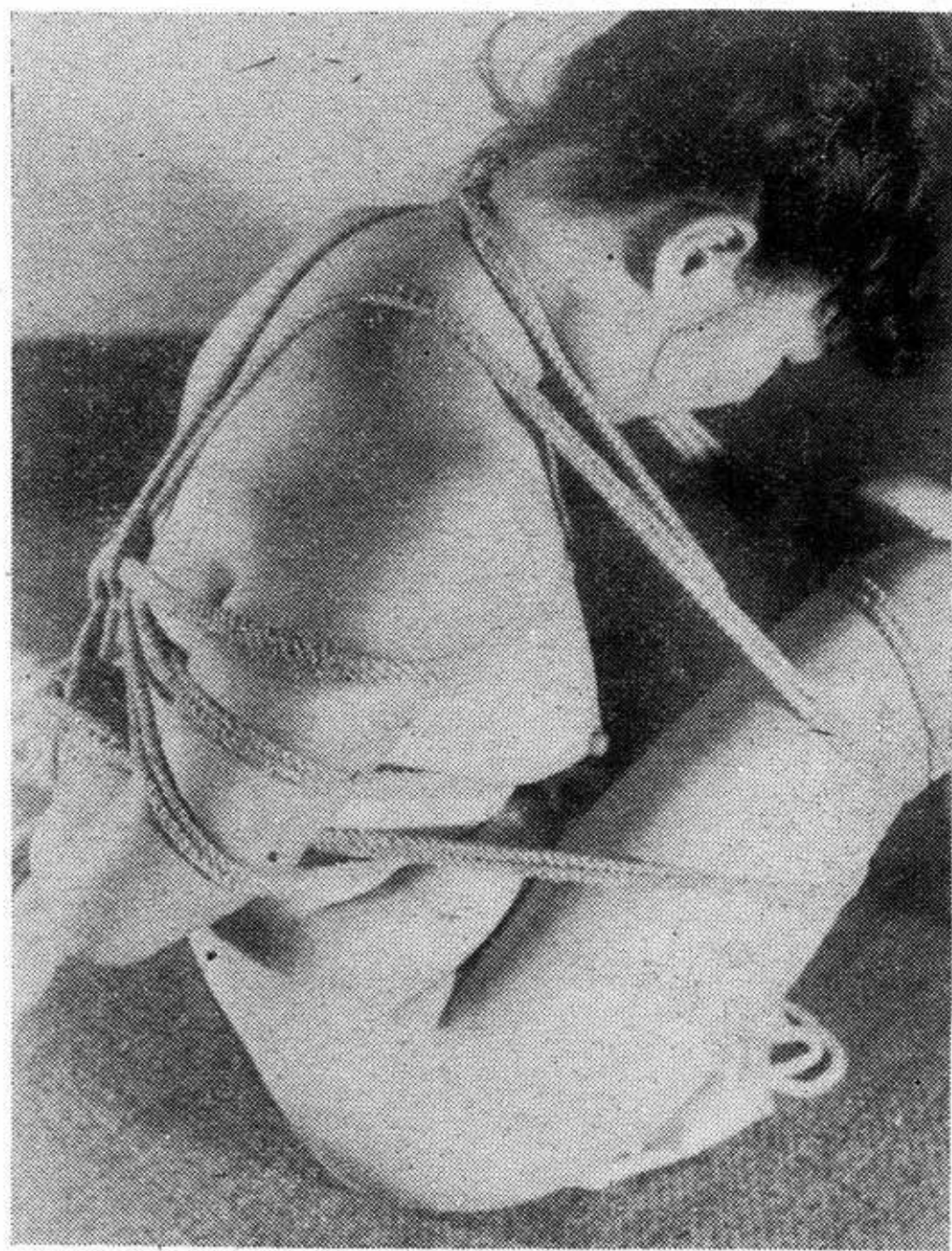


足交互に伸ばしたり縮めたり、文字通り身も
だえする、もがきようである。

顔はほんのりと上気して汗ばみ、おくれ毛
が頬に額にへばりついている。うっとりとし
た顔の表情、私はポーズをつけようとしたが
全身、ぐにやぐにやに張りを失って、手ごた
えがない。そのままのポーズでカメラ・アン
グルを変えて三枚シャッターを切る。余りに
も早くムチを振ったために、
土偶のようになって、伸びき
ったままである。

元氣をつけるために、更に
ムチをふるったが、巾広の布
が如何にも邪魔である。こん
なとき、バタフライは極めて
便利である。両脇の結び目を
解いて臀部をまる出しにす
る。豊かなポリウムを見せた
双丘には、うすくムチアトが
二条、三条残っているだけで
白い肌にはんのりとかすかな
赤味を帯びて逞ましい盛り上
りを見せている。

ピシン、ピシン、ピシン、
ムチが臀部で炸裂するたび



に快い反応が手元に戻ってくる。

忽ち臀全体が真赤に染まり、その真赤の肌
の中に、数本のミミズ脹れが、はっきりと見
える。次は、ばたつかせる足の裏めがけてム
チを放つ。足の裏は痛いらしく、足の指全体
を内側に曲げてピクピクとびくつかせる。

その足の指に目標をつける。脛から内股、
太股、臀部、そして時には足の裏へ。

打った個所よりも、しなやかなムチ先がま
といつくように、くるりとまわった先の方が
赤くなる。脇腹にも幾条かの赤い線――。

首筋、膝の内側の縄が喰い込み、もだえる
たびに、皮膚がこすれて赤くなる。私は皮下
溢血を起すのを恐れて、連撃した縄を解く。

ムチを止めると、ぐったりとして彼女は緊
張を解くのだが、如何にもムチを待っている
かのような態度である。私は縄
を解かれてバネの伸びたような
彼女の姿態をじっと見下してい
た。

臀部のミミズ脹れはすっかり
引いていて、全体にピンク色の
ほんのりとした赤味が残ってい
るばかり、内股や脛は、赤味さ
え残っていない。足の裏は勿論
のことである。両足を揃えて伸
し、拇指と拇指とがすれ合うほ
ど、ぴったりと揃えている。

後手に括った両手の縄は、さ
っきのもだえで一層深く喰い込
んで、指、掌、など充血して真
赤である。手首が下ってくると
邪魔になるので、私は縄尻を首

にまわして、後手首をきゅうと吊り上げた。両手首は水平より上に釣り上ってゆく。両手がいかにも痛そうである。この時――

「ムチウチシテ、」

彼女の口から控え目な言葉が洩れた。

「ええ？」

不意をつかれたように、私は思わず反問していた。

「ム、チ、ウチ」

彼女の口が再びゆっくり開いた。

先日、今日の日を指定したときから、彼女は、この鞭打を期待していたのだろう。

「よし、こうなれば手加減しないで打って打って打ちまくるぞ」

と思った。実際、場所を狙って、その都度強さを加減し、早さを加減して打ってゆくのは、随分手の疲れるものだ。しかし、所嫌わず力一杯打ってゆくのは、いかにも本格的な責めらしくて面白い。今までの私の責め方は生ぬるかったに違いない。

もう時間は一時間以上も経っている。しかし撮った写真は一ポーズ三枚だけだ。せめて十枚以上は撮らなくては、と思ったり、いや最初、ビールなんか飲んでいたので無駄な時間の空費をしたのだ。でも、あれは、五分か

十分ぐらいではなかったか――。

その瞬間、私の頭の中をそんな考えがとりとめもなく閃めいたが、彼女の「ムチウチシテ」と呟いて全身を投げだして姿態が強烈な誘惑となって迫ってきた。

一キロワツとの写真電球のこうこうと照らし出す光帯の中に浮かび上った白い女体に対して、先ず最初の激しい一打を放った。

身もだえする全身、脇腹にある小さなホクロまでが鮮やかに見出せる明るさである。この激しい動き、写真をあきらめた私は、自分の目で、この素晴らしい姿態の躍動をよくよく観察しておこうと思った。

力まかせのムチが臀部に命中して、ビーンという快い手応え、彼女の身体は弓のようにそり反ったかと思うと、ごろりと仰向けになる。仰向けになった太股に一打、今度はエビのように前屈みになって横倒しになる。

打って、打って、打つ度に、部屋中、ごろごろと音がって、伸びたり縮んだり派手な動きをする。私は、とにかく、上になった打ち易いところを狙って力まかせにムチ打つ。

やがて、十数打、数十打。

うつ伏せに両脚を揃えて伸した彼女は、膝のうしろあたりをくの字に逆に反したまま、

「ヒー」と硬直すると、もう、いくら打っても反応を示さなくなってしまった。

そういえば、彼女の反応もはじめの激しさから次第に緩慢になり、そして遂に、もういくらムチ打っても動かなくなってしまったのである。私はムチを投げ出して、彼女の顔のぞき込んだ。汗びっしょりになった顔は、なごやかな満足の表情だった。

私は縄を解いてトイレへ立った。

便所の脇の縁に立つと、落葉のいっぱい積った庭が目の前にあった。背後が崖になっていて、その崖の上にある大きな松の木が掩いかぶさるように庭の上につき出ている、松力サがいくつもいくつもころがっている。

私が部屋へ戻ると、彼女はすでに身仕度を整えて、手鏡を前にしてお化粧をしているところだった。私はあわててカメラや道具をしまうと、そそくさと外へ出た。

駅まで送ってほしいという彼女と一緒に車中の人となった。

「今日は、お写真ダメでしたわね」

彼女はすまなさそうに言った。

「いや、又次にいいのが撮れますよ、」

「ええ、妾、出来るだけ早く、御連絡させて頂きますわ。今度はあの家、もう使えないと

思いますので、別のところで——」
彼女は、西宮駅のホームへ入っていった。

西へ行くのか、それとも東へ行くのか私には
わからなかったが、なんとなく心残りの気持

から、私は彼女の後姿をいついつまでも見送
っていた。
(おわり)

〔優秀緊縛フォト紹介〕

乳房責

略号

(きよ)

大手札型

三枚一組 二五〇円
モデル 四方 清美

全く凄絶な責めである。裸にむかれた首から二の腕、胸、腹にはピンクの綿ロープがきびしくからまり、身動きならぬ女体の背後にはプライヤーを手にした辻村隆が可憐な乳房を思いきり挟む。忽ち上る悲鳴も、きびしく噛まれた猿ぐつわに消される。苦悶の表情は見る者をして思わず手に汗をにぎる。乳房責の圧巻、責めの圧巻である。

女囚独居

略号

(はつ)

大手札型

三枚一組 二五〇円
モデル 柳 初子

哀愁を帯びた柳初子の美しい顔(十一月号巻頭口絵参照)が女囚六三号の囚衣をまとい、前手縛りに手首と肘とを括られて独房に幽閉された表情。そして手と足がアップで美しく描き出されている。陰惨な囚女の雰囲気モデルの美しさによって、ほのぼのとした口

吊られた美女

略号

(けい)

大手札型

三枚一組 二五〇円
モデル 絹川 文代

豪華なシャンデリヤに両手首を括られて吊り下げられている全裸の美女は、身をくねらせてこの華やかにも甘く厳しいムードによっている。うねうねともだえる裸身は見物人によって隅から隅まで眺められ、次第次第に増してくる苦痛は彼女の羞恥心を徐々に剥ぎとってゆく。

首縄と腰縄

略号

(せつ)

大手札型

三枚一組 二五〇円
モデル 大塚 啓子

一点のシミもないスベスベとした柔肌の太塚啓子嬢が湯上りの全裸の肌を惜しげもなくさらけ出して後手高小手しぼりに首縄と腰縄を併用した縄目に足の先から長髪の前まで緊張させたサジ・ムード満点の素晴らしいフォト。恍惚とした表情、凄艶なながしめ。あきらめきった諦観の表情。

全裸後手縛

略号

(みに)

大名刺

三枚一組 二〇〇円
モデル 平野 笑子

OSミュージックのヌードダンサーとして活躍する平野笑子嬢が一条まとわぬすべとした姿態にロープをかけられて後手高小手の緊縛ポーズをとらされた嗜虐的な三葉のフォト。

寝台の全裸

略号

(みほ)

大名刺

三枚一組 二〇〇円
モデル 平野 笑子

ぐっと凹んだお臍、伸びやかな下股、痛さにもだえる太股、投げだされた足の指。厳しい縄目にベッド上で転々ところがりまわる平野笑子嬢の緊縛裸身をとらえた三ポーズ。前作(みに)と共に彼女の全身の美しさを余すところなく露呈した垂涎万丈のフォト。

全裸の羞恥

略号

(みる)

大名刺

五枚一組 三〇〇円
モデル 田原美佐子

モデルずれのしていない可憐な

股間しばり

略号

(みと)

大名刺

五枚一組 三〇〇円
モデル 絹川 文代

顔といい姿態といい、モデルとして一級品に属するベテラン絹川文代嬢が股間しばり、首縄高小手に施されて、開股、仰向、足の指をくの字に曲げてのもたえ、等々、度胸をきめて縄ととり組んだ五つの変化のあるポーズ。

全裸股間縛

略号

(みへ)

大名刺

五枚一組 三〇〇円
モデル 絹川 文代

全裸になった文代嬢の真白い肌に喰い込む茶とグレイのまんだらんのロープが美しい姿態と相まって夢幻的な股間しばりのムードを全面にほのぼのとかもし出して、見る者をして恍惚境へさそい込む。

新版代理部分讓品案内

関谷富佐子夫人緊縛特集

一、強烈、エビ縛り

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(もい) モデル 関谷富佐子

肥り肉(じし)の白い女体をくの字に二つ折りにして、着用のバタフライもかなぐりすててエビ縛りのまま受ける強烈なムチ打ちに真白の臀部は忽ち紅に染まり、頸にかかった縄をピンと張りきらして悶える美体。

二、乳房責の苦悶

大手札印画紙 二枚一組 二〇〇円

略号(もろ) モデル 関谷富佐子

脂ののりきつたコリコリとした固い乳房に加えられる手と足の暴虐の嵐。猿ぐつわに息もできぬくらいの口から洩れる苦悶の悲鳴。

三、全裸ムチ打ち

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(もた) モデル 関谷富佐子

豊麗な臀部に、太股に脛に、情容赦なく炸烈する革製のムチ。白い肌にはミミズばれが赤黒く走り、後手に縛られて身動きの出来ぬ彼女は、只ヒーヒーといって転げまわるばかり。ムチ打ちに命を捧げる彼女に対して行っ

た手加減のない本格的なムチ打ちの成果。

四、六尺禪の女性像

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(くろ) モデル 関谷富佐子

恥しさに顔を赤らめた関谷夫人が、そのポリウムのある堂々たる体格の裸身に、白晒の六尺禪をきりりと締めて、前後左右から、その見事な姿態を十二分に見て頂くため、皎々たる電光下に立つ。(縛りなし)

五、強打に泣く裸身

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(むち) モデル 関谷富佐子

裸身に六尺禪一丁の彼女が前手しぱりにあって、その可憐な身をかばうことができない哀れな膝立のポーズで、むきだしになった臀部に、背中に乱れとぶ皮ムチの強打。彼女の全身はエビのように曲り、或は倒れんばかりに逆に反り、ぐねぐねと曲り屈み、ムチの痛さに悶えぬく悦虐の極の姿態。ムチ打ちつつシャッターを切った二十数枚のネガの中から選びだした絶妙の表情のものばかり。

フェチッシュ緊縛の部

一、レインコートの拘束

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(いろ) モデル 大塚 啓子

裸の肌に直接ネチネチとしたレインコートをまとい、フットをまぶたにかかった大塚啓子の柔肌をぐるぐると荒縄で厳しく縛り上げれば、ゴムの裏布がジカに肌を圧迫して、その感触に、てんてん反側するさまを彼女の足の先から頭のとっぺんまで刻明に捉らえた。

二、ゴム布に包まれて

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(こま) モデル 梨花悠紀子

後手に縛られた梨花悠紀子が頭にはゴム帽子、首にはゴムの前掛け、ゴムのズロースをはき、手にはゴムの手袋、足にはゴムの靴下と、全身これすべてゴムづくめ、縛られて次第に時間が経つてくると、ゴムのあのヌメヌメとしたタッチが直接肌を刺戟し、特有の臭気が鼻をついてくると、彼は、そのままじっとしていくことができなかった。

三、狙われた和装の娘

大手札印画紙 十二枚一組 一〇〇〇円

略号(ねい) モデル 愛川 悦子

珍しく和服に身をかためた娘、愛川悦子に襲いかかった縄の暴虐。忽ち羽織は剝がれ着物の前は押しはだけられて、赤い長襦袢があらわに乱れ、縛しめられた愛川嬢の周囲は帯や腰紐、羽織などが百花繚乱と咲きはこり時ならぬ目の正月が現出した。

浣腸マニア東浦ひかる特集

一、只今浣腸実施中

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(かみ) モデル 東浦ひかる

責めの中でも浣腸が一番好きだという東浦ひかるに対して、実際に彼女のためのプレイとして実施した浣腸の場面を特にマニアに分譲するために撮影したもののワンカット。

二、強制空気浣腸

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(かく) モデル 東浦ひかる

彼女の好む空想のアイデア。お腹の中にドンドン空気を入れて蛙腹したらという要求でエネマシリンジを用いて、最大限に空気を注入したときの、腹部膨満の状態をごろんといれる珍しい浣腸作品。

三、百CCの硝子浣腸

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(かな) モデル 東浦ひかる

浣腸が好きだというモデルでないと、中々出来ない芸当。彼女なればこそ、こういった強烈な浣腸も容易に、しかも何の抵抗もなしに実施できるのである。

四、浣腸責のムード

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(かむ) モデル 東浦ひかる

浣腸されることが至って好きであるという彼女にしても、やはりマゾ女性の通有として無理矢理に浣腸されるというムードには弱い。従って、両手を拘束されて、もうどうにもならないという絶対絶命のピンチに対して大きな関心を持っている。クリスター・マゾのひかるを最大限に満足させるポーズ。

水本茂美緊縛特集

一、強烈エビ責め

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(えび) モデル 水本茂美

野性美を帯びた水本茂美を全裸にひきむしった上で、足首と背中中に吊り上った後手首とを連結させて、グイグイ足で踏みつけて締め上げたエビ縛り、一分、五分、十分と経つうちに、流石の水本札も全身から脂汗をふきだして、うとうと苦悶のうめきを洩らす。

二、ゴム衣緊縛

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(みす) モデル 水本茂美

アメゴムのヌメヌメしたゴムズロースが、

汗ばんだ肌にネチャネチャとねばりつく。容赦のない縄さばきは彼女の弾力性のある肌を腰のあたりから二つ折りにして力いっぱい締めつける。むき出しのはりきった尻には、ぴっちりゴムズロースが貼りついている。

二女争斗場面特集

一、和洋争闘場面

大手札印画紙 六枚一組 五〇〇円

略号(らり) モデル 田中芳代 外

禪一本に長襦袢をひっかけた田中芳代と、シュミーズ一枚の愛川悦子とが、腕を逆にとり、足を逆エビにとり、必死に相争う中、互いに着衣もふっとんでしまい、裸身のまま、むしゃぶりついて上になり下になりして格闘する場面。二人の娘が激しく争斗するシーンが迫力をもって迫ってくる第二作。

二、裸女争斗場面

大手札印画紙 十二枚一組 一〇〇〇円

略号(らし) モデル 田中芳代 外

禪一本の若々しい裸女二人が互いに相手に止めをさそうと、あられもない姿を展開して根かぎり争う場面。胴絞め、ヘッドロック、腕とり、押え込みなどの手を使って相手の顔を自分のお尻の下に敷いでしまおうと争うメトミファン、女斗ファン並に女性のサドマゾに関心をお持ちの方及び女相撲ファンの方に捧げる。

女体切腹（現代篇）絵巻

四馬孝画

B6判 感光紙焼付

六枚一組 五〇〇円

略号（えまー）

その精細にしてリアルなタッチにて、数多くの責画を発表して、斯界に独特の新風を吹き込んだ四馬孝画伯が、ここに同じく女性切腹のテーマに意欲を燃やし、うら若い現代的な女性、絶対絶命の場面に追い込まれて、自らう手にて自らの命を断たなければならぬ場面を想定して、その哀婉に満ちた現代女性の姿を再現することに努力されました。想を練ること数旬。十二分に意欲の燃え上ったところで、現代風女性切腹の姿を彩管に托して、女性切腹マニアの目に訴えることになりました。お申込みの如何によって、更に第二作、第三作の構想がある由なので、何卒奮って御注文下さるようお願いいたします。

一、将校と女学生の切腹情死

煉瓦のくずれた廃家の一室にて軍服姿の将校が軍刀にて双手突きの立腹を切り鮮血りんりと飛び散る。その前には可憐な十六七才の制服姿の女学生、スカートを脱ぎすて、白いズロースを托くし上げて九寸五分の短刀をぐざりと臍下に突き立て右脇腹まで、きりりと切り進む。血汐は壁にとび散り、哀れにも美しい最期の有様。

二、女間諜夕に切腹す

スパイであることの露見した、うら若き敵国潜入の女将校。すでに逮捕の手の迫ったことを知った彼女は、軍服長靴に身を固め、十分に胸と腹をくつろげ、秘蔵の軍刀でたたかに腹を切れば、青黒い腸が傷口から僅かにのぞき、血は床にしたり落ちる。乱入した敵兵の見る前で、急所の乳下を突き刺して華々しい女性の最期。

三、大和撫子、乙女の自刃

敗戦は可弱い乙女の寄宿舎にも、凌辱の手が迫ってきた。大和撫子の操を守るため、次々と自刃してゆく乙女たち。生徒たちの最期を見届けた未婚の美貌の教師は、乱入する暴徒を目の前にして、日本の娘の自決を見よと、下腹を短刀にて軽く切り、咽喉元に突き立て、飛び散る血汐の中に鬼神も哭く悲壮な自殺を遂げた。

四、美女雨中の立腹プレイ

横なぐりの雨が降りつける深夜の林の中。レインコート一枚を素膚にまとっただけの美女の白い肌だけが、夜目にも鮮かにうかびあがる。洋式ナイフを片手に、左脇腹から右脇へかけて、深々と切り進む美女。創口からはむくむくと腸が溢れ出て、血汐は下半身一面に紅と彩る。降りしく雨は、その血汐をも押し流す激しさである。

五、夜会服貴婦人の切腹

黒皮手套に黒皮長靴の外は裸の大胆きわまりない貴婦人が夜会服を肩にかけたまま大の字に立っての壮絶なる覚悟の自決。海軍将校用の短剣の切れ味は、婦人の柔かい下腹を思うさまに斬りさばき、驚くほど太い腸管がぐっと切口いっぱいにくれ上り、豪華な雰囲気と美貌の女性とは、反対に凄惨きわまりない切腹のシーン。

六、女子大生の切腹自殺

私が自殺するときは、切腹によって命を絶つと覚悟していた美しい女子大生が失恋の結果、旅館の一室を選んで、思いきり自らの腹をかき切って死のうとする。パンティ一枚の裸身のまま、腸ののぞくまで深々と下腹を切り、部屋の壁に身をもたして、じっと自分の最期を待つ悲壮にして哀婉きわまりない女性切腹の表情。

女性切腹（時代篇）絵巻

四馬孝画

B6判 感光紙焼付

六枚一組 五〇〇円

略号（えま2）

若き女性のイメージを時代風俗に求めて、その構想を縦横に發揮しようと試みたのが、この時代篇です。近代的なリアルなタッチを活かして、美しい過去の女性の切腹の姿を追求してもらいました。別の項では同じような狙いで、『大奥裸女決斗場面』も描いて頂きましたが、若しマニアの方の数が或る程度まとまっていて、御注文があるようでしたら、引続いて別な構想とアイデアでドシドシ描いて貰う考えです。期待通りの御注文がないようでしたら、今回の試みを以って一応打ち切りにしたいと思えます。マゾ関係の御注文は大変僅少なので、今度は分譲品の発表を見あわしておきます。

一、落城の姫君、火中の自刃

火焰に包まれた天主閣の一室、城主の姫君は迫りくる火焰と姫を生捕りにしようとする敵兵に追われながら、十八の花の命を自らの手で、潔く腹かき切って、女ながらも城主の娘。双肌ぬぎになって豊満な上半身を惜しげもなく燃えさかる火にさらし、家宝の脇差で下腹をしたたかに切りまくる。真白い肌が惜くしも血に塗れる。

二、武家の娘、覚悟の切腹

父のあとを追って女ながらも死を賜った武家の娘は、介錯のため派遣された藩中の青年武士に対して、介錯を断り、白布の上に正座して古式にかなった覚悟の切腹。柄も通れと思いきり突き立てた刃を、きりきりと切り回せば、血汐と共に腸が溢れ出て、氣丈夫な彼女も、思わず「ツツーツ」と前に手について倒れ伏してしまった。

三、恋人に抱かれて切腹する娘

「ウーム、なんのこれしき」白装束に覚悟の腹切りを敢行する娘に對して、恋人の武士は、その悲壮な最期を見届けるように、背後から抱き起して顔をのぞき込む。下腹は一面血の海で腸さえのぞいている。顔面蒼白として悲痛な表情の娘は、その両の乳房を恋人に抱えられて、次第次第にうすれゆく意識の中で満足そうであった。

四、介錯に落ちる女の首

カガリ火の燃える御殿の庭、双肌ぬぎになった若い女が殿の御前で覚悟の切腹。前かがみになった下腹の膨らみに短刀を突き立てた途端、背後に回った介錯の武士が、白刃一閃。娘の白い首すじに斬りつけ、さっと飛び散る血汐。自らの織手で下腹を切った娘は、哀れにも、その首は、刃の狙いうちでぐさっと大きく抉ぐられる。

五、死を賜った腰元の切腹

局のザン訴によって切腹を賜った腰元は、その憎い局の見ている前で無念の切腹を遂げる。白布の上の白装束、上半身肌ぬぎとなり「えいッ」とばかり、短刀を思いきり下腹へ突き上てる。思わず口をついて出る絶叫、真一文字に切りまくった上、健気にも、とってかえした刃で臍の真上を十文字腹にきりきりと切り裂く壮絶さ。

六、操を守る花妻の切腹

夫が江戸表へ出在中のこと。かねて横恋慕していた上役の上人が無理無体に迫ろうとする。死を以って操を守ろうとした若妻は、男に首をまかれ左手をとられた姿のまま、かくし持った懐刀で、あらわになった下腹をしたたかに突き刺し、二寸ばかりぐいと切りすすむ。血は白い内股にとび散り、操を守ろうとする若妻の心意気。

最新代理部分讓品案内

女体緊縛フオトの部

一、//大の字//逆さ吊り

大判判印画紙 三枚一組 四〇〇円
略号(つり) モデル 梨花悠紀子

二、立木//宙縛り//

大判判印画紙 三枚一組 四〇〇円
略号(くた) モデル 梨花悠紀子

三、凄惨//乳房責//

大判判印画紙 三枚一組 二五〇円
略号(とい) モデル 梨花悠紀子

四、//妊婦の緊縛//

大判判印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号(にむ) モデル 某女

五、//全裸の仕置//

大判判印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号(すお) モデル 東浦ひかる

女体切腹フオトの部

一、血紅女体自害

大判判印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(ひち) モデル 大塚啓子

二、女体切腹マンダラ

大判判印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(あま) モデル 甘木春子外

三、悲愴女体自決

大判判印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(ひい) モデル 大塚啓子

四、哀艶女体割腹

大判判印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(かつ) モデル 梨花悠紀子

五、凄惨血紅女体立腹

大判判印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(ひさ) モデル 大塚啓子

六、苦悶切腹表情

大判判印画紙 五枚一組 五〇〇円
略号(せく) モデル 梨花悠紀子

フェチ・フオトの部

一、バンド着用フオト

大判判印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(めい) モデル 梨花悠紀子

二、バンド着用の縛り(後手)

大判判印画紙 四枚一組 三〇〇円
略号(めろ) モデル 梨花悠紀子

三、バンド着用の縛り(前手)

大判判印画紙 四枚一組 三〇〇円
略号(めは) モデル 梨花悠紀子

四、女性の六尺褌

大判判印画紙 五枚一組 四〇〇円
略号(ろく) モデル 大塚啓子

五、ゴム・マニヤ

大判判印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号(こむ) モデル 梨花悠紀子

六、メンス・バンド

大判判印画紙 四枚一組 四〇〇円
略号(めす) モデル 梨花悠紀子

七、ゴムカバー着縛り

大判判 三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(かは)

八、脱がされたバンド

大判判 二枚一組 二五〇円
梨花悠紀子 略号(めに)

九、アテゴムの猿ぐつわ

大判判 二枚一組 二五〇円
梨花悠紀子 略号(めほ)

Mフオトの部

一、足で戴く珍味

大判判印画紙 二枚一組 二五〇円
略号(くさ) モデル 絹川文代外

二、靴の下にうごめく

大判判印画紙 二枚一組 二五〇円
略号(くつ) モデル 絹川文代外

特殊趣向フオトの部

一、絞首処刑

大判判印画紙 三枚一組 三〇〇円
略号(こう) モデル 絹川文代

『今月の新版特殊フォト』

△ゴム・マニヤ向作品の部▽

一、ゴムぐるみ人形

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(こみ) モデル 東浦ひかる

豊満な若々しいはちきれそうな全裸にした女体の頭のとっぺんから足の爪先まで、ゴムで包み、ゴムバンドで締めつけたゴムの臭気のおんぷんとするゴムマニヤ待望の作品。頭から顔はシャワー用ゴム帽子で掩い胸は生ゴムのシートで包み、腰部は総ゴム製のピンクパーレリーナバンドでびったりと包む。手はゴム手袋、足はゴムの靴下。肌にびったりとはりついたゴムの感触を十二分に味って悶えるひかる嬢の姿態のかずかず。

二、ゴム包みの束縛

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(こは) モデル 東浦ひかる

全身ゴム布でぐるぐるに包んだ女体にゴム紐がじわりじわりと肌をしめつける。直接肌に密着した生ゴムの刺戟が時間が経つと共に激しさを加えてくる。締ってきたゴム紐によって赤くかぶれてきた皮膚のむずがゆさに、ころげまわって苦しむ東浦嬢の姿態と表情とニヤニヤのお好みのままにとった。

三、ゴムと女体のアップ

大手札印画紙 四枚一組 四〇〇円

略号(こあ) モデル 東浦ひかる

びったりとゴムを肌にはりつけられた女体の各部の表情とそのデテールをアップによって極めて鮮鋭なレンズを駆使して刻明にキャッチした作品。まことに大胆に、女体の肌と生ゴムのタッチとを、そのずばりと狙いをつけて、ゴムフォトの決定版ともいうべき、ゴムの感触を最大限に發揮している。

△バンド・マニヤ向作品の部▽

一、パリスバンド前開き

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(おい) モデル 東浦ひかる

黒メリヤス製前開きのパリスバンドを着用し、前開きをあけて当てゴムをあらわにしているバンド着用のフォト。替ゴムの部分をはっきりと見せるために、その部分を殊更前面につき出させ、自らの手でバンドにふれている諸々のポーズを開陳(縛りなし)。

二、パリスバンドの縛り

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(おは) モデル 東浦ひかる

替ゴムもあらわなポーズでパリスバンドを着用させられた東浦嬢が、両手を厳しく緊縛されて自由のきかない身を、僅かに両手をば

たつかせてもがくさまを表す。

三、パリス携帯用白バンド

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(おか) モデル 東浦ひかる

白い布に替ゴムが直接ついたままの解放型の携帯用の白バンドを着用し、足を挙げた大胆なポーズで月経帯の特徴を十二分にあらわにいれようというサービス本位のポーズ。

四、サカエ軽便型バンド

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(おた) モデル 東浦ひかる

五、パリスSSSバンド

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(おこ) モデル 東浦ひかる

六、パピアバンド(大型替ゴム)

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(おし) モデル 東浦ひかる

七、サカエバンド(百合)

大手札印画紙 三枚一組

略号(おえ) モデル 東浦ひかる

以上四点の月経帯着用フォトは、いずれも解放型(替ゴムが外部から見えるもの、スロース型でないもの)のメンスバンドで、マニヤのために、種々型の変ったものを取り揃えました。

佐保 忍案・四馬孝画

B6版8枚1組 500円

時代風俗責場面八景

略号(さほ8)

< 時代風凌辱場面ばかりの被虐絵巻 >

第四景
親分の折檻

コウモリの辰が狙った小股の切れ上った小間物屋の娘には、生憎くと言いかわした男があった。乾分に欺まされて連れて来られた娘は、腰巻もはがされたあらわな姿に縄を掛けられて、部屋の中に押しこめられた。キセルの雁首を娘の真ッしろい肌を押し当て、自分の意に従わせようと、いろいろ手を変えて責め折檻するのだった。

第三景
腰元の逆吊

「拙者の意に従うと言わぬから、このような哀れな姿を晒すのじゃ」素裸に剥かれた美しい腰元は納屋の梁から逆さ吊りに釣り上げられて、観念の眼を閉じている。可愛さ余って憎さ百倍の直参は、弓の折れを手にして、この美麗な生人形を叩きのめそうというのである。汚れを知らぬ真ッ白い肌は、やがて紅に染まることだろう。

第二景
目明裸吟味

番小屋の裏の柱に真ッ裸のまま縛りつけられた娘、身に覚えのないことと拒みつづけるのを、役得とばかり十手を口の中へ捻じ込んで、口を割らせようと目明し。真白い太股にむしろのケバが喰いこんで痛々しそう。娘は乳房も押し潰されそうに厳しい縄目にもだえ、柱のうしろで頑丈に縛られた後手がびくびくと哀れにふるえる。

第一景
乞食と美女

荒むしろを張った乞食小屋へ掠われてきた町一番の小町娘と評判の美女。雪をあざむくばかり真白な肌をむき出しに、一糸まとわぬ裸身に太い麻縄がぐるぐる縛りつけられ、口には、むさくるしい汚れ褌できっちり猿ぐつわをされて乞食の一人に抱かれて無慚な光景を、庭のすき間から覗き見している仲間の乞食の眼。

第八景
井戸責の姫

「姫、かくなる上は不憫ながら、その真ッ白い肌に、この弓のムチをお見舞いさせて貰いますぞ」全裸の恥しい姿にむかれ、冷たい井戸端の栗石の上に座らせられた姫は、後手をもうこれ以上上らないという程、高々と背に縛り上げられ、苦痛の悲鳴を洩らすのであった。これから行われる苛酷な責を暗示する釣籠がころがっている。

第七景
杉葉いぶし

深夜の森の中にぽっかりと焚火の火。夜目にも白く浮かぶ裸身の若い女が、松の木から太い縄で吊るされている。下には奇怪な老女が白髪をふり乱して、この哀れなイケニエを山の神の人身御供に捧げるべく祈りつづけている。焚火にのせられた生の杉葉は、くすぶり続けて蒙々と白い煙を女の裸身にそそぎかけていた。

第六景
駕籠舁人足

悪人足の駕籠にのったのが運の尽きであった。人影のない森の中へかつぎ込まれた末、着物という着物をむしり取られ、後手のまま樹に縛られてしまった。口には汗くさい豆しぼりの手拭できっちり猿ぐつわをされ、いやらしい醜男の人足が、美しい若奥様に対して舌なめずりしながら近づいてくる。まさに危ふし、美女の運命。

第五景
戦陣の血祭

生捕りにされた敵方の娘は、裸にむかれて楯にぎりぎり縛りつけられて、土塁の上に立てられた。裸の首に、胸に、腹に、胴に荒々しい太縄が喰い込んで息もつけぬ娘は、苦痛と羞恥に真赤になりながら、味方に救いを求めて泣き叫ぶが、飛び来たった一筋の矢が激しく楯に突き刺って、彼女の恐怖心を一層あふりたてるのだった。

四馬孝画 (女斗ファンと裸女血斗マニアのために)

大奥裸女決闘場面

略号

(おく5)

B6判 感光紙焼付 四枚一組 五〇〇円

○大奥の裸女格闘

大奥の広間を舞台として繰りひろげるフンドシ一本の豊満な裸女、腰元対腰元の必死の格闘。髪をふり乱したハダカの二人があられもなく取っ組みあう勇ましくも目ざましい光景。脚を巻きつけ首を締め。止めをさそうとする腰元と、懸命に耐えてはねかえそうとする下になった腰元の必死の形相。

○禪裸女の争い

灯籠のある御殿の庭。二人ともきりきりと締めた六尺禪一本のりりしい姿の腰元、その真白な裸身を白日の下に惜しげもなく、さらけ出しての争い。乱れ流れた髪を掴み合つての立芸。御殿に仕えたときの淑やかな物腰も今は、その影すらなく、互いにすきを狙って相手を倒そうとする鋭い目つき。

○庭での果し合い

互いに懐刀を手にした二人の腰元が、フンドシ一つの裸身で斬り合う惨忍な果し合い。一人の刃先が肩口に、更に二の腕、脇、太股へと四太刀くれて、忽ち鮮血に彩る白い肌。禪裸女の激しい死斗が血にまみれながら続けられてゆく。やがて、いずれかの首級が挙げられるまで、この争いは終らぬだろう。

○首級を挙げる

金屏風のかげ。争いに破れた腰元の一人がフンドシ一本の逞ましい裸女に馬乗りになられて組み敷かれている。上になった腰元は勇ましく股を開いてまたがり、懐刀をぎして首を挙げるべく切りつけた。下の女の必死の抵抗でも刃はそれで頬に傷を与えたが、この死斗は更に凄絶に続けられてゆく。

一、首吊り屍体発見

二階の手摺りから縄を垂らし、首吊り自殺を遂げたワンピース姿のうら若き洋裁生。何気なく部屋へ入ってきて、プラリプラリとぶら下る首吊り屍体にびっくりにして「きゃっ」と恐トの悲鳴を挙げて身動きもできないでいるその友人。屍体の口からは、だらりの涎が流れて、足は力なく伸びている。

三、縊死体の検屍

「他殺の疑いがあるから縄は切らぬように」そう注意しながら検事は靴を脱いで机の上に上った。シユミーズが盛り上った豊かな胸。キャバレーかアルサロに勤めていたか、二十前後の美しい女だった。口から出たものをハンカチに受けて。彼は職業を離れた気持で、この咲ききった花の女の興味を指った。

四馬孝画 (若き女性の美しくもいたましい変死体)

変死女体惨酷場面

略号

(へし4)

B6判 感光紙焼付 四枚一組 五〇〇円

二、溺死体の検屍

河原の荒ムシロを警官がめくると、そこには輝くばかりの白い若い女の溺死体があった。生けるが如く豊かな肌の女だ。半ば口紅のはげた口からは水が静かに溢れている。検屍官は手帖を出して、この土の上に放り出されたうら若い女体の死後三時間の屍体を仔細に検屍してゆくのであった。

四、溺死体の解剖

変死体は、どんなに花恥しい妙令の乙女であっても、こうして全裸に剥かれて、頭の皮から足の先まで、否、咽喉元からお腹まで真二つに切り裂かれて解剖されるのです。数時間前まで動いていた、この肌が冷たいメスによってズタズタに切りちやちやくられてゆくのです。



十二月号に於ける関谷さん、まったくすばらしい人です。自分みずからグラビヤに載せてほしいと申出ただけあって、なにからななまで板についているようです。この関谷さんはマゾであるから川端さんのように仕上ることは十分出来ます。塚本さん、関谷さんファンの代表として関谷さんが満足するよう強く責めて責めぬいて下さい。お願いします。通信に於ける東京の山辺さん、僕も貴女と同様

S M両方の性癖があるようです。未だ女の人を縛った経験はありませんが、自分で自分を責めております。(高手首縄、乳頭責、浣腸責、鼻責)これだけは、いつでも一人で出来ます。一度貴女とプレイを行って見たいと思いますが、一度もお逢いしたことのない私達ですから、これは実現不可能でしょう。この誌上での文通で二人の心が一致を見た時はプレイ実現の時だと思います。奇くには何回か通信も出たことがあるし貴女よりはいくらか先輩のようです。最後に本誌で旧号から今月号までに総数六十数冊持っております。貴女が持っていない本でもありましたなら、お貸し致します。その時は誌上をもってお知らせ下さい。又、誌上で貴女とお逢い出来るのを楽しみにお待ちしております。(埼玉県本庄市八阪東太郎)

始めてお便り致します。私は二十五才になるBGでございますが、たまたま叔父の家でKK十月号を見る機会にめぐまれ、ほんとうにすばらしいと思いました。特に読者通信欄の中で男のMの方々(早川、森、小田切様等)の文をよみ、体中がかつとしてしまい、

誰もいないのに思わすうずくまっています。私はお恥しい次第ですが、男の人に馬乗りになり、むち打ちながら乗り廻す事が出来ましたら、どんなにすばらしい事か、又男の人に私の汚れたショーツ等をかぶせたら、どんなに楽しい事かと夢みています。しかし、この世の中はどうして私の様な変わった趣味の女に理解がないのでしょうか、私は一五八センチ、五二キロで高校時代、バレーボールの選手をしておりました。自分でもどちらかといえばグラマーの方だと思っています。私は汗かきのため、木綿の白のものを愛用しておりますが、いつも五回洗濯すれば捨ててしまいます。勿論ハサミで切りきざんでから捨てます。私はMの方に私の下着類を使用し、戴きたいのです。見知らぬ男の方が私の汚れた衣類を弄んでいるのを考えるだけで、ぞくぞくしてスリルが湧きます。今の私はそんな事ぐらいい気をまぎらわす他ありません。是非Mの方御申し出下さい。編集部宛送っては御迷惑でしょう。私の方の住所は都合により記入出来ませんが、そちらの宛先さえおしらせ願えましたら、必ずお送り申し上げます。

(神奈川八中川フミ子)

ずっと貴誌を拝見していましたが次の様なジャンルのフィクション(小説)或は絵画がない様です。御検討の上、然るべき作者又は画伯(四馬氏など適任か)に依頼実現される様希望いたします。ギリシャ神話には多くの半人半獣の神々が存在しますが、これを現代の進んだ或は将来の医術に依り、女奴隷に外科手術を加えて人工的に作り出すのです。曰く人魚、曰く女馬、ライオン、豹、縞馬、その他多数考えられましょう。加工は下半身の変更に止める方可。誘拐された美女が女馬に作り変えられて厩に繋がれ、客車を曳いて疾走せしめられるなど、サルジニアの話に一步を進めるものと思います(東京八生)

変態強盗侵入

(略号)

大手札型印画紙焼付
十二枚一組 一〇〇〇円

モデル 絹川 文代

小生一年程前から奇クを愛読している独身青年です。ショートパンツや三角フンドシが非常に好き

です。毎年夏には女性のショーツ姿が見られますが、どうもショーツをはいた女性が少いです。股下が少し長い目でダブダブだからと思ひます。太ももにグツと喰ひ込み豊かな臀部をくつきりと浮かび上らせたハチ切れそうなショーツパンツが非常に好きです。その様なスタイルの女性に皮の鞭でピシリピシリと打たれたい(又は打ちたい)という願ひも持っています。私と同じ様な女性との文通致したく存じます。(西宮市八岡本清三)

貴誌永年の愛読者ですので潜越乍ら、奇クの為、私の所見を述べさせて頂きます。従来貴誌写真を見致しますと、大体ヌードの小包縛、器具による責、かん腸マニヤが多い様ですが、尤も私の職掌柄(外科医)他動的、物的サドより一歩進んで心理的苦痛を与えるのも如何でしょうか。例えば従来拷問の極致、疲労こんぱいのポーズに、冷やかに左乳房下に聴診器を当てて絶え絶えな心音を聴くとか静脈注射(注射針の先をペンチで切り、あたかも突きさしたような真似にて可)により昏睡してゆく美しき顔、半裸の乳房に聴診

器を当てたポーズ等にエキサイトするものです。其れには貴誌の梨花悠紀子嬢か四方清美嬢がモデルとして好ましいと思ひます。(高知県八小橋広)

一愛読者より近頃の感想を少し申し述べさせて頂きます。近頃女性の切腹シーンに興味をひかれる方がとても多くなったようでございますが、私もその一人でございます。しかし近頃は一寸マンネリのような気がいたします。一、二回程妊婦の切腹の有様が書かれてありましたが、やはり女性の腹を切るもつとも最高の場面は、臨月腹のはち切れそうな双子が入っているような大きな腹のときと思ひます。そして姫が腰元の黒髪が地につくような豊かな光景で、れい子様にも口絵にお願いしたいものです。胎児がはみ出したような悲惨な光景を一度読み物の中でも記事と絵にしたいだけませんか。妊婦の切腹では、やはり腹帯をとく時の光景からたんねんに書いてありますと、本当に切腹の極致を見る様でございます。こういう臨月腹の切腹の口絵をどしどし読者のもとへお送り戴きますようお願いいたします。来年もより一

腸露出 「無念腹」 女体切腹写真

A5判(本誌の大きさ)感光紙焼付 十枚一組 八〇〇円

モデル……大塚啓子 略号(せ10)

やわらかなヘソ下の肌に今や深々と刃を突き立てれば、溢れる血汐は、唐くれないに、とびちり、腸が切口から、むくりむくりと盛り上ってくる。無念の形相も物凄く、血に染った手に更に力をこめて引きまわせば、腸は刃のきりきりと皮膚をさき皮下脂肪を割け、肉を切るにつれて、みるみる創口いっぱいにひろがってくる。

左手で腸を押えながら右脇腹まで切りさいてゆくと、刃を抜いて、今度は下腹からみぞおちまで一気に凄惨な十文字腹。今まで試みられなかった腸露出の有様を今回はじめて写真化した女体切腹フォトの決定版ともいふべき迫力のある連続写真集である。凄絶、女体切腹フォトの決定版として自信を以ておすすめできる切腹フォト集です。

層の御発展をなさいますように。
(東京八一愛読者)

須藤律夫様、新年号の「川柳お臍漫考」面白く拝読しました。お臍を詠みこんだ柳向に、次のようなものもございます。御参考までに。

道のりの臍へ近いで上とする
臍つきりとん出してゐる

田舎乳母

お妾は臍を去ること一二寸
色男臍から二寸うへでしめ
其時のかみなり臍に目はかけず

(延喜八年、菅原道真のたたりと云われる京都の落雷のことでしょう)

平内が臍のあたりへ文をつけたたひやつ

臍をほしがる門から出
夏中も臍に怪我なくまづくらし
乳の下か臍の下かと大臣きき
(大臣八おとど)は藤不比等、例の支度の浦の海女の宝珠奪還のおはなし)

奥家老臍から下のぐちをいい
雷にする丸潰けは臍をくり
咲耶姫へそのあたりで

生理帯シリーズ

A6判感光紙焼付

二十枚一組 一〇〇〇円

略号(め20)

モデル 大塚啓子

バンドマニアのために、ここにパントタイプバンド、ズロース型バンド並にパネットの三種の生理帯の着脱連続フォトを大塚啓子嬢を煩して、特にトイレを背景にして順を追って、前後左右からカメラの焦点を当てた生理帯着脱シリーズです。

ごろつかれ

こは珍事小町に脐が二つあり天が下お脐の下もことわりや最後の句も勿論小町のことですネ。「俳風末摘花」「川柳愛欲史」有光書房刊、「古川柳辞典」日本新聞社版、「俳風柳多留拾遺」今井卯木校訂、から拾いました。(東京八万田不仁V)

女相撲ファンに再度提案いたします。御案内の通り最近に興行的女角力も容易に私達の眼にふれることが出来なくなりました。従ってあらゆるところに情報網をはつ

てその開催地を調べて一日がかりで観戦におもむくことが多いと思います。そこで奇く女相撲後援会を結成していただき会費を支払いその巡業日程表等の配布をしていただければ好都合に思います。如何でしょうか。幸い仮設興行事務所が大阪の南区にあるときいておりますので是非実現したいものと思います。同好者が多数であれば、それも実現可能と思いますのでドシンドシ編集部へ投稿されるようお願い致します。また長年集めました女相撲の写真がありますので他の女相撲の写真と交換したく存じます。ご希望の方は東京都文京区弓町二ノ三、梅木館あてにお便り下さい。(岡平吉夫)

久方振りに本屋へ行ってみたら「奇く」十二月号が丁度発売になった所でした。「奇く」は八年ばかり前読んだ事がありなつかしい思いで一頁をめぐったら「生首シリーズ」として「女武者の討死と生首」と出て居るではありませんか。私は身体中の血が逆流するような思いで顔がかっかつとあつくなりしました。早速買い、会社の昼休み、事務所に他に誰も居ないのを幸いに一気に読みました。

生首の所を読んだら他の切腹だとか、しほるのだとか、或は浣腸等の所は全然読む気がおきませんでした。そして読者通信欄をみましたら意外に同好の志の多いのに驚き、且つ心強く思った次第です。どうも此の趣味は、他の趣味とちがって朋輩、或は家族に話したり等する事が出来にくい欠点があります。私は小さい時から女の生首が好きでした。勿論実物におめにかかるといふ機会はありませんでしたけれども。現在でも、「生首マニア」である事は変りません。芝居の小道具屋へ行って歌舞伎で使う小道具の生首をみせて貰ったり、或は自分で粘土細工で作ってみたりして居りました。それだけでは本当に自己を満足する迄も行かず、同好の士とも語れず淋しい思いでした。そこで、先ず次の事が実現できたら嬉しいと思います。東京にも川上さんのような方もいらっしゃる事です。先ず同志を集めて、同好会をつくり、話合の場を設け、資料の交

鼻料理

大手札 六枚一組 六〇〇円
略号(はか) モデル 大塚啓子

換、モデルによるトリック撮影会等を催すという事。次に編集部にお願致しますが、沢山生首ファンも居る事です。その方面の口絵、写真、本文、或は代理部扱いのものを増強していただきたいと思っています。簡単ですが今日はこの位にします。(東京都中央区八江原生V)

久し振りに貴誌を手にして、喜びに目を見張りました。それは、関谷富佐子さんの出現によるものです。塚本鉄三氏の文を拝見して益々、すばらしいと思いました。こうした女性の登場となったのは何といっても、貴誌の長年の輝やかなしい存在が生んだのだと思います。グラビアの写真を見ても、生々とした美しさが見る者の心を引きつけます。そこには、少しのわ

避暑地の切腹

略号(せひ)

大手札型印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円

モデル 絹川 文代

ざとらしきありません。真剣、そのものの肉体の動きが感じられます。往年の川端嬢に見られたものです。しかも関谷さんは、御夫人との事。全く、すばらしいと思います。若いモデル嬢の固さがなく、やわらかな中に苦悩の波が出ています。小生は、梨花嬢を愛して居りますが、一度、関谷さんの腰巻姿の責めを拝見したいと希望します。いずれにしても、大変、立派な方がモデルとして、その美

しさを公開して下さった事を心から感謝します。貴誌の更に御隆盛を祈ります。(東京八竹谷十三)

○ 先日、近所の本屋から「奇譚クラブ」一月号を買い入れ、少からず心ゆさぶるものがありました。特に第一グラビヤ「女体馬とその調教ぶり」、第二グラビヤ「逆エビのもだえ」の容赦なく、ぐいと絞っている大塚啓子嬢のモデル写真、これは、これまでに見られない迫力

を覚えました。だって、それらグラビヤのページをめくって見たら神秘的なことばかりだったのですから。「奇譚三十九夜物語」第二十一夜「辻村隆著も胸をときめかせて繰り返し繰り返し熱心に読み耽りました。僕が求めて止まなかったオアシスであり、夢の実現でした。催眠術を百パーセントに活用して快楽の生活を創り上げた第五十話「催眠儀式」の或るサラリーマンの告白記のほかに、毎号

の素晴らしいマゾ・サド小説集、巻頭口絵の四馬孝画傑作画シリーズなどの出来栄が、僕を十分に満足させて下さったことに、感謝の意を表します。ただ僕一人ですえ、大塚啓子嬢の豊満な肉体美の緊縛フォトに何よりも強く心を引かれ、たとえ遠くにあっても、常に彼女のそばに近付いて責めて見たいような気持で、次号からも引き続き「奇譚クラブ」を楽しみ愛読したいと思ひます。(東京八

「最新版」 女体緊縛フォト五十選

B組五十集 大手札判印画紙(9×13) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円

B 1	全裸エビ責仰向け(関谷)
B 2	逆エビ責め全裸像(水本)
B 3	乳首ペンチ挟み(竹野)
B 4	後手十字縛肩口上(梨花)

B 5	足の裏擦り責め(竹野)
B 6	おへソいじめ大罵(関谷)
B 7	剃いだバタフライ(関谷)
B 8	貴方に捧げた裸身(大塚)
B 9	乳房責め絶叫苦悶(大塚)
B 10	無防備双手吊り(絹川)
B 11	豊満臀部エビ縛り(水本)
B 12	一糸纏わぬ股間縛(水本)
B 13	全裸亀甲股間縛(関谷)
B 14	足踏付け二つ折り(大塚)
B 15	尻突出しムチ打ち(関谷)
B 16	手錠にもだえる(竹野)

B 17	尻突出エビ責め(水本)
B 18	椅子開股鼻責触手(梨花)
B 19	息もつがせぬ猿轡(竹野)
B 20	投げ出した全裸(関谷)
B 21	美しき尻部の露出(絹川)
B 22	首絞めの悦虐境(竹野)
B 23	後手柱縛り脚線美(竹野)
B 24	強制鼻挟水吞ませ(梨花)
B 25	苦悶にねじる裸身(関谷)
B 26	責めに氣を失って(関谷)
B 27	さアどうでもして(関谷)
B 28	豊満乳房膨隆縛り(竹野)
B 29	投げだされた女体(竹野)
B 30	裸身をくびる麻縄(梨花)
B 31	強烈縛りに悦ぶ(梨花)
B 32	全裸逆エビ片脚拳(東浦)
B 33	踏みつけマゾ境地(東浦)

B 34	すべてをさらけて(関谷)
B 35	ムチ打ち失神寸前(関谷)
B 36	クリップ鼻挟み(絹川)
B 37	台上のマゾポーズ(大塚)
B 38	吊られゆく美体(絹川)
B 39	拷問に無惨な美貌(梨花)
B 40	マゾ女性の表情美(東浦)
B 41	喰い込む股間縄(絹川)
B 42	灸責めに悶える(梨花)
B 43	犠牲台の人身御供(大塚)
B 44	美肌無茶苦茶縛り(絹川)
B 45	裸身に立つ蠟燭(大塚)
B 46	手枷足枷大罵し(四方)
B 47	鎖に悶える足首美(柳初)
B 48	蛇責めに柔肌栗然(梨花)
B 49	鼻の玩弄恍惚境(大塚)
B 50	女囚菱縄さらし(絹川)

山本茂雄▽

本郷綾子様、突然この様なお便りをさし上げる失礼をお許し下さい。奇く新年号一六二頁の「バンドあれこれ」を書いた保田（いえどあれこれ）と云うもので

す。男の私が月経帯に恋い焦れると云うのは、たしかにいやらしい事かも知れませんが。私も社会人の一員として日々立派に過して居る平凡な人間なのです。でもバンドの魅力は反省も何もかも忘れさせるものがあります。貴女も最初の頃はバンドマニアでいらした由承り大変嬉しく存じます。今後よろしく御指導下さいませ。尚、こんなことを申し上げて大変失礼になるかも知れませんが、私の愛用のバンドや時々着用しておりますオシメカバーと貴女の御愛用のバンドと交換していただけないものかと夢みています。御送付の費用は負担させていただきます。結構です。私の体は至極健康で不衛生な病源は全くありませんのでその点についても貴女の御迷惑になるようなことはしないつもりです。私は貴女の御同意が得られるなれば無上の光栄に存じて居ります。貴女の月経帯を私も穿かしていただ

き、それをオシメカバーで覆い外側に洩れないようにして十日間いや一カ月も二カ月も着用させていただきます。御約束させていただけます。（山口県徳山市八保田高夫▽）

十二月号に出て居りました斎藤七郎氏の「ゴムマニアの弁」は私達ゴムマニア待望の言です。何故もっと早くから斎藤氏の様な弁をのべる人がなかったかと思ひます。自分も早く投稿すれば良かったと思ひますが、近頃貴誌愛読者の中から非常に多くのゴムマニアの手記や通信文が出て居り、我々ゴムマニアも少しく安心出来る様になりましたが、貴誌編集部に於ても尚一層私達ゴムマニアの期待に添う様に編集上御留意下さい。又、十二月号誌上に四馬孝氏の作品「ゴム長靴の水」は非常に良かったですから、今後共あの様な作品を発表される様に御願ひします。尚、京都市中京区の佐藤良子さん、連絡をつけて下さいませんか。（大阪市西淀川区八小豆良生▽）

○ 新年号の「緊縛フォト撮影の実際」には笞打などが加わり、と

今月の特選

（各組二十組限り）

（優秀緊縛フォト紹介）

●絹川文代強烈股間縛

美貌と均整のとれた肢体を誇る絹川文代嬢に対して遠慮なく肌にも喰い込めと強烈な股間縛りを敢行、各組とも開股の痛烈さに足の指をくの字に曲げて喘ぎもがくさまを刻明に描写しました。

●鰐利用股間縛（略号）

大手札三枚一組 二五〇円

豆しほり猿ぐつわ、朱色ロープ使用、首縄、鰐利用股間縛り両脚大の字開き強烈なしほり。

●キの字股間縛（略号）

大手札三枚一組 二五〇円

白布猿ぐつわ、白色綿ロープ使用、乳房の上下二条、二の腕の二筋、高手小手、強烈股間しほり開股、足の指を屈げ、反らして苦痛に耐える表情もいたいたしい。

●亀甲型股間縛（略号）

大手札三枚一組 二五〇円

水玉模様手拭猿ぐつわ、白紺マダラロープ使用、首縄亀甲縛り脐中心菱型、下腹より喰い込む強烈股間しほり。開股して恍惚たる表情はふるいつきたいばかり。

●花坂道子裸身の開陳

本誌モデル陣の中で最もお嬢さんらしい美貌の持主で花柳流の踊りの名取、その優美の着物を脱した緊縛ポーズの珍品。

●剥がれた腰巻（略号）

大手札三枚一組 二五〇円

裸の肌を見せることに非常な羞恥を覚える花坂道子が乳房も潰れよとばかり締めつけられた高手小手、これだけは許してと願った腰巻さえも無惨にひきはがされて...

●若い妓の寝室（略号）

モデル 愛川悦子
大手札三枚一組 二五〇円

でも素晴しかったです。ところで先月号もそうだったのですが、関谷さんから塚本氏にあてた手紙の中で、彼女は浣腸責を肯定しておられるようですが、一度「浣腸フオト撮影の実際」というようなものをのせていただけませんか、お願いします。それから、浣腸に興味をお持ちだという東浦ひかるさん、私達ファンのために、少しでも素晴らしい浣腸フオトを作成して下さい。今後の内容に大いに期待し、発展を祈ります。(静岡八川本一成)

○ 当方二十五才になるマゾ男ですが、読者サロンに於て、ますますマゾヒストが活躍しておられるように心強い限りです。自分がマゾを自覚してしばらくは、人間的に非常な悩みを持ち苦しみました。が、毎月奇クを愛読しているうちに、数々の同好の士の文を読み、ここ一年位でやっと自分の性格を悩みなしに自覚できた次第です。

自刃悶絶

略号
(せよ)

大手札型印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円

モデル 大塚啓子

ダブル切腹

略号
(せる)

大手札型印画紙焼付

二枚一組 二五〇円

モデル 絹川文代、大塚啓子

三味線の御用もすんで行燈の灯かげもひそやかな蒲団の上に横になった若い妓は、思わぬ好事家の客の手で豊満な乳房がむくくりと盛り上るまでに厳しく縛り上げられている。白い胸が白い臀部が身動きできない縄目のもだえに、うごめいている。

トバクの代償

略号
(かけ)

モデル 愛川悦子
大手札三枚一組 二五〇円

タオルの猿ぐつわをされて素裸のまま、手首と足首を括られてベッドの上に投げ出された娘丁半トバクで勝った男の餌食になるのだ。今や彼女は観念して只豊満な裸身を衆目に晒しているばかりであった。

泥中の花

略号
(あめ)

モデル 愛川悦子
大手札五枚一組 四〇〇円

雨ふりしぶく泥の中にて厳しく高手小手にいましめられた全裸の女体がもだえぬく五葉のシリズ写真。一、パーマの髪も雨のためにびしょびしょに濡れて頬や額にへばりつき、掛ける型に交叉した両手首、胸に喰い込む縄、濡れて益々締ってゆく。二、泥の中へ足を開いてべったりと坐った全裸の女、脛から太股まで泥まみれ、縄にくびれた乳房は腹につきそう。三、横倒しになった女、うらめしげに雨あしを眺める。四、泥から起き上ろうとして、開いた足に力を入れるが、高々と後手首が括り上げられていて自由がきかない。五、雨空をふり仰いで観念した彼女、べったりと泥の中に尻をすえている。

によって、ある程度、御満足が行くのではないでしょうか？ 僕はそういった類の対象となり得る能力があると信じます。よくマゾモストは高貴な婦人とか美人、肉体的な美人、足の美しい人……等々にあこがれを抱く様ですが、それはある程度、男性(人間)として

の生理的本能の満足の為に対象を限定してくるだろうと思います。理想としてはそういうわがままな事も云えますが僕の場合は、そういう事に関係なく水商売に従事しておられる女性であれば、どんな方でも又何才の方であらうと自分の心身を全てお預けして、その女

性の方の消費対象となり得るつもりです。そういう男を一度飼っておくのも良いナとお考えの女性の方がおられましたら、ぜひ御一報下されたくお願い申し上げます。僕は二年前大学を卒業し現在会社に務めているサラリーマンです。土曜日曜にかけては終日御奉仕させて戴けますし、又ウィークデーでも、夜間であれば何時間でも明方まで御奉仕出来るだろうと思えます。京都又は大阪の方々であれば、より結構なのですが……。

(京都市八木安雄)

初めての投書、よろしくお願い致します。日中は忙しく働いて居りますが、夜は他の人より自由時間があり、たいくつ致します。毎夜三十冊以上の奇クを床の間に置き私の好みの文章をひろい読み致して居ります。持っている本に対して言い様のない愛情を感じております。私の夢を叶えて呉れるSM物語は読み終った後で、私は必ず私自身をヒロインとして当てはめて、都合の良いストーリーを作ってしまう。過去に二人の男性によってSとなった私ではなりましたが、その当時はあまりに若く、良く理解出来ずに終ったので

す。何年も後の今になって、いかに過去の男性達が理想のマゾヒストであったかを思い、残念に思います。私に奉仕して呉れたJとFの事は私と同好の方には良い参考になると思いますが、どの様にし居ります。色々と考えて居ります。毎日ですが、一人で考えて居るよりはと、大なる勇気をもって読者の皆様に話しかけた次第です。Mの男性に私の体験を話し、又次第によってはプレイの実行を致したく思っています。これは私の夢ですが、単なる夢とせず、誰か思い切って実現させて下さい。プレイの場所もムチもナワもすべて持って居ります。私は二十六才、お互いに大人であればプレイもよろしいではありませんか。私は待つて居ります。どうか勇気を出して私に答えて下さい。この文が奇クの読者の皆様(特にマゾの男性)のお目にとまったとしたら、私の切ない想いを叶えて下さい。力のかぎりいじめてさし上げます。最後に私の最大のなぐさめである奇クの今後の発展を心から祈ってペンをおきます。(東京八川田幸子)

夫婦であって、他人に迷惑を及

本誌最近号在庫案内

△新装特大号より以降▽

昭和35年10月号	(定価一四〇円)
昭和35年11月号	(売切)
昭和35年12月号	(定価一四〇円)
昭和36年新年号	(定価一五〇円)
昭和36年2月号	(定価一五〇円)
昭和36年3月号	(定価一五〇円)
昭和36年4月号	(定価一五〇円)
昭和36年5月号	(定価一五〇円)
昭和36年6月号	(定価一五〇円)
昭和36年7月号	(定価一五〇円)
昭和36年8月号	(定価一五〇円)
昭和36年9月号	(定価一五〇円)
昭和36年10月号	(定価二〇〇円)

昭和36年11月号	(定価二〇〇円)
昭和36年12月号	(定価二〇〇円)
昭和37年新年号	(定価二〇〇円)
昭和37年2月号	(定価二〇〇円)
昭和37年3月号	(定価二〇〇円)
昭和37年4月号	(定価二〇〇円)
昭和37年5月号	(定価二〇〇円)
昭和37年6月号	(定価二〇〇円)
昭和37年7月号	(定価二〇〇円)
昭和37年8月号	(定価二〇〇円)
昭和37年9月号	(定価二〇〇円)
昭和37年10月号	(定価二〇〇円)
昭和37年11月号	(定価二〇〇円)
昭和37年12月号	(定価二〇〇円)
昭和38年1月号	(定価二〇〇円)

送本誌の最近号は以上の通り在庫
しお申し上げます。御申込み次第急
送申し上げます。

ぼさなないなれば、どのような性生活をしようと差支えない”とアメリカの精神医学者ジェローム・レイナー夫妻がいつています。人には云いにくい傾向をもっている適切な相手さえ得ることが出来れば、誰はばかることなく幸福に暮せるのではないのでしょうか。ところで小生、このような考え方で思切つてこの紙上をかりて求婚広告をいたします。縛りと浣腸に興味のある女の方を望みます。年令は22才26才高校を出ておられればなお幸いです。当方は私大卒31才、一流会社に勤めています。お便りお待ちしております。秘密厳守し

山辺まゆみ様、12月号の読者通信を読んでいたら、あなたのお便りにぶつかりました。私は前から同性の方と責め合いたいと思つていたので、思いきって通信欄に出す勇気がなく、一人でお便りを読んだ。それがあなたのお便りと思ひ、思いきって出しました。私は新宿の戸塚に住んでいるBGです。二十五になります。あなたのお便りによれば、SM両方の性癖が、おありだとか、どちらの方向に傾いておられるのでしょうか

よびかけ——女のくせに、こんなことを書いて恥しいと思います。でも、お仲間の方々が居られ

特に定価の半額に奉仕いたします。

今月の新版案内

六 尺 褌

略号 (ろい)

大手札 五枚一組 四〇〇円

モデル 東浦ひかる

セイカンな若々しい姿態にきりりと締めた白い晒の六尺褌一本の裸体(褌をしめさせると殆どの娘は大変恥かしがる)にて四股を踏む蹲踞の構えで正面。立って正面背面、側面、というゝの禪姿のポーズをこらんにいれます。

蒲団に悶ゆ

略号 (なき)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 関谷富佐子

裸身に喰い込む麻縄、激しいムチ打ちに追い立てられて蒲団の上で転げまわって悶える若き夫人。足の爪先立ててムチを防ぐ太股に痛烈なる革ムチ。顔は悲痛に泣きむせぶ感きわまつた悦虐の表情。

悦虐の果て

略号 (なみ)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 関谷富佐子

この全身の表情をちよつとごらん下さい。殴って殴って殴りつけた末に、今まさに倒れんとした刹那、やっとキャッチした貴重なポーズばかりです。この写真から従前にはない強烈なすさまじい責めのムードを擲んで下されば幸甚。

椅子エビ責

略号 (おき)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

このポーズの撮影で半日を費した強烈きわまりないエビ責めマゾヒスト東浦嬢の熱意と若さを以てしなければ出来ないポーズ。椅子の上に縛りつけられ、両足を頭の上まで高々と折り曲げ、ぎゅうぎゅう締めつけ、一時間ばかり放置した上でシャツターを切ったフオート。勿論これはひかる嬢の注文で忍耐の限界を試したものの。

六 尺 褌 縛

略号 (ろは)

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 東浦ひかる

六尺褌を前の垂れもなくしてきゅっと締めつけ、恥しきにもすれば両手を前にやろうとす

ますので書いてみました。女子寮の降参ごっこを読みましてから、あんなことが出来れば本当に嬉しいと存じます。あのような記事をどんだんのせて下さいませ、私のお友達では、そんな方が居りませんの、編集者の先生方、是非御紹介下さいませ。東京の岡平様のおっしゃる通り、そんな大会が開かれれば出させて下さいませ、かならず秘密は守って下さいませね、また、それが駄目でしたら東京中野の上月ふみえ様から実際にお教えいただきたく存じます。是非是非お友達になつて下さいませ、私の所から二時間位で中野までまいれます。二十才、身長一五三センチ、体重四十二キロで家事を手伝いをしていきますから、ひまはございます。(都下南多摩郡稲城町八中川春江)

Kクラブ一月号拝読、「責場面」の空想的読書法(二六四頁以下)を非常に興味を以てむさぼり読みました。真奈部氏は全く小生の云いたいことを云ってくれた感じでした。ずっと以前に、刑事部屋で排尿をさせないで責める場面が二回ばかり出ていましたが、あれ以後、排尿をこらえさせて責めるシ

ーンの決定的なものがなく毎号淋しく物足らなく思っておりましてが、あの一月号の記事で魚が水を得たような思いです。これからもういった記事を多くのせて下さい。(千葉八木永一夫)

編集部の皆様御苦勞様、毎月毎月の出版は大変な御苦勞があると思ひますが、それにもめげず我々マニヤの為に発刊されるのに頭が下ります。どんなに難関があろうとも最初の編集方針を貫いて下さい。奇巧通信欄にはM女性の通信が沢山載るようになったことは我々Sマニヤにとっては大変うれしいことです。十月号の水野嬢などは大変な人気ですね。ところで十二月号に載っていた山辺まゆみ様、小生は貴女のような人の出現を待っていました。貴女の文を見ておりますと、小生はなんとなく引きよせられるものがありました。貴女はSM両方だそうですが、小生はSマニヤです。貴女は自分の乳房を責めて虚しくなつたと書いておられましたね、そして異性の方は体に傷をつけない程度なら、やってもよいと書いておられました。もし貴女とプレーが出来たら、貴女のことを十分に入れ貴女

るのを制して、両手首を背後で括りつけて、殊更大きなお腹をつき出させるようにしたフンドシのしぼりフオート。

東浦の切腹

略号

大手札 五枚一組 四〇〇円

モデル 東浦ひかる

東浦ひかるの腹部は最近皮下脂肪が増したか大変膨隆してきた。一日、彼女に切腹のことを話すと自分の下腹に刃を立てるということには興味を持っていいると言うので、彼女の思いのままに短刀を渡してポーズをとらしてみた。これはその時のフオートである。端座して刃を下腹にかまえ、したたかに突き刺したところ。扶ぐって痛さに倒れ伏したところ等、好ポーズばかり五点を選び出した。

浣腸シリーズ

略号

大手札 十二枚一組 一〇〇〇円

モデル 梨花悠紀子

梨花悠紀子が、いちじく、ガラス製三〇〇CC浣腸器、イルリガートル、オシメ、オシメカバー、差込便器、等を用いて連続に浣腸と排便を模様を近い距

離から手にとるように仔細に描き出した浣腸関連シリーズ、愛川悦子、大塚啓子の(ちよ)(ちし)(ちふ)に続く浣腸マニヤに捧ぐ第四作。

弓吊り責め

略号

大手札 二枚一組 二五〇円

モデル 梨花悠紀子

両手首と両足首とを反対側にして別々に吊り上げ背を上にして高々と宙に浮いた梨花嬢。吊りを第一に好む悠紀子にして始めて出来た本格的な弓吊りポーズ。さすがの彼女も顔を垂れて苦痛に耐え、頭を上げて悶えるさまは、素晴らしい。

手足宙吊り

略号

大手札 三枚一組 三〇〇円

モデル 梨花悠紀子

両手を手摺に水平に括られ、両足を八の字に開いてその両首を各々左右に釣り上げて縛られた強烈な宙吊りのポーズ。辛抱づよい悠紀子嬢も美しい眉をひそめて苦痛に耐える懸命の責められぶり。
△すべて略号にてお申込み願います▽

の好む様なプレーをするでしょう。小生は外面的な責めよりも、内面的な責めの方が好きです。なぜならば徐々に女体の変ってゆく過程がわかるからです。貴女は異性の場合は、素性、氏名、住所がわからない場合はおことわりしますと書いておられました。それが、それはもったもたこと。この世の中は何人も信用出来ない世の中ですから。しかし、ここで私の素性を書くのは困難です。なぜならば奇巧の通信欄のスペースを大きく取ることは出来ないからです。通信欄はマニヤの為の交歓の場であるからです。貴女となにげなく逢いましょう。今月号が発売されてから、毎週水木土、五時半から一時間、東京駅の中央出口の所に赤い表紙の薄い辞書を持って待っております。東浦嬢、その後どうなさっておりますのか、貴女も年頃だから結婚されたのですか。小生貴女に呼びかけるのは、これで二回目です。一度は八、九合併号の中にあります。その中にも書いておきましたが、もっと早く貴女とお友達になっておきたかったです。しかし残念ながら小生は筆不精のため、書きそびれてしまいました。しかし今日ここに貴女に

あらためて文通して下さいと願います。小生は本年の四月から九月まで病気のために大阪に帰っておりましたが、現在は東京に居りますので逢うことは不可能なことです。しかし正月には帰阪します。その前後に逢うかも知れません。山辺まゆみ様、東浦ひかる様、お待ちしております。では、お二人共お身体大切に。(東京都大田区八石田弘美▽)

今迄皆様方の楽しい通信を拝見してわすか乍ら、内に秘められた激しい己がマゾをなぐさめて参りましたが思い切って決心致し皆様方と交流することにしました。私は以前にある御夫婦の方からマゾとしての経験を受けてより性来のマゾ性といえ、その激烈・夢幻の素晴らしい刺激を忘れ去ることが出来ず今迄悶々とした毎日を通して居ります。奇巧読者のS女性の方と文通交際或は真の奴隷として御奉仕する機会を得たく広く皆様にお願いする次第で御座います。もっともこの賤しいマゾヒストとしてプレイや交際に於て一応希望もあるのですがそれを申し上げるは、御主人様に対して失礼です。ので一切貴女様の申し付け通り

に行動するつもりですし、二十六才の若さと健康な身体と、誠実をもって貴女様にお仕えする所存です。どうかこの切実な願いが届きましたら何卒御連絡をたまわります様伏してお願ひ申し上げます。御連絡は、毎週火曜日と金曜日七時頃に大阪六六一局八四二一番の所におります故呼び出して下さいます様に、又M女性やアヌスに興味をお持ちの女性からも御連絡戴けましたら幸甚に存じます。奇くのことやMS、アブノーマル全般にわたって種々遠慮なく大いに話し合っ同好者として親睦をはかりたいと思います。ではどうかよろしく(友田良一生)

私の頭ではどうしても文を造る事は出来ないと思えて少しも纏まらないのですが、女斗美を心より愛する私の最近体験した事実を申述べ、何らかの資となればと思

裸女格闘

略号(くる)

(首を締める)

大手札型印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円

モデル 田中芳代、愛川悦子

自分ではくバンド

略号(はく)

大手札型印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円

モデル 梨花悠紀子

(浣腸関連資料)

○オシメと浣腸責

大手札 四枚一組 三〇〇円

略号(せち)

モデル 大塚啓子

○オシメカバー着用と浣腸連続フオート

大手 十二枚一組 九〇〇円

略号(ちし)

モデル 大塚啓子

れてもとまで考えるようになったのでした。去月私は所要あってある県に参りましたが、帰途観光地であるF浜に立寄った時の事です。この浜は白砂と松で有名で汽車から降りて一里位は人家もなく白砂と松の連続しているところでした。白砂を踏んで歩いていくうちにむらむらと私の性癖は首をもたげて参りました。私はいつも旅行する時は夏用の晒の褌と軽量の帯で相撲帯の替りとしていた帯芯(十六尺)をもって参りました。さっそく土俵に似た条件を備えた場所を選ぼうとして歩を早め三〇分位で漸くここなら人にも見られず思い切った諸作を楽しめると思い松の根元に衣服を脱ぎすて帯芯の方の褌を喰入るばかりにしめこみ四股から仕切りの動作を繰返し汗のにじみ出たところでぶつかり稽古でみられる転倒に入り全身砂にみれふらふらになるまで体を砂にぶつけました。砂地は前に川と

なっていたものとみえてひからびた川底より四〇糎の高さがありましたが投げられて土俵の下に転落するとうみじめな自分の姿を想像して転倒してみることにしました。砂のふちより三米程離れたところから勢をつけてもんどりうって落ちた時生憎と砂にうまって木々の切株にみぞおちをいやという程うちつけて仕舞い思わず大きなうめき声を出してのたうち廻るはめになりました。目先はちらちらと星が飛ぶ様になり苦しい事それはどうにもならない程です。その時、人の駆けつけてくる足音が聞えました。私は大慌てで衣服のある所へ逃げようとするのですが体はどうにもなりません。「どうしたか」と田舎の言葉で近寄った中年の農家風の女性は私の姿をみて驚きじっと見入るばかり、私は自分の秘密を知られたはずかしさで真赤になり身動きも出来ないのです。私はとぎれとぎれに相撲の

●代理部分讓品総目録(第五号)出来ました。

十円切手封入の上お申込み下さい、折返し急送いたします。

稽古をしていた事を話し衣服をとってくれと頼みました。漸く納得したのか女の人は衣服をもって来てくれ腹這いになった私の体から砂にまみれた褌をとってくれました。暫くして漸く自分を取戻した私は呉々も内密にとくどく頼み褌を入れたバッグをさげると一目散に駅にむけ駆けだしたのでした。汽車にのつても心の動揺は治まらず顔は赤面したままでした。しかし私はこの出来事ははからず私の夢に画いた強くてたくましい女性から稽古をつけられ目茶目茶に投げられ転がされた上、あげくの果は褌までも奪い去られてしまう自分の姿でした。がはからずも砂まみれの私の体から褌を静かにとってくれたあの女性によりある程度の満足した実感が得られた事でした。一月余りだった今日でもあの状態はまざまざと私の脳裏に画かれてあり一人部屋に引こもって褌をしめておりますが今度再びあの

地を訪れ今度こそ私の秘密を打あけてプレイできたらと念じているのです。私のもう一つのプレイは晒の褌ですが、これも十六尺ものを使用しておりしめこむ時八尺の前吊れをもたせ後の八尺を一回腹に廻して後で立褌と結びます。前吊の分は前記の様な稽古の後緊縛された状態を造るため腹と腕とに廻し末端にて口を覆い背の結び目からの余った部分と連結致します。そう致しますと背のびしようにとしたとき口と股間はいやという程しめられ二、三分ではく息もぜいぜいとなって仕舞う程疲れま

す。(長崎県佐世保市八毛利生)

十二月号を見てほんとに驚きました。「女装に魅せられて」という私のまじい一文が掲載されているではありませんか。一昨年の春も終り近くなしか投稿させていただいた文です。一度は掲載予定作品になっていたのですが、その後

次号(三月号)は一月二十五日に発売いたします。

一向音沙汰なしで、本誌の躍進振りから恐らく没になったものとしてあきらめていました。それが約束どおり掲載されるなんて、編集部善意に深く感謝したいと思えます。改めてお礼申し上げます。あのころはカツラ一つなく、服装なども一帳羅でした。よく白昼堂々と歩いたものだと思ひ出しても我ながら感心しています。あれから足かけ三年、いまは半カツラですが、一応カツラも買い、フアンデーションもキャミソールブラウエストニッパ、コルセットもほかに二種、オール・イン・ワンピース・ブラウス・スカート・スラックスと一とおありあります。これは皆で箱に三バイもありしまつておくのに苦労している状態です。仕事の方が忙しいため、とても毎晩とは行かず、土曜日の夜を楽しんでいる状況です。昼間歩きは最近ほんとにも恐しくてできません。せいぜい夜の田舎道をひそかに歩く程度で、あの頃の勇氣(う)はだんだんなくなりました。そのうち、またやってみようと思っています。このお手紙も実は女姿で書いています。キャミソール型ブラジャ(ブラカップ二重入)、パン

ティ型コルセットそれに、ウェストニッパ、ヒップパッド(サイド付)で基を作り、その上にピンクのショーツ・ピンクのスリッパをつけ、ナイロンのストッキング、そしてチェックのブラウスに紺のスカート、頭はカツラで顔はアイシャドウ、つけマツゲなどをし、さらに手にはマニキュアまでしています。こうしてペンを走らせるのとウェストニッパの緊迫感と共に、ブラジャーの下で胸がうずき、さらに顔にハラハラとカツラの毛が垂れ下ります。私は女なの、そしてお手紙を書いているの、そんなに思っ興奮しています。十二月号の私の文章に川中志乃さんという方のお写真が一例として同時に掲載されました。私の文章のために、掲載を許されているのなら、川中さんに厚く御礼を申し上げます。ここに私のもの三種(全部で五十枚近くも写真に取っています)を同封しましたから、どうぞごらんになって下さい。レインコート、赤いブーツは私の大好きなものです。このコートは男物で、いまササール型のを注文中です。そのうちにもっと変わったものを撮影して送付したいと思っています。(横浜八木博)

読者原稿募集

△体験、告白、手記▽

どなたにも一つや二つの思い出とか、体験とかいったものが必ずあるものです。物言わざるは腹ふくるものたえ、どうか皆様の真実の叫びを、どしどし文字にしてお寄せ下さい。採用篇には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

△創作、小説、物語▽

御自分の描く夢をまとめて下さい。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。

△(映画、雑誌)通信▽

映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下さい。

さるようお待ちします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

△レポート・マニヤ通信▽

新聞記事、週刊誌記事等、関心をお持ちの事項、或はマニヤ各傾向の本誌に対する通信をお寄せ下さい。本誌二月分贈呈します。◎尚、以上の五項目の採用原稿には御希望により編集部作成の各種フォトを贈呈いたします。

△読者通信▽

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、本誌に対する希望や御意見、感想、文通、或いは読者相互間の交歓、面談の許す限り、つとめて掲載いたします。

書下し原稿募集

新しい風俗雑誌として新発足する本誌のため、新鮮にして読者の大歓迎するよう、新鋭の作家を、どしどしとお寄せ下さるよう、左記の要項にて募集いたします。どうか奮って御応募下さい。

募集要項

一、原稿の内容は風俗雑誌の尖端をゆく本誌にふさわしいもの。例え、オーストリア、研究、資料、連した小説、創作、論説、といったもの。告白、紹介、流暢、女装、美、身体各部に對する狂崇等に關連したものを含めます。

一、表紙、口絵、挿絵、或は写真なども努めて掲載したいと考えます。一、原稿の枚数は別に定めません。合に、長短は御自由です。尚、御都合によつては、便箋や鉛筆がき等、未発表のものに限りません。一、締切は特別に定めません。掲載可能な作品は、最近号から漸次表にいたします。優秀作品の投稿者には、編集部から題材を提供して寄稿を依頼することもあります。一、採用原稿に對しては、相当の原稿料をお支払い致します。一、誌上で匿名は御自由です。又、投稿者や寄稿家の住所本名は絶対に他へ洩すようなことは致しません。故御安心下さい。

奇譚クラブ編集部

☆本誌御愛読の榮

予約料

一月分 (1冊)	二百円	△送共▽
三月分 (3冊)	六百円	△送共▽
半年分 (6冊)	千二百円	△送共▽

本誌は各地書店にて毎月二十五日一斉に発売致しますが、若し入手困難でしたら、直接発行所へ代金御送りの上お申込み下さい。予約お申込みの場合は発行と同時に、厳重包装の上、急送申し上げます。尚既刊号の内、在庫分は別項に一覧表を掲げてあります故、御注文頂き次第に急送いたします。

☆代理部分譲品についての案内

○本誌代理部分の譲品は、最近分譲品案内並に読者通信欄の記事中に広告してあります。他に「代理部分譲品総目録」を準備しております。録は十円切手同封にてお申込下さい。急送申し上げます。○雑誌は厳重包装の上第三種郵便にて、写真類は密封の第一種郵便にて、その他は第五種郵便でお送りいたします。○代理部に対する御送金は、なるべく現金書留、振替、定額小為替、小為替、切手代用の節は、八円又は十円切手等の小額のものに願います。本誌に発表した口絵、写真の複写或は無断転載等は固くお断りいたします。

奇譚クラブ 定価二百円

二月号

(第十七卷第二号) (通刊第百七十三号)

昭和三十一年一月二十日印刷
昭和三十一年二月一日発行

編集印刷兼発行人 箕田 京二

大阪阿倍野郵便局私書函第十四号

発行所 天 星 社

(振替口座大阪五〇〇四二番)

(昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可)
(国鉄大局特別扱承認雑誌 第二二二号)